
艦魂たちともうひとつの日本海軍史 現代編

火龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂たちともうひとつの日本海軍史 現代編

【Nコード】

N5744Q

【作者名】

火龍

【あらすじ】

二年近くに及んだ対米戦が幕を閉じ、日本は再びの平和を謳歌するかに見えた。しかし米ソ冷戦が無くなったものの、それによって日本が背負うことになった責任はあまりにも大きかった。果たして、勇が去った後の日本が辿る道とは？ 現代まで執筆予定の第二部に、どうかご期待ください。

第一話 新時代の黎明と一時代の終焉

講和が締結されて暫くした九月三十日の昼頃、ハワイから引き揚げの数万名の将兵を積んだ輸送船団を護衛中の戦艦「秋津洲」予備会議室では、秋津洲の訓示もそこに艦魂たちが好き勝手に騒ぎ出していた。しかし勇だけはどうも浮かない顔をしており、彼女はそのことを訝しんでいた。

なおこの時第二艦隊だけは真珠湾に残留しており、「上野」及びアメリカ海軍から購入した「ワस्प」の修理が完了次第、この二隻と同じくアメリカから購入した旧「キアサージ」及び旧「ケンタッキー」を連れてメジユロへ戻る手はずになっていた。

「大将、如何なさったのですか？」

「これからのことが、ちょっと心配になってね……なに、秋津洲が気にすることではない」

秋津洲を心配させまいと勇は笑顔を繕ってみるが、その表情はあまりにもぎこちないものであった。秋津洲も人の感情を察することがあまり得意な方ではなかったが、勇の笑顔が作りものであるということはそんな彼女にさえ容易く見破られた。

「戦後の海軍軍縮が、気がかりなのですね？」

「気付かれた、か……ああ。そのことだ」

勇が知っている史実は、何も大東亜戦争で日本軍が無条件降伏するまでではない。その後、この戦争に参加した艦艇がどうなったかということもよく知っていた。だからこそ、戦後間もなく大幅に数を減らし始めるであろう目の前の艦魂たちに対して同情の念を抱い

てしまっていたのだ。

その上、戦後の軍備縮小計画は既に大筋が決まっており、勇自身も誰がいつ除籍され、そして解体されるのかということを知っていたのだ。自分が設計に携わった艦艇が間もなく次々と解体処分されるとあっては、戦勝気分もどこかへ吹き飛んでしまう。なお、この時点で練られていた計画の大筋は以下のとおり。

一九四五年三月三十一日

・戦艦を除く現在の第一艦隊全艦、及び上総型戦艦全艦が除籍され、横須賀にて記念館として保存される以下の艦を除いて解体開始予定
上総、岩代、黄龍、六角、菱田、秋風、雨風

・既に艦種が変更されている旧戦艦十隻（富士から豊後まで）と旧巡洋艦八隻（六六艦隊の装甲巡洋艦及び日進、春日）を除籍。全艦を横須賀にて記念艦として保存

・第一潜水艦隊全艦が除籍、横須賀にて記念艦となる二隻を除いて解体

一九五〇年三月三十一日

・因幡型戦艦全艦と、現在の第二艦隊のうち残余の全艦が除籍され、横須賀にて記念館として保存される因幡と上野を除いて解体開始予定
・第二潜水艦隊全艦除籍。全艦解体

即ちあと一年半ほどで戦艦二隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦二十二隻、潜水艦三十四隻が一斉に解体を開始されるのである。さらにその五年後には再び戦艦三隻、軽巡洋艦二隻、駆逐艦二十四隻、潜水艦三十六隻がその役目を終え、中にはたまたま戦没艦の代わりになったばかりに十年足らずで艦命を終えなければならぬ艦さえいた。

不幸中の幸いは、第十一艦隊の艦艇がそのまま練習艦隊の名目で

現役に留まることになり、解体や外国への転出を免れたということであった。それまで練習艦を務めていた三笠たちは既に現用艦艇との年代差が大きすぎるために、揃って記念艦となるための処置である。

さらには海上護衛総隊の護衛空母や護衛艇も、現在予備艦となっている護衛空母三隻と多数の護衛艇はそれぞれ商船や漁船へと改装された後に民間へ払い下げられることが決定。現役の護衛空母と護衛艇は沿岸警備隊へと移管され、予備艦として各鎮守府に護衛艦隊と警備艇隊が一個ずつ配置される手はずになっていた。

「ところで、私たちは？」

「史実の『アイオワ』級が辿った艦暦から考えると、一九六〇年までは現役。その後は国際情勢次第で予備役に入るか、あるいは記念艦だろうね」

勇はこの後大規模な国際紛争が生起しないという前提でこう述べたが、実際には「秋津洲」型戦艦二隻の将来はまったくもって不確定と言う他に無かった。戦艦という艦種の性質上、純粋に軍事的な価値だけ考えれば、誘導弾が一般化する一九六〇年頃には退役するであろう。しかし見るものに強烈な印象を与え得る戦艦、ましてや世界最大の戦艦である彼女たちは、国威発揚の面でも相当な利用価値を有していると言えるからだ。

そしてこれから一週間後の十月七日に、第二艦隊を除く連合艦隊全戦力がメジロへと凱旋。そこで勇は、三笠たちとおよそ四か月ぶりの再会を果たすのだった。

第一話 新時代の黎明と一時代の終焉（後書き）

作者「さてさて、ひと月近い間をあけて第二部が始まりました」

富士「しかし、あと十年足らずで二個艦隊相当が消滅させられるとは……戦争が終われば軍事予算の縮小がつきものとはいえ、寂しいな」

敷島「私たちも、そろそろ御役御免だからねえ」

三笠「ところで、このひと月の間も執筆は続けていたんですか？」

作者「勿論。だから書きかけのものも含めて、七十話近い予備がたまったよ」

大隅「な、七十話……それで、扱った出来事は？」

作者「仏印紛争、洞爺丸台風、明神礁の爆発、コンゴ動乱、ビアフラ戦争、フォークランド紛争は確定。あとは途中で国境でのいざこざや、新しい艦艇の進水式を随時挿んでいく形になるはずだよ……欲を言えば一九六〇年から八〇年の間に、北海道の辺りでなんかネタが欲しいね」

三笠「朝鮮戦争や中台紛争、キューバ危機などが発生しないことを考えると、題材の不足も仕方がないのかもしれないですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回は、勇と三笠たちが四ヶ月ぶりの再会をします。次回『肩の荷は未だ下りず』ご期待ください」

第二話 肩の荷は未だ下りず

十月七日朝、メジユロ。ここに、ハワイから凱旋する「秋津洲」を先頭とする第一艦隊が入港してきた。これに対して港内にいる艦船は揃って満艦飾で出迎えたので、見た目は非常に華やかであった。

同時刻、戦艦「秋津洲」艦橋休憩室。勇は、ここからメジユロに停泊している「三笠」を初めとした大艦隊を感慨深げに眺めていた。

「ようやく、本当に終わったのか……今まで実感がなかったが、これでようやく一安心だ」

四か月半前にメジユロを発った頃は、戦時なら当然のこととはいえどの艦もせわしなく動き回り、余裕が全く感じられなかった。ところが今は整然と船体を並べており、どの船も心なしか生き生きしているようにさえ見えた。

そこへ、焦ったように扉を叩く音と「有馬大将、ここですか？」という声が響く。待ってましたとばかりにこの「秋津洲」へとやってきたであろう声の主を想像して苦笑いしながら、勇が「三笠か、入っていいぞ」と告げると、扉は勢いよく開け放たれた。

「有馬大将、お久しぶりです！」

「やれやれ……っと、よく戻ってきたな」

「これでやっと一丁上がりだね。お疲れ様」

「御無事の帰還、何よりですな」

「御無沙汰しております、有馬大将」

三笠に続いて富士、敷島、朝日、そして大隅が次々と部屋に入る。

突然の揃いも揃っての来客に勇は驚いたが、暫くぶりに出会った面々を前に顔を綻ばせた。

「これで、日本はアメリカと戦って焦土になるのを免れたと見ていいんだな？」

「はい……しばらくは、という条件付きですが」

「そうか……まさか、こんなことになるとはな。四十年前に貴様が降ってきたときには、思いもしなかったぞ」

「私ですよ。自分がこんな大それたことをやるとは、露ほども思っていないませんでした」

「兎も角、犠牲が出たとはいえ最悪の結果は免れることができた……礼を言う」

勇が未来を変えることを決意したことに対して礼を言った時の富士は、どこかぶっきらぼうな顔つきのままであった。しかし今の富士は対照的に、極めて清々しい表情である。

「本当だよ。内地は一回も空襲を受けていないし、私たちも殆どが無事。十分、上出来なんじゃない？」

「全いです。私も対米戦が始まる時には、どれだけの犠牲が出るのかと気を揉んでしまいましたが……こう言うのは酷かもしれませんが、十分想定範囲内でした」

「有り難う。おかげで、横須賀でゆっくり休めそうだよ」

そう言うと、敷島は暫し目を閉じて安堵の表情を浮かべる。以前の敷島であればまず富士が礼を言ったことに対して茶々を入れるのだろうが、四十年以上という時間はそんな彼女の悪い癖をほぼ完全に消し去ってしまっていた。

「最後の一働きができて、最早思い残すことはありませんぬよ」

「まだまだ。今後は横須賀で、将来の若い世代が歴史を知るための生き証人になってもらわないと困る」

「おっと……これは失念しておりました。なら、お言葉に甘えて今暫しの御奉公といきますかな」

捉えようによつては臨終の言葉にも思える発言をした朝日を、勇が慌てて訂正する。だがそれが彼女の性分から出たことは勇も承知の上だったので、あまり強くは言わなかった。

「貴方がいなければ、日本は焦土になっていたかもしれません。そしておそらく、私が艦魂としての生を受けることもできなかったでしょう。ですから、今一度御礼を申し上げさせてください……誠に、誠に有難う御座いました」

「そんなに緊張しなくてもいいよ。ただ、やるべきだと思ったことをやっただけのことだから」

「緊張しているつもりなど、毛頭無いのですが……うう」

初めて出会った時と同じ台詞を言われてしまい、大隅は自分が何ら変わっていないのであるかと自責の念にとらわれる。生真面目さ故に堅苦しくなり、そしてまた自分の堅苦しさを苛む。大隅のこの悩みは、当分解決しそうになかった。

「またこうして無事に会えて、本当に良かったです」

「ああ。思えば日本海海戦、陸軍の反乱、そしてこの戦争と何度も死線を潜り抜けてきた。万が一のことがあったらどうなっていたのかと思うと、ぞっとするよ」

「私も有馬大将の身を案じると、気が気ではありませんでした」

「済まなかったな。日本海海戦の後、佐世保に帰った時の一件に始まってこれまで散々心配をかけてしまった」

「お気になさらず。これから私たちは横須賀にいます」

けど、たまには来てくださいね」

「勿論だとも」

勇の返事に、三笠は満面の笑みを浮かべる。こうして名実ともに勇の戦争は終わったが、それは決して彼が職務から解放されることを意味しなかった。

第二話 肩の荷は未だ下りず（後書き）

富士「まるで、有馬大將が暫くの間こっちに居続けそうな書き方だな」

作者「実際そうです。それにある読者の方から頂いた案を織り込んだことで、あと五年から十年ほど勇はこのままです」

敷島「十年……っていったら、それまでに大將の定年が来ない？」

一九〇五年に十七歳なら、一九五三年には六十五歳になって、予備役に編入されると思うよ」

作者「様々な海軍軍人の経歴を見ていたら、ひとつ定年後も海軍に居続けられる方法を見つけたので、その点は問題ありません」

三笠「はて、有馬大將が過去にいる期間を延ばして織り込んだ案とはいったいなんでしょう？ それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、対米戦が終わったことで各国に軍縮の機運が高まります。次回『東京海軍軍縮条約』御期待ください」

第三話 東京海軍軍縮条約

対米戦の終結後、軍備の縮小を図ったのは日本だけではない。イギリス、フランス、さらにはイタリアといった国々もまた、巨額の維持費を要する軍の縮小を考えていた。

そこで六か国協約とイタリアとの間に締結された講和条約において定められたイタリア軍の兵力量決定を兼ねて、一九四三年十二月一日より東京において主に海洋軍備縮小のための会議が開催。既に各国は旧式艦を多数抱えており、数年以内に廃棄予定の艦艇が少なからず存在していたので、わずか一か月後の十二月二十八日には以下の内容からなる「東京海軍軍縮条約」が締結された。

一、各国は西暦一九四五年九月一日までに以下の主力艦（定義はワシントン海軍軍縮条約に準ずる）を海軍軍艦籍から除籍し、処分あるいは現役に復帰しないことを前提とした状態での保存を行うこと。

主力艦

日本：上総型全艦

イギリス：リベンジ級及びクイーン・エリザベス級全艦、レナウン、レパルス、フッド

なお、建造中のヴァンガード、ライオン、テメレーアは建造を認める
フランス：クールベ級及びプロヴァンス級全艦

なお、建造中のクレマンソー、ガスゴーニユは建造を認める
ドイツ：ドイッチュラント級及びシャルンホルスト級全艦

また、建造中の戦艦は全て廃棄

イタリア：コンテ・ディ・カヴール級及びカイオ・デュイリオ級全艦

達成後の満載排水量

日本三五五〇〇〇トン、イギリス三九五七〇〇トン、フランス一四八〇九八トン

ドイツ二三三六五五トン、イタリア一八四一五五トン

二、加えて、一九五〇年九月一日までに各国は以下の主力艦を海軍軍艦籍から除籍し、処分あるいは現役に復帰しないことを前提とした状態での保存を行うこと。

日本：因幡型全艦

イギリス：ネルソン級全艦

フランス：ダンケルク級及びリシュリユ級各二隻

ドイツ：ビスマルク級全艦

イタリア：リットリオ級二隻

達成後の満載排水量

日本一八〇〇〇〇トン、イギリス三一九七〇〇トン、フランス九九七〇〇トン

ドイツ一三〇〇〇〇トン、イタリア九二四三〇トン

三、各国は本条約で認められたものを除いて主力艦の建造を行ってはならず、かつ改装によって主砲口径または装甲厚を増大させ、あるいは一隻もしくは複数隻の満載排水量を一〇〇〇トン以上増加させてはならない。

四、各国海軍は西暦一九五〇年九月一日以降、満載排水量が五千トンを超える空母の合計満載排水量を以下の枠内に収めること。なおここでは、水上機を除く固定翼機の運用能力を有する艦を全て航空母艦であると見做す。また、現役に戻さないことを前提とする保存は自由とする。

日本一八万トン、イギリス三〇万トン、フランス、ドイツ、イタリア各九万トン

五、各国は戦時を除いて、現役軍人の数を人口の一パーセント以上にしてはならない。

この条約は実質的には各国がお互いの軍縮予定を確認しあつたに過ぎず、海軍補助艦艇や航空戦力の縮小は保有枠の決定に手間がかかる割に効果が少ないとされ、各国の裁量に委ねられることになった。なお、各国の西暦一九五〇年までにおける巡洋艦、駆逐艦及び潜水艦の予備役編入は以下のとおり。

イギリス

全重巡洋艦、タウン級より前の軽巡洋艦、トライバル級より前の駆逐艦、T級及びU級より前の潜水艦

フランス

ラ・ガリソニエールより前の巡洋艦、ル・フアンタスクより前の駆逐艦、水上排水量千トン未満の潜水艦

ドイツ

アドミラル・ヒッパーより前の巡洋艦、Z1より前の駆逐艦、1型及び2型潜水艦

イタリア

カピターニ・ロマーニより前の巡洋艦、レオーネより前の駆逐艦、フラテリ・バンディエラより前の潜水艦

第三話 東京海軍軍縮条約（後書き）

富士「史実を知っていれば予想できるが、相当な軍縮だな」

敷島「で、私たちもお役御免というわけね」

作者「止むを得ません。むしろ東西冷戦が史実どおりの時期に発生しないことを考えれば、これ以上の軍縮だってあり得ます」

大隅「私たちはまだ保存して頂けるだけ幸せかもしれませんが、大半の艦艇はそのまま一生を終えるのでしょうかね」

作者「そればかりは、仕方ないと言ってしまえば仕方ない。そりゃあ全艦を保存できればこっちとしても理想だけれど、そんな予算や場所の余裕はないだろうから」

三笠「港湾を埋め尽くす数百隻の大艦隊……作者さんが見たら、正気を失ってしまうかもしれないですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「無事、横須賀へと帰ってきた輝久と瑞穂。しかしそんな二人に起こった、予想もし得ないいざこざとは？ 次回『縁談と情念の間で』ご期待ください」

第四話 縁談と情念の間で

連合艦隊の主力六個艦隊と旧戦艦の工作艦部隊、そして旧巡洋艦の標的艦部隊が内地へと帰還してしばらくしたある日、勇は横須賀鎮守府の一室で現代兵器の考案に勤しんでいた。そんな彼の元へと、何やら困った表情の輝久がやってくる。

「おお、谷口中尉か。浮かない顔だが……何かあったのか？」

「実は、生きて帰ったまでは良かったのですが……帰って早々、両親から厄介な話を持ち掛けられました」

「厄介な話？ まさかとは思いますが……海軍を辞めろ、とも言われたのか？」

自分の貴重な後継者がいなくなってしまうことを恐れた勇は、険しい表情でつい本音を口にしてしまう。しかし輝久の悩みとは、そんな彼のした最悪の想像とは遠くかけ離れたものだった。

「いいえ、そういった話ではないのでご心配なく。実は、厄介な話というのは……縁談のことです」

「そうか、それは確かに厄介……って、へ？」

想定の外にあった話を持ち出され、勇は思わず間拔けな声を出してしまう。輝久はその時の勇の顔が可笑しくてたまらず、危うく吹き出しそうになったものの、すんでの所で堪えた。そして改めて、真剣な表情に戻る。

「そこまでは……まあ、男ですから遅かれ早かれ持ち掛けられる話だったのだらうと思っています。ですがその話を瑞穂にしたところ、突然ぐずり始めまして……挙句の果てには、『その話を受けるのな

ら、もう二度とこの船には乗るな』とまで言われてしまいました」

輝久は瑞穂の真意を量りかねて困り果てていたが、勇には瑞穂がぐずった原因がなんとなくわかっていた。つまり瑞穂は自覚があるか無いかを問わず輝久に好意を抱いており、彼が自分から離れていってしまふことを恐れているのであらうと踏んだのだ。

「おそらく、瑞穂は中尉を慕っているな。だから中尉が結婚して、会うことはできても自分の感情を打ち明けられなくなるぐらいなら、いつそのまま会えなくなったほうがましだと思ったんだろう」

「む、むう……何やら、分かりにくいですな」

「もちろん、今言ったことが正解だとは限らない。ただ、瑞穂がこれまで中尉を嫌ったような素振りを見せたとは聞いていない以上、生憎とそれ以外の可能性は思いつかない」

勇の言葉を理解したのかしていないのか、輝久はなおも首を捻ったままである。そして暫く悩んだ挙句にようやく勇の話を飲み込めたものの、今度は別の不安が彼に襲い掛かる。

「正直なところ、私も今すぐの結婚は不安です。それに、瑞穂にあそこまで言われてしまうと……ただ、将来的にもずっと結婚しなければ親類縁者が何と言うか」

「広瀬武夫中佐も、三十歳過ぎで戦死するまで生涯独身だったんだ。有り得ない話ではないよ」

生真面目さ故に世間体まで気にしてしまう輝久に、勇はなおも食い下がる。この時代はまだ結婚するのが当然であったとはいえ、避けられる出来事で輝久と瑞穂の関係が険悪になることは避けておきたかった。輝久は今後数十年に亘って海軍軍人として職務に当たり、また「瑞穂」も横須賀港にて記念艦として保存されるというのがそ

れぞれ確実であることを考えれば、否が応でも今後二人が会う機会は少なくないと考えられるからだ。

さらには最悪の場合、二人の関係悪化が他の艦魂にも影響を及ぼし、そして彼女たちの船体に何らかの異常が発生する恐れもある。もし有事の際にそのような事態が起これば、日本の防衛そのものに支障をきたすことも考えられなくはないのだ。こう考えた勇は、言葉を尽くして説得を試みた。

「そ、そこまで考えていらしたとは……御見逸れ致しました」

「これではまるで、日本のために結婚をするなど言っているように聞こえるだろう。第一、個人が結婚するか否かということに第三者が口出しすること自体おかしいことかも知れない。だからこんなことを言っておいてなんだが、最終的な判断はあくまで中尉に任せよう」

「了解しました……この場で即座に返答することは致しかねますが、近いうちに返事をさせて頂きます」

その後間もなく輝久は横須賀鎮守府を後にしたが、彼を見送った後に勇は猛烈な後悔と自責の念に囚われることになる。実直な輝久の性格を考えれば、自分の言葉に抑圧されて本当に自由な決断ができなくなる恐れがあるということが目に見えていたからだ。

第四話 縁談と情念の間で（後書き）

作者「読者の方から頂いたネタを使っではみたものの……やはり、自分に経験が無いことは如何ともし難いですね。生憎と、今の私にはこれが限界です」

富士「六つの頃から戦のことばかり考えていたんだ。自業自得だな」

大隅「それに、それ以前から続いている興味の対象というのも相撲と競馬観戦だったようで……言ってしまうえば、これまで作者さんの趣味は殆ど全て何らかの形で争うものばかりだったようです」

敷島「相撲はともかく、小学生の頃から競馬観戦というのはどうかと思うよ」

富士「まさか貴様、観るだけでは飽き足らず……いや、何でもない」

作者「一切記憶に御座いません……というネタはさておき、兎も角色恋沙汰というのは私が最も疎い分野なのであります。経験も知識も、そもそも私個人の関心そのものが絶望的なまでに不足しているのですね」

朝日「それは色恋沙汰でも、『生身の人間』に対する色恋沙汰でありましょう？」

作者「まあ、兵器や船舶に対してなら……っと、これ以上は深入りしないでおくよ。うっかり自滅してしまいそうだから」

三笠「作者さんが零しようになった言葉の内容が気になります」

次回予告をお願いします」

作者「勇の言葉を聞き、葛藤する輝久の下した決断とは？ 次回『不器用な鉄砲屋』ご期待ください」

第五話 不器用な鉄砲屋

輝久が縁談の件を勇に告げてからしばらく後、横須賀鎮守府にいた勇の元へと再び輝久がやってくる。「入ります」という彼の声を聞いた途端、勇は心情の脈が急に早くなるのを感じた。そしていてもたってもいられず、部屋に入ってきた輝久へとすぐさま問いかける。

「早速だが……返事を聞かせてくれるか？」

「はい。親類縁者と話し合ったのですが……縁談は、今しばらく延期になりました」

勇は輝久の返事に安堵する一方で、自責の念に苛まれる。自分が独り善がりな説得を行ったために彼の縁談を御破算にし、時代を考えればもう結婚にはやや遅い年齢となっている輝久の将来を大きく歪めてしまったからだ。そして、表情も自ずと険しいものになってしまう。

「そうか……君と初めて会った時のように、また厄介な目に遭わせてしまったな」

「お気になさらず。これは、あくまで自分の意志で決めたことです」「それは、そうかもしれないが……済まない」

そう言うと、勇は立ち上がって頭を深々と下げる。生真面目で勇に対しても常に礼儀正しく接してきた輝久は、自分の人生に様々な形で影響を与えてきた上官の突然の行動に面食らった。

「あ、頭を上げてください！ 大將が気に病まれることは、何も御座いません！」

「だが、私の所為で君の人生が大きく変わってしまったのも事実だ」
「それは……認めましょう。ですが、少なくとも悪い変化だったとは微塵も思っておりません」

毅然とした態度で言い放つ輝久の眼に、勇への遠慮や嘘といったものは一切感じ取れなかった。それを見た勇はようやく安心すると、ふと気になっていたあることを思い出す。

「それで……瑞穂は何と？」

「これから向かおうかと思っています」

輝久の答えに、勇は椅子から転げ落ちそうになる。縁談が御破算になった以上、伊の一番に伝えるべき相手は瑞穂のほずであり、このような場所で時間を浪費している暇はないのだ。

「早く行ってやれ。こうしている間にも、瑞穂は気を揉んでいるはずだ」

「はっ。それでは、失礼致します」

部屋から出ていく輝久を見送った後で、勇は大きなため息をつく。このままでは、瑞穂は今後も幾度となく輝久の生真面目さに振り回されるであろうことを察し、彼女に同情せずにはいられなかった。

戦艦「瑞穂」が停泊している栈橋に到着した輝久は、まっすぐ予備幕僚室へと向かう。そして部屋の前で「瑞穂、いる？」と話しかけてはみたものの、返事は無かった。しかし彼が念のため扉を開けて部屋の中を見てみると、扉に背を向ける形で彼女が机に突っ伏していたのである。

「この前の、縁談の件だけ……取りやめになったよ」

「え？　今……なんて？」

慌てて輝久のほうを振り向いた瑞穂は、当初きょんとした顔をしていて事態が呑み込めない様子であった。しかし彼の言葉の意味を理解すると、安心したような、それでいてどこか気まずそうな表情になった。

「そう、ですか……まさか、私の言葉が気になって……？」

「そうではない。自分で……そう、自分で決めたことだ」

輝久がそう言ったきり、二人は言葉に詰まってしまう。彼としては瑞穂の反応を待っているつもりだったのだが、彼女としては縁談が帳消しになったことを安心したからといってそれを言葉に出すことは憚られ、とはいえ破談を残念がることは本心に反するのでできない相談だった。

ましてや、ここで彼に対する思いを打ち明けることはあまりにも不謹慎すぎるように思えた。一方の輝久も、自分が瑞穂に一方ならぬ好意を抱いていることは承知していたが、縁談の決裂を知らせた直後に思いの丈を告げては軽薄な輩だと思われてしまうと考えて口を噤むしかなかった。

結局、数分ほど経って輝久が「また今度」と言って部屋を出て行き、暫くの間は二人とも悶々とした気分で過ごす羽目になるのだった。

第五話 不器用な鉄砲屋（後書き）

朝日「めでたしめでたし……かと思いきや、経緯が経緯だけに気まずいすな」

作者「輝久は真面目を通り越して、純粹で不器用な堅物と言ったほうがしっくりくる人間という設定だからね。どちらが先に思いを打ち明けるにせよ、二人の性格から考えて暫くは間が空くはずだよ」

富士「ということは、時間さえ経てば二人は何れ恋仲になるわけか」

作者「そのはずです。話は変わりますが、現代の戦車について調べていたところ不可解な問題に突き当たりました」

敷島「また、全然違う方向に飛んだねえ……で、その問題って何？」

作者「イギリス軍の戦車『チーフテン』シリーズについてなのですが、書籍とネットとともに車体幅を二・八メートル程度とする資料と、三・五メートル程度とする資料が混在しているのです。いくら型式が違えど、同じ系列の戦車で車体に幅がここまで違うということとは考えづらいので、おそらくどちらかが誤字なのでしょうが」

大隅「で、その資料とは？」

作者「書籍ではコスミックの『戦車大百科』がマーク一について三・六六メートル、光栄の『戦車名鑑現用編』がマーク五について二・八二メートルとしているよ。おそらく、ネット上の数字もこういった資料から適宜選択しているのだと思う」

三笠「あの、お気持ちは分かりますがそろそろ次回予告をお願いします」

作者「了解。次回、誰かが輝久と瑞穂の間に起こった出来事を知ることになります。次回『四十年越しの想い』ご期待ください」

第六話 四十年越しの想い

勇が輝久を見送った直後、部屋に「有馬大将、入ってもいいですか？」という三笠の声が響く。勇が入室を許可すると、三笠は怪訝な表情で部屋に入ってきた。

「谷口中尉の表情が良くありませんでしたが……何かあったのですか？」

勇は三笠に、輝久の元に縁談が舞い込んだこと、しかし彼が瑞穂からの好意に気付いてその縁談を断ったことを説明する。それを聞いた三笠は、顔を赤らめて暫く何かを考え込んでいる様子であった。

三笠は以前から勇に好意を持っており、そのことを自覚もしていた。とはいえ率直に自分の好意を告げることは恥ずかしかったので、これまで表だって口にすることは無かったのである。しかしここで輝久への縁談という出来事があり、瑞穂が婉曲的とはいえその好意を表した以上、自分も何らかの方法でこの好意を伝えておかなくてはという焦りが生じた。

「あの……有馬大将には、縁談は来ていませんよね？」

「昔東郷大将に相談されたことはあったけれど、この時代の人間と必要以上に関わると後世にどんな影響があるかわからないから、一切合切断っておいたよ」

自分が暗に示したつもりの好意が伝わらず、三笠は無意識のうちに膨れっ面になる。そしてこのままでは埒が明かないと見ると、彼女は無粋であることを承知の上で瑞穂のやり口を真似ることにした。直接言うことも考えたが、それは今の三笠にとってはあまりに勇気

の要ることだったのだ。

「もし、有馬大將が縁談を受けるようなことがあれば……私も、有馬大將には私の艦に乗った貰いたくはありません」

「三笠、それはつまり……三笠も？」

「はい。私は、有馬大將のことが……っ！」

三笠は最後の一言を言おうとするが、緊張で呂律が回らず、顔は今までにないくらいに赤くなっている。そんな三笠の様子を見ていた勇は三笠が最後まで言い切るまで待つかどうか迷っていたが、途中で遮るのは彼女に失礼であると考え、じっと最後まで待つことにした。

「有馬大將のことが……好きです！」

言い終えるが早いのか、思いの丈を打ち明けて緊張がほぐれた三笠は、まるで糸が切れた人形のように倒れこみそうになる。勇はそんな彼女の体を慌てて支えると、荒い息をしている三笠が落ち着くまで暫くの間背中をさすってやっていた。

「有馬大將が未来から来た方である以上、いつか私の元からいなくなってしまうことは覚悟しています……ですが、私は五十年であろうと百年であろうと、大將が戻ってきてくれるまで必ずこの横須賀港で待っています！」

「有り難う……有り難う、三笠」

目が真っ赤に充血し、顔を赤らめて涙ぐみながら決意を露にする三笠を、勇はそっと抱きしめる。そこで彼は、三笠の体が想像以上に華奢であることに気付いた。こんな体でよくこれまで幾度もの激戦や連合艦隊旗艦の職務をこなしてきたものであると、勇は感心せ

ずにはいられない。

「ですから、その……未来に戻ったとしても、いつか必ずここに来ると約束してください。そのことだけを約束してくれば、私はいつまでも待てますから」

「ああ、必ず戻ってくる」

涙を堪えて哀願する三笠を、勇はしっかりと見つめて強い口調で答える。するとそれに安心した彼女は、やがてほっとしたように頬を緩めた。

「有り難う御座います。それで……それだけで、私は十分です」

そう言うのと三笠はゆつくりと、しかし力強く立ち上がる。その眼は未だに充血していたが、不安や恐れといった表情は一切が消え失せていた。

この後、勇はこれまでにしまして頻繁に三笠の元を訪れるようになったという。そして仕事も可能な限り横須賀周辺でこなすようにし、三笠に逐一予定を伝えて少しでも二人で過ごす時間が長くなるよう取り計らったのだった。

第六話 四十年越しの想い（後書き）

作者「正直に言う。この話を書いている間、無性に恥ずかしくなった」

富士「自分に経験が無いからだろうか？」

作者「ええ。知識だけはある程度あるので、いろいろと露骨な場面の方がまだすんなり書けそうです」

敷島「まさか……ノクターン（富士に殴られて気絶）」

朝日「姉上……今回ばかりは、同情致しかねます」

作者「書けないことはない。けど、質は保証しかねるよ」

三笠（作者に冷ややかな視線を浴びせつつ）「戯言はさておき、次回予告をお願いします」

作者（申し訳なさそうに）「対米戦の終結は、中露の経済に深刻な影響をもたらしました。そこで、日本が採った策とは一体？ 次回『新海洋秩序を見据えて』ご期待ください」

第七話 新海洋秩序を見据えて

対米戦の終結後、各国において軍需向けに兵器や軍需物資を生産していた企業は、軒並み在庫のだぶつきによる経営不振に陥りつつあった。そんな中、ハワイ攻略戦終了時から政府が主導で少しずつ生産の規模を減らしていった統制経済下の日本だけは、比較的ましな状況にあった。

とはいえ、戦時において月に何隻もの戦闘艦艇を建造してきた各地の造船所は、軍からの注文が激減したことで労働力を余らせてしまふことになる。そこで彼らが職を失うことが無いようにと計画されたのが、軍用艦艇を殆ど建造しないであろう一九五〇年までの五カ年で、沿岸警備隊を大幅に増強することである。なお、計画完成時の各種船艇の保有数は以下のように定められた。

甲型巡視船四隻、乙型巡視船十二隻、丙型巡視船三十六隻

甲型巡視艇四十八隻、乙型巡視艇及び丙型巡視艇各九十六隻、丁型巡視艇四十八隻

一方で戦後不況の影響が深刻だったのは、一番に中国、ついでロシアである。即ちそれまで日本の補給基地として機能していた両国の工場が、対米戦の終結によって日本軍からの発注を見込めなくなり、消耗していた日本軍と自国の軍にある程度は引き取ってもらえたものの、相変わらず大量の在庫を抱えていたのだ。

そこでまず中国が一九四三年十二月十五日、何らかの代償と引き換えに自国の不良在庫を引き取るよう要請。日本は東沙諸島と中沙諸島の領有権割譲を条件としてこれを一九四四年四月一日に受諾し、合計で数万トンとも数十万トンともいわれる弾薬や物資を買い入れ

た。

そしてこの一件を聞きつけたロシアも八月十三日に、日本政府に対して自国で余剰になった軍需物資を買い取るよう依頼。しかし日本も中国から大量の物資を仕入れてしまったために、これ以上の物資購入には躊躇せざるを得ず、何らかの代償が約束されなければ買い取りは不可能との返答をした。

ロシアは当初この返答に不快感を示したが、多少の代償を払ってでも軍需品の不良在庫を一掃せねば自国の経済が停滞し続けてしまう。そこで止むに止まれず、まさしく断腸の思いで北樺太の領有権譲渡を申し出た。

とはいえ、不良在庫一掃のためとはいえ資源が多く眠ると思えられていた北樺太の喪失はあまりにも惜しい。そこでロシアは北樺太におけるロシア人の居住と経済活動の自由、さらに日本国民と同条件での参政権付与を要求した。

日本は当初この参政権付与という要求を呑むか否か悩んだものの、北樺太にある天然資源は不良在庫の買い取りという代償を払ってなお余りある旨味であり、ロシア側の申し出を断りたくはなかった。そこで双方が妥協した結果、ロシア側から戸籍についての情報提供を受け、一九四四年四月一日現在北樺太に居住していることが確認された者のみに参政権を付与するということで合意したのである。そして一九四四年十二月八日、以下の内容からなる「日露北樺太譲渡協定」が締結された。

一、ロシア帝国は大日本帝国に対し、一九四五年四月一日に北緯五十度以北の樺太島及び付属の諸小島に対する一切の主権、領有権及び請求権を譲渡する。

二、大日本帝国は、西暦一九四四年四月一日現在第一条に定める地域に居住していたロシア帝国国民に対し、自国民と同一の条件で選挙権及び被選挙権を付与する。また該当者の情報は、ロシア帝国が大日本帝国政府に提出するものとする。

三、第一条に定める地域と、本協定発効後もなおロシア帝国の領域であり続ける地域の間に存在する一切の権益は、本初子午線に平行な東経一四一度三五分の線で分割することとする。但しこの線を跨いで液体または気体の海底資源が確認された場合は両国の共同開発とし、開発及び採掘に要する費用は両国が同額を支出し、採掘された資源は両国がそれぞれ同量を得ることとする。

第七話 新海洋秩序を見据えて（後書き）

富士「なるほどな……資源と排他的経済水域の確保が目当てか」

作者「どの道、領海や排他的経済水域は遅かれ早かれ史実と同じように定められることになるでしょう。であれば、今のうちに小島をちまちま掻き集めておいた方がいいわけです」

敷島「しかし、前に『小さなアメリカになりつつある』って言うていたけれど……これは、アメリカ以上の外道国家だと思うよ」

作者「外道であろうと、中国やロシアの側もそれなりに被害を免れているわけです。ですから、近代のような武力での脅しとは一線を画しています」

三笠「日本の将来がいろいろな意味で心配ですが、次回予告をお願いします」

作者「対米戦開戦後、日本が多額の予算を投じて進めていた計画とは？ 次回『ア号兵器開発計画』ご期待ください」

第八話 ア号兵器開発計画

対米伊戦争勃発後の一九四二年四月一日、日本陸海空軍は共同で極秘裏に「ア号兵器開発研究所」を設立。「ア」は「アトミック・ボム」即ち原子爆弾の頭文字をとったもので、その名のとおり核兵器の開発を主任務とした研究所であった。

施設は勇の後知恵によってウランの埋蔵が知られていた鳥取県の打札に建設され、採掘要員は地元に住屯していた陸軍の工兵隊からを送り込むことにして、作業中は家族と会えないが特別手当をつけるという条件で志願者を募ったのである。

こうして人形峠に集結した将兵に与えられたのは、光を発する見たことも内容な機械であった。案の定兵士たちが首をかしげているところに、現場監督として派遣された研究所職員の指示が飛ぶ。

「いいか。その機械はついている突起を押すと紫色に光るようになってから、暗いところでその光を当てて緑色に光った石だけを掘り出してこい。また何度も繰り返しになるが、任務が終わった後もこのことは決して誰にも話すなよ。それでは、作業始め！」

坑口に入っていった兵士たちは言われるがままに壁面を光で照らし、緑色に光った摩訶不思議な物体を鶴嘴で採掘していく。だが自分が何を掘らされているのかまったくもって見当もつかない兵士たちは、退屈な気分を紛らわせようとして、あれこれと勝手な推測を始めた。

「しかし、こりゃあなんだ？ 鉄じゃあねえし石炭でもねえ。こんな見たこともねえぞ」

「光を当てねえとこいつも光らねえから、宝石の類でもないしなあ……こんなのを俺たちに掘らせて、お偉いさん方は一体何がしたいんだ？」

「知ったことかよ。月俸はうんとはずんでくれるから、俺たちはそれで十分じゃねえか」

「それもそうだな。ははは」

実は彼らが掘っている物質こそ、ウランの鉱石物質のひとつである燐灰ウラン石であった。これは紫外線を当てるとき緑色に光るという特徴を持っており、そのために兵士たちは訳も分からず紫外線を当てさせられていたのだ。

こうして集められたウラン鉱石はまず粉碎されたのちに硫酸で溶かし、六価ウラン浸出液と呼ばれる物体にする。次いで沈殿法と呼ばれる水溶液中での金属精錬（湿式精錬）方法を用いて不純物を取り除き脱水することで、ウラン含有率六割程度のフレーク状ウラン精鉱になるのである。

このウラン精鉱は史実の現代においてイエローケーキと呼ばれるが、これはたまたま最初に精錬されたウラン精鉱が鮮やかな黄色だったことから名づけられたにすぎない。実際には橙や緑、茶褐色など様々な色の「イエローケーキ」が存在する。

イエローケーキは転換工場へと運び込まれ、硝酸で溶解された後に燐酸トリプチルを用いて不純物を除去されるが、その後硝酸も除去（脱硝）されて三酸化ウランとなる。これは水素を使用した還元で二酸化ウランとなり、フッ化水素と反応させて四フッ化ウランとされ、最後にフッ素と反応させて六フッ化ウランと変化させられる。なお四フッ化ウランは緑色の個体であることから、別名グリーンソルトとも呼ばれている。

六フッ化ウランは遠心分離機にかけられて（またはガス拡散法によって）ウラン235の割合を高められ、この過程を濃縮という。そして濃縮を終えたウランが濃縮ウランと呼ばれ、ウランを用いる核兵器に不可欠な存在なのである。

しかしこれらの作業方法が分かっていたとはいえ、実際に設備を建設し、それらを運用することは容易ではない。加えてあまりにも順調に原子爆弾の開発に成功してしまうと、後世の科学者たちになぜ短い期間で開発に成功したのかと疑われ、最悪の場合後知恵を持っている人物の存在を勘繰られてしまう恐れもあった。

そのため、本来この研究は史実のマンハッタン計画よりも順調に行えるはずであったが、ある程度の故意に為された試行錯誤を交えて進められた。さらには研究用軽水炉の建設や、濃縮ウランを製造すると同時に残される劣化ウラン（ウラン235の含有率が低いので軽水炉の燃料には使えない）を用いた劣化ウラン弾の設計（但し実用化は一九八〇年）、劣化ウラン中のウラン238に中性子を吸収させて核分裂させることが容易なプルトニウム239として高速増殖炉の燃料として用いることなどが計画された。

第八話 ア号兵器開発計画（後書き）

富士「貴様……国益のためなら、禁じ手も何も無いのだな」

作者「むしろ、国際情勢の変化次第では現実の日本も核武装をするべき……と、日本全国で万単位の人間を敵に回しかねないことを言ってみる次第です」

大隅「まさか、このまま大陸間弾道弾や原子力潜水艦なども開発なさるおつもりですか？」

作者「必要とあらば、何でもするよ。軍事においては感情論を出したら負けだと思っているし、ましてや核に対する過度の拒否反応があるのは史実だけだから」

三笠「確かに、侮りを受けるよりはましかもしれませんが……それでは、次回予告をお願いします」

作者「莫大な後知恵と予算が投じられた世界初の核実験は、果たして成功するのでしょうか？ 次回『核の時代』ご期待ください」

第九話 核の時代

こうしてウラン235の濃度が七割を超えた濃縮ウランは合計で一先ず百キログラム分が製造され、筒状のウラン二個とそれに対応する形の棒状のウラン二本に成型された。その後東京の研究所へと運ばれ、ここでいよいよ原子爆弾の製造が開始されたのである。

この時製造された原子爆弾は何れも製造が比較的容易なガンバレル型（砲身型）と呼ばれるもので、まずは爆弾内部にある円筒形をした空間の両端に、それぞれ棒状と筒状のウランを設置する。そして円筒状のウランを火薬で吹き飛ばし、棒状のウランと激突させることで臨界を引き起こし、核爆発に至るという寸法なのだ。

とはいえガンバレル型は確かに製造と開発が容易ではあるものの、直径を除けば弾体の小型化が困難であり、核反応の効率が悪いためにより多量の核物質を搭載しなければならない。さらには爆弾が搭載航空機の墜落など何らかのはずみで傾斜してしまった際には、爆弾の内部で核物質が勝手に移動して衝突してしまい、空中で搭載機もろとも爆散しかねないという代物でもあった。

このようにガンバレル型の核爆弾は無視できない危険性を有していたものの、イギリスやドイツも原子爆弾の研究に取り組んでいるという噂がある以上、これらの国々がそう遠くない将来原子爆弾を保有することは明らかであった。そしてもしその時に日本が原子爆弾の開発に成功していなければ、国威発揚の面で不利になり、国際的な発言力の低下や安全保障への悪影響も懸念されたからこそ、日本は敢えて核兵器の開発を急いだのである。

なお史実において広島に投下された原子爆弾はウランを用いたガ

ンバレル型だが、長崎に投下された原子爆弾はプルトニウムを用いた爆縮型と呼ばれる構造で、世界初の核実験「トリニティ実験」で使用されたのもこちらである。即ちアメリカは二種類の原子爆弾を開発していたことになるが、日本は開発期間と費用を局限するために、当初は専ら前者の開発に力を注いだのだ。

その甲斐あってか、研究所設立からの期間であれば史実のアメリカより長期間を要したものの、一九四五年三月十五日にそれぞれ「天雷」及び「極光」と名付けられた原子爆弾の第一号及び第二号が完成。三月三十日に実験を行うこととし、実験場所はマーシャル諸島のビキニ環礁と決まった。

因みに実験後は大気中に微量とはいえ放射能が拡散し、地上の金属に付着してしまう恐れがある。それでは将来開発されるであろう放射線測定装置の部品に用いるには不適となってしまうため、今のうちに部品として使うための金属をどこかで保護しておく必要があった。

そこで実験直前の三月二十五日、対米戦の終結によって進水前に建造が中止された多数の軍用艦艇や商船で、未だ解体を終えていないものが屑鉄として買い上げられ、各地の浅い海底へと沈められた。史実の日本では主に柱島の沖合で沈んでいる戦艦「陸奥」の鋼材が使用されるが、この日本では「陸奥」爆沈事件が発生していないために、史実より圧倒的に少ない内地沿岸にいる沈船の引き揚げだけでは将来的に材料が枯渇する恐れがあるのだ。

三月三十日、ビキニ環礁沖の戦艦「秋津洲」艦橋。彼女は爆風の影響を避けるために投下予定地点から十海里離れた海上におり、研究者の一部や高級軍人、さらには勇や輝久を乗せて実験の成り行きを見守ることになっていた。

また投下予定地点からは南北それぞれ五海里毎に百海里まで八千トン級指定船が配置され、万が一にでも沈没してしまわないよう大量の浮きを装着したうえでその時を待っている。彼女たちは何れも各種測定装置を搭載しているものの、乗員の被爆を防ぐために無人の状態であった。

加えて、さらに遠方には沿岸警備隊の巡視船多数が放水銃を装備した状態で待機。放射線を浴びた船舶を速やかに洗浄できるよう、水タンクにはありったけの水が搭載され、何としても彼女たちを再使用に耐える状態にすることが至上命題とされていた。

「本当に……これで良かったのでしょうか？」

「仕方ないさ。どのみちイギリスやドイツだって、あと十年も経たずに実用化するだろう。そうなったときに我が国だけが保有していないとなると、諸外国から軽視される一因になりかねない」

史実を知るが故に、核兵器の開発に対してどちらかと言えば否定的な見方をする輝久を、勇が宥めるように説き伏せる。斯く言う勇も本心では開発せずに済むのであればそれに越したことはないと思っていたが、今更とやかく論じたところで意味の無い話であった。

原子爆弾投下用に改造された一機の二式戦略爆撃機の機内で、不測の事態によるウランの激突を防ぐための安全装置が解除される。そして爆弾倉が開き、遂に人類初の原子爆弾が宙を舞った。

「総員、遮光硝子用意！」

嶋田大将の指示で、艦橋にいた全員が閃光に備えて遮光硝子を使って目を覆う。そして投下から暫くして、遂にその威力を発揮する

ことになった。

第九話 核の時代（後書き）

富士「場所は……よりにもよってビキニ環礁か」

敷島「実験の場所といい、わざわざ事件に参加した船が沈まないようにするための処置について詳しく描いていることといい、どう考えても史実の某作戦に対する当てつけの匂いがするよ」

大隅「敷島さん、それ以上は作者さんのために触れないでお願い頂きますか？ また、いつぞやのように落ち込んでしまわれる恐れがありますから」

作者「そうしてくれると助かるよ。某掲示板で広島や長崎に投下された原子爆弾の件を冗談に仕立て上げている人間がいたけれど、個人的にはそれよりも某作戦をネタにされる方が辛いからね」

朝日「最早船と人の垣根を越えたというより、人間よりも船に対して愛着を抱いておりますな」

作者「おそらく、それだけの愛着が無ければここまで小説を書き続けることはできなかったと思う。それどころか、小説を書こうとさえ思わなかっただろうね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「いよいよ爆発した、人類初の核兵器。果たしてその威力とは？ 次回『拡散する核の炎』ご期待ください」

第十話 拡散する核の炎

高度七百メートルまで落下した時点で内部の火薬に点火され、ふたつのウラン塊が激突する。そして臨界に達したウランは核分裂を始め、一気にその威力を解放した。時に三月三十日、午前十時三十分二十九秒のことである。

核爆発が生み出した閃光によって辺りは一瞬目も眩むような明るさになり、暫くして強烈な衝撃波が「秋津洲」にまで到達。衝撃波と津波によって彼女の船体は大きく振動したが、船体が無傷だったおかげか秋津洲自身は平然としていた。

この爆発によると思われる衝撃波や爆発音は東南東に約百八十キロメートルほど離れたロンゲラプ島のみならず、南南東に約二百キロメートル離れたウォトホ島や、さらには西に約三百五十キロメートルエニウェトク環礁でも微弱ながら観測された。そして、後日指定船が搭載していた機器の観測結果と総合した結果、トリニトロトルエンTNT換算で一万吨（十キロトン）相当の爆発があったと推定されたのである。

この数字は史実のトリニティ実験で推定された十九キロトンと言う数字に比べると見劣りするが、これは日本の技術力が当時のアメリカより劣っていたせいである。ウランの濃縮が十分ではなく、爆発するのに必要なほぼ最低限の品質しか有していなかったためであるといわれている。ともかく、こうして世界は核の時代へと突入していった。

衝撃波が止んでしばらくの間、「秋津洲」艦橋にいた科学者と軍人たちは全員が啞然としていた。爆発事態は予定どおりの出来事であり、またその規模についても事前にある程度の予測が立てられて

いたが、実際に目にしたときの衝撃は言語に絶するものがあった。

「これが、原子爆弾の……ア号兵器の威力だというのか」

「想定はしていましたが、まさかこれほどとは……いやはや、腰を抜かしそうになりました」

嶋田大将と勇が、揃って驚きの言葉を口にする。これだけの威力があれば、ひとつの都市を殲滅とまではいかずとも、都市機能を喪失させるだけの打撃は勇分与えられることが明白だったからである。とはいえ、手放して喜んでいるわけにもいかない。

「これで、各国も核開発に力を入れ始めるでしょう。そうなった時のためにも、この作戦で明らかにになった問題点を洗い出して、より高性能な核兵器を開発しなければなりません」

秋津洲の言葉に、勇の顔が引き締まる。史実より早く核兵器が実用化され、かつアメリカやカナダを除けばどの国も戦争による消耗が少ない以上、核兵器の高性能化も史実以上の勢いで為されると見るのが自然だからだ。因みに勇が思い描いていた構想としては、早ければ一九五〇年（史実で史上初の水爆実験はこの二年後）を目処に水素爆弾を実用化するつもりであった。

「自分は大将から史実をある程度教えて頂きましたから、そうそうないことだとは思っておりますが……もし将来、これが人口密集地に対して投下されるようなことがあったら、と考えるとぞっとします」

「フォークランドの時も、ダマンスキーの時も使われなかったからな。とはいえ、最悪の事態を考えるとすれば、犠牲者が百万人単位の大台に達しても何ら不思議ではない」

勇がさらりと言った一言に、輝久は身の毛がよだつを感じる。だが既に軍人となってそれ相応の経験を積んでいた彼は、勇の言葉が決して絵空事ではないことも、そして日本がそうせざるを得ない事態が発生し得るということも理解していた。

なお幸いなことにこの実験で沈没した指定船はおらず、最大でも約半年を修理と洗浄に費やした後、現役へと復帰した。一方で、勇の心配どおりこの一件の後六か国協約締結国は核兵器の開発を急ぎ、一九五〇年までにイギリス、ロシア、さらにはアメリカがそれぞれ最初の核実験を行ったのである。

第十話 拡散する核の炎（後書き）

富士「威力が微妙だな……もっと時間をかければよかったものを」

作者「と仰いまして、日本の技術力では核開発そのものが相当な難題です。逆にここで数十キロトン級の核爆弾を開発したと設定すれば、不必要に現実味を損なってしまいます」

敷島「まあ、核兵器は威力云々より持っていること自体に意味があるからね。水爆や弾道弾は、どのみちもうしばらく時間がかかるだろうし」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「これまで半世紀近くに亘って活躍した三笠たちが、とうとう現役を退きます。次回『記念艦三笠』ご期待ください」

第十一話 記念艦三笠

一九四五年三月三十一日付で工作艦となっていた戦艦十隻と標的艦となっていた装甲巡洋艦八隻、そして「秋津洲」型及び「因幡」型戦艦を除く第一艦隊と、第一潜水艦隊の全艦及び「上総」型戦艦全艦が事実上退役。しかし多くの艦艇は半年ほど前から記念艦として横須賀で保存される準備が整っており、翌四月一日に「横須賀海軍博物館」が開館することになっていた。なお、同日時点における主な展示艦艇と展示状態は以下のとおり。

戦艦

富士、敷島、朝日、三笠（それぞれ日本海海戦時）、大隅、上総（それぞれ竣工時）、岩代（対米戦開戦時）

装甲巡洋艦（全て日本海海戦時）

浅間、常盤、八雲、吾妻、出雲、磐手、日進、春日

空母

黄龍（竣工時）

軽巡洋艦

六角（竣工時）、菱田（対米戦開戦時）

駆逐艦

秋風、雨風（以上二隻は竣工時）、天津風、浦風（以上二隻は対米戦開戦時）

潜水艦

笠戸、四阪（以上二隻は竣工時）、能美、石垣（以上二隻は対米戦開戦時）

三月三十一日、戦艦「三笠」下甲板の右舷後部にある予備士官室。ここでは公開に向けた最終準備の指揮を執っていた勇が、三笠と

もに暫しの休息をしていた。

「今日で、私も事実上軍艦としての使命を終えるんですね……対米戦が終わった頃から覚悟は決めていましたが、いざその日になってみると寂しいです」

窓から横須賀港を見つめていた三笠が、落ち込んだ様子で呟く。
彼女の脳裏には、進水から「八島」と「初瀬」の沈没、日本海海戦、そして戦艦として最後の実戦となったパガン島沖海戦の記憶が、走馬灯のように駆け巡っていた。

「終わるわけではないよ。確かに今後航海に出る機会はぐっと減るだろうけれど、今後は歴史を後世へと伝えていってもらわないとね」
「つまり……歴史の生き証人になれ、ということですか？」

「ああ。『三笠』は幾度とない戦闘で、あまりにも多くのことを経験してきた。だからそのことを、これから生まれ育つであろう若い世代へと身を以って知らせて、彼らが未来のことを考えるときの手助けをしてほしい。それは……三笠たちだからこそこできることだ」
「有馬大将……っ！」

自信を喪失しかけていた中での勇の一言に、三笠は思わず涙をこぼす。自分がまだ日本に必要とされていることが、彼女にとっては大きな誇りであり、また生きていく上での支えとなるのだ。

「ありがとうございます。おかげで、だいぶ楽になりました」
「そうか、良かった……さてと、そろそろ鎮守府に戻るか」
「はい。その……これからも、たまには来てくださいね？」
「もちろん、そのつもりだよ」

そう言って、勇は部屋から出ようとする。だがそれより早く扉が

開き、富士、敷島、朝日、そして大隅がぞろぞろと部屋の中に入ってきた。

「ほう、私たちにも何か言ってくれてもいいのではないか？」

「ふ、富士さん……まさか、そこでずっと聞いていたんですか？」

「ああ。三笠の様子を見に行こうとしたら、部屋の中から声が聞こえたんでな。私は別に何を話していようが関係ないと思っていたが、敷島が盗み聞きをしようと持ちかけてくるものだからつい、その……無粋な真似をしてしまった。済まない」

「ふーん。本当にどうでもいいんなら、話には乗らないと思うけど？」

ばつが悪そうに頭を掻く富士を見て、敷島は自分一人のせいではないとでも言いたげに痛いところを突いてくる。凶星を指された富士は眉をしかめて「ぐっ」と小さく呻いたが、すぐさま食って掛かった。

「目の前で聞き耳を立てている奴がいたら、誰だって気になるだろうが」

「さあ？」

「貴様なあ……自分がお役御免になるからって、昔の悪い癖をぶり返さないでくれ」

富士はどうか冷静な風を装っていたが、顔は紅潮しているうえに、握った両手は怒りで小刻みに震えている。このままでは遠からず彼女の怒りが爆発すると見た三笠は、かつての連合艦隊旗艦としての責任感から二人へと釘を刺すことにした。

「敷島姉さん……確かに、私たちが博物館になることは『身をやつす』と言えることも知れませんが、ですがどうか、あまり富士さん

を怒らせないでください。さっきの有馬大将の言葉どおり、私たちはただお情けで保存されるのではなく、きちんとした意味があるんですから」

三笠に説得された敷島は、罪悪感に苛まれたせいかわかりきり押し黙ってしまふ。取り敢えず敷島の説得に成功したと見た三笠は、次いで富士にも頭を冷やしてもらわなくてはならなかった。

「富士さんも、茶化されて頭に血が上ってしまうのは分かります。とはいえここで怒りに任せてしまっっては、私たちの艦歴に泥を塗ることになりますよ？」

「くっ、それもそうか……すまん、三笠」

富士はまだ不服そうな表情であるものの、どうにか最後の一線を越えることだけは思い止まったようであった。しかし敷島と富士は、お互い同じ場所にてはまた同じようなことを繰り返すと思ったのか、そそくさとその場を離れてしまった。

第十一話 記念艦三笠（後書き）

富士「それにしても、主だった展示艦艇だけでこの数とは……採算が合うのか？」

作者「国営ですから、極端なことを言えば見学料が無料でも大きな問題にはならないかと。史実と違って国民は軍事に関して寛容になっ
ていますし、見学料で足りないなら売店の売り上げや出店料を当てにすることもできます」

敷島「まさか、その売店では模型や資料が山ほど並べられて販売されるっていうオチなの？」

作者「はい。そうすれば国民へ軍事に関する関心を持たせ、より多くの知識を身につけてもらうこともできるはずです。そうすれば、軍への的外れな批判も少なくなるでしょう」

大隅「何やら、作者さんがただ自分の願望を満たすためだけになさっているような気も……私としては、保存して頂けるのであればそれは当然有難いことです」

三笠「もしこの世界で作者さんが生まれていたらと思うと、末恐ろしいです……それはともかくとして、次回予告をお願いします」

作者「次回、日本の協力の下でフィリピンが独立します。次回『本音と建て前』ご期待ください」

第十二話 本音と建て前

一九四五年四月一日、講和条約の内容に従い日本主導の下でフィリピン共和国が独立。同日付で以下の内容からなる「大日本帝国とフィリピン共和国との間の経済及び安全保障に関する相互協力条約」、略称「日比相互協力条約」が締結された。

一、大日本帝国はフィリピンの政治体制及び法体制の確立と、自衛のための戦力の整備に協力すること。
二、フィリピン共和国は大日本帝国に対し、別途両国間の合意によって決定された数量及び品目の天然資源を毎年輸出すること。
三、両国はお互いを侵略せず、どちらか一方の国が第三国と交戦状態に入った場合、もう一方の国はこれを支援すること。
四、第三条に従って本来支援をすべき側の国が、当該第三国との間で相互不可侵を含む条約を締結していた際には、中立を守ること。

第四条は専ら、フィリピンと六か国協約締結国との間に国際紛争が起きた際に、日本がフィリピンに肩入れすることで当該締結国との関係を悪化させることを避けるための条項であり、いわば蜥蜴の尻尾切りができるようにしておくためのものであった。無論それはフィリピンの側も承知の上だったが、背に腹は代えられずこの条件を呑んだのである。

その分、日本はフィリピンの生活基盤や警察組織を整備するために多額の援助を約束。既に決定されていた軍用艦艇に加え、以下の巡視船艇の部品をフィリピンへと輸出し、造船技術の習熟も兼ねて現地で建造させるという方式をとることにした。

甲型巡視船一隻、乙型巡視船四隻、丙型巡視船十二隻
甲型巡視艇十六隻、乙型巡視艇、丙型巡視艇及び丁型巡視艇各六十
四隻

しかしやはりというべきか、東南アジアに海外領土を有していた
イギリスやフランス、さらにはオランダと言った国々はフィリピン
が強力な軍事力や警察力を持つことについて警戒心を抱いた。フィ
リピンが直接自国の勢力圏を脅かすことだけではなく、日本の庇護
下で独立したフィリピンがそれ相応に豊かな国になった場合、自国
の海外領土に住む住民が二匹目の泥鰌を狙おうと日本と手を結んで
独立運動を行うのではないかと危惧したのである。

そして日本に対し、フィリピンにあまり強大な軍事力や経済力を
持たせないよう極秘裏に要求。六か国協約の解消を望まない日本は
渋々これに応じざるを得ず、以下の内容からなる密約を英仏蘭と結
ぶことになる。

一、日本は六か国協約締結国とアメリカ、イタリア、オランダ各国
及び、英仏蘭の何れかが認めた国を除いて、対象が国家であるか否
かを問わず海外の如何なる相手に対しても以下の品目を売却、譲渡
若しくは貸与しないこと。

- ・基準排水量五千トンを超える武装艦艇、一万総トンを超える船舶
- ・発動機を三基以上有する航空機
- ・口径八インチを超える陸上部隊用の砲、口径六インチを超える艦
載砲

二、日本はフィリピンに対する援助の内容及び金額を毎年英仏蘭の
三国に報告すること。

三、英仏蘭はフィリピン共和国の主権及び領域を承認し、これを侵害しないこと。

しかし日本はこれにめぐることなく、マニラを初めとする四か所（他はダバオ、セブ、サンボアング）での大学設立や工場の建設などに官民共同で積極的に出資。だがこれは純粹に当地の発展だけを目的としたものではなく、フィリピンにある程度の力をつけさせることで、欧米の海外領土（インドシナ、マレー、東インド）と外地や委任統治領（台湾、南洋諸島）との間の緩衝地域たらしめることを期待してのものであった。

即ち、インドシナとビルマやマレーの間に位置するタイ王国のような役割を担わせようとしていたのである。また今のうちに恩を売っておくことで、将来的に資源の輸出や工業製品の発注、さらには海外からの工場誘致などの際に優遇してもらおうという魂胆もあった。

こうしてさまざまな国の思惑が渦巻くなかで為されたフィリピンの独立だったが、この後英仏蘭が危惧していたように、各地の独立派勢力が日本に協力を打診。日本はこれに対する対応に迫られるとともに、ブルネイやニューギニアで発生し始めた独立運動にも頭を悩まされることになった。

第十二話 本音と建て前（後書き）

富士「そういえばフィリピンはともかく、仏印や蘭印はどうなるのだ？」

作者「仏印につきましては、次回から取り扱う予定です。蘭印は：：仏印における一件の後、日本がとった行動がきっかけになって独立運動が起こったとすれば、不自然ではなくなるかと」

大隅「しかし、ここでも資源をねだるとは：：：将来の資源供給を安定させるためとはいえ、がめつすぎるのでは？」

作者「今後数十年に亘って、日本はこの方法を繰り返すことになるよ。少なくとも今の時点では史実の生活水準を大幅に上回っているし、内地の人口も増えているから、資源はいくらあってもあり過ぎるということはない」

三笠「まあ、フィリピンにとっても一定の利益はあるようですから、侵略には当たらないでしょうが：：：次回予告をお願いします」

作者「今回はフランスの要請を受け入れて、仏印の独立運動に日本が介入します。次回『仏印動乱』ご期待ください」

第十三話 仏印動乱

フランス統治下のインドシナ（史実の現代におけるベトナム、ラオス及びカンボジア）では、一九三〇年代まで独立運動のための大規模な組織は結成されなかった。しかしアメリカでフランクリン・デラノ・ルーズベルトが政権を握ると、六か国協約弱体化計画の一環としてインドシナ独立に向けた扇動が極秘裏に行われ、相次いで以下の地域で独立組織が形成されていた。

・ルアンパバーン王国

ラオス北部に存在する、フランスの保護国であるルアンパバーン王国の完全独立を目指す。指導者は同国の国王であったシーサワン・ウオン。

・チャンパーサック王国

ラオス南部に存在し、フランスの直轄植民地であるチャンパーサック県の独立を目指す。指導者は、チャンパーサック県の知事であったチャオ・ラーチャナダイ（国王だった頃の名はチャオ・ニユイ）。

なお日本がフランスとの関係悪化を恐れてタイ王国への武器輸出を行わず、タイ王国がタイ・フランス領インドシナ戦争を起こさなかった影響により、メコン川東岸とチャンパサク地方はタイへの割譲を免れている。

・カンボジア王国

形ばかりの王朝はあったものの、フランスに宗主権を握られていたカンボジアの独立を目指す。指導者はカンボジア国王のノロドム・シハヌーク（シーハヌ、シアヌークとも）。

なおチャンパーサック王国と同じ理由により、バットアンバン州と

シエムリアップ州のタイ王国への割譲は免れている。

・安南国

南部のコーチシナ（サイゴン周辺）をフランスの直轄領とされ、北部のトンキン（ハノイ周辺）はフランスの保護領となり、さらに残った部分もインドシナの一部としてフランスの保護国にされた安南の独立を目指す。指導者は阮朝最後の皇帝であったバオ・ダイ（保大）。

当初はアメリカとの対立から軍事費をある程度潤沢に用意できたフランスが抑え込めていたものの、対米戦終結後の軍事費減額に伴い、インドシナへの大規模な派兵と反乱の鎮圧が困難になっていった。一方の独立派もアメリカからの援助が途絶えたことで活動が鈍化した。こちらは既に供与された武器を使用して未だに活動を続行できたのである。なお、一九四五年当初における在仏印フランス軍の戦力は以下のとおり。

陸軍

二個師団、五万名

海軍

戦艦ダンケルク及びストラスブール、空母ベアルン、駆逐艦ル・ファンタスク級全艦

空軍

FK58戦闘機八十機など

そこで、本土から遠く離れた地域における反乱の鎮圧を煩わしいものと考えていたフランスは、インドシナからほど近い日本に反乱鎮圧の支援を要請。中国及びロシアから物資を大量に買い入れたことで、弾薬が有り余っていた日本はこれを快諾したが、やはり何らかの見返りは欲しいとフランス側に様々な要求を出しては引っ込め

た。

交渉の結果、フランス側が一九四五年九月一日をもって南沙諸島（別名スプラトリー諸島）と西沙諸島（別名パラセル諸島）の領有権を日本に割譲するということで、一九四五年七月十五日に合意。この条件はフランスに不利なようにも思えるが、割譲した地域に日本軍が配置されることでフィリピンとインドシナの間における緩衝地帯となってくれることを考えれば、一概に損であるとも言えなかった。

むしろ軍備縮小の煽りを受けて、フランスはこれらの離島に部隊を常駐させておくだけの余裕が無く、このまま非武装の状態で放置しておけば他国、特にこれから国力を増大させるであろうフィリピンや中国が島を占拠してしまう恐れも十分にあった。それよりは、付き合いの長い日本に譲渡したほうがフランスにとってはまだましなのである。

この取り決めに従い、日本は台湾軍のうち一個師団を派兵。さらには第一航空艦隊と第二航空艦隊を交代で援護に就かせることにし、まずは輸送船団を護衛した第一航空艦隊が七月二十四日に佐世保港を出港したのだった。

第十三話 仏印動乱（後書き）

富士「貴様、まさかこのために支那や露助から弾薬を買い叩いたのか？」

作者「一切記憶に御座いません」

敷島「理に適った行動ではあるけれど……鬼畜過ぎるよ」

大隅「武力による脅しを一切用いず、着々と権益や領土を拡張する……普通の帝国主義政策より、批判しにくい分遙かに厄介なやり口ですね」

三笠「これぐらい姑息でなければ、諸外国の好餌になると言ってます。まあそれまでですが……次回予告をお願いします」

作者「この仏印動乱では、ジェット戦闘機が初めて実戦に送られます。次回『実戦は最大の試験』ご期待ください」

第十四話 実戦は最大の試験

七月二十四日、横須賀港には第一航空艦隊と輸送船十五万トンが集められ、一路南シナ海へ向け出港していった。日本はこのために新型航空機の生産を急ぎ、どうにか空母四隻の搭載機を全て最新鋭の機体に交換していた。なお、内訳は以下のとおり。

五式艦上戦闘機常用三十六機、予備機四機、合計四十機
五式艦上攻撃機常用三十六機、予備機四機、合計四十機
総計八十機（一隻当たり）

なお空母搭載機の更新に伴い、現役の正規空母は全てカタパルトや着艦装置の換装、及び甲板の補強を行っている。これは搭載機の重量や、発艦時及び着艦時の速度が飛躍的に増したことに對する処置であるが、アングルドデッキ化は時期尚早であるとして見送られた。

まともな航空戦力を持たない独立組織が相手であれば最新鋭機、それも最高速度が時速一千キロメートル近くに達する戦闘機を使用する必要性は皆無と言っている。それでも工場の生産能力を目一杯稼働させて新型機の配備を急いだ理由は、この紛争を通して新鋭機の性能を確かめるためであった。

即ち、新鋭機を高温多湿という過酷な環境の中で連日出撃させることにより、問題点をわざと表面化させようとしたのである。いわば、この紛争は体のいい実験場であった。

この紛争に投入される新型兵器はそれだけに止まらず、空母は魚雷や大型爆弾の搭載数を減らす代わりに、ガンポッド（外部武装の

形式で搭載する機銃及び機関砲）やロケット弾ポッドも搭載。アメリカから供与された、独立組織が所有する車両や小型舟艇を破壊し、敵の進軍に影響を与えることが期待された。

その後、第一航空艦隊は八月六日にベトナム北部のハノイ沖合に到着。そしてこの日より、艦隊から連日二十機程度ずつが出撃しての対地攻撃が延々と行われることになった。そしてこの日は、旗艦である「赤龍」から戦闘機六機、攻撃機十二機の攻撃隊が出撃したのである。

「いいか！ アメ公がばら撒いた小舟など、一隻や二隻沈めたって埒が明かん！ 十や二十は沈めて来い！」

自分の飛行甲板から飛び立っていく攻撃隊へと、赤龍が怒号にも似た檄を飛ばす。当の本人はと言えば、顔は興奮からか熱があるかのように紅潮していた。対米戦以来初の実戦とあって、少々力が入り過ぎているのだ。

なおこの時空母「赤龍」から飛び立った制空隊の一番機が、歴史上初めて実戦に投入されたジェット機となった。実戦部隊への配備という点ではイギリスのミーティア（一九四四年）やドイツのMe 262（同年。ヒトラーが政権を握らず、爆撃機への転用がされなかった結果早まった）より遅れたものの、性能では一級品である。

最初に仏印のフランス軍が撃破を依頼してきた目標は、北部仏印を流れるホン川に停泊中と思しき舟艇群。ベトナムにはいくつもの大河が流れており、そこではアメリカが独立組織へ漁船や渡し船といった名目で輸出した舟艇が無数に活動していたのだ。

とはいえ、フランスからしてみれば反乱軍である独立組織へと武

装艦艇を輸出すれば、それを口実に宣戦布告をされかねない。そこで舟艇は非武装のまま貨物船に積み込んで仏印へと輸送し、現地で別途密輸した機銃や迫撃砲等を搭載させることにしたのだ。また、独立組織がフランスの現地部隊から鹵獲した火器も搭載された。

問題は武装舟艇と民間の舟艇の区別が付きにくいことであつたが、そんな第一航空艦隊司令部の懸念に対し、フランス軍は民間船舶を巻き添えにしても構わないと回答。明らかに民間のものである船舶を除き、必要とあれば無差別攻撃も許容することであつた。

ホン川を遡行するように飛行した航空隊はフランス軍がいるハノイ上空を通過し、やがて独立組織が拠点としているであろうイエンバイやトゥインクアン、ラオカイといった地方の農村に到達。付近にいた舟艇へと、機銃や噴進弾を用いた攻撃を開始した。

第十四話 実戦は最大の試験（後書き）

富士「領土をせびっただけでは飽き足らず、新兵器の実験までするか」

作者「いくら設計図に後知恵を転用しても、工作精度によってその性能は大きく変わるはずです。ですから今のうちに、設計思想のみならず工業技術の弱点も洗い出しておこうという算段ですよ」

大隅「確かに、史実よりましとはいえ、我が国の工作精度に難があることに変わりはないでしょうからね」

三笠「利用できるものは、あらゆる方法で利用するのですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「果たして、日本製ジェット機の実力は如何に？ 次回『舟艇掃討戦』ご期待ください」

第十五話 舟艇掃討戦

翼にガンポッドを装備した二式戦闘機が低空まで急降下し、川辺に並んでいる舟艇へと二〇ミリ機銃弾の雨を降らせる。アメリカが輸出した舟艇は以下のように上陸用舟艇などの試作型が多く、さらに輸出時には全ての武装が外されていたため、対空戦闘能力は何れも皆無に近かった。

・LCM（五十隻）

史実における大発よりやや幅広な船体を持つ上陸用舟艇。後部に機銃二門装備、兵員百名を輸送可能。

・LCP L（五十隻）

史実における小発に相当する上陸用舟艇。前部に機銃二門を装備し、兵員三十六名を輸送可能。

・PT-10級魚雷艇（エレクトリック・ボート社エルコ部門製七十フィート型、十隻）

基準排水量三十三トン、十二・七ミリ連装機銃二基、十八インチ魚雷四本、速力三十九ノット。

・PT-20級魚雷艇（エレクトリック・ボート社エルコ部門製七十七フィート型、二十八隻）

基準排水量三十五トン、武装と速力は七十フィート型に準ずる。

船体が木製のアメリカ製魚雷艇は、焼夷炸裂弾が命中すると瞬く間に炎上する。また上陸用舟艇も簡単には炎上こそしないものの、相次ぐ機銃弾の命中によって船体は穴だらけにされ、やがてそこから発生した進水によって傾斜していった。

史実においては、ソロモン諸島周辺で日本海軍の大発が米軍魚雷艇の四十ミリ機関砲や二十ミリ機銃を受けて次々と失われていった。

また反対に、魚雷艇の側が大発に仮設された火器や航空機の機銃掃射によって撃沈されたことも多々ある。

中でも米軍魚雷艇にとって厄介だったのが、今回と同じように大口徑機銃を搭載した航空機による空からの攻撃であった。航空機相手では四十ノット前後に達する速力も大して生かせず、また対抗手段もないからである。つまりこの攻撃は、「歴史改変によってなかったことにされた戦訓」を元にして考案されたのだ。

「フランスの飛行機め、こんなところにまで来るのかよ！」

「いや、翼の印が違うからあれはフランスのじゃあないぞ……どこ
の飛行機だ？」

見慣れない赤い丸があしらわれた飛行機を見て、民兵たちは混乱する。まさか日本軍が自分たちを攻撃してこようとは思ってもしなかった彼らは取り敢えず手近な武器、それも小銃や軽機関銃と言ったお粗末な代物で無我夢中のまま応戦するしかなかった。

そして、敵機がいないために手持無沙汰となった二式戦闘機隊が機銃掃射に加わる。民兵は当初二式戦闘機の違和感に気付かなかつたが、プロペラが無いことを知るとまたもや面喰った。

「なんだあれは！ プロペラが無いのに飛んでいるぞ！」

「ば……化け物だあっ！」

錯乱状態に陥った民兵たちが闇雲に応戦するが、何ら有効な打撃を与えるには至らない。むしろ発砲炎や煙によって自分たちの位置を知らせ、機銃掃射の良的になるだけであった。

「そんな豆鉄砲で、この機体が墜ちるかよっ！」

左右の翼に外部機銃を装備し、合計で二十ミリ機銃六門という大火力を備えた五式戦闘機が機銃掃射を行う。その威力は余りにも熾烈で、反動が翼に負担をかけるため連続発射時間に限度があるということを除けば、対地攻撃に関して非の打ち所の無い兵器となった。

航空攻撃が終わった頃には、川辺の至る所で火災が発生しており、舟艇も二十隻近くが撃沈若しくは撃破された。双方の詳細な損害は以下のとおりで、民兵側の死傷者は概数である。

日本側損害

喪失航空機無し。但し被弾によって戦闘機二機、攻撃機三機が一時的に出撃不能。

民兵側損害

P T-10 級魚雷艇三隻、L C M 八隻、L C P L 六隻喪失。他に、多数の舟艇が損傷。

戦死五十名、負傷二十名

同日午後三時、赤龍は自分の艦に帰投してきた航空隊の戦果報告を聞いて、欣喜雀躍しながら自室へと戻った。ましてや喪失航空機が皆無なのだから、相手が相手とはいえまさに完全な作戦成功である。

「アメリカの援助を受けて調子に乗っているようだが、所詮民兵は民兵。正規軍、それも世界随一の精強である我々には、手も足も出まいな。この戦、一年……いや、半年と経たずにけりをつけてやる！」

だが、彼女はまだ知らなかった。勝手知ったる森林地帯で遊撃戦を行う相手が如何に頑強で、神出鬼没の彼らに対抗するのが如何に

困難かということ。

第十五話 舟艇掃討戦（後書き）

敷島「これはまた、随分なオーバーキルだねえ」

富士「本当に、ジェット機を派遣する意味があるのか？」

作者「将来に多様な環境の場所にジェット機を送らなければならなくなつた際、今回の戦訓があるとないとでは大違いでしょう」

大隅「つまり、飽くまで戦訓が得られればそれで良い、と？」

作者「うん。戦訓と領土が得られて、フランスに嫌われるようなことが無ければ、正直なところ仏印がどうなつたって日本の知るところではないよ」

三笠「今、さらっとんでもないことを言つたような気が……それはともかくとして、次回予告をお願いします」

作者「仏印に送られた日本陸軍は、変わった戦い方を強いられることとなります。次回『遊撃部隊掃討戦』ご期待ください」

第十六話 遊撃部隊掃討戦

翌日から、第一航空艦隊は三日間に亘る航空攻撃を敢行。さらに魚雷艇六隻、LCM九隻、LCP L十一隻を沈没若しくは炎上させ、ホン川の民兵海上戦力は壊滅した。一方の日本側も被弾によって修理が不可能と見做された戦闘機一機と攻撃機三機がそれぞれその場で解体処分となったが、搭乗員の戦死は攻撃機に搭乗中機上で戦死した一名のみで、撃墜された航空機も皆無だった。

その後の八月十日、第一航空艦隊はハノイの東南東約八十キロの地点にあるハイフォンに入港。輸送船団から「海上機動師団」と名付けられた海兵隊のような一個師団が陸揚げされ、フランス軍と共に反乱の鎮圧に当たることになった。

なおこの時陸揚げされた師団には、火炎放射器や対人指向性地雷といった対非正規軍用の装備が優先的に供給されており、戦車にも徹甲弾より対人散弾（キャニスター弾）が多く搭載されていた。そしてこういった兵器もまた、五式戦闘機や外部機銃と同じく半ば実験目的での実戦投入がなされたのである。

無数の防弾性能を強化した上陸用舟艇に乗り移った師団は、数万吨もの物資や弾薬と共に早速ハノイへと移動すると、そこに駐屯地を仮設。北部の農村を根拠地とする民兵を掃討するために、上陸用舟艇で川を遡行しながらの戦闘を行った。

「フランスからの情報では、敵は機関砲や歩兵砲といった重火器を保有していない。つまり今我々が乗っている舟艇も、ろくに沈められないということだ。万が一の場合というものは当然警戒しておく必要があるだろうが、安心して戦え」

将兵はまず一個分隊ずつが上陸用舟艇に乗り込み、舟艇には小銃の他に複数の機関銃や擲弾筒を装備。敵を発見した際には適宜上陸戦闘を行うこととし、まるで「水上装甲兵員輸送車」のような戦い方が考えられていた。そして、それが四隻一隊（即ち陸軍将兵一個小隊単位）で行動するのである。

舟艇で移動するのは、行軍による将兵の疲労を軽減することと、移動中に地雷や罠の所為で死傷する恐れを少なくするのが目的。四隻一隊で移動する理由は、もし一隻か二隻が奇襲でやられたとしても残った部隊ですぐに応戦したり、あるいは後方に増援を頼んだりすることができるようにするためであった。

「しかし、こんな馬賊や匪賊みたいな戦い方をすることになるとはなあ」

「敵だって、それに毛が生えたようなもんだ。それに下手に大軍で動いたら、一網打尽にされかねない」

「各個撃破されてもいいっていうのか？ そりゃあないぜ」

「そこ、静かにしろ！ 敵がいつ出てくるかわからんだから、警戒を怠るな！」

慣れない戦い方に愚痴をこぼす兵士へと、上陸用舟艇を操舵している分隊長の怒号が飛ぶ。舟艇は簡単かつ迅速に移動できるが、川をそれなりに大きな船体が移動しているのだから敵からは発見されやすく、逆にこちらからは森林に潜んでいる敵を見つけにくいという難点があった。

なので舟艇に乗る将兵には双眼鏡が支給され、操舵室や舷側で見張りをしていた。しかし二時間、三時間と搜索を続けても敵は見つからず、時折目に入る集落からも何の反応も無かった。

（なあ、このまま骨折り損のくたびれもうけになるんじゃないか？）
（もしかしたら、こっちに恐れをなして逃げて行ったのかもな）

「そろそろ、敵の勢力圏に入る。いつでも戦闘に入れるよう準備しておけ」

（おっと、いけねえ）

ひそひそと話をしていた二人の兵士は、分隊長の一声で慌てて雑談を止める。そしてその刹那、一発の弾丸が舟艇の右舷舷側へと命中した。小銃弾だったのか幸いにしてその弾丸は側壁によって弾かれたが、四隻の上陸用舟艇に乗っていた将兵の間には一気に緊張が走る。

「敵襲！ 目標右舷発砲炎、撃ち方始め！」

分隊長の号令で、先程発砲炎が認められた方向へと機関銃が放たれる。しかし五分ほど断続的な発砲を行ったが陸上からは何の反応も無く、舟艇隊を率いていた小隊長兼一番艇艇長は、自らの艇と二番艇を着岸させ、上陸戦闘を行うことにした。

第十六話 遊撃部隊掃討戦（後書き）

作者「アッー！」

富士「貴様……何があったかは知らんが、叫ぶのは兎も角、その叫び方だけは止めろ。変な疑いをかけられるぞ」

大隅「何でも、作者さんがこれまで書き溜めていた現代編の下書きを読み返した際、設定の矛盾点がいくつも見つかったそうです。ですから修正が億劫になって、あのような御乱心に至ったのでしょ

う」
敷島「で、叫び方はなんであなるの？」

作者「事故です、事故。まあ、私は高校時代、同級生の男子に二人がかりで襲われたことがありますかね……念のため言っておきますと、私も男です」

朝日「で……彼我の損害は？」

作者「徒手空拳で二人とも流血寸前まで追い込んだら、何もせずに逃げて行ったよ。二人とも身長は六尺近くあったけれど、むしろそっちの方がやりやすかったかな」

三笠「果たして、作者さんがどう戦ったのか気にもなりますが……次回予告をお願いします」

作者「果たして、上陸した二個分隊の命運は如何に？ 次回『ブービートラップ』ご期待ください」

第十七話　ブービートラップ

川岸に近づいた一番艇と二番艇はまず川底に錨を下ろし、艇首を岸へと乗り上げる。そして「門扉開け」の号令で前方の床板が渡されると、それぞれ十名ずつが森林地帯へと突入していった。残りの五名ずつは、着岸中に襲われてもすぐ避退できるよう、また必要とあらば火力支援ができるよう留守番をするのである。

「くそっ、あいつらどこ行きやがった！」

「静かにしろ。大声を出せば、こちらの居場所を感付かれて追いつけるものも追いつけなくなるぞ」

痺れを切らして苦々しげに吐き捨てる若い兵士を、上陸した面々の中で最年長である古参の伍長が慌ててたしなめる。結局一時間ほど搜索したものの敵はおろか人っ子一人発見できず、二十名の兵士たちはすすごと舟艇に引き返していった。

その後もしばらくは似たような事態が続き、ハノイ周辺を警戒していた本隊が散発的な戦闘を行った他は、戦闘らしい戦闘もないまま数日が過ぎた。そして八月十九日の哨戒中、またもや陸上から舟艇に向けた発砲が認められたのである。

「全艇、着岸用意！ 今日こそ奴らの尻尾を掴んでやれ！」

四隻の舟艇から、四十名の兵士が森林地帯へと突入する。一方の民兵はと言えば、日本兵たちと付かず離れずの距離を保ちながら一定の方向に逃げ続けていた。その挙動に不信感を抱いた一番艇上陸部隊の指揮官である伍長は、一時追撃の中止を決断する。

「ええい、いい加減観念しやがれ！」

「追撃止め！　これは、もしかしたら敵の罠――」

言うが早いか、隊の先頭付近を進んでいた一人の兵士が足を針金に引っ掛ける。そして針金が引っ張られたことで爆弾に点火し、彼の足元で小さな、しかし人間を殺傷するには十分すぎる程度の規模を持った爆発が起きた。

「ぐはあっ！」

「大丈夫か！　くっ、足をやられてやがる……全員、舟艇まで戻ろぞ！」

伍長は両足を吹き飛ばされた兵士を背負うと、先程来た道を引き返そうとする。だがその時、周囲の木陰から五十名以上の民兵がアメリカから供与されたスプリングフィールドM1903小銃などを持って現れた。既に、一個小隊の日本軍将兵は歩いてきた真後ろを除いて完全に包囲されていたのだ。

「敵の術中に嵌まるとは……二番艇から四番艇までの部隊は、早く逃げろ！　一番艇の部隊が殿軍を務める！」

「そんなこと、できるわけないだろうが！　全部隊で一点突破を目指すべきだ！」

「く……っ。四番艇の部隊を先頭とし、鋒矢の陣形をとれ！　殿軍は変わらず一番艇隊！」

鋒矢の陣形は、突破力に優れるものの側面や後方からの攻撃に弱い。とはいえこの状況では真正面から戦って勝てる見込みもなく、伍長は手薄な後方を一刻も早く突破して再起を図るのが上策だと考えたのだ。

だが案の定、殿軍を務める分隊は四方八方からの集中砲火を受けた。そして一番艇の伍長も、肩を銃弾が掠ったことで手傷を負ってしまったのである。

「班長、自分はどう無理です……ですから自分を囚としてここに置いて、その間に逃げてください」

「馬鹿野郎、そんなことができるか！　生きて舟艇に……ごほあっ！」

伍長の真後ろから放たれた銃弾が、背負われていた兵士ごと彼の胴体を貫く。痛みと衝撃でがくりと膝をついた伍長は、兵士ともどもその場に倒れこむ。最早、兵士を背負って帰るだけの体力は彼に残されていなかった。

「くそっ……もう、貴様を負ぶって帰れそうにない」

「それで構いません。自分も、辛うじて銃は撃てますから……時間稼ぎぐらいは」

「すまん……すまん……っ！」

そう言うと、伍長は涙を滲ませながら撤退する。そしてそれを見届けた兵士は、わざと敵の注意を惹きつけるように大声で叫んだ。

「貴様らっ！　ここを通りたければ、この俺を殺してからにするんだなあっ！」

岩を背もたれ代わりにして兵士が放った銃弾は、一人また一人と民兵を撃ち倒していく。しかし三人目を仕留めたところで一弾が彼の心臓を貫き、戦友の撤退と引き換えに彼は絶命したのだった。

第十七話 ブービートラップ（後書き）

富士「まさかとは思うが、負傷した部下を背負った指揮官が後ろから撃たれるのは……軍歌『橘中佐』からとったのか？」

作者「最初は意識していませんでしたが、書いてから気付きました。『またも中佐の背を貫きて 内田の胸を破りけり』という部分ですね」

敷島「上下に分かれているとはいえ、三十二番もある歌なんてそうそうないよ」

作者「どなたか、それぞれ通して歌ってくれないかな……と、話がそれすぎました」

三笠「他力本願のような気もしますが、こればかりは仕方ないですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「民兵の遊撃戦に手を焼いた日本軍が、毎度お馴染みの手段で独立組織を潰しにかかります。次回『ヘッドショット』ご期待ください」

第十八話 ヘッドショット

八月十九日の一件を受け、河川での警戒活動を担当していた仏印派遣軍第四歩兵大隊第一中隊は水上警備の方針を変更。それまで一個分隊搭乗の舟艇四隻で行動していたところを一個小隊搭乗の舟艇四隻で行動することにして、戦力の各個撃破を防ごうとしていた。

しかしこれでは一回の哨戒で出撃する兵員が一個中隊となり、交代要員を確保できない。そこで今後のホン川における河川警備は第四歩兵大隊総出で当たることになり、さらには南のマー川にも第三歩兵大隊が上陸用舟艇十六隻と共に進出した。

一方、仏印派遣軍本隊は民兵の不意打ちや罠に苦戦しながらも、火炎放射器や対人散弾、さらには航空攻撃を用いた半ば焦土作戦と言っても過言ではない戦法で進撃。特に戦車隊による対人散弾は、戦車に対する有効な攻撃手段を持たない民兵にとって大きな脅威であり、地雷によって履帯を切断したり戦車の入ってこれない沼地や山地に逃げ込んだりするのが関の山であった。

また階級章や軍服を着用していない民兵は戦時国際法で保護されないことを逆手に取り、捕えた民兵に対して大きな音を聴かせ続けて眠らせないなど、拷問すれすれの方法を交えて尋問。身体に傷跡が残ると、それが拷問の証拠となって後に国際的な批判の対象になる恐れもあったため、専ら精神的な苦痛だけを与える方法が用いられた。

そして尋問によって指導者の居場所や活動拠点の所在などが分かり次第、そこに攻撃を加える。これまでに日本が鎮圧してきた民間の武装組織は、ロシア革命然り中国国内の共産主義組織然り指導者

と拠点を叩けば瓦解させやすいものであったので、今回もこの方法が用いられたのだ。その結果、以下のような面々が拘束または殺害されることになる。

グエン・タト・タイン

史実のベトナム民主共和国初代首相ホー・チ・ミンと同一人物。史実で彼は一九四二年にベトナム独立を支援してもらったため中華民国へと渡り、その時にホー・チ・ミンと改名したが、中華民国がフランス寄りの立場をとっていたために訪中を取り止めた結果改名も無くなった。

一九四五年十月十八日、ディエンビエンフーでの戦闘後日本軍に投降する。直後にフランス軍へと身柄を引き渡されたが、後述のダン・シャン・クーと同じく名ばかりの裁判にかけられ、十一月二十三日死刑判決。十二月十日に刑場の露と消えた。

ダン・シャン・クー

史実のベトナム社会主義共和国国会議長チュオン・チンと同一人物。史実において彼は一九三〇年に結成されたベトナム共産党へと入党する際、毛沢東の「長征」からとってチュオン・チンと改名したが、歴史が変わったことで長征もベトナム共産党も存在していないため改名しないままとなった。

一九四五年九月八日、イエンバイで日本軍に拘束される。その後フランスによって形だけの裁判にかけられ、十月十五日に死刑判決。二十日には銃殺刑に処されるという早業であった。

ヴォー・グエン・ザップ

遊撃戦の名手。史実の第一次インドシナ戦争ではベトナム軍総司令官となっており、歴史が変わってなおこのことに変化は無かった。一九四五年十月十三日、ディエンビエンフーの戦闘で日仏連合軍と銃撃戦になり、陣頭指揮を執った末に銃弾を受けて戦死。

こうして北部仏印の反乱は一九四五年中に粗方鎮圧されたものの、十月二日に始まったディエンビエンフーの戦いはフランス軍と民兵の双方、そして日本軍にとっても厳しい戦いとなったのだ。

第十八話 ヘッドショット（後書き）

作者「二日間で一万文字近く書き進んだと思ったら、イギリス海軍とアルゼンチン海軍がフォークランドの沖で砲撃戦をしていました。ちなみにアルゼンチン海軍の主力は史実ではアメリカの中古艦でしたが、本作では日本が一世代前に使っていた艦の同型艦です」

富士「それは、よほど調子が良かったのだな。そう言えば、我が海軍の艦艇は今までに無い汎用艦だと言っていなかったか？」

作者「はい。それに誘導弾も大半の艦が装備しますから、イギリス軍はそれ相応の苦戦を強いられますね」

富士「ほう、イギリス生まれの私たちの前でそれを言うとはいいい度胸だ」

三笠「あの、早めの次回予告をお願いします」

作者「今回は反乱鎮圧に当たったの風物詩ともなった、指導者狩りが行われます。次回『ディエンビエンフーの戦い』ご期待ください」

第十九話 ディエンビエンフーの戦い

一九四五年十月二日より、日仏連合軍と民兵は仏印北部のディエンビエンフーで交戦。日本軍はこの時点で既に一個歩兵大隊に相当する人員が死傷して戦闘不能に陥っていたが、一万四千名近い兵力のうちほぼ全員をこの戦闘へと投入した。

またフランス軍は当初の二個師団五万名に加え、本土から本来は解隊予定だった部隊のうち四個師団、合計十万名を輸送。そして、本土から新たに輸送したこの四個師団をそのままディエンビエンフーへと送り込んだ。即ち、日仏連合軍の合計戦力は十一万四千名近くに達していたのである。

一方の民兵側は、三個歩兵大隊からなる歩兵連隊を三個合わせた歩兵師団が三個の合計およそ七万五千名。数の上での不利はそれほどでもなかったが、史実の第一次インドシナ戦争における同地での戦いでは大小合計で百五十門以上入手できていた火炮がごく僅かしか配備されておらず、火力の面では絶対的な劣勢に立たされていた。

「目標、前方の敵塹壕！ 撃ち方始め！」

塹壕の中や物陰から精々機関銃を撃つことしかできない民兵たちへと、無数の砲弾が降り注ぐ。そして日本軍の砲兵部隊には三インチと五インチの拡散弾が少数ながら支給されており、ただでさえ大きな対人殺傷能力をさらに高めていた。

「第一中隊、敵塹壕に突撃せよ！」

砲兵の砲撃が終わると、今度は師団の一番前に陣取っていた戦車

隊が殴り込みをかける。だが塹壕を乗り越えようとしていた戦車のうち数台が、突如として車体の真下で起こった爆発に巻き込まれた。

「だ、第二小队全車移動不能っ！」

「まさか……塹壕の目の前に地雷を置いていたのか！」

そして履帯を切断され動けなくなった戦車へと民兵がよじ登り、操縦席や砲塔の出入り口を開けて手榴弾を投げ込む。瞬間に、第一中队第二小队の四両は全車が破壊されてしまった。無論、手榴弾を投げ込むために塹壕から出てきた民兵は大半が随伴歩兵や他の戦車の車載機銃によって射殺されたが、それでも日本側としては無視できない損害であった。

その後民兵が立てこもる施設へと日仏連合軍が到達するまでに、日本では十二両、フランスも十六両の戦車が破壊されるか行動不能に陥っていた。しかし一度地雷原を突破してしまえば、日仏両軍の戦車隊を止められるものは何も無いのだ。

「歩兵相手なら十分だ……射撃始め！」

民兵の総指揮官であるヴォー・グエン・ザップ直属の歩兵師団が、日仏連合軍の前に最後の壁として立ち塞がる。地形や建物の陰から少人数で射撃を行い、追撃される前に移動するという遊撃戦は装備、兵力そして練度と何れの面でも劣る民兵側が採れる最善の手段であった。

さらに他の師団が専らM1903スプリングフィールドを主力小銃とするのに対して、この師団はアメリカから供与されたM1ガーランドを所有。半自動小銃と言う点では日本の百式小銃と互角であり、フランス軍に至ってはより旧式なボルトアクション式小銃であ

るMAS36が主力であったので、双方の戦力差を縮める貴重な存在となった。

とはいえやはり衆寡敵せず、最終的には自らも前線で小銃を構えたヴォー・グエン・ザップは十月十五日午後一時半頃、フランス軍の銃撃によって戦死。次いで三日後の十月十八日午後七時頃、日本軍仏印派遣師団の第二歩兵大隊がグエン・タト・タイン（ホー・チ・ミン）の立て籠もる家屋へと突入した。

「俺が扉を蹴破るから、室内に突入していつでも銃を撃てるよう構えておけ」

小隊長兼分隊長である少尉の命令に、この分隊で生き残っていた十一名の下士官兵が頷く。そして勢いよく蹴倒された扉から、十名の下士官兵が躍り込んで横一列に並び、一斉に銃を構えた。その様子はまるで、銃殺刑を執行するときのようにも思えた。

「ここまで、か……全員、手を挙げなさい」

指導者たちに抵抗の意思が無いことを悟った小隊長は安堵するが、彼はベトナムの言葉など知る由もないので対応に困る。すると数分ほどして、フランス軍の分隊がやってきたので、彼はフランス軍の隊長と思しき軍人に英語で話しかけた。

「あー……貴方は、ベトナムの言葉を話せますかな？」

「ええ。ところで、彼らの身柄を我々が引き取っても宜しいですか？ 彼らの処遇は、我々フランスに一任して頂きたい」

「お願いします」

そう言うと、小隊長は部下に「彼らはフランス軍に任せる。我々

は、掃討戦に移ろう」と言って部屋を出た。なお、この戦闘における各勢力の被害は以下のとおり。

日本軍損害

戦死三千六百名、負傷二千九百名

フランス軍損害

戦死一万二千名、負傷一万三千名

ベトナム民兵損害（抵抗を止めたものの、一方的に殺害された場合も含む）

戦死五万名（実質的な戦死は半分程度）、負傷六千名

第十九話 ディエンビエンフーの戦い（後書き）

敷島「日本の士官が英語を話せるのは分かるけれど……フランスの士官って、英語を教わっているの？」

作者「断定はできませんが、仏印に回されるぐらいですからあるていどの語学力はあると考えて差し支えないかと。ましてや日本との共同作戦は、以前から続いていることですから」

富士「しかし、どうも見せ場に欠けるな……で、フォークランドはどうなった？」

作者「本日、三万文字を優に上回った末に書き終えました。結果は申し上げられませんが、フリゲート以上の戦闘艦艇だけで、両国合わせて基準排水量にして八万トン以上の戦没艦が出てしまいました」

朝日「は、八万トン……小規模な海軍であれば、とっくに全滅している数字ですな」

大隅「その数字なら、おそらく一万トン以上の大型艦が含まれているのではと推察致しますが……如何ですか？」

作者「一隻だけ、ね。まあ、遠からず退役するような艦ではあったけれど」

三笠「ということは、老朽艦ということですね……誰だか気になりますが、次回予告をお願いします」

作者「ディエンビエンフーを落としても、仏印動乱はまだまだ続き

ます。次回『焦土作戦』ご期待ください」

第二十話 焦土作戦

ディエンビエンフーにおける戦闘の後、日仏の目論見どおり東部仏印の反乱は徐々に沈静化。未だに南部では反乱がある程度の勢いを持っていたが、指導者を失ったことで統率がとれなくなった民兵は正規軍の敵ではなく、日本から食糧や燃料等の物資を買い取ったフランスの大軍によって各個撃破されていった。

そして、反乱の中心は史実の現代におけるラオスやカンボジアといった内陸部へと移行。しかしこの民兵は、かつてアメリカから武器弾薬を調達しただけではなく、なんとフランスと仲が悪いタイ王国から現在進行形で援助を受けていた。

仏印と陸続きで接するタイ王国としては、フランスによる仏印統治が安定すればやがて自分たちに刃を向けられかねないという危機感があり、今回の反乱は願ったり叶ったりであった。だからこそ、事と次第が明らかになれば今までも増してフランスから敵対視されるという危険を冒してまで、民兵への援助を行ったのだ。

このことを以前から察知していたフランス政府は、ディエンビエンフーの戦いの直後に裏付けとなる証拠を提出して援助の中止を要求。これに対してタイ王国は史実のタイ・仏印紛争時と同じく「ラオスにあるメコン川右岸のチャンパサク地方と、カンボジアのバツタンバン州及びシエムリアプ州の返還」を代償として求めてきた。

これは仏印にとって到底呑めない条件であり、一時はタイとの開戦も検討されたが、これ以上戦線を広げればタイと民兵の共同戦線が展開されて今以上に状況が悪化する恐れもあった。そのため仏印は、タイの援助を指を咥えて見ているしかないという半ば泣寝入り

を強いられたのである。

また仏印に展開している戦力は現在でさえ余裕が無く、さりとて現在の軍事予算では増派も難しい。仕方なく、仏印はフランスによる統治に協力的な現地住民から可能な限りの戦時徴兵を行って、二個師団を捻出することでその場を凌ぐしかなかった。

それでもなお、民兵による神出鬼没の遊撃戦に手を焼いたフランスは必要に応じて本格的な焦土作戦を実行。民兵に与していると判断された集落がいくつも焼き払われ、そのたびに数十名から数百名の民兵や民間人が無差別に殺傷されることになった。

火炎放射を浴びせられた民家は容易く焼け落ち、逃げようとした民間人は悉く小銃や機関銃の餌食になった。そしてフランス兵は黒焦げや蜂の巣になった死体を、一ヶ所へとうず高く積み上げた。

「よし、着火！」

死体の山へと四方八方から火炎放射が放たれ、忽ち全体が炎に包まれる。こうなっては最早生存者の存在も望めず、この作戦に携わった誰かが口外しない限り永遠に事の次第が明るみになることもない。

「それにしても、いつになったら終わるんだか」

「知らないよ。ひょっとしたら、半永久的に続くかもな」

「おいおい、洒落になんねえよ」

最初の頃は、良心に苛まれて作戦の実行を躊躇する将兵も多数いた。しかし二度三度と繰り返していくにつれ、いつしか自分が引き起こしている目の前の惨劇に慣れてしまい、やがて何の躊躇いも無

く集落を消滅させるようになってしまふ者も少なくなかった。

「なんだ、まだ躊躇っているのか？」

「俺は、こんなことをするために軍隊に入ったんじゃない。敵兵を殺すならまだしも、疑いがあるっていうだけで民間人を殺すのはどうも性に合わねえ」

「疑いがあるのなら、それで十分だ。軍隊は、常に最悪の事態を想定して動くべきだからな」

良く言えば冷静、悪く言えば冷酷な同僚の反応に、兵士は大きなため息をつく。彼は何度経験しても、目の前で死体の山が炎に包まれるのを見るのは辛かった。ましてやそうなった原因の一端は自分にもあるのだから、そう考えると気が狂いそうでさえあった。

「冷てえなあ。あーあ、早くフランスに帰りたいよ」

そう言っではみるものの、実際にそれがいつ叶うのかは見当もつかない。彼はただ、上官の「全員、撤収するぞ！」という命令に応じてすごすごと駐屯地に帰ることしかできなかった。

第二十話 焦土作戦（後書き）

作者「帝都北部で、しかもビルの四階にいるときに地震が来たからだいぶ揺れたよ。まあ、想定はしていたから慌てずに避難できたけど」

富士「で、家は大丈夫だったのか？」

作者「軍事書籍七十冊以上が本棚から落ちて、軽巡洋艦『酒匂』の模型が小破した以外は無事でした。天照大御神と靖国神社の神札を祀った縦に細長い神棚が、震度五強にも拘らず平然としていたのは流石といったところでしょうか」

敷島「まあ、無事ならそれでいいけど……宮城のほうは酷い有様だよ」

作者「ええ。今回の地震で亡くなられた全ての方々に対して哀悼の意を表すとともに、最終的な犠牲者が一人でも少ないことを願わずにはられません」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「半年でけりをつけると宣言した赤龍でしたが、その見込みは脆くも裏切られました。次回『慢心から焦燥へ』ご期待ください」

第二十一話 慢心から焦燥へ

一九四六年、元旦。既に日本が仏印紛争に介入しておよそ五か月が経過していたが、日仏連合軍は海岸部や都市部の制圧にこそ成功したものの、内陸の農村部では未だに民兵が跳梁跋扈していた。特にルアンパバーンとシエムリアプは、それぞれルアンパバーン王国独立派とカンボジア王国独立派の根拠地となっており、万単位の民兵がいると言われていた。

民兵の予想を超えた頑強な抵抗に業を煮やしたフランスは、日本へと再三に亘って増援を要請。日本もこれに応えて、フランスから譲渡された南沙諸島の黄山馬島（日本名は長島。史実の現代における太平島）や西沙諸島のウツディー島（日本名は同じく永興島）に飛行場を仮設してそれぞれ六十機の航空部隊を派遣したが、根本的な解決にはなりえなかった。

そこで、日本軍は十二月にブルネイから第二十七師団を増派したものの、やはり焼石に水であった。なお一九四五年度の軍縮終了後における日本陸軍師団の配置と各師団の通称号は以下のとおりであり、第十九師団以降は日露戦争後に編成された師団である。

北部方面軍（北海道、東北及び関東地方）

近衛（東京・宮）、第一（東京・玉。現在仏印に派遣中）、第二（仙台・勇）、第七（旭川・熊）

中部方面軍（中部及び近畿地方）

第三（名古屋・幸）、第四（大阪・淀）、第九（金沢・武）、第十（姫路・鉄）

西部方面軍（中国及び四国地方、中华民国派遣軍）

第五（広島・鯉）、第十一（善通寺・錦）、第十七（岡山・月）、

第十九（旅順・徳）

南西方面軍（九州地方、沖縄、台湾）

第六（熊本・明）、第十二（小倉・剣）、第二十（那覇・沖）、第二十一（台北・高）

南洋方面軍（北西ニューギニアを含む南洋諸島）

第二十一（サイパン・彩）、第二十二（コロール・南）、第二十三（メジロ・灘）、第二十四（ラバウル・春）

南東方面軍（ブルネイ、フィリピン）

第二十五（クチン・剛）、第二十六（サンダカン・峰）、第二十七（シブ・龍）、第二十八（マニラ・衛）

合計二十四個師団、三十六万名

史実の日露戦争までに編成され、かつ一九四五年までに解隊された師団

第八（弘前・杉）、第十三（高田・鏡）、第十四（宇都宮・照）、第十五（豊橋・祭）第十六（京都・垣）

同日、第一航空艦隊旗艦「赤龍」予備幕僚室。

「敵もしぶといな……まさか、第一師団将兵の過半が死傷するとは」

彼女は、「半年と経たずにけりをつける」と考えていた自分の甘い目算を悔いていた。横須賀から出撃する前、彼女は勇や秋津洲から遊撃戦の厄介さについて再三に亘って忠告を受けていたが、彼女はどこかその言葉を本気にしていない節があった。

その理由は、偏に慢心から来た油断であると言えよう。では一体何が、彼女を慢心へと走らせたのであろうか。それは、彼女の艦歴と戦歴が大きく関係していた。

赤龍は第一航空艦隊旗艦として開戦劈頭の真珠湾攻撃へと参加し、搭載していた航空隊が現在は横須賀に保存されている空母「ワस्प」を含めて数十隻の艦船を撃沈もしくは撃破。その後も彼女の艦隊は特にこれと言って大きな損害を受けることも無く、対米戦の終結まで戦い抜いた。

このことは彼女の誇りになると同時に自らの、ひいては日本軍全体の能力を過信させるきっかけにもなってしまった。あたかも自分だけで真珠湾の在泊艦艇を、あるいは日本だけでアメリカを撃破したかのような錯覚に陥り、最早自分に鎧袖一触できない敵はこの世界に存在しないとさえ思いこんだのだ。

「あの時、私が有馬大将や秋津洲長官のお言葉をしっかりと聞いていれば……多少は、変わったのか？」

椅子から立ち上がって、彼女はおもむろに自分の露天艦橋へと瞬間移動する。そこには万が一の事態に備え、戦闘機六機がいつでも出撃できる状態で待機していたが、民兵がまともな航空隊を持っていない今の状況では大した意味を成していなかった。

「この紛争は……いつまで続くんだ？」

攻撃隊を出しても出しても戦果を収めているという実感が湧かなくなり、赤龍は途方に暮れる。今の彼女には、自分のやっていることに意味があるのかどうかということさえ分からなくなってきていた。

第二十一話 慢心から焦燥へ（後書き）

作者「東京のスーパーやコンビニを何軒か回ったけれど、何処も彼処も品不足だよ。特に、すぐ食べられる菓子パンや非常食の類はほぼ全滅だ」

富士「まるでオイルショックだな。ガソリンスタンドも、レギュラーガソリンを切らしているところが多いらしい」

敷島「恐怖心や集団心理に依るところが大きいんだろうね。物流も大損害を受けているから、最初から品不足というのもあるんだろうけれど」

三笠「未だに予断を許さない状況ですが、次回予告をお願いします」

作者「次回、偶発的な戦闘が新たな争いを引き起こします。次回『日泰開戦』ご期待ください」

第二十二話 日泰開戦

一九四六年、一月上旬のある日のこと。この日も空母「赤龍」から戦闘機六機、攻撃機十二機の攻撃隊が編成されてビエンチャンの民兵や舟艇、さらには目に付いた車両なども攻撃していた。これまでに日本海軍は戦闘機八機と攻撃機十五機を事故や損傷後の海中投棄によって失っていたが、戦闘によって撃墜された機体は皆無であり、戦死搭乗員も戦闘機三名、攻撃機二十六名の合計二十九名に止まっていた。

「やれやれ、今日も機銃掃射だけか……ん？」

毎回、護衛の名目で出撃しては機銃掃射だけして帰ってくるという現実には愚痴をこぼしていた搭乗員が、遠くに数個の黒点を発見する。その黒点はみるみる大きくなり、やがてははっきりと飛行機の形に見えるまで接近してきた。

「所属不明機からの発砲を確認した。全戦闘機、敵機の排除にかかれ！」

制空隊隊長からの航空無線で状況を飲み込んだ彼は、慌てて愛機を駆って敵機と思しき機体を追撃する。そうして彼が視界に捉えた機体は、見慣れない国籍識別標識が描かれた戦闘機であった。

「墜ちろ、蚊蜻蛉っ！」

満を持して放たれた二十ミリ機銃弾は敵機へと吸い込まれるように飛んでいき、敵機であるP-36「ホーク」の主翼を叩き折る。レシプロ戦闘機の中でも既に大半の国で第一線を退いているP-3

6は五式戦闘機の相手にならず、日本側が二機被弾しただけで来襲した四機全機の撃墜に成功した。

だがこの翌日、タイ王国政府は領土上空で哨戒飛行を行っていた戦闘機が日本軍の先制攻撃によって一方的に撃墜されたと主張。日本側も空戦記録を楯に正当防衛であったことを強調したが、確たる証拠も無いために、両者の主張は平行線を辿った。

実はタイ王国国内において当時、今回の仏印における混乱に乗じて領土を奪回すべきだという世論が大きくなっていた。これを見做しきれなくなり、自らもまたその意志を持っていたタイ王国政府は、どうにかして仏印へと侵攻する口実が欲しかったのである。

そのためタイ王国空軍は、アメリカが仏印にフランス軍の戦力を縛り付ける目的で供与したP-36やP-26「ピーシュター」といった戦闘機で哨戒飛行を実施。わざとフランス軍機との空中戦を発生させ、先にフランス側が攻撃を加えてきたかのように演じることで、仏印侵攻の正当性を持たせようとしたのだ。

つまり、日本軍は期せずしてタイ王国の撒き餌に食いついてしまったことになる。その後タイ王国は一九四五年一月十五日に大日本帝国及びフランス共和国へと宣戦を布告し、ここに「仏印紛争」は「仏印戦争」と姿を変えた。

この宣戦布告は、タイと日仏の国力を考えれば無謀なことである。しかし日仏が仏印へと一度に展開できる戦力は、両国の軍全体から見れば一割程度に過ぎないため、常備軍が全体で十万名程度しかないタイでも十分対抗できるとタイ王国軍は予想した。

またこの時のタイ王国はブレーク・ピブンスンクラーム元帥が首

相となっている軍事政権であり、前年にフランスが自分たちからの領土要求を蹴ったことに対して、強い怒りを持っていた。だからこそ、強気に過ぎると思える宣戦布告を行ったのだ。

タイとの開戦に伴って問題になったのが、タイ王国海軍へと売却されていたかつてのアメリカ海軍艦艇であった。仏印の民兵へと多数の舟艇や小火器が供与されるのに前後して、史実では何れも一九三〇年代に解体の憂き目を見ていた以下のような艦艇がタイ王国海軍の手に渡っていたのだ。なお括弧内の艦名は、各艦艇のアメリカ海軍時代の艦名である。

・軽巡洋艦旧「チェスター」級

常備排水量三七五〇トン、速力二四ノット、乗員三五九名
五インチ単装砲二基、三インチ単装砲六基、五三・三センチ魚雷発射管二門
ナンクラオ（チェスター）、モンクット（バーミンガム）、チュラーロンコーン（セイレム）

アメリカ海軍が「六角」型軽巡洋艦の初期型とほぼ同時期に建造した巡洋艦で、当時は軽巡洋艦ではなく偵察巡洋艦に類別された。一九二〇年に一等軽巡洋艦に類別され、一九二〇年代前半に三隻とも相次いで退役。その後一九二八年に「チェスター」は「ヨーク」と改名されたが、一九三〇年に三隻ともタイ海軍へと売却。細長い四本の煙突と、鋭い艦尾が特徴である。

・駆逐艦旧「オブライエン」級

基準排水量一〇五〇トン、速力二九ノット、乗員一〇一名
四インチ単装砲四基、七・六ミリ単装機銃二基、五三・三センチ連装魚雷発射管四基
マハーラート（オブライエン）、ウボン（ニコルソン）、クルンテ

ープ（ウィンスロウ）、
ナコーンチャイシー（マクドウガル）、パヤップ（カッシン）、ブ
ーラパー（エリクソン）

第一次世界大戦初期に相次いで竣工した、船首楼型の駆逐艦。旧
式ではあるものの、五三・三センチ魚雷をアメリカ海軍で初めて装
備した駆逐艦であり、対艦攻撃力はそれなりのものを有している。
ロンドン海軍軍縮条約に伴って、タイ海軍へと売却された。

・哨戒艇旧「イーグルボート」級

満載排水量七一〇トン、速力一八ノット、乗員六一名
四インチ単装砲一基、三インチ単装砲一基、一二・七ミリ単装機銃
二基

ナコーンサワン（第一号）、ピサヌローク（第二号）、ローイエッ
ト（第三号）、
ブーケット（第四号）、アユタヤ（第五号）、パッターニー（第九
号）

第一次世界大戦末期に、ドイツ海軍の潜水艦に対抗して建造され
た哨戒艇。戦後も多くの艇が十年以上に亘ってアメリカ海軍で使用
され、対日戦開戦時にも八隻が現役であった。彼女たちは、史実に
おいてはスクラップや標的となる運命であったが、一九三〇年にタ
イ海軍へと売却されたのである。

・潜水艦旧「R-21」級

水上排水量四九七トン、水上速力一四ノット、水中速力一一ノット、
乗員二九名

三インチ単装砲一基、四五センチ魚雷発射管四門、魚雷八本
クルート（R-21）、チャーレン（R-22）、パンガン（R-23）
、サムイ（R-24）、

アントン（R－25）、ランタヤイ（R－26）、ヤオヤイ（R－27）

第一次世界大戦中期から末期にかけて建造された「R級」潜水艦の後期型。建造時期で言えば対日戦開戦時に八隻が再就役した「O級」より僅かに新しいものの、レイク・トーピード・ボート社で建造された彼女たちは小型すぎると判断されたため、ロンドン海軍軍縮条約と共に全艦が除籍。史実ではそのまま解体されていたところを、タイ海軍に引き取られて命拾いした。

第二十二話 日泰開戦（後書き）

富士「これ……いくらなんでも無謀すぎないか？」

作者「タイとしては、フランスが仏印のほんの一部を諦めてくれればそれでいいのです。なにも仏印全体を占領する必要はないのですから、時間もさほどかかりません」

敷島「まあ、確かに数個師団と一個水雷戦隊を敵に回せば、こっちも無傷というわけにはいかないからね……でも、空軍は？」

作者「それは、まあ……本文からお察してください」

三笠「私が言うのもなんですが、装備が古すぎますから、数ほど手ごわい敵にはならないと思いますが……次回予告をお願いします」

作者「タイ艦隊に対し、日本が採った対抗策とは？ 次回『サタヒップ襲撃』ご期待ください」

第二十三話 サタヒップ襲撃

タイ王国からの宣戦布告は、その日のうちに勇の元にも知らされた。そして勇は、旧式とはいえ一個水雷戦隊に相当するタイ王国海軍への対応に苦慮することになる。

現在派遣している第一航空艦隊は仏印への対地攻撃にかかりきりとなっており、彼女たちの搭載機までタイ王国海軍の撃滅に差し向けてしまつては、最悪の場合半月から一カ月に亘って仏印の日仏連合軍が航空支援を受けられなくなる。今なお予断を許さない状況にある現地から航空戦力の多くを撤退させれば、タイ王国陸軍の支援を得た民兵によって彼らが劣勢に立たされる恐れもあるのだ。

とはいえ、今から別の艦隊を送っても三日から四日は必要になり、それまでにタイ海軍と第一航空艦隊が鉢合わせする恐れが大きい。そのためやむを得ず、第一航空艦隊の水上機だけを全てタイ海軍の搜索に充てることとし、発見次第水上戦闘若しくは航空攻撃で撃滅させるということになった。

一月十六日、空母「赤龍」長官室。

「山口長官、連合艦隊司令部と『白石』搭載機から通信です」
「そうか」

山口多聞中将は電信の内容が書かれた紙を受け取ると、だんだん興奮したような表情になりながら読み進めていく。なお現在連合艦隊司令部は横須賀に停泊中の戦艦「秋津洲」艦上に置かれており、通信はここから発されたものであった。

また第一航空艦隊所属の重巡洋艦「白石」搭載機からの通信には、現在全ての巡洋艦と駆逐艦を初めとした主力がサタヒップに寄港中である旨が書き添えられていた。これを知った山口中将は、対米戦以来久しぶりの大物にありつけるとあって笑みを隠しきれなかった。

「そうか……どうやら、この退屈な任務から暫くは解放されそうだ。各空母から戦闘機十二機、攻撃機二十四機を出せ！ 目標は、サタヒップのタイ海軍主力艦隊！」

午前十一時から十一時半にかけて母艦を発った攻撃隊は、午後一時にサタヒップ海軍基地の上空に到達。電探を保有していなかったタイ海軍は日本海軍航空隊の接近を事前に察知できず、上空を護る戦闘機が皆無の状態で一方的な攻撃を許してしまうことになる。

「敵機は無し、か……全機、港内の艦艇に機銃掃射をかけろ！」

戦闘機隊の機銃掃射によって蜂の巣にされた小型の船艇が、次々と港内の海底に沈んでいく。タイ海軍は六か国協約締結以来、フランスに遠慮した日英独伊からの艦艇輸出が途絶えてしまった。そのため、アメリカから供与又は売却された艦艇を除けば、漁船に毛の生えたような船艇しか保有できなかったのだ。

さらにその頼みの綱であるアメリカでさえ、新型艦艇の輸出はできず自国で使わなくなった旧式艦艇の供与に終始。彼女たちが装備していた対空火器といえば、最大でも一二・七ミリの機銃以外には、イーグル級哨戒艇の三インチ高角砲しかなかった。

港内に残っていた「アユタヤ」と「パッターニー」が高角砲を放つが、たった四門の高角砲では脅しにもならない。むしろ自分たちの位置を攻撃隊の搭乗員たちに知らせ、目障りな存在として「赤龍」

及び「雛鶴」所属の攻撃隊から集中砲火を受けることになった。

「そんな豆鉄砲で……馬鹿にしゃがって！」

「三……二……一……投下！」

たった二隻の小型艦に、二十四機もの攻撃機が殺到する。その結果「アユタヤ」が四本、「パッターニー」が三本の魚雷を受け、船体が原形を留めない程度にまで破壊されて瞬く間に沈没。完成から既に二十年以上が経過した千トン足らずの船体には、この攻撃はあまりにも激烈すぎた。

そして「黒鶴」所属の攻撃隊は、まず出航準備をしていた三隻の軽巡洋艦に狙いを定める。彼女たちは何れも三十年以上前の就役であり、対空火器は機銃の一門さえも装備していなかったために、攻撃隊にとっては訓練よりも気が楽な実戦であった。

魚雷が命中したことによる破孔は、船体の老朽化も手伝って、直径五メートルを優に超える大穴となる。命中した魚雷の数こそ先頭に停泊していた「ナンクラオ」が二本、他の二隻が一本ずつと少なかったが、喫水線の下にろくな浸水対策が施されていなかった三隻はたちまちのうちに傾斜を始めた。

最後に「八龍」所属攻撃機が駆逐艦群へと魚雷を相次いで投下し、「クルンテープ」に二本が命中して轟沈、「パヤップ」と「マハーラート」にも一本ずつが命中して大破着底させるという大戦果を挙げた。しかしその直後、今度は爆撃隊がタイ海軍へと襲い掛かる。

第二十三話 サタヒップ襲撃（後書き）

富士「これはまた、殆ど据え物斬りではないか」

作者「航空機が本格的に軍事目的で使われ始める以前に就役した艦が多いですからね。近代化改装をしていなければ、こうなるでしょう」

敷島「こりゃあ、艦隊全滅もあり得るよ」

三笠「タイ海軍の壊滅は、最早避けられそうにないですが……次回予告をお願いします」

作者「タイ海軍に大打撃を与えた日本軍でしたが、思わぬ出血を強いられます。次回『あの世への道連れ』ご期待下さい」

第二十四話 あの世界への道連れ

雷撃隊に続き、爆撃隊はまず大型艦である三隻の巡洋艦に「赤龍」と「八龍」の所属機である合計二十四機が突入。ワシントン空襲でも使用され、アメリカから「バンカーバスター」と渾名された一トン爆弾が、再びその牙を剥いた。

「まだだ……よし、投下！」

投下された爆弾は弾頭部分を下に向け、真っ逆さまに落ちていく。そして一発が既に傾斜しつつあった「ナンクラオ」の艦首甲板に突き刺さると、彼女の艦内でもあまりにも過大な威力を発揮した。

轟音と共に鋼板の破片が飛散し、「ナンクラオ」の前半部は黒煙に包まれる。暫くして煙が晴れた後には、艦首を完全にへし折られた巡洋艦の姿があった。戦艦の主砲弾が数百メートルの高さからほぼ垂直に落ちてきたために、たった二センチ半の甲板装甲は何の意味も持たなかったのである。

そこへすかさず二番目の三機小隊が突撃し、一発が艦橋へと命中。もう一発も艦尾右舷への至近弾となり、この一発で防戦の指揮を執っていたタイ海軍の幕僚は大半が死傷するという惨事に見舞われた。また至近弾による浸水も到底無視できるものではなく、艦尾が少しずつ沈み込んでいく。

「敵艦が動かない分、訓練よりやりやすいな」

「対空砲火も無いから、完全に据え物斬りだぜ！」

最早「ナンクラオ」の沈没は時間の問題であると考えた残りの六

個小隊十八機は、半数ずつが残る「モンクット」及び「チュラーロ
ンコーン」へと突撃。前者に命中弾二発と至近弾一発、後者に命中
弾二発と至近弾三発を見舞い、両艦を炎上させた。

同じ頃、第二航空戦隊の「雛鶴」及び「黒鶴」から出撃した合計
二十四機の爆装攻撃機は、六隻の駆逐艦に対して攻撃を開始。「ウ
ボン」に四発、「ナコーンチャイシー」に一発、「ブーラパー」に
二発の命中弾を与えた。

これにより「ウボン」は船体が三つに切断された状態で沈没し、
「ナコーンチャイシー」は命中弾と至近弾により航行不能。「ブー
ラパー」はマストが海面に露出した状態で大破着底となり、タイ海
軍の主力は完全に戦闘能力を失った。

「敵機です！ 北方より敵機！」

「数は！」

「十……二十……いえ、四十！」

このとき来襲したのは、三十六機のP-36「ホーク」である。
タイはアメリカから以下のような多数の航空機を供与されており、
タイの各航空基地に配備していたのだ。

P-36戦闘機及びPT-13練習機各三百二十機、B-10爆撃
機及びC-45輸送機各八十機、SOC索敵機百六十機

ホークの大編隊は数に任せて、日本側の攻撃隊に向け機銃を遮二
無二撃ち掛ける。狙いも何もない銃撃は脅し以上のものにはなり得
ないと思われたが、なんと運悪く一機の戦闘機と二機の攻撃機が煙
を噴き出し始めた。

「全機、急いで母艦に戻れ！」

攻撃隊隊長の命令一下、攻撃機は次々と退避行動に移り、それまで機銃掃射をしていた戦闘機隊が一撃離脱戦法に移行する。最高速度が五百キロ程度にしかないホークでは、倍近い速度を発揮する五式戦闘機を補足することなどまず不可能であり、一方的に叩き落されていった。

しかし、ここに唯一の例外がある。最初の一撃で煙を噴き出した一機の五式戦闘機はその後翼が燃え始め、空母に帰還する望みが完全に絶たれてしまったのだ。

「くそっ。よりによって、俺が五式戦闘機にとって初めての被撃墜かよっ！」

これまで、五式戦闘機の喪失は全てが帰還後の修理不能による廃棄処分か、あるいは事故によるものだったので、燃えさかる五式戦闘機の搭乗員は、自分が不名誉な最期を迎えるのかと思うと死んでも死にきれない気分であった。そんな彼の前に、一機のホークが飛んでいるのが目に入る。

「最後の機だ。喰らえっ！」

十分近づいたところで引き金を引くが、機銃弾は一発も発射されない。これまでの機銃掃射と空戦で彼の愛機は全ての機銃弾を撃ち尽くし、今となっては目の前に飛んでいる一機の戦闘機にすら手も足も出ない状態になっていた。

「こうなったら、せめて……うおおっ！」

絶叫とともに操縦桿を傾け、愛機を目の前のホーク目掛けて飛び続ける。母艦への生還の望みを絶たれてしまい、さらには目の前の敵機を撃ち抜く機銃弾さえ失った彼が選んだ行動は、愛機諸共ホークに体当たりすることであった。

「あの世への道連れだ！ 覚悟しろ！」

次の瞬間、彼の機体は上斜め後方から追突するようなかたちでホークに激突。両機は空中で爆発四散し、ここに五式戦闘機にとって初めて空戦中の喪失が記録されることになった。なお、この戦闘における双方の損害は以下のとおり。

日本側損害

戦闘機二機（一機は自爆、一機は帰還後海没処分）、攻撃機五機（三機は撃墜、二機は帰還後海没処分）喪失

タイ側損害

沈没（完全に船体が水没したもの）

巡洋艦モンクラット（爆弾二、魚雷一）

駆逐艦クルンテープ（魚雷二）、ウボン（爆弾四）

哨戒艇アユタヤ（魚雷四）、パッターニー（魚雷三）

大破着底（船体の一部が海面上に露出しているもの）

巡洋艦ナンクラオ（爆弾二、魚雷二）、チュラーロンコーン（爆弾

二、魚雷一）

駆逐艦マハーラート（魚雷一）、パヤップ（魚雷一）、ブーラパー（爆弾二）

大破

駆逐艦ナコーンチャイシー（爆弾二）

合計爆弾十三発（二割七分）、魚雷十五本（三割一分）命中

戦闘機十二機喪失（撃墜十機、修理不能二機）

なおこの戦闘で撃墜された五式戦闘機の搭乗員は、その後内地の新聞で「友軍を庇い壮烈な自爆」や「自らを銃弾として敵機を撃墜」などの文言でもて囃されたという。

第二十四話 あの世界への道連れ（後書き）

作者「さて、自爆の元ネタが分かる方はいらっしゃるのだろうか」

敷島「出撃前に、隊長に写真を撮られていた人？」

作者「はい。彼の愛機は対空砲火により損傷しましたが、そのままではさすがに芸が無いと思ったもので、少しばかり改変致しました」

富士「それに、下手をすれば盗作と言われかねないからな。用心するに越したことはあるまい」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「日仏連合軍の攻勢に、タイ軍は焦りの色を強くします。次回『内憂外患』ご期待下さい」

第二十五話 内憂外患

第一航空艦隊搭載機の奮戦によって、タイ海軍は主力艦艇の大半を喪失。たまたま出撃していた哨戒艇四隻と、攻撃隊に発見されずに済んだ潜水艦部隊だけが難を逃れたが、彼女たちを除いてタイ海軍に残された戦力は漁船に毛の生えたような小型艇ばかりであった。

また四個師団、合計六万名を擁する陸軍も、火器は一九三〇年代にアメリカから購入した以下のような旧式兵器ばかり。そのため日本軍どころか植民地軍である仏印軍にさえ劣勢を強いられ、以前割譲を要求した地域の占領どころか、ウボンやチャンタブリといった自国領の防衛さえままならなかった。

・ M2軽戦車（一個師団に十六両、予備を含めて合計百二十両輸出）
重量一〇・四トン、最高時速四八キロメートル、装甲六ミリから二五ミリ、乗員四名

兵装三七ミリ戦車砲一門及び七・六二ミリ機銃五門

・ スプリングフィールド M1903 小銃（約二万丁）

・ M1918 軽機関銃（約七千丁）

他、三インチ程度までの火砲合計約二千門

一月十七日、バンコク某所。ここではタイ王国軍の高級軍人たちが、海軍の壊滅と開戦後すぐに明らかとなった陸戦での劣勢に関して善後策を協議していた。

「仏印の一件で、民兵ごときに苦戦するものかとフランスと日本の軍を甘く見ていたが……迂闊だった」

「もっと、敵の情報を集めてからにすべきだった。まさか日本の航空機が、かくも高性能だったとは」

タイ王国は「日仏両軍が民兵相手に苦戦している」という事実のみを見て、その理由が何なのかということをも十分に調べていなかった。そのため「民兵に苦戦するぐらいの相手なら、我々も独力で領土を拡張できるはずだ」と楽観視したのである。

「今からでも遅くはない。原状回復を条件に講和を申し入れよう」
「日本はともかく、フランスがそれで引き下がるか？」
「とにかく、やってみるしかあるまい」

しかしこの動きがタイ国内に知られるや否や、各地で反政府運動が頻発。何のために開戦したのかと言って徹底抗戦を主張する者、宣戦布告そのものを非難する者など立場は様々だったが、このままではタイ国内の混乱に乗じた日仏連合軍がタイ領の奥地にまで侵攻してくる恐れがあった。

現に十九日には仏印との国境沿いに位置するナコン・パノムが、翌二十日にはアランヤプラテートがそれぞれフランス軍の攻撃により陥落。開戦からの五日間における日仏連合軍の死傷者が千名足らずであるのに対しタイ側のそれは陸戦だけで三千名、サタヒップ空襲によるものも含めれば四千名以上に達していた。

さらにはサタヒップ空襲から難を逃れた数少ない海軍艦艇についても、第一航空艦隊の艦載機による攻撃を受ける。その結果一月二十日までに四隻のイーグルボートが全て撃沈され、残ったのは七隻の旧式潜水艦と小型艇のみとなってしまうていた。

一月二十一日、タイ海軍の壊滅によって再び手持ち無沙汰となった第一航空艦隊の山口中将は、連合艦隊司令部に対して陸上の軍事施設に対する爆撃を提案。前年十二月一日から嶋田繁太郎大将に代

わって連合艦隊司令長官を務めていた古賀峯一大将は、民間人への攻撃を厳禁したうえでこれを認めた。

そこで一月二十五日午前八時より、第一航空艦隊に所属する四隻の空母からそれぞれ戦闘機十二機、攻撃機二十四機の攻撃隊が出撃。民間人を巻き込んで隊の国民感情を刺激することの無いよう、また攻撃した施設を確実に破壊できるよう、攻撃機には八インチ砲弾を改設計した二五〇キロ徹甲爆弾が四発ずつ搭載された。

攻撃隊は八時半に隊形を整え終わると、バンコクに向けて北上。午前十時にバンコク上空に到達し、敵戦闘機が未だに飛び立っていないバンコク上空で悠々と爆弾を投下し始めた。

第二十五話 内憂外患（後書き）

作者「そろそろ、冗談抜きで現代戦のネタが尽きてまいりました」

富士「何故だ？ 史実では、以前貴様が挙げていた以外にも幾度となく武力種痘があったはずだが」

作者「それは、そうなのですが……冷戦とソ連および中国共産党が存在しなくなった現代においては、おそらく少なくとも以下の武力衝突が発生しない可能性が濃厚なのです」

朝鮮戦争、中印国境紛争、ハンガリー動乱、ベトナム戦争
チェコ事件、ソ連のアフガン侵攻、中越国境紛争

富士「これと貴様が以前言った分を除けば……それなりの規模があって、小説で描けそうなのはこのくらいか」

サッカー戦争、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、イラク戦争
パナマ侵攻、オガデン戦争、印パ戦争

作者「ところが、これらの多くは当事国の使用していた兵器が分からないものばかり。分からない分は、いっそ全て日本製の兵器にしてもいいというのであれば書けますが」

敷島「ポソ宗教紛争は？」

作者「書けますが、それだと架空戦記というよりただの猟奇的な文章にしかならなさそうです……ともかく、もし御意見のある読者の方がいらっしゃいましたら、是非とも伺いたいところなのです」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「痺れを切らした日本軍がバンコクを空襲しますが、結果は如何に？ 次回『遅ればせながら』ご期待下さい」

第二十六話 遅ればせながら

攻撃機が投下した爆弾が次々とタイの軍事施設に着弾し、屋根を貫通したうえで炸裂する。その爆発は炸薬量が少ないために危害半径こそ狭いものの、建物の内部で炸裂することで柱や壁を吹き飛ばし、命中した建物を確実に倒壊させていった。

目標は都市部にあった軍の司令部等に止まらず、滑走路や格納庫、兵舎と目に付いた軍事施設は片っ端から破壊されていく。バンコクやナコン・パヤムの戦闘機隊合計四十機は、出撃前にその大半が地上撃破されるという大損害を被った。

「撃て！ 一機でも撃ち墜とせ！」

「無理です！ 敵機の手速度が速すぎて、とても追尾できません！」

タイの航空基地はアメリカから譲り受けた二十八ミリ機銃や三インチ単装砲で応戦するが、十年前の対空火器で、そのうえ電探や射撃指揮装置も無い状態では、それこそ奇跡的なまぐれ当たりでもなければ五式戦闘機の撃墜は不可能であった。

しかし攻撃隊がタイの上空に到達してから三十分後、沿岸に設置されていた監視台からの通報を受けて出撃したP-36が、ようやくバンコク上空に到着。その数は六か所の基地から合計七十二機にも及び、サタヒップでの戦いで日本側に多少なりとも損害を与えた密集陣形による突撃をかけてきた。

「敵さんは馬鹿のひとつ覚えだ！ 対空噴進弾、撃ち方始め！」

ホークの大編隊と正対した五式戦闘機のうち十二機が、それまで

翼に装着されたままとなっていた噴進弾を相次いで発射する。そしてそれらの噴進弾はなおも密集したままの迎撃隊に接近すると、一斉に炸裂して周囲へと無数の機銃弾をばらまいた。

「うわあっ！　なんだ、これはっ！」

「だめだ、避けきれない……うわあああっ！」

四方八方から飛んでくる機銃弾の雨に、密集していた迎撃機は次々と叩き落される。この噴進弾には日本が前年に実用化した近接信管（秘匿のため、対空噴進弾とだけ呼んでいた）が使用されており、発射後に敵機を感知すると爆発して機銃弾をまき散らす仕掛けになっていた。

とはいえ一応開発に成功した近接信管ではあるものの、作動率は史実のアメリカが初期に用いた近接信管と同じ約五割。それでも製造費はそれまでの砲弾や噴進弾の数倍に跳ね上がり、この時まで製造できていた近接信管付き砲弾及び噴進弾は合計で約五千発（史実の米英は一九四五年八月までに各種合計で約二千二百万発生産。日産四万発）に過ぎなかった。

合計九十六発もの噴進弾が発射され、数千発の機銃弾があらゆる方向からホークに襲い掛かる。そして、この噴進弾によるものだけでホークは十二機が撃墜され、さらに八機が損傷するという大打撃を受けたのだった。

「くそっ、俺は逃げるぞ！」

「あんな速い機体、撃墜できるか！」

ホークの搭乗員は一部が戦意を喪失したのか、生き残った六十機のうち実に二十四機が撤退。どうにか撤退を思い留まった残りの三

十六機には、四十八機の五式戦闘機が容赦なく襲いかかった。

「攻撃隊が護りきれればいい！　あまり撃墜数が多いと、市街地に被害が及ぶぞ！」

既に爆弾の投下は粗方終わっており、制空隊は戦闘もそこそこに慌てて離脱する。それでも一機の被撃墜も出すことなく、逆にホークを七機撃墜してバンコク上空から去って行ったのだった。なお、この戦闘における双方の損害は以下のとおり。

日本側損害（全て帰還後の海没処分）

戦闘機二機、攻撃機十機

タイ側損害

戦闘機十九機が被撃墜、五機が帰還後に廃棄処分

この空襲でタイ側は高級軍人や軍司令部の要員を多数死傷させられ、到底軍全体をまとめるだけの人員は残っていなかった。そこで止むを得ず、日仏両国との講和に乗り出したのである。

第二十六話 遅ればせながら（後書き）

富士「こんなの、当時の日本の技術で本当に使えるのか？」

作者「五インチ噴進弾は五インチ砲弾と互角かそれ以上の大きさが
ありますから、不可能ではないかと。ただ、戦果が製造費用に見合
うものかどうかということまでは、さすがに保証しかねます」

敷島「つまり、戦闘場面を変わり映えさせるためのネタ兵器ってい
うこと？」

作者「ええ、まあ……その感は否めません」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「日仏連合軍を侮っていたタイ軍ですが、ついに講和を余儀な
くされます。次回『サイゴン講和』ご期待下さい」

第二十七話 サイゴン講和

一月二十七日、既にタイ南部のチャンタブリーは日仏連合軍に奪われ、チャーン（コーチャン）島とクート島も仏印南部のコンポン・ソムから上陸用舟艇に乗って襲来した日本軍によって占領されていた。最早、タイが独力でこの戦局を押し戻すことは不可能であり、一日も早い講和の締結が急務であった。

そこで同日より、サイゴンにおいて講和会議が開催。三か国とも領土的野心は放棄したか元々無く、基本的には現状維持ということで三か国の意向が一致していたために、二月一日に「サイゴン講和条約」が以下の内容で調印された。

- ・ 三国ともに領土、賠償金及びその他の權益を要求しない
- ・ 日本はタイに対し、フランスへの事前通告を経たうえで兵器を輸出する（壊滅したタイ軍の再建）
- ・ タイ軍は、仏印の民兵を日仏と共同で攻撃する

これにより、同年から一九五〇年にかけて日本からタイに大量の兵器が輸出されていくことになる。その主なものは以下のとおりで、艦船は全て部品単位での輸出後にタイで建造するノックダウン方式を採用している。

陸軍向け

九五式中戦車三三〇、中型輸送機二四〇、練習機兼連絡機四八〇

三八式小銃二万、軽機関銃、擲弾筒及び重機関銃各三千五百、火炮八百

海軍向け

軽巡洋艦四（竣工時の『六角』型に準ずる）、五百トン級駆逐艦十二

甲型巡視船一、乙型巡視船四、丙型巡視船一二、甲型巡視艇一六、乙型、丙型及び丁型巡視艇各六四

（機関出力低下により、速力は十五ノット程度）

空軍向け

戦闘機及び攻撃機各三二〇、双発飛行艇八〇、中型爆撃機八〇、練習機兼連絡機八〇

（年式は全て、日本軍から既に退役した零式）

また日本から士官を派遣し、軍の編成や訓練に関与させた。この影響でタイ王国軍の編成は日本軍のそれと酷似したものとなったが、これは同様に日本からの軍事支援を受けたロシアや中華民国にも言えることだった。

この取り決めに、勢力圏であるマレーやビルマがタイと接していたイギリスは難色を示した。対米戦が終わって軍縮を始めているイギリスとしては、軍隊を再建したタイがビルマやマレーに侵略をしてきた場合に備えて、これを確実に抑え込めるだけの戦力を置いておくだけの余裕はなかったからである。

そのため、天然資源の日本向け輸出量を増やすことと引き換えに、タイがイギリスと武力紛争を起こした際には日本は必ずマレーやビルマの防衛に協力するという密約を締結。またタイに輸出する兵器は既に日本軍から退役したものに限るという条件を設け、タイ軍が強力になり過ぎないようあらゆる手段が講じられた。

サイゴン講和条約の締結後、日仏連合軍に加えてタイ軍からも攻撃を受けることになった民兵は瞬く間に弱体化。さらには弾薬の補給が途絶えたことで戦闘の継続も困難になっていき、最早これまでと観念して投降する者や、武器を隠匿して一般人のふりをする者などが現れた。

とはいえ民兵を完全に掃討することは困難を極め、その上戦闘の度に日仏連合軍の死傷者も増加。二月初旬には日本軍の死傷者だけで累計七千名を数え、最初に仏印へと派遣された第一師団は既に師団としての活動が困難になりつつあった。

これに痺れを切らした日本軍は、まず発煙弾を投下して敵を洞窟や村落から追い出してから砲弾で追撃するという「シェイクンベイク戦術」や、爆弾の炸薬を減らして灯油と増粘剤を詰めた、史実の米軍が用いたマーク七十七爆弾のようなものを使用。これはゲリラには確かに効果的であったが、民間人を巻き込む恐れもまた大きかった。

また一月末に第一艦隊航空隊の一部を南沙諸島と西沙諸島の飛行場へと移動させ、第一航空艦隊は内地へと帰投。以後は南沙諸島と西沙諸島にそれぞれ配属された航空隊が、日仏泰連合軍の支援に当たることになった。

第二十七話 サイゴン講和（後書き）

富士「結局、タイが参戦した意味はあったのか？」

作者「さあ……強いて言うなら、日本から新しく兵器を輸入できるおかげで、ほんのわずかながら軍の近代化が進んだことでしょうか」

敷島「でも戦車は九五式、小銃に至ってはサンパチって……なんだから、史実の対米戦戦時の日本よりさらにひどくなっているよ」

作者「とはいえ、日本の現用兵器より一世代前のものを輸出するとなると、自ずからこうなってしまうのです。少なくとも、これまで使っていたアメリカからの中古品よりはましかと」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「内地へと帰還した赤龍に、上総がかけた言葉とは？ 次回『失意の帰還』ご期待下さい」

第二十八話 失意の帰還

第一師団の生存者を乗せた輸送船団と共に仏印沖を離れた第一航空艦隊は、途中南沙諸島と西沙諸島でそれぞれ守備隊や航空要員を降ろし、二月八日に横須賀へと帰投。だが大任を果たしてきたはずの赤龍の顔は、非常に悔しそうであった。

第一航空艦隊を出迎えた勇は横須賀海軍記念館へと出向き、現役を退いた上総と岩代を連れて同日午後に空母「赤龍」予備士官室へと移動。赤龍に労いの言葉をかけたが、彼女は突然深々と頭を下げた。

「赤龍、どうした？」

「申し訳御座いません。私が自分の能力を過信したばかりに時間を浪費しただけでなく、艦載機と搭乗員を……っ！」

赤龍の彼女らしからぬ行動に、三人は非常に驚いた。しかしさすが、上総が落ち込んでいる赤龍を励まそうとする。

「貴様の言うとおり、今回の仏印出兵で我が海軍の航空隊からも少なくない数の犠牲者が出てしまったことは、非常に残念ではある。だが、貴様が自分の慢心を悔いたところで、失われた搭乗員や搭乗機は帰ってこないだろう？」

「確かに……それは、そうですが」

「それに、今貴様とその航空隊に出撃命令が出されてみる。このまま貴様の落胆が船体に影響を及ぼせば、理由は違えど再び搭乗機や搭乗員、下手をすれば艦隊全体を危険に晒すことになる。だから今回の失敗を覚えておくことは必要だが、拘泥しすぎれば逆効果だ」

「むう……了解です」

このときの上総は、腰を屈めて目線の高さを赤龍に合わせ、また口調も極力諭すようにおっとりとしていた。これは赤龍を委縮させることで精神的な傷を長期間に亘って残さないよう、上総は上総なりに気遣ったの行動であった。

「姉さん、私の時と態度がえらく違うのは気のせいですか？」

「ふん。貴様は何遍口を酸っぱくして言おうが、ちっとも懲りた様子が無いじゃないか。むしろ、これまでもある程度は自制してきたつもりだが？」

「ちえっ。まあ……現役を退いたおかげで、前よりは姉さんの小言を聞かずに済むようになりましたから、それで十分ですけどね」

岩代が、もうあの頃に戻るのには御免蒙りたいとでも言いたげに愚痴をこぼす。だが上総にとっては、自分の忠告がただの小言と言われたことを抜きにしても、岩代の言葉は聞き捨てならないものであった。

「それが、かつて連合艦隊艦魂の参謀長を務めた奴が言う言葉か？」

「ああ……あん時は、私の生涯で一番面倒くさい時期でしたね。幸い、何年かでお役御免になりましたけど」

「まったく、貴様というやつは……二十年経とうが三十年経とうが、そこだけは変わらないのだな」

上総は口でこそ毒づいて見せるが、内心妹のことを非常に信頼していることもまた事実であった。欧州大戦のジュットランド沖海戦に始まり、アメリカ海軍アジア艦隊を撃破してのフィリピン攻略、羽前と羽後を失ったフェニックス諸島沖海戦、そして臨時とはいえ連合艦隊旗艦に返り咲いてのハワイ攻略と、三十年に亘って彼女が

いるところには常に岩代もいたからだ。

「でもまあ、姉さんがいてくれてよかったですよ」

「何を今更……らしくないぞ？」

妹から言われた思いがけない言葉に、上総は少しばかりではあるが嬉しくなる。しかし、そんな些細な喜びは次の瞬間脆くも崩された。

「ええ。姉さんが先に生まれてなけりゃあ、危うく私が連合艦隊旗艦になるところでしたから」

「ははは……ちよつとでも期待した私が馬鹿だったよ……はあ」

一通り自分を嘲るかのように苦笑いをした上総は、妹の齒に衣着せぬ物言いに呆れて溜息をつきながら、がっくりと肩を落とす。それを見ていた勇と赤龍は、今後も二人の性分は当分変わるまいと確信したのであった。

第二十八話 失意の帰還（後書き）

富士「さりげなく陸軍部隊が引き揚げているが……仏印の反乱は片付いたのか？」

作者「植民地の独立運動なんて、何回叩いたところで完全に無くすることは不可能に近いです。ですから仏印のフランス軍だけででもどうにかできる状態にまで持っていければ、日本としては十分でしょう」

敷島「まあ、弾薬の売却や航空支援は続けるみたいだから、完全に手を切ったわけではないと言えるけれど……このまま、ずるずると現代まで続きそうな予感が無きにしも非ずだよ」

作者「おそらく、この歴史でも大半の植民地は遅かれ早かれ独立することになるでしょう。ですが今回の仏印のように大きな干渉を受けた場合ですとか、バハマやキリバスのように他の列強へと睨みをきかせられるような場所は、独立ができなくなってしまうことも考えられますね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「記念艦となった三笠たちは、それぞれ思うところがあるようです。次回『記念艦の心掛け』ご期待下さい」

第二十九話 記念艦の心掛け

その後、勇は横須賀海軍記念館に移動。明治時代から昭和にかけて建造された百隻を超える艦艇が保存されている様子は、現役時代の姿がほぼそのまま残されていることと相まって、軍港に停泊している大艦隊そのものであった。

同日夕方、横須賀海軍記念館に係留されている戦艦「三笠」予備士官室。勇は三笠に富士、敷島、朝日、そして大隅といった面々と共にその大艦隊を眺めていた。すると、ふと三笠が首を傾げる。

「ふと思ったのですが……私たちの船体の整備には、相当な予算が要るのでは？」

「これで一人でも多くの日本人が軍事や歴史に関心を持ってもらえれば、安いものだよ。それに、戦争が終わってめっきり受注が減った造船業にとっては、予備部品の製造や定期的な整備が貴重な収入になる」

勇の言葉どおり、日本海軍は対米戦終結に前後して、進水していない艦艇の建造を多数取り止めさせた。そして以後は軍事費の減額によって大型軍艦の建造予定もなく、日本軍から発注される艦艇と言えば民間の船舶とさほど仕様の変わらない支援船艇ばかりであった。

これは民間の海運各社も同じことで、戦時中の指定船大量建造により保有船舶の世代交代が進んだ各社は、戦没船の代役が揃うと相次いで新型船の発注を中断。二年弱の対米戦が”s c r u p a n d b u i l d”（旧式船を解体し、それに代わる新型船を建造すること）ならぬ”s i n k a n d b u i l d”となり、平時に

行われる旧式船の代替がここ数年は低調になっていたのだ。

これらの原因により、当時の造船業は総じて不調であった。そんな中で、勇の入れ知恵によって日本政府が主導となり整備を推し進めているコンテナ船の建造や、退役した軍艦や商船の一部が保存されたことによる部品や整備の発注はまさに造船業の生命線だと言えるのだ。

「ところで、最近の来館者はどれぐらいなの？」

「一日平均で、千人前後だったかと。交通網が発達していないことを考えれば、予想以上ですね」

また来館者の日本海軍に対する関心をさらに高めるべく、秘匿の必要が無くなった情報は兵器の性能、内部構造、製造方法に至るまで幅広く公開。さらには一九三六年にイギリスで販売が開始されたプラスチック製の模型や資料集を販売することで、合成樹脂の成型技術や印刷技術の向上にも寄与させようとした。

「千名……ですか。それだけの方々に来て頂けるのであれば、私たちの存在も無駄ではないですね」

「ああ。だがこれで満足することなく、より多くの人間に関心を持つてもらいたいものだ」

「富士、気持ちは分かるけど……私たちにできることって、何かある？」

敷島の半ば諦めが混じった言葉に、その場にいた全員が頭を悩ませる。他の人間がいない間に船体の整備に関与すれば怪奇現象として扱われかねないし、艦魂が見えない人間がいる前で物を動かしたりすればなおさらだからである。そうになると、できることは自ずと極端に限られてしまうのだ。

「そう言われると弱るな。私たちが見えない連中に気付かれないままやれることと言ったら、碌に無いぞ」

「有馬大将と谷口大尉（前年十二月任官）がなさったことにするにも、それ以外の第三者がいてはやりにくいですからな。はてさて、どうしたものやら」

「結局、我々が自覚と矜持を持つことで船体の劣化を最小限に止めようとするぐらいしかできないのか……くそっ、これでは精神論の範疇を出ないではないか」

自らの無力さに対する歯痒さで、富士が見る見るうちに苛つき始める。

「富士さん、ならそれで十分ではないですか？ 船体の整備や修理なら人間にもできますが、そればかりは艦魂にしかできないことですから」

やがて目に見えて奥歯を噛み締め始めた富士をどうにか宥めようと、勇は「艦魂にしかできない」ということを強調して提案する。富士は当初不満そうな表情であったが、やがて渋々ながら「まだ納得がいかが、無いよりはましか」と言っただうにか鬱憤の爆発を堪えた様子であった。

第二十九話 記念艦の心掛け（後書き）

富士「結局は、二度とお呼びがかからない予備役のまま現代まで放置されるのか……まあ、記念艦としてさえ使われないまま港の片隅に放置されているよりはましだがな」

大隅「もし、ここに作者さんがいらっしやれば……私たちの船体に何をなさるか、到底わかりませんね」

作者「自分で言うのもなんだけれど、九分九厘理性が吹っ飛ぶと思うよ」

三笠「つまり……自分の『娘』を見て興奮する、ということですか」

作者「艦船の設計に当たっては、少なからず自分の好みも反映しているからね。艦橋のくびれや連装砲塔、角ばった形状と、挙げればきりが無い」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「日本が講和条約に従って行ったフィリピンの独立が、思わぬ影響を巻き起こします。次回『地図は変わる』ご期待ください」

第三十話 地図は変わる

フィリピン共和国の独立は、英仏蘭が危惧していたようにまず東南アジアへの植民地に影響を及ぼした。そして英領マレー及びビルマ、仏領インドシナ、蘭領東インドといった地域で、独立運動の激化を招いたのである。

事態はそれだけに止まらず、なんと日本の統治下にあった南洋諸島やニューギニア北東部、ブルネイといった地域でも一部の住民が独立や自治権の獲得を主張。とはいうものの日本はこれらの地域に苛政を敷いていたわけではなく、むしろラバウル（羅春）やサイパン（彩帆）、ブルネイに大学を設立するなど現地住民の教育水準や生活水準の向上に力を入れていたために、大半の住民は日本の姿勢に対してさほど大きな不満を抱いてはいなかった。

それ故に暴動が発生した際にも、警察だけで十分鎮圧できる程度の規模であった。しかし対米戦の終結に伴い、防衛に回せる予算や人員が大幅に削られた日本にとっては、以前と異なり西太平洋全体に船艇と航空機による哨戒網を敷くことが大きな負担になっていたのである。

以前と比べ巡視船艇の数は大幅に増えたが、それでもなお沿岸と主要航路を警戒するのが手一杯である。そのため、史実のように新海洋秩序（領海十二海里、排他的経済水域二百海里）が国際標準となった場合には、外国漁船の違法操業が防ぎきれない恐れもあった。また海難や領海侵犯の際に増援として駆けつける巡視船艇が足らなくなり、緊急時における対応の遅延が危惧されていた。

さらには対米戦の終結とそれに伴う各国の軍縮により、天然資源

の仕入れ先や軍の駐留拠点としてこれらの地域を影響下に置く利点こそあれ、統治している利点が無くなりつつあることも事実であった。天然資源の確保だけであればわざわざ領有を続ける必要も無く、むしろ領有し続けることで現地の統治や防衛に必要な予算や人手が、日本にとっての負担となってしまうのだ。

そこで一九四六年から大日本帝国政府と南洋諸島、北ブルネイ及び北ニューギニアでそれぞれ独立運動を指導していた者たちの間で独立に向けた秘密交渉が開催。日本は日比相互協力条約と同等の条件さえ飲めば、一九五〇年四月一日付でこれら地域の独立を認めるとした。

この条件は独立運動指導者から見てさほど大きな負担とは映らず、日本軍の駐留は自主防衛が困難な彼らにとってむしろ願ったり叶ったりであるとも言えた。また天然資源の輸出についても、考え方によつては毎年ある程度の外貨収入が約束されているともとれるのである。

そのため、独立をめぐる交渉は比較的順調に進捗。一九四六年中に三地域全てとの間で密約が取り交わされたものの、フィリピン独立時にあったような欧米各国からの批判を避けるべく公表は発行の一年前、即ち一九四九年四月一日まで延期することになった。

協定の締結直後より、日本はこれらの地域に存在していた造船所へと多数の巡視船艇を発注。これはあらかじめ巡視船艇を用意しておくことで、三地域が独立直後からある程度の自主防衛を行えるよう配慮した結果であり、一九五〇年までに就役した三地域向けの巡視船艇は合計で数百隻に上った。

しかし現地で当初から巡視船艇として建造してしまうと、再び英

仏蘭へと無用の心配をかける恐れがあったため、これらの巡視船艇は当初同規模の商船としての名目で発注された。そして進水後に日本海軍が買い取り、武装を装備して特務艦艇として就役させたうえで、三地域の独立と同時に供与することになったのである。

第三十話 地図は変わる（後書き）

敷島「資源がもらえればそれでいいって……身も蓋もないよ」

作者「事実は事実です。幸い、周囲で界有数の軍事力を持った国はアメリカぐらいですから、ウエークとグアムぐらいを海外領土として確保しておけば十分かと」

富士「まあ、内地を含めた全体を本気で警備しようとするれば、それこそ沿岸警備隊だけで千隻単位の大所帯になりかねないからな。人員も、海軍に匹敵する数が必要になるだろう」

作者「それに、私も数千隻の船艇に名前をつけてやる自信は無いですから」

大隅「必要とあらば、つけるつもりでいらっしゃったのですね」

作者「勿論。現に、沿岸警備隊の編成表は既に作ってあるよ」

三笠「私たちも……いえ、そもそもこの小説自体、作者さんの異常な愛情があったために生み出されたのかも知れませんね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、一話若しくは数話ごとに舞台が何度も変わります。次回『今も残る禍根』ご期待下さい」

第三十一話 今も残る禍根

第一次世界大戦後、敗北したオスマントルコ帝国が支配していたパレスチナはイギリスの植民地となる。そして欧米にいたユダヤ人たちはパレスチナへの帰還を始めたが、帰還が進むにつれて現地にいたアラブ人との関係が険悪になり、両者の間を取り持っていたイギリス軍も交えての衝突がしばしば発生するようになっていた。

さらに対米戦の勃発でアメリカ本土さえ危険に晒されるようになると、ユダヤ人はアメリカから逃げるようにしてパレスチナへと移動。史実ではナチス政権下のドイツによるユダヤ人迫害によって発生したユダヤ人のパレスチナ入植が原因を変えて発生し、入植者の増加に伴ってアラブ人との諍いも激しさを増していった。

イギリス軍は騒動の鎮静化を試み、一九四六年六月二十九日にユダヤ人三千名以上を拘禁。これに反発したユダヤ人は七月二十二日にイギリス軍司令部があるキングダビデホテルを爆破し、多数の司令部要員を死傷させた。

時と共に激化する衝突に耐えかねたイギリスは、対米戦後に国際連合へとこの問題を提訴。一九四七年十一月二十九日にはアメリカ主導でそれぞれアラブ人とユダヤ人による二国家の建設が決議されたが、元々パレスチナに住んでいたアラブ人は領土の配分（極少数のユダヤ人にパレスチナの三分の一を与えることになっていた）を良しとせず、武力衝突が一層深刻になったため、イギリス軍は翌年五月十五日までの撤退を決めた。

また一九四八年二月より、アラブ人義勇兵はアラブ救世軍やアラブ解放軍といった義勇軍を結成。ユダヤ人も民兵組織「ハガナー」

を立ち上げ、海外から従軍経験を有するユダヤ人を招いて軍事力の強化を図った。一説には、この頃ハガナーが動員した兵力は七万名とも言われている。

翌三月からは、アラブ人がエルサレムの包囲とユダヤ側の輸送車両に対する攻撃を実行。デイル・ヤシーン事件（四月九日、ユダヤ人組織が住民百名超を殺害）やハダサー医療従事者虐殺事件（四月十三日、アラブ人がバスに乗っていたユダヤ人医療関係者七十七名を殺害）といった双方による虐殺事件も相次ぎ、前者の影響でパレスチナからアラブ系難民が多数発生することとなる。

そしてついに五月十四日、ユダヤ国民評議会はテルアビブでイギリス軍の撤退に合わせたイスラエルの独立宣言を行った。これに対しレバノン、シリア、トランスヨルダン（現在のヨルダン・ハシミテ）、イラク及びエジプトからなるアラブ連盟は即日宣戦布告し、翌日にはイスラエルの三万名に対し十五万名という圧倒的戦力での侵攻を開始した。

国連によって正規軍の保有を禁じられていたイスラエルではハガナーなどの武装組織が善戦したものの、十八日にはヨルダン軍がエルサレムを包囲。二十八日にはエルサレムのうち旧市街にいたユダヤ人組織が降伏し、残った新市街も帆空を絶たれ風前の灯であった。

しかし六月にはテルアビブから迂回路を通ったユダヤ人によって補給が回復し、十一日からは国連の仲裁によって四週間の停戦に突入。この間にイスラエルは武装組織をまとめてイスラエル国防軍を設立するなど態勢を立て直したが、アラブ連盟は内輪もめによって十分な調整ができなかった。

七月二十九日、イスラエルは反撃を開始。十八日に国連が再度停

戦を通告したがすぐさま戦鬭の再開によって消滅し、十二月にイスラエル軍はシナイ半島まで到達したが、エジプトに影響力を持っていたイギリスの警告によって撤退した。

その後一九四九年二月から七月にかけて、イスラエルとアラブ連盟各国尾の間で停戦協定が成立。パレスチナのうちヨルダン川西岸地区とエルサレム旧市街がヨルダン領に、ガザ地区がエジプト領になった以外は全体がイスラエル領となった。この国境線は、グリーンラインと呼称されている。

だがユダヤ人の聖地である嘆きの壁は、ヨルダン領となったエルサレム旧市街にあった。そのため聖地巡礼が思うようにできないユダヤ人は、不満を募らせていくことになる。なお嘆きの壁はヘロデ大王が再建したエルサレム神殿の西側にある外壁のことであり、このためユダヤ人は「西の壁」とも呼んだ。

第三十一話 今も残る禍根（後書き）

作者「フォークランドの後、印パ戦争やサッカー戦争、挙句の果てにはハニーシュ群島紛争まで書いてみたけれど、とうとうネタが無くなった」

大隅「前者ふたつはともかく、ハニーシュ群島紛争は無名すぎるのでは？」

作者「うん。両軍の戦力どころか、戦闘があった日付の資料さえ無いものだから、年数以外はほとんど想像だよ」

富士「湾岸戦争やイラン・イラク戦争は書かないのか？」

作者「書こうとはしているのですが、調べれば調べるほど頭の中が混沌としてしまい、いったいどの程度まで改変していいものか見当がつかないのです。分からない部分は全てでっち上げでも構わないのでしたら、別なのですが」

三笠「今回はほぼ史実をなぞっただけなので、語ることが少ないですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「今回は、時系列の都合上またもや舞台が移動します。次回『宗教と領土』ご期待下さい」

第三十二話 宗教と領土

イギリス領インド北西部にあるカシミール地方の藩王であったハリ・シン（ハリ・シングとも）は、イギリスのインドに対する宗主権喪失に合わせて、カシミール地方の独立を目論んでいた。なお彼自身はヒンドゥー教徒であるものの、当時カシミール地方の住人はおよそ八割がイスラム教徒であったと言われている。

そして一九四七年八月十四日には宗教の対立が原因となり、イスラム教国家のパキスタンが、インドを東西から挟むような形で分離独立。翌日にインドも独立を果たし、独立当時は両国ともにイギリス連邦の一国として歩むことになる。

ところが独立した両国は、隣国であるということに加え宗教の違いという問題があり、関係が非常に険悪であった。そのため、対米戦の終結によって兵器の在庫がだぶついていた日本やイギリスから兵器を輸入するようになる。

それに合わせて、両国はカシミール藩王国へと自国への帰属を要求。飽くまでカシミール地方の独立を考えていたハリ・シンに対して、イスラム教国であるパキスタンへの帰属を求める住民が暴動を起こす事態に発展した。

そんな中、一九四七年十月二十一日にパシユトゥンと呼ばれる部族が、イスラム教徒の民兵となってカシミール地方へと侵入。パシユトゥン族の侵入についてパキスタンが裏で糸を引いていると考えたハリ・シンは、カシミール地方を守るために、独立を諦めてインドへの併合を選んだのだった。

これを受けたインドは、二十七日より部隊の空輸によるカシミール渓谷掃討作戦を実行。だが間もなく、パキスタンも宣戦布告が無いままに正規軍を投入したため、正規軍同士の武力衝突に発展することになる。

国際連合安全保障理事会は、翌年一月二十日の決議で印パ両国に停戦を要求。インド・パキスタン軍事監視団が活動を開始するとともに、停戦ラインを基にした暫定的な国境線の策定が七月に為され、最終的には住民投票によってカシミール地方の帰属を決めることになった。

だがイスラム教徒が住民の八割を占めるカシミール地方で住民投票を実施すれば、イスラム教国であるパキスタンへの帰属を望む票が多くを占めることは容易に予想できた。そこでインドが住民投票を拒否し続けたことにより、結局は停戦ラインがそのまま国境となってしまうのである。

この国境線はカシミール地方のおよそ六割をインド領とするようになっており、インド側はジャンムー・カシミール、パキスタンはアザド・カシミールと称してそれぞれ統治。とはいえ、特にパキスタンにとっては不満の残る国境線であった。

インドが実効支配するカシミール地方最大の街スリナガルに置かれた政府は、一九五一年九月に議会選挙を強行。一九五四年二月にはその議会がインド連邦への帰属を決定したものの、カシミール地方の住民のうち多くやパキスタンはこれに反対した。

残りおよそ六割のカシミール地方を自国に編入したいパキスタンは、打倒インド軍を目標に軍備を拡張。インド軍もこれに対抗して軍拡を行い、第二次印パ戦争が勃発する一九七一年までに以下のよ

うな戦力を整えたのである。なお、両軍の航空戦力については空軍のみの保有数を記す。そのため、陸海軍や沿岸警備隊の保有機を含めれば、輸送機や回転翼機の保有数はより大きな数字になる。

また史実で一九六五年に勃発した第二次印パ戦争は、きっかけとなった中印国境紛争が発生しなかったために勃発していない。これは中国共産党が中国を実効支配できなかったことで、中国がチベット侵攻などといった軍事拡張主義に走らなかったためである。

・インド軍（人口四九六九三万人、陸軍三六万人、海軍及び空軍各三万人）

二四個師団、百式中戦車九六〇両、二〇式戦車及びセンチュリオン各四八〇両

四千トン級軽巡洋艦二隻、千トン級駆逐艦一二隻

災害救難艦一隻、乙型水上艦及び二〇式潜水艦各一二隻、乙型水上艇二四隻

一〇式戦闘機及び二〇式二号戦闘機各一二〇機、輸送機一二〇機、回転翼機四〇機

・パキスタン軍（人口一一五一九万人、陸軍二四万人、海軍及び空軍各一万五千人）

東パキスタン

八個師団、百式中戦車六四〇両

四〇〇〇トン級軽巡洋艦一隻、千トン級駆逐艦六隻

一〇式戦闘機六〇機、輸送機四〇機等

西パキスタン

八個師団、二〇式戦車六四〇両

災害救難艦一隻、乙型水上艦及び二〇式潜水艦各六隻、乙型水上艇一二隻

二〇式二号戦闘機六〇機、輸送機二〇機、回転翼機二〇機

第三十二話 宗教と領土（後書き）

富士「なあ……史実のインド海軍は、イギリス製の艦艇が主力じゃなかったか？」

大隅「それに災害救難艦や、水上艦や水上艇という初めて見る艦艇がいますね」

作者「これが、以前から言っていた究極の汎用艦のことだよ。詳細は、一番艦が進水する話のときに資料集で明らかにするけれど、資金に余裕のない国は他国の中古艦艇よりこっちを発注した方がお得だと思う」

三笠「なにか、釈然としないものがありますが……次回予告をお願いします」

作者「次回、戦後に強化された巡視船艇の配置を公表します。次回『コーストガード一九五〇』ご期待下さい」

第三十三話 コーストガード一九五〇

第一管区（北海道）

稚内本部

乙型巡視船野付、乙型巡視艇阿寒、厚岸、丙型巡視艇相生、浅茅、

丁型巡視艇裏見滝、霜降

幌筵警備部

丙型巡視船絵鞆、乙型巡視艇網走、大沼、丙型巡視艇諫早、石巻、

丁型巡視艇華厳、塩川

敷香警備部

丙型巡視船亀田、乙型巡視艇屈斜路、小沼、丙型巡視艇伊根、伊万

里、丁型巡視艇宿谷、高滝

函館警備部

丙型巡視船知床、乙型巡視艇駒止、支笏、丙型巡視艇臼杵、内浦、

丁型巡視艇田代滝、月待

苫小牧警備部

甲型巡視艇野寒布、乙型巡視艇然別、洞爺、丙型巡視艇浦戸、大槌、

丁型巡視艇早戸、百尋

小樽警備部

甲型巡視艇北追、乙型巡視艇能取、風蓮、丙型巡視艇大湊、大村、

丁型巡視艇吹割、袋田

歴山警備署（史実のアレクサンドロフ・サハリンスキー）

甲型巡視艇虻向、乙型巡視艇摩周、羅臼、丙型巡視艇女川、小浜、

丁型巡視艇払沢、本棚

室蘭警備署

甲型巡視艇尾花、乙型巡視艇湧洞、春採、丙型巡視艇川平、釜石、

丁型巡視艇竜化、竜頭

第二管区（東北全域）

大湊本部

乙型巡視船平舘、乙型巡視艇姉沼、宇曾利、丙型巡視艇唐津、飯屋、
丁型巡視艇丸神、湯滝

酒田警備部

丙型巡視船夏泊、乙型巡視艇小川原、鷹架、丙型巡視艇衣浦、久慈、
丁型巡視艇龍門、犬養

石巻警備部

丙型巡視船男鹿、乙型巡視艇十和田、蕪栗、丙型巡視艇佐伯、佐世
保、丁型巡視艇魚住、羽門

久慈警備部

丙型巡視船牡鹿、乙型巡視艇五色、万石、丙型巡視艇鮫浦、志布志、
丁型巡視艇大川、乙原

八戸警備署

甲型巡視艇大間、乙型巡視艇作沢、田沢、丙型巡視艇島原、宿毛、
丁型巡視艇暁嵐、桜滝

秋田警備署

甲型巡視艇竜飛、乙型巡視艇大鳥、秋元、丙型巡視艇寿都、仙台、
丁型巡視艇慈恩、白水

相馬警備署

甲型巡視艇入道、乙型巡視艇猪苗代、雄国、丙型巡視艇館山、津久
見、丁型巡視艇震動、数鹿流

宮古警備署

甲型巡視艇尻屋、乙型巡視艇尾瀬、小野川、丙型巡視艇和歌山、富
山、丁型巡視艇関之尾、曾木

第三管区（関東全域）

横須賀本部

甲型巡視船七里

乙型巡視船浦賀、乙型巡視艇牛久、北浦、丙型巡視艇中城、七尾、
丁型巡視艇西椎屋、原尻

東京警備部

丙型巡視船三浦、乙型巡視艇西浦、菅生、丙型巡視艇両津、油谷、
丁型巡視艇東椎谷、福貴野

銚子警備部

丙型巡視船真鶴、乙型巡視艇古利根、鬼怒沼、丙型巡視艇矢代、守
江、丁型巡視艇真名井、矢研

大宮島警備部（グアムの日本名）

丙型巡視船房総、乙型巡視艇中禅寺、榛名湖、丙型巡視艇三厩、水
俣、丁型巡視艇落門、田吉滝

三宅警備署

甲型巡視艇富津、乙型巡視艇伊佐沼、黒浜、丙型巡視艇の矢、舞鶴、
丁型巡視艇念珠、聖滝

八丈警備署

甲型巡視艇観音、乙型巡視艇白幡、鳥羽井、丙型巡視艇堀江、船越、
丁型巡視艇横野、竜宮

父島警備署

甲型巡視艇野島、乙型巡視艇原市、別所、丙型巡視艇広島、平潟、
丁型巡視艇天神、白糸

大島島警備署（ウエークの日本名）

甲型巡視艇蒲生田、乙型巡視艇印旛、手賀沼、丙型巡視艇浜中、函
館、丁型巡視艇滝切、津賀野

第四管区（新潟、富山）

新潟本部

乙型巡視船大島、乙型巡視艇加茂湖、佐潟、丙型巡視艇博多、野辺
地、丁型巡視艇松蔵、鳥原

両津警備部（佐渡）

丙型巡視船渡島、乙型巡視艇鳥屋野、福島、丙型巡視艇住用、錦江、
丁型巡視艇越早、綾織

上越警備部

丙型巡視船根室、乙型巡視艇芦ノ湖、洗足、丙型巡視艇美保湾、土佐湾、丁型巡視艇姥川、布勢滝

富山警備部

丙型巡視船積丹、乙型巡視艇井の頭、不忍、丙型巡視艇宮津、英虞湾、丁型巡視艇木鷺野、福良

水見警備署

甲型巡視艇祿剛、乙型巡視艇女沼、松川、丙型巡視艇尾鷲、田辺、丁型巡視艇竿渡、木原野

魚津警備署

甲型巡視艇松帆、乙型巡視艇蓋沼、桧原、丙型巡視艇飯田、九十九、丁型巡視艇布引、岩屋

柏崎警備署

甲型巡視艇生石、乙型巡視艇半田、沼沢、丙型巡視艇知多湾、茅ヶ崎、丁型巡視艇北辰、内陣

粟島警備署

甲型巡視艇雑賀、乙型巡視艇仁田沼、曾原、丙型巡視艇大船渡、広田、丁型巡視艇琴糸、琴滝

第五管区（石川、福井、京都、兵庫北岸）

舞鶴本部

甲型巡視船玄海

乙型巡視船早岐、乙型巡視艇金鱗、河原井、丙型巡視艇気仙沼、志津川、丁型巡視艇桃尾、竜仙

敦賀警備部

丙型巡視船敦賀、乙型巡視艇今江、木場潟、丙型巡視艇胆振、洞海、丁型巡視艇鳴滝、雪輪

金沢警備部

丙型巡視船常神、乙型巡視艇柴山、河北、丙型巡視艇吉浜、唐丹、丁型巡視艇雨滝、陣馬

輪島警備部

丙型巡視船能登、乙型巡視艇阿蘇海、余呉湖、丙型巡視艇門ノ浜、
伊里前、丁型巡視艇三条、五竜
七尾警備署

甲型巡視艇立石、乙型巡視艇琵琶湖、白駒、丙型巡視艇名振、雄勝、
丁型巡視艇河津、阿寺

志賀警備署

甲型巡視艇珠洲、乙型巡視艇諏訪湖、田代、丙型巡視艇五部浦、塩
釜、丁型巡視艇銚子口、瑠璃滝

小浜警備署

甲型巡視艇安乗、乙型巡視艇仁科、青木、丙型巡視艇神前、寺倉、
丁型巡視艇龍頭、常清

三国警備署

甲型巡視艇羽豆、乙型巡視艇木崎、中綱、丙型巡視艇二木島、新鹿、
丁型巡視艇清滝、妹背

第六管区（静岡、愛知、三重、和歌山、大阪、兵庫南岸）

大阪本部

乙型巡視船紀淡、乙型巡視艇河口、本栖、丙型巡視艇森浦、南部、
丁型巡視艇神庭、鈴ヶ滝

浜松警備部

丙型巡視船知多、乙型巡視艇山中、四尾連、丙型巡視艇内海、坂手、
丁型巡視艇吐龍、万城

姫路警備部

丙型巡視船渥美、乙型巡視艇一碧、猪鼻、丙型巡視艇小樽、釧路、
丁型巡視艇平原、平湯

津警備部

丙型巡視船大浦、乙型巡視艇佐鳴、八丁、丙型巡視艇十勝、苦小牧、
丁型巡視艇龍吟、秋保

神戸警備署

甲型巡視艇劔、乙型巡視艇浜名、汽水、丙型巡視艇紋別、留萌、丁

型巡視艇小野川、滑川

田辺警備署

甲型巡視艇大戸瀬、乙型巡視艇水月、三方、丙型巡視艇稚内、室蘭、
丁型巡視艇滑津、不動

四日市警備署

甲型巡視艇川尻、乙型巡視艇菅湖、野尻、丙型巡視艇魚津、金沢、
丁型巡視艇鳳鳴、虹滝

下田警備署

甲型巡視艇高茂、乙型巡視艇松原、明神、丙型巡視艇鷹巣、黒部、
丁型巡視艇観音、七種

第七管区（岡山、広島、山口）

呉本部

甲型巡視船水島

乙型巡視船関門、乙型巡視艇豊田、永沢、丙型巡視艇姫川、福井、

丁型巡視艇霧ヶ滝、鮎壺

倉敷警備部

丙型巡視船重茂、乙型巡視艇長谷上、長谷下、丙型巡視艇福浦、輪
島、丁型巡視艇星置、羽衣

下関警備部

丙型巡視船下北、乙型巡視艇辛香、冠光寺、丙型巡視艇川之江、菊
間、丁型巡視艇安倍、白藤

岩国警備部

丙型巡視船松前、乙型巡視艇横尾、龍王、丙型巡視艇木浦、新居浜、
丁型巡視艇松見、不動滝

萩警備署

甲型巡視艇爪木、乙型巡視艇奥田、宮原、丙型巡視艇乙浜、片貝、
丁型巡視艇赤滝、鼻白

防府警備署

甲型巡視艇稻村、乙型巡視艇長池、瀬戸池、丙型巡視艇枕崎、松江、

丁型巡視艇千城、黒熊

広島警備署

甲型巡視艇小動（こゆるぎ）、乙型巡視艇鈴池、本庄、丙型巡視艇
巖原、長洲、丁型巡視艇三階、常布

見島警備署

甲型巡視艇部瀬名、乙型巡視艇菊川、八千代、丙型巡視艇長浜、東
予、丁型巡視艇西椎屋、八ッ淵

第八管区（鳥取、島根）

境港本部

乙型巡視船尾道、乙型巡視艇湖山、中海、丙型巡視艇高松、下田水、
丁型巡視艇牛尾、帝釈

隠岐島後警備部

丙型巡視船島根、乙型巡視艇多鯨ヶ池、東郷、丙型巡視艇引田、丸
亀、丁型巡視艇金山、天津

浜田警備部

丙型巡視船児島、乙型巡視艇神西、穴道、丙型巡視艇宮浦、八幡浜、
丁型巡視艇波津井、那須一

鳥取警備部

丙型巡視船弓ヶ浜、乙型巡視艇入鹿、碓氷、丙型巡視艇弓削、伊保
田、丁型巡視艇北精進、酒水

益田警備署

甲型巡視艇琴引、乙型巡視艇奥相模、奥多摩、丙型巡視艇浦郷、岡
山、丁型巡視艇苗名滝、三本

江津警備署

甲型巡視艇刑部、乙型巡視艇巨椋、乙見、丙型巡視艇蒲刈、竹原、
丁型巡視艇田立、根尾

大田警備署

甲型巡視艇鳥居、乙型巡視艇鎌北、須川、丙型巡視艇下関、草津、
丁型巡視艇東椎屋、轟

竹島警備署

甲型巡視艇御浜、乙型巡視艇翠明、菅平、丙型巡視艇鳥取、浜田、
丁型巡視艇大樽、神庭

第九管区（四国全域）

松山本部

乙型巡視船鳴門、乙型巡視艇定山、白土、丙型巡視艇菱浦、水島、
丁型巡視艇八草、双門

高松警備部

丙型巡視船莊内、乙型巡視艇狭山、沢山、丙型巡視艇中関、柳井、
丁型巡視艇猿尾、天滝

小松島警備部

丙型巡視船高縄、乙型巡視艇昆陽、久種、丙型巡視艇大井川、清水、
丁型巡視艇原不動、金引

高知警備部

丙型巡視船佐多岬、乙型巡視艇沓沢、波志江、丙型巡視艇下田、白
子、丁型巡視艇七ッ釜、垂珠

宇和島警備署

甲型巡視艇田倉、乙型巡視艇白竜、津久井、丙型巡視艇津松阪、師
崎、丁型巡視艇伊奈美、鳥瑠奇

土佐清水警備署

甲型巡視艇大房、乙型巡視艇千塚、田貫湖、丙型巡視艇焼津、四日
市、丁型巡視艇三ッ滝、千滝

阿南警備署

甲型巡視艇波戸、乙型巡視艇蓼科、田光沼、丙型巡視艇浜島、大畑、
丁型巡視艇孫滝、聖滝

坂出警備署

甲型巡視艇神崎、乙型巡視艇高遠、福上、丙型巡視艇大間、八戸、
丁型巡視艇岩菅、鳥原

第十管区（九州全域）

佐世保本部

甲型巡視船備後

乙型巡視船豊予、乙型巡視艇上江津、下江津、丙型巡視艇吹浦、船川、丁型巡視艇越早、南田前

鹿児島警備部

丙型巡視船国東、乙型巡視艇志高、大幡、丙型巡視艇三沢、鰯浜、丁型巡視艇南田後、木鷺野

宮崎警備部

丙型巡視船若松、乙型巡視艇住吉、大浪、丙型巡視艇浦島、成生、丁型巡視艇福良、社台

北九州警備部

丙型巡視船島原、乙型巡視艇蘭牟田、池田、丙型巡視艇坪根、瀬崎、丁型巡視艇八垂別、建治

対馬警備署

甲型巡視艇都井、乙型巡視艇武周、不動、丙型巡視艇州本、塩津、丁型巡視艇南精進、上平

福岡警備署

甲型巡視艇門倉、乙型巡視艇弁天、宮ヶ瀬、丙型巡視艇野原、浜詰、丁型巡視艇魚返、平滝

大分警備署

甲型巡視艇笠利、乙型巡視艇美鈴、三島、丙型巡視艇日高、姫路、丁型巡視艇函滝、上段

八代警備署

甲型巡視艇備瀬、乙型巡視艇満濃、松姫、丙型巡視艇林崎、下津、丁型巡視艇王滝、布晒

第十一管区（沖縄）

那覇本部

乙型巡視船諏訪瀬、乙型巡視艇穂高、北山、丙型巡視艇那覇、佐良

浜、丁型巡視艇琵琶滝、縋藤

奄美警備部

丙型巡視船本部、乙型巡視艇宝仙、美山、丙型巡視艇糸満、運天、

丁型巡視艇柿窪、斜滝

宮古警備部

丙型巡視船与勝、乙型巡視艇四ッ池、靈善寺、丙型巡視艇天津、飯

岡、丁型巡視艇六段、樽ヶ沢

石垣警備部

丙型巡視船知念、乙型巡視艇六観音、御幸、丙型巡視艇石橋、茨城、

丁型巡視艇雷滝、大嵐

徳之島警備署

甲型巡視艇勝連、乙型巡視艇放生津、神扇、丙型巡視艇大洗、大原、

丁型巡視艇小嵐、鶴ヶ滝

名護警備署

甲型巡視艇残波、乙型巡視艇瓶割、雲場、丙型巡視艇小田原、片貝、

丁型巡視艇鶴来、桶滝

多良間警備署

甲型巡視艇喜屋武、乙型巡視艇高須賀、洲原、丙型巡視艇片瀬、勝

山、丁型巡視艇七反、野鹿

与那国警備署

甲型巡視艇辺戸、乙型巡視艇中谷、中曲、丙型巡視艇鴨井、鴨川、

丁型巡視艇鱒止、唐沢

第十二管区（台湾）

高雄本部

乙型巡視船澎湖、乙型巡視艇広沢、深野、丙型巡視艇川崎、木更津、

丁型巡視艇二重、鱒飛

基隆警備部

丙型巡視船宇土、乙型巡視艇宝泉寺、葉師、丙型巡視艇小坪、小湊、

丁型巡視艇雪虹、月待

馬公警備部

丙型巡視船平久保、乙型巡視艇栢山、新沼、丙型巡視艇米神、湘南、
丁型巡視艇生瀬、里ヶ淵

花蓮警備部

丙型巡視船佐賀関、乙型巡視艇城沼、阿佐美、丙型巡視艇銚子、土
浦、丁型巡視艇玉簾、朧滝

新竹警備署

甲型巡視艇魚崎、乙型巡視艇澄清、日月、丙型巡視艇横浜、横須賀、
丁型巡視艇亀淵、鳴沢

台東警備署

甲型巡視艇白崎、乙型巡視艇野反、奥只見、丙型巡視艇三崎、平塚、
丁型巡視艇大倉、山岡

西沢島警備署（史実の現代における東沙諸島東沙島）

甲型巡視艇潮岬、乙型巡視艇姉沼、砂沼、丙型巡視艇日立、長浦、
丁型巡視艇岩間、宇嶺

長島警備署（史実の現代における南沙諸島太平島）

甲型巡視艇和田岬、乙型巡視艇上野沼、小林、丙型巡視艇富崎、外
川、丁型巡視艇赤水、大下

・船魂の階級

大將（一隻）

沿岸警備隊総旗艦（通常、横須賀の甲型巡視船）

中將（一隻）

沿岸警備隊参謀長（通常、舞鶴の甲型巡視船）

少將（二隻）

甲型巡視船

大佐（二隻）

第三及び第五管区本部所属の乙型巡視船

中佐（二隻）

第七及び第十管区本部所属の乙型巡視船

少佐（八隻）

乙型巡視船

大尉（十二隻）

各管区で最も艦歴の長い丙型巡視船

中尉（十二隻）

各管区で二番目に艦歴の長い丙型巡視船

少尉（二十四隻）

丙型巡視船

兵曹長（十二隻）

各管区で最も艦歴の長い甲型巡視艇

上等兵曹（三十六隻）

甲型巡視艇

一等兵曹（九十六隻）

配属地で艦歴が長いほうの乙型巡視艇

二等兵曹（九十六隻）

乙型巡視艇

一等水兵（九十六隻）

配属地で艦歴が長いほうの丙型巡視艇

二等水兵（九十六隻）

丙型巡視艇

三等水兵（九十六隻）

配属地で艦歴が長いほうの丁型巡視艇

四等水兵（九十六隻）

丁型巡視艇

命名基準及び任務

甲型巡視船……灘の名。大規模な天災及び人災や事故に対応する際の旗艦、及び各種式典への参加

乙型巡視船……海峡や水道の名。中規模な天災及び人災や事故に対応する際の旗艦

丙型巡視船……半島名。小規模な天災及び人災や事故に対応する際の旗艦

甲型巡視艇……岬の名。これ以上の規模の船艇は定期的な警備よりも、災害等に対する緊急出動が主眼

乙型巡視艇……湖沼名。各本部、警備部及び警備署から常に一隻の乙型又は丙型巡視艇が沿岸警備に出撃

丙型巡視艇……港の名。

丁型巡視艇……渚の名。港湾周辺の警備や灯台の支援

第三十三話 コーストガード一九五〇（後書き）

作者「自己満足と言われればそれまでですが、やらずにはいられませんでした。ただ、どこかで重複している船の名前があるかもしれません」

富士「とち狂った人間が本気を出すと、こうなるのだな」

作者「湖沼名なんて、最後はy a h o oの日本地図を端から端まで眺めて探しましたよ、ええ」

敷島「でも宮古や気仙沼辺りにいる船は、今回の地震大丈夫だったの？」

作者「海上保安庁のサイトを見ましたが、今回の地震による津波で巡視船艇が失われたという情報はありませんでした。あの辺りには小型の巡視艇もありますから、まあ私の設計した娘たちも耐えてくれるであろうと、楽観的な予測をした次第です」

三笠「かつての台風では失われた艇もいると聞きましたから、対策がとれていたのかもしれませんがね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回はようやく、戦後型艦艇の一隻目が進水します。次回『アングルドデッキ』ご期待下さい」

第三十四話 アングルドデッキ

対米戦の終結後、日本海軍は数年間に亘って水上戦闘艦艇の新造を行わなかった。しかし五式戦闘機の登場により艦載機までもがジェット機化したことで、原型の設計が四十年前の中型空母である「黄龍」型航空母艦では、運用に支障が出始めていたのだ。

そこで、艦政本部はアングルド・デッキを持つ戦後第一世代の航空母艦を開発。当初は満載排水量で三万トンや四万トンになる大型空母の建造も検討されたが、限られた軍事費の中で大型空母を量産しては他艦種の整備に差し支えるとして、最終的には満載排水量二万トンという小型空母に落ち着いた。

だが、この艦の特徴はこれだけではない。格納庫の下には、兵員の居住区に加えて車両や舟艇を搭載できる甲板が設けられており、艦尾にある扉からこれらの舟艇を下ろすことで、上陸作戦にも投入できるようになっていたのだ。

この災害救難艦の一番艦は一九四七年四月二十日に横須賀海軍工廠で起工され、一部「黄龍」型空母の設計を流用したことも幸いして作業は順調に進行。二年後の一九四九年四月十日に進水式となり、予定では一九五〇年四月中の就役を見込んでいた。

一九四九年四月十日、横須賀海軍工廠。船台には「雛鳳」と名付けられた一番艦の船体が鎮座しており、その予備会議室には勇や輝久と第一戦隊の二人、さらには上総や岩代といった面々まで集合していた。「上総」と「岩代」の船体は横須賀海軍工廠からさほど遠くない場所でも保存されているため、瞬間移動でここまでやってきたのである。

「しかし、見れば見るほど妙な形の艦ですなあ……海に浮かべたらすぐにでも転覆しそうで、私は気が気じゃあないですよ」

「同感だ。船体の幅が私たちと互角なのに、甲板の幅は『秋津洲』型と同じとはな」

大正生まれの上総と岩代は、やはりその甲板の広さが気になるようであった。約百十二メートルの長さを持つアングルド・デッキは船体から左舷側に十四メートルも張り出しており、見るものにひどく不安定な印象を与えていたのだ。

因みに彼女たち退役艦艇の艦魂は、一部の例外を除けば現役時代のように他の艦魂へと直接指揮命令する権限こそ持っていないものの、政界で言う元老のような影響力を持っていた。現に二人は現役時代と同じ軍装を纏っており、そして腰には軍刀を佩びていたのである。

「有馬大将、ひとつ宜しいですか？」

「どうした、瑞穂？」

「私たちは、確かあと十年ほどで退役すると伺いましたが……その後は、この艦が連合艦隊旗艦になるのですか？」

「ああ……つまり寂しいことではあるが、あと十年で日本海軍の現役艦艇から戦艦が姿を消すということだ。史実と同じように、これからの列強では空母が水上艦隊の旗艦になっていくはずだよ」

言葉どおり寂しそうな表情を浮かべる勇を見て、瑞穂もしょんぼりとした表情にならざるを得ない。そしてそれを見ていた輝久も仕方のないことと分かっているとはいえ、砲術畑の士官として、そしてかつての「瑞穂」乗員として複雑な思いであった。

「他国では、私たちと同世代の戦艦は既に少なからずが予備役に編入されています。そのことを考えれば、まだましな部類かと」

秋津洲の言うとおり、欧州の各国は東京海軍軍縮条約の期限を待たずして次々と戦艦を予備役に編入。一隻当たり二千名前後もの乗員を必要とする戦艦は限られた軍事費を圧迫するだけであるとして、イギリスの「キングジョージ五世」級やドイツの「ビスマルク」級も現在は動態保存されていた。

またアメリカでも、終戦前に完成した高速戦艦「アイオワ」及び「ニュージャージー」を除いて、既に全艦が退役。その二隻も名目上の旗艦としてそれぞれハワイとノーフォークに繋留されたままであり、活動は極めて低調であった。

このようにお世辞にも縁起が良いとは言えない話をしている間に、「雛鳳」の進水時刻が近づく。そこで、秋津洲と瑞穂が誕生する艦魂を迎えるべく飛行甲板へと向かった。

第三十四話 アングルドデッキ（後書き）

富士「アングルドデッキ装備の強襲揚陸艦とは……無茶な事をしたな」

作者「こういう船が現実の日本にもあれば有り難いですが、実際に建造できるという保証はありません。もし建造できたとしても、帯に短し襷に長しという状態になりかねないでしょう」

敷島「で、建造数は？」

作者「二十年間で八隻を見込んでいます。四隻いれば常時一隻は展開できますが、逆に言えば一隻か、精々二隻しか展開できないということですから」

三笠「つまり、一隻の性能より運用の柔軟性を優先したということですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回は、この『雛鳳』が進水します。次回『気弱な次期旗艦』ご期待下さい」

第三十五話 気弱な次期旗艦

勇と上総、それに岩代の三人は、秋津洲と瑞穂が雛鳳を連れてくるのを待っていた。すると上総が突然とても大きなため息を漏らしたので、隣にいた岩代は何事かと驚く。

「どうしたんですか姉さん。柄にもない」

「いや、大したことじゃあないんだ」

「今のため息は、到底そうとは思えませんでしたが」

さすがに、三十年以上一緒にいる妹を欺ける嘘ではなかったか、と上総は俯いてしまう。一方の岩代は姉の様子が気になり、「姉さん？」と話しかけながら頻りに彼女の肩を揺らしていた。暫くして、ようやく本心を打ち明ける決心がついた上総が顔を上げる。

「最近、どうも張り合いが無くてな。このまま私も船体も馬齢を重ねていくのかと思うと、かつての連合艦隊旗艦としての意地がどうしても頭をもたげてしまうんだ。今さらどうこう言ったって詮無きことだというのは、百も承知だがな」

「なるほど、ねえ。確かに、私だって金喰い虫のままは癪ですよ……本当に金喰い虫のままなら、ね」

「金喰い虫のままなら……とは、どういうことだ？」

岩代の真意が分からず、上総は思わず聞き返す。すると岩代は、我が意を得たりとばかりにほくそ笑んだ。

「今日も、横須賀海軍博物館……つまり私たちの船体には、それなりに人が来ています。そしてその中には、餓鬼ども……失敬。子供も少なからずいるでしょうよ」

「ああ。最初の頃はやかましいと思っていたが、最近はようやく慣れてあまり気にならなくなったぞ」

「そしてそいつらの中には、私たちを見て海軍に憧れを持つ奴もいるはずですよ。というより、そうだという前提に立たなきゃあ私たちは本当に金喰い虫ですよ」

「まあ、建前はそうだからな。で？　まさか、それだけじゃあないだろう？」

「ええ。で、そいつらのうち一人でも二人でも海軍に入って日本を守ってくれるんだとすりゃあ……私は、それで十分ですがね」

良く言えば前向きな、悪く言えばどこか諦めてしまっているような答えを聞いて、上総が吹っ切れたように鼻を鳴らす。だが、そんな答えを聞いてなお上総の中には疑問があった。

「だが、それにしたって現役の連中を交代で宛がえばいいじゃないか。そうすれば、私たちがいる意味は今度こそ無くなってしまおうぞ？」

「姉さんも、相変わらず頑固ですなあ。そんなことをして、そいつらの本業が疎かになったらどうします？　それに……でかくて大砲や機銃がわんさか付いているほうが、強そうで格好良いでしょう？」

「そりゃあ、まあ事実かもしれんが……身も蓋も無いな」

二人がそうこう話しているうちに、予備会議室の一角が発光して秋津洲と瑞穂、そして「雛鳳」の艦魂と思しき三人が現れる。「雛鳳」の艦魂は身長百六十センチほどで、髪は肩甲骨の辺りまですらりと伸ばしており、大きな目の所為か十代半ばぐらいの童顔に見えた。

「お、お初にお目にかかります……大日本帝国海軍『雛鳳』型航空母艦一番艦、『雛鳳』の艦魂ですよ」

どこか怯えているような口調で自己紹介をする雛鳳を見て、上総は内心「こんな艦魂に連合艦隊旗艦が務まるのか」と不安になる。しかし今の彼女には、雛鳳の連合艦隊旗艦就任までに十年の月日がある以上、それまでに鍛え上げればいいことだと考えるだけの余裕があった。

その後、全員が自己紹介を終えた後に待っていたのは、雛鳳からの質問攻めであった。特に百年後からやってきたという勇の来歴に興味を示した彼女は、彼に休む間もなく質問を浴びせかけたのである。そして一頻り彼自身についての質問を終えると、最後にこう切り出した。

「で……私の階級は何ですか？」

「確か、就役したら第一航空戦隊を一隻で編成するはずだから……おそらく、海軍中将だな」

「え……ええっ？ そんな、私には到底無理です……うう」

連合艦隊参謀長就任を告げられた時の瑞穂によく似た反応だが、彼女の場合は余計に委縮してしまっているようであった。そのため上総や岩代が「自分たちが後一年で知識を教え込むから」と説得し、どうにか受諾してもらったのである。

第三十五話 気弱な次期旗艦（後書き）

作者「それにしても、冷戦やソ連と中国の共産党が無くなれば、まさか戦後の武力衝突の原因のうちほぼ半分が無くなるとは……おかげで、いくつか架空の紛争をでっち上げてなお、ネタ不足が続いています」

富士「アフリカの内戦でも、資本主義と社会主義、あるいは共産主義の争いという例は多いからな」

敷島「犠牲者が減るに越したことは無いけれど、列強同士の表だった対立が無ければ、軍需産業は現在まで冷や飯食いが続きそうだよ」

朝日「もし対立があったとしても、八カ国協約が有効であれば、先に手を出した方が袋叩きですからな。おまけに八カ国のうち半数程度かそれ以上が核保有国となれば、その国はまず間違いないで壊滅しましょう」

三笠「ある意味、八カ国協約の存在は最強の抑止力となりそうですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、舞台が朝鮮半島に移ります。次回『生かさず殺さず』ご期待下さい」

第三十六話 生かさず殺さず

日本は一九〇七年、オランダのハーグで行われる第二回万国平和会議に向けた、大韓帝国皇帝の高宗による密使派遣（史実のハーグ密使事件）を阻止。そして史実どおり高宗を退位（純宗が即位）させたうえで第三次日韓協約を締結し、韓国軍を王宮警護用の一個大隊を除いて解散させた。

これを受けて、解散させられた韓国軍の将兵はそれぞれ数百名や数千名の集団となって各地で蜂起。とはいえ装備は旧式で統率もとれず、また物資や弾薬の補給もままならない状況下では、日本軍に次々と鎮圧されるばかりであった。

その後数十年の間は、日本からの予算投入も韓国からの物資徴発もほとんど行われず、韓国統監府の干渉によって日本に仇為するような国力を備えさせず、また後々他国から非難を浴びるような弾圧も行わないという方針が続いた。即ち、有名無実の大韓帝国は日本によって「生かさず殺さず」に近い状況に保たれていたとも言える。

こうした日本の方針転換により、史実においては一九一〇年から一九四五年までの間に約二千五百万人と倍増した人口も、約千五百万人と伸び悩んでいた。また経済的にも朝鮮半島が史実ほどの発展を見なかったために、日本へ不法入国しようとする密航者が相次いだ、多くは沿岸警備隊によって送還されていた。

しかし一九五〇年に北ニューギニアと南洋諸島、さらに北ブルネイが独立すると、大韓帝国では日本の干渉に反対する運動が再興。当初は警察や、大韓帝国からの不法入国者による治安悪化を恐れる中華民国の協力によって抑えていたものの、朝鮮全土で散発的に発

生ずる武力蜂起に対抗するには数が足りなかった。

そこで一九五〇年十二月一日、仏印戦で経験を積んでいた第一師団を乗せた輸送船団が、仁川に向けて第一艦隊と共に横須賀を出撃。戦艦「秋津洲」と「瑞穂」、さらには災害救難艦「雛鳳」と対米戦時における第三艦隊が編入されていたこの艦隊は、日本海軍の歴史上初めて戦艦と事実上の空母、及び一等巡洋艦の三艦種が一堂に会した艦隊であった。

これは同年に「因幡」型戦艦全艦と対米戦時の第二艦隊に所属していた全艦、即ち一九四五年の第一次戦後軍縮以降「秋津洲」及び「瑞穂」と共に第一艦隊を編成していた艦艇が一举に除籍されたことに伴う編成替えの結果編成された艦隊で戦艦二隻、空母二隻、重巡洋艦八隻、軽巡洋艦四隻、駆逐艦二十四隻を擁していた。なお連合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官は大西瀧治郎大將が務める。

同日午後、戦艦「秋津洲」予備士官室。

「有馬大將、自分は今回の出撃を非常に光栄であると思っていますが……なぜ、敵がまともな対艦攻撃能力を有していないとわかっていながら、これだけの艦隊を護衛につけるのです？」

大尉へと昇進し、戦艦「瑞穂」の副砲長になっていた輝久が、勇へと予てよりの疑問を投げかける。輝久の言うとおり、元韓国軍將兵には精々小銃や機関銃程度の火器しか残されていない以上、戦艦や最新鋭の空母まで随伴させる必要性は薄かった。

「だからこそ、とも言える。輸送船だけで行けば無謀な連中が破壊工作を企んでくるかも知れないが、これだけの艦隊に攻撃を仕掛けるのはそれこそ自殺行為だ。だから、輸送船への攻撃を抑止する

ことができる」

「ですが、効果がそれだけでは割に合わないのでは？」

「ああ。それに大艦隊を差し向けることで、武装組織のみならず一般の韓国国民に無言の重圧を与えることもできる。そうすれば抵抗を止める者も出てくるだろうし、将来予定されている蜂起を断念させることにもつながるはずだ」

「なるほど……こう言うのもなんですが、以前の砲艦外交のようですね」

「まさに、そのとおりだよ」

勇の説明に輝久は納得した表情であったが、一人瑞穂だけは浮かない表情であった。

第三十六話 生かさず殺さず（後書き）

敷島「このまま現代までぐだぐだの状態が続くんですね、わかります」

富士「確かに、深入りすると面倒な連中ではあるからな」

作者「まあ、西日本の日本海側や国境の島々に沿岸警備隊を重点配置する手間はかかりますけどね。竹島とか竹島とか（以下略）」

三笠「竹島に駐留している沿岸警備隊員の苦勞が偲ばれますが、一先ず次回予告をお願いします」

作者「輝久が気付いていなかった、考え方の変化とは？ 次回『よく訓練された軍人』ご期待下さい」

第三十七話　よく訓練された軍人

数時間後、戦艦「瑞穂」分隊長室。

「どうした？　さっきから浮かない顔だけど」

「大尉……いえ、なんでもありません」

そうは言いつつも、瑞穂は相変わらずしょげたまま少しだけ俯いている。こうなると輝久の方も気が気ではなく、まずは原因を探ってみることにした。

「何か、僕が気に食わないことをした？」

「ち、違います！　私はただ……ただ、この任務が脅しのように思えてならないだけです。戦時でもないのに、民間人に砲を向けるようなことはしたくありません」

彼女の「脅し」という言葉には、輝久も同意するところである。だからこそ勇との会話で「砲艦外交」という言葉を用いたのであるし、また感情でそれに全く後ろめたさを感じていないかと言われれば、彼自身全くないとは言い切れない節があった。

「確かにそうかもしれない。それでも……これで暴動が収まって、これから朝鮮で発生する暴動の結果死んでしまう人間が一人でも減るのなら、ただの脅しではないと思う」

「大尉……すいません。ハワイ諸島で行われた市街地への砲撃の時も、あまり気が進みませんでしたから」

先の大戦中、戦艦「瑞穂」がハワイ諸島で唯一行った、明確に市街地を目的とした艦砲射撃。そのことを彼女は未だに悔やんでおり、

被害の実態が知らされてからは暫くの間は塞ぎ込んでいた。

「でも、あの時は……ああでもないし上陸後の陸戦によるこちらの犠牲はもつと増えていたし、もしこちらが艦砲射撃をためらえば、あのまま守備隊が味を占めて市街地に居続け、そこでの陸戦になっていた恐れもあるんだ。そうだったら、民間人の死者だって今より増えていたはずだよ」

「つまり最終的な犠牲が減ればそれで良い、と？」

「勿論、あの時の艦砲射撃で死んだ米軍将兵や民間人は死んでも構わなかったと言うつもりはない。とはいえ戦争の早期終結を優先するなら、他に方法はなかったと思う。戦争が早く終われば、それだけ死傷する人間は減るはずだから」

輝久は瑞穂に話しかける中で、自分の考え方がここ数年で大きく変わっていることに気付いた。以前の彼なら理想論を掲げてハワイ諸島での艦砲射撃も否定的に捉えていたのだろうが、今は知識や経験の蓄積によって多少の非情な手段は許容できるようになったのだ。これには、彼が史実の戦訓について勇に師事していたことも影響していたのであるが、彼はそこまでは気付かなかった。

「大尉、なんだか有馬大将に似てきましたね」

「え？　そう……かな？」

「はい。ハワイを攻略するとき、上野さんが輸送船団を囲にすると仰った際、大尉は反対なさいましたよね？」

「ああ……そんなこともあったなあ」

もうあれから五年以上経つのかと、輝久は思わず当時を懐かしむ。今や当の上野は予備役に編入され、三笠たちと同じく横須賀で舳先を並べて休んでいた。そして彼自身も大尉となり、一戦艦の副砲長を任されるに至っている。

「あの時、大尉は囚や捨て石といった『誰かを犠牲にすることで、全体の被害を最小限に止めようとするやり方』を嫌っていたんじゃないか。それが、今ではすっかり変わりましたね」

「もしかして、気分を悪くした？」

「いいえ。私も伊達や酔狂で連合艦隊艦魂の参謀長を何年も務めているわけではありません。さすがにそういった手段への抵抗が全く無くなったわけではないですが、その必要性は理解したつもりです」

すっかり軍人としての考え方を身につけた輝久の前に、瑞穂はいくら寂しく思う。しかし同時に、彼の軍人としての成長を喜んでいることもまた、事実であった。

第三十七話 よく訓練された軍人（後書き）

敷島「逃げる奴はベトコンだ！ 逃げない奴は（以下略）」

富士「まあ、よく訓練されていない軍人というのは困るがな」

大隅「富士さん……今のスルーはさすがに強引では？」

作者「それはさておき……調べれば調べるほど、やはり日本では政情が不安定になった時に大地震が起こりやすいそうです」

敷島「阪神淡路と今回はわかるけれど……あとは？」

作者「関東大震災は、加藤首相が亡くなって後任が八日間も正式に決まらなかった時。奥尻島の件は、非自民連立政権が成立する直前。さらには、昭和二十年前後にも三河、鳥取、東南海及び南海でそれぞれ死者千名を超す大地震が発生しています」

朝日「とはいえ、被害の大小を考えなければ、マグニチュード六や七の地震はほぼ毎年発生していますがな」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「今回は、一話だけですが中国海軍の艦魂が登場します。次回『国を分けた姉妹』ご期待下さい」

第三十八話 国を分けた姉妹

横須賀を出港した第一艦隊は、豊後水道と速吸の瀬戸（豊予海峡）、さらに関門海峡を通過。十二月四日に釜山の沖合へと到着し、以後は示威行動も兼ねて朝鮮半島の沿岸を航行することになった。

驚いたのは、武装蜂起の時を虎視眈々と窺っていたかつての大韓帝国軍将兵である。まさか日本が戦艦を含む大艦隊を差し向けてくるとは思っておらず、彼らは完全に虚を突かれた形になった。そしてそのまま、戦意の喪失へとつながったのである。

日本に武力で対抗することが不可能であることを悟った旧韓国軍将兵は、ある者は市民に紛れて生活をするようになり、またある者は人里離れた奥地で集落を形成してひっそりと生きる道を選んだ。こうして、日本は一発の砲弾も用いることなく武装蜂起の芽を順調に摘み取っていったのである。

その後第一艦隊と輸送船団は、十二月六日に仁川へと入港。第一師団はそこから東北東に三十キロメートル離れた漢城（史実の現代におけるソウル）へと陸路で移動し、朝鮮半島各地で武力蜂起の鎮圧にあたることとされた。

第一師団が各地へと展開し、輸送船団が物資を揚陸している間、第一艦隊は朝鮮半島の沿岸で示威行動を継続。形だけの韓国政府に許可を得たうえで、空砲の発射や航空機による警戒も行われた。こうして内陸にまで日本軍の存在を知らしめることで、より広範囲の武装蜂起を抑止しようとしたのである。

しかしこうした日本軍の行動に対し、自国の目と鼻の先で演習を

行われていた中華民国が警戒。駆逐艦や時には巡洋艦が、交代で常時第一艦隊の様子を窺い始めた。

十二月十日、仁川沖の戦艦「秋津洲」。この日も旧韓国軍将兵を威圧すべく、周辺海域を遊弋していた彼女の後方に、中華民国海軍の青島級駆逐艦「西安」と「銀川」が現れた。砲口こそ向けてこないものの、二隻は「秋津洲」から付かず離れずの距離を保っており、第一艦隊の動向を監視していることは明らかであった。

「面倒だな……こちらから手を出さなければ向こうも手を出さない、という考えでいてくれればいいが」

艦尾先端にあるスタンウオークから双眼鏡を使って二隻の様子を見ていた勇が、不安そうに呟く。もし中華民国側が先に発砲すれば日本側としても黙ってやられているわけにはいかず、最悪の場合日中間で全面的な武力衝突に陥る危険があるからだ。

「それにしても、中華民国海軍艦艇はさほど入念な整備が行われていないようですね」

「ああ。我が軍の『秋風』型駆逐艦とほぼ同型の駆逐艦とは思えん」

二人の言葉どおり二隻は船体のところどころに錆が見られ、また未熟な溶接技術を用いてノックダウン生産されたことで、船体の外板がへこんでしまう「痩せ馬」と呼ばれる現象も顕著に発生していた。後者は船体形状の変化によって推進効率の悪化や縦方向における強度の低下といった弊害をもたらす現象であり、戦時特需で改善されたとはいえ、いまだに中華民国国内の工業技術力に難があることを如実に示していた。

「あーあ。なんで私たちが、あんな大艦隊の監視をさせられるのや

ら」

駆逐艦「西安」の予備士官室から第一艦隊を眺めていた艦魂の西安が、心底面倒くさそうにため息をつく。彼女は上総に勝るとも劣らない長身で、また髪型も上総に似ていたが、彼女の持つような覇気や目力といったものは全く感じられなかった。

「いいなあ、あんなにきちんと整備してもらえて……私たちなんて、時間があっても碌に塗装さえしてもらえないのに」

第一艦隊の周囲を固めている、義理の姉妹とも言うべき「秋風」型駆逐艦の寛容を見ながら、西安は自分の不遇を恨む。しかし彼女がどれほど愚痴をこぼしたところで、状況は幾ばくも好転しないのであった。

第三十八話 国を分けた姉妹（後書き）

作者「アフリカで架空の武力衝突まで発生させ、現在およそ百話分の備蓄を抱えておりますが……手に余る湾岸戦争とイラン・イラク戦争を除き、とうとう本格的なネタ切れに追い込まれました」

富士「それでは『マネーの退蔵』ならぬ『ネタの退蔵』ではないか」

朝日「とはいえ史実どおりの武力衝突であれば、仮想戦記の範囲外ですからな。冷戦も、史実の現代に見るような極東地域の緊張も薄らいでは、題材の不足も致し方ありますまい」

作者「一時期、阪神淡路大震災を取り扱うことも考えていましたが、東日本大震災があったのでどうも不謹慎に過ぎる気がしてしまっています。とはいえ今書いたところで、公開は半年程度後のことになるでしょうが」

大隅「作者さんの設計なさった災害救難艦がいれば、確かに復興支援は大幅に捗りそうですが……そういうことでしたら、止むを得ませんね」

作者「それに、水上戦闘艦艇は高速輸送艦としても使えるから、どこかで活躍させてあげたいというのが親心なのだけ……役立ちそうな事態と言えば、地震か台風か離島の奪還ぐらいだからなあ」

三笠「輸送もできる戦闘艦というのが気になりますが、次回予告をお願いします」

作者「輝久は、やはり今回の作戦に不満を持っているようです。次

回『宝の持ち腐れ』ご期待下さい」

第三十九話 宝の持ち腐れ

中華民國海軍による警戒が開始された後も、第一艦隊は暫くの間朝鮮半島周辺での示威行動を続けていた。しかし戦時中のように多数の補給用艦艇を連れていなかったために第一艦隊の残余食糧や燃料が乏しくなってきたこと、必要以上の長期間に亘って大艦隊を展開し続ければ中国やロシアに無用の危機感を抱かせかねないことなどを理由に、十二月十八日には釜山沖から横須賀への帰路に就くこととされた。

同日、戦艦「秋津洲」予備幕僚室。

「結局、実弾を発砲せずに済みましたね」

「ああ……でも、せっかく出撃したのに戦闘配置さえ無かったなあ」

示威行動が新たな諍いを引き起こすことなく終わったことを瑞穂は安堵し、また輝久も同じであった。しかし輝久としてはただ行つて帰ってくるだけでも同然の出撃となつてしまったことに、幾許かの不満を抱いていることも事実であった。

「大尉、そう気を落とすな。それよりも、中華民國との間に偶発的な戦闘が起こらなかっただけでもよしとしなければ」

「それはそうですが……出撃しておきながら碌に訓練もなしでは、暇を持て余してしまいます」

出撃前、第一艦隊の艦艇は空包と実弾を混載していた。そして当初は威嚇も兼ねて空包による砲撃訓練を行っていたのであるが、搭載していた空包の残りが少なくなると戦闘配置どころか訓練さえままならなくなっていた。そうなつては砲術を専門とする輝久の出

番も当然減ってしまい、彼は手持ち無沙汰な日々を過ごすしかないのだった。

「最初、自分は砲術こそ海軍の主力だと思って海軍に入りました。そして、それは今も変わっていません。ですが……今だけは、常に為すべきことがある航海科や機関科の人間が羨ましく思えます。それにこう何週間も砲を撃たないでいると、技量が落ちてしまいそうです」

そう言うと、輝久は齒痒さからか大きなため息をつく。既に海軍砲術学校の普通科（少尉が対象）と高等科（大尉や少佐が対象）、さらには海軍大学校乙種及び甲種の課程を終えていた彼は自分の技量に誇りを持っており、訓練が長期間行われないことで腕が鈍ってしまうのではないかと危惧していた。

「それは同感だよ。早く横須賀に戻って、いつもどおりの訓練ができるように態勢を整えないとな」

「はい」

勇は最初、輝久の意気盛んに過ぎることを諫めようとしたが、あまりきつく言えば彼の士気を不必要に沮喪させかねないと考えて何も言わなかった。しかしせめて「いつもどおりの訓練」と言っておくことで、輝久が血気に走らないようにしたのである。

この第一師団派遣以降、日本からは常に一個若しくは二個師団が交代で朝鮮半島を警備。しかしその分常に本土のどこかが手薄になるということで、一九五〇年までに既存の師団を以下のように改変することとなった。

近衛一個師団

東部方面軍……北海道二個師団、東北一個師団、関東一個師団
中部方面軍……甲信越一個師団、甲信越を除く中部地方一個師団、
近畿一個師団
西部方面軍……中国一個師団、四国一個師団
南部方面軍……九州一個師団、沖縄一個師団、台湾一個師団
朝鮮方面軍……朝鮮二個師団

第三十九話 宝の持ち腐れ（後書き）

作者「対米戦後の指定船で一話書いたはいいものの、資料集に載せるような内容になりました」

富士「ということは、戦後も金太郎飴みたいな船ばかりが建造されるということか……効率は良いだろうが、味気ないな」

大隅「作者さんの嗜好から考えると、さぞ古めかしい艦容の船ばかりなのでしょね。双胴船や三胴船は、滅多なことでは建造されなさそうです」

作者「どうも、最近の客船はいまいち興奮する船が少ないんだよなあ」

三笠「今の発言で、相応数の船を敵に回したような気がします、取り敢えず次回予告をお願いします」

作者「次回は、歴史改変の影響を受けたアフリカについて解説します。次回『資源獲得競争』ご期待下さい」

第四十話 資源獲得競争

一九五〇年にブルネイ、北ニューギニア、そして南洋諸島連邦が独立すると、イギリスやフランス、さらにはオランダといった国々の間で懸念されていたように世界各地の植民地で独立運動が過激化。日本の干渉により独立運動が潰されたことで、今となっては東南アジアでも数少ない植民地となっていた仏印だけでなく、アフリカにまでその動きが広がるという有様であった。

その結果、対米戦後に植民地の維持を面倒なものと捉え始めていた欧米列強は多くの植民地を平和裏に独立させた。なお、一九五〇年から二〇〇〇年までに独立を達成し、かつ史実と異なる事情があるアフリカの国家は以下のとおり。

・アンゴラ

一九七五年十一月十一日（史実と同日）にポルトガルより独立。なお共産主義勢力が世界から放逐されたためアンゴラ解放人民運動（MPLA）は結成されず、資本主義を肯定するアンゴラ国民解放戦線（FNLA、かつてのアンゴラ人民同盟）とそれから分離したアンゴラ全面独立民族同盟（UNITA）が共同で政権を運営するようになった。またこのため、米ソの代理戦争であるアンゴラ内戦は発生していない。

・コンゴ民主共和国

日本、国連軍の一国として南カサイ鉱山国とカタンガ併合を支援。
・ジンバブエ

ムガベ大統領の独裁に対し、日本を含めた国際連合は経済措置を実行。これは史実においてロシア連邦と中華人民共和国の拒否権発動により阻止されたものである。

・ソマリア

反政府勢力であるソマリ国民運動（SNM）の指導者としてソマリ社会主義革命党のモハメド・シアド・バーレ大統領を追放した後、自らもモハメド・ファッラ・アイディード將軍によって首都を追われたアリ・マハディ・モハメド暫定大統領の要請に従い、日本を含む国連多国籍軍が派遣。

・ナイジェリア

ビアフラ戦争時、日本が政府を支援。

・ブルキナファソ（旧オートボルタ。トーマス・サンカラが改名）

第五代大統領トーマス・サンカラは社会主義政策を行わなかったものの、独裁が反感を買って史実どおり暗殺される。なお女子割礼や一夫多妻制の禁止は史実どおり行った。

・ベナン

マチュー・ケレクの社会主義政権が成立せず、国名がダホメー共和国のまま

・モザンビーク

モザンビーク解放戦線がマルクス主義を標榜せず、モザンビーク内戦は勃発しなかった。

・独立まで、及び独立後の経過も史実に準じたアフリカの国

ウガンダ、エリトリア、ガーナ、カーボベルデ、ガボン、カメルーン、ガンビア、ギニア、ギニアビサウ、ケニア、コートジボワール、コモロ、コンゴ共和国、サントメ・プリンシペ、ザンビア、シエラレオネ、ジブチ、スーダン、スワジランド、セーシェル、赤道ギニア、セネガル、リビア、タンザニア、チャド、中央アフリカ、チュニジア、トーゴ、ニジェール、ブルンジ、ボツワナ、マダガスカル、マラウイ、マリ、南アフリカ、モーリシャス、モーリタニア、モロッコ、ルワンダ、レソト

日本はこのうちコンゴ民主共和国には国連軍、ナイジェリアには政府の反乱鎮圧に対する協力要請を受け入れた支援部隊、ソマリア

には多国籍軍として軍を派遣。これには名目こそ国際協力という意味合いがあったが、実際には軍事援助との引き換えによる地下資源に関する権益の確保や兵器を輸出するための市場開拓、そして戦後に開発された新兵器の実戦投入による欠点の洗い出しといった側面もあった。

第四十話 資源獲得競争（後書き）

富士「重ね重ねになるが……共産主義勢力が壊滅したおかげで、随分と内戦や紛争が減るのだな」

作者「ええ。朝鮮戦争やキューバ危機も、中国が隣国との間に起こした紛争も全て無くなるでしょうね。そう考えると、共産主義勢力の殲滅は、予想以上に成果があったと言えます」

大隅「そう考えれば、仮想戦記としてのネタ不足はある意味必然ですね」

敷島「それに八カ国協約がある限り、列強同士の紛争だって起こすに起こせないよ。手を出したら、そっちが袋叩きに遭うんだから」

三笠「八カ国協約は、ある意味究極の相互確証破壊といえますね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回は、史実の出来事を基にした一発ネタです。次回『幻の島』ご期待下さい」

第四十一話 幻の島

一九五二年九月十七日午前、伊豆諸島青ヶ島の南南東にあるベヨネーズ列岩（一八四六年にフランスの軍艦バイヨネーズが発見したことに因んで命名）の東方約十キロメートルの海底で火山が爆発。突如として海面上に島が形成され、その様子は沿岸警備隊の測量船「藤前」によって観測された。

「す、すごい……もし巻き込まれていたら、一卷の終わりだったわね」

高さ二、三百メートルはあるであろう峻険な山が、そのまま海の上に浮かんだような様相を呈する明神礁を前に、測量船「藤前」の船魂である藤前は戦慄する。もし自分の真下であの爆発が起こっていたら今頃自分の船体は木端微塵だっただろうと思うと、彼女は途端に血の気が引いた。

史実においてこの海底火山の爆発は焼津港の漁船「第十一明神丸」によって発見されたため、火山は「明神礁」と名付けられたが、予め沿岸警備隊の測量船が周囲を交代で警戒した結果、第一発見船も変わって「藤前礁」と命名されることになった。

実はこの海域で海底火山が活動したのはこれが初めてではなく、一九〇六年に噴煙が観測されたのを皮切りとして幾度かの火山活動が観測されていたのだ。そして一九四六年の二月から十二月までは複数の島が形成されたため、予てより沿岸警備隊はこの海域を重点的に調査していた。無論、勇と共に過去へと渡った資料に頼るところも大きかったが。

そして勇の後知恵が存在していたために、沿岸警備隊はこの後暫くの間主として航空機による様子見の観測を続行。これは史実の九月二十三日に島が水面下へと没した夜、観測中だった海上保安庁の測量船「第五海洋丸」が火山の爆発に巻き込まれて船体を粉碎され、乗組員と観測員の合計三十一名が全員行方不明となったことに鑑み、火山活動が収まってから改めて本格的に船艇による観測を行うためであった。

九月二十二日にも猛烈な海底火山の噴火があり、運命の九月二十四日、ベヨネーズ列岸沖の「藤前」。彼女はあれ以来航空機と共同で観測の結果を逐一横須賀の沿岸警備隊第一管区本部へと報告していたが、その全てが史実で残されていた記録と一致していた。最早史実のいきさつを知る者にとって、この夜の爆発は疑いようもなかった。

二十四日午前零時すぎ、測量船「藤前」露天艦橋。ここでは藤前が眠た眼をこすりながら、海底火山の噴火を今や遅しと待っていた。

「もうすぐ、有馬大将という人がいた歴史で『第五海洋丸』の連絡が絶えて二時間……そろそろね」

その刹那海面が盛り上がったかと思うと、海面から魚雷が命中した際のそれを何十倍にも大きくしたような水柱がそり立つ。そして周辺には軽石が銃弾のような勢いで飛散し、数キロメートル離れた距離で観測を行っていた「藤前」にさえ無数に降り注いだ。

「痛たたっ……何よこれ、まるで軽石の雨が降っているみたい……くうっ！」

空から降り注いだ軽石は「藤前」の船体へと次々に当たり、一部

は外板にめり込んだり貫通したりしている。そしてその度に船魂である藤前の体にも痣や刺し傷のようなものができ、一頻り軽石が降り注いだ後の彼女は船体ともども傷だらけであった。

「はあ、はあ……今の水柱、一体何メートルあったのよ……っ」

そう呟くと、痛みと眠気に耐えかねた藤前はそのまま眠りに就く。幸い水面下や機関室に大した損傷は無かったものの、彼女の船体はまるで戦闘機数十機がかりの機銃掃射を受けたかのような惨状を呈していた。軽石によって商船構造の船体は酷く痛めつけられ、一刻も早い修理が必要であった。

満身創痍の「藤前」を横須賀に引き揚げさせた後も、沿岸警備隊は明神礁の観測を継続。十月十一日に島が形成され、日本はひとまず新島の第一発見国として「藤前島」の領有宣言を行ったが、翌年三月十一日に大爆発を起こして消滅。その後四月五日に三たび島が形成されたものの、九月三日にはやはり海没し、その後現在に至るまで島は形成されていない。

第四十一話 幻の島（後書き）

作者「南無三。時系列がこんがらがった」

富士「ん？ 特に違和感はないが、どうした？」

作者「本来、この時既に勇は六十五歳になって、予備役に編入されているはずなのです。ですから、本来はその話を先に投稿する予定だったのですが……執筆中小説を貯め込み過ぎて、順番がちぐはぐになってしまいました」

敷島「六十五歳といっても、体のほうは……」

富士「敷島、言っておくがヘル談には持ち込むなよ？」

敷島「さて、何のことやら」

朝日「そこでしらを切るのは……最早、清々しくさえ思えますな」

三笠「敷島姉さんがこれ以上暴走しないうちに、次回予告をお願いします」

作者「今回は先述のとおり、勇が退役する話です。次回『それぞれの正義』ご期待下さい」

第四十二話 それぞれの正義

一九五二年五月二十六日夜、横須賀海軍記念館の「三笠」予備士官室。ここでは勇が、寂しそうな表情で窓の外をじっと見つめていた。

この日、彼は軍人としては予備役へと編入されたのである。海軍大将の定年は六十五才であり、便宜上過去に転移した明治三十八年五月二十六日に十八歳になったことにされていた勇は、とうとうその定年を迎えてしまったのだ。

しかし予備役に編入されれば、以降軍機に関わることが非常に困難なものとなり、後知恵を生かせなくなってしまう。そこで海軍省事務嘱託という形で海軍内部に残留し、実質的にはこれまでと変わらない職務に当たれるようにされたのだ。

「もう、この時代に来てかれこれ五十年近くか……長かったようで、案外あっという間だったな」

「ええ。それにしても、ここ数年で随分と風景が変わりましたね」

三笠の言葉どおり、横須賀港から見える市街地には、それまで無かった高層建築物などがいくつも建っていた。対米戦終結以来、削減された軍事費の多くがニューディール政策ながらに公共事業へと充てられた結果、日本は戦後不況を最小限に止めることができたのである。この海軍博物館建設も、そのような性格が無いわけではなかった。

「これで……本当に良かったのか？」

勇が自問自答するように呟いた一言を、三笠はしっかりと聞き取っていた。

「どうしたんです？ 一体」

「歴史への介入によって、確かに軍事衝突による犠牲者は大幅に減った……特に、史実で大きな被害を受けた日本やドイツ、それとロシアはね。しかし、史実で命を落とさずに済んでいたにも拘らず、歴史が変わった所為で死んだ人間も多い。それはアメリカだけではなく、我が国にもいるはずだ」

勇の言葉が真実であるだけに、それまで日本の発展を喜んでいた三笠も表情を曇らせる。

「だから、日本という『国家』や日本海軍という『組織』にとっては、この歴史の変化は願ったり叶ったりだっただろう。それでもアメリカという『国家』だけではなく、もしかしたら数億人といった単位の『個人』には、この歴史改変が悪夢のように映るかもしれないということだ」

勇の言葉が一面の真実であるということは、三笠もわかっていた。しかし一方で、これまで半世紀近くに亘って歴史を変えておきながら、今さらそのようなことを口にするのかという怒りのような感情が芽生えつつあったことも事実であった。

「では、有馬さんは自分が歴史に手を出したことが間違っていたと言うのですか？」

怒気を孕んだ三笠の口調に、勇は驚いて思わずたじろいでしまう。

「そんなつもりは無い。ただ日本にとってこの歴史改変が正義であ

ったとしても、それが万人にとっての正義にはなり得ないということと言いたかったただだよ。アメリカにとっては史実のほうが『正義』の実現に近かっただろうし、その歴史があったからこそ、この『歴史改変』も存在するわけだから」

教訓というものは、本来何らかの出来事があって初めて生かされる。しかし勇が歴史改変で用いた教訓のもとになった出来事は勇の時空転移という珍事の結果、自らが生み出した教訓によってその存在を歴史上から抹消されてしまったのだ。

「つまり、結果が原因を消滅させた……ということですか？」

「ああ。普通は、原因が無くなれば結果も無くなってしまふ。しかしこの場合、史実の歴史と時空転移が起こるとすれば、何回やつてもこのような結果になるはずだ」

「辻褄を合わせる方法は……有馬さんが過去に來たことを『無かったこと』にするしかありませんね」

「勿論、そんなことを今さらやるのは不可能に近い。だからおかしなことではあるけれど、歴史がこのまま続いていく公算が大きいよ」

二人とも、心の中では未だに腑に落ちないものがあつた。とはいえ自分の力でそのわだかまりをどうこうできる状況ではなく、為す術が無かつたのである。

しかし、二人が知らなかったことがある。それは、恐れていた別れがさほど遠くない未来に迫っているという事実であつた。

第四十二話 それぞれの正義（後書き）

敷島 「あーあ、最後の一行でフラグが立ってるよ」

富士 「とはいえ、ここからさらに何十年も過去にいては、いったい何歳まで生きるのかといらぬ疑いをかけられかねないからな。遅かれ早かれ、戻さねばなるまい」

三笠 「半世紀待ち……ですか。いくらなんでも長すぎます」

大隅 「今生の別れではないだけ、まだましかもしれませんけれどね」

三笠 「むう……次回予告をお願いします」

作者 「次回からは、洞爺丸台風と青函連絡船の苦闘を描きます。次回『商売敵と天災』ご期待下さい」

第四十三話 商売敵と天災

日本海軍が空母「雛鳳」を初めとする武装コンテナを主武装とする艦艇を計画し始めたころ、民間でも共通の寸法を有するコンテナを使用して貨物の輸送を迅速に行えるようにする動きが活発化。貨物室に軍用と同じ寸法のコンテナを搭載できるよう改造された指定船が相次いで登場し、またトラックもこれらのコンテナを搭載できる大型のものが広まりつつあった。

こうしてコンテナと自動車による輸送が一般化すると、やがて鉄道も台車にコンテナを搭載して貨物を運搬するようになり、それまでの貨車は急速に廃れていった。そして陸路と海路の引き継ぎもコンテナを移し替えるだけで済むようになり、荷役作業にかかる時間は大幅に短縮されるようになった。

一方で、それまで貨車を台車ごと搭載していた各地の鉄道連絡船は、関門トンネルや本州四国連絡橋の完成によって乗客数が減少。青函連絡船だけは商売敵の出現を免れていたものの、関門連絡船と宇高連絡船（岡山の宇野と高松を結ぶ）は厳しい経営を強いられるようになった。

関門トンネルは史実より早い一九四〇年三月一日に開通し、本州四国連絡橋は尾道から向島、因島、生口島、大三島、伯方島、大島、武志島、中渡島、馬島を通過して今治に入るという史実の現代における西瀬戸自動車道に近い道筋を辿っていた。この針路であれば最長でも長さ一キロメートル程度の橋が架けられればいいので、時間さえかければ戦前の技術でも不可能ではなかったのだ。

このようにして連絡船が衰退への道を辿りつつあった最中の一九

五四年九月二十六日、台風十五号が日本に上陸。午前十二時頃佐渡島へと到達し、時速百キロメートルという異常な速度で日本海を北上したのち、午後五時ごろ青函連絡船が活動する津軽海峡に接近すると予想された。

青函連絡船を運航していた国鉄はこれを受け、すぐさま全青函連絡船を函館港若しくは青森港へと避退させた。同時に付近を航行している民間船にも同様の指示が出され、普段は多くの船が行きかう津軽海峡は数時間と経たずに閑散とした。

なおこの国鉄の迅速な判断は、勇が残した資料によって史実の洞爺丸事故を知った日本政府の指示があればこそであった。そして洞爺丸事故の教訓から船尾に防水扉を装備された十二隻の青函連絡船は、午後三時までに港へと帰着したのである。十二隻の要目と鮮明は以下のとおり。

船体寸法 四〇〇〇トン級指定船に準ずる

積載能力

甲型コンテナを搭載可能な貨車を四十八台及び乗用車やトラック数台
貨物千トン（車両甲板後部の船底）

（なお、同規模のコンテナ船が輸送できる甲型コンテナは百個前後）
客室

上部構造物に八十室、最大四百八十名

車両甲板前部の船底に三十二室、最大百八十六名

合計百十二室、最大六百六十六名

船首と船尾に、史実の二等輸送艦と同形式の防水扉（幅は船体一杯）
を装備

立岩丸、汐首丸、恵山丸、日浦丸、白神丸、矢越丸（函館待機組）
尻屋丸、龍飛丸、高野丸、小泊丸、夏泊丸、大戸瀬丸（青森待機組）

（津軽海峡周辺の岬から命名。現在は二年ごとに建造されており、最古参の立待丸は一九三二年就役）

午後五時頃、函館周辺の天候は好転。これを見た青函連絡船の船長たちと、その要請を受けた国鉄は政府に運航再開を認めるよう求めたが、史実の洞爺丸事故の二の舞を何としてでも防ぎたい日本政府は頑としてこれを受け付けなかった。

同時刻、函館港に停泊する青函連絡船「白神丸」艦橋の最上部。

「せっかく晴れたのに、何で出たら駄目なのよ……私たちは、これが仕事だっていうのに」

青函連絡船「白神丸」の船魂が、普段なら気持ちいいはずの太陽を忌々しげに見つめる。史実において「洞爺丸」たちが辿った悲惨な末路を知らない彼女にとって、天候が好転しているにも拘らず出航できないという現状は歯痒いことこの上なかった。

「白神。まだ台風が去ったわけではないから、油断はしないほうがいいわよ？」

「立岩姉さん……でもここが台風の目だとしたら、もう半ばまでは過ぎたっていうことじゃないの？　なら、もう半分も耐えられそうに思えるけれど」

後ろから話しかけてきた姉の忠告にも、白神丸は半信半疑といったところであった。これまでも津軽海峡に台風が接近したことはあったが、少なくともこれほどまでに早く運航中止の指示が出されたのは初めてであったからだ。

「私も、正直に言うとは運航中止が早すぎると思う。でも、無理に

出港してお客さんを危険に晒すよりは、まだ運航中止になって待ちぼうけになった方が気が楽よ」

「それは、そうだけど……台風、早く通り過ぎてくれないかなあ」

白神丸が痺れを切らしそうにしていると、そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、だんだんと雲行きが再び怪しくなってくる。その様子を見届けた二人は、急いで自分の線内へと戻っていった。

午後七時頃、函館港周辺では最大で秒速五十メートルを超える南西からの風が吹き荒れる。そして歴史上まれにみる強烈な台風による暴風と高波は、容赦なく青函連絡船たちの船体に襲い掛かったのだった。

第四十三話 商売敵と天災（後書き）

作者「コンテナの話が出てきたので、戦後の艦艇の要目を追加致しました」

富士「確かに、こいつはべらぼうに汎用性が高いな……建造できれば、の話だが」

作者「この艦艇が生まれた背景には、とある読者の方との間でなされた数十回の意見交換があるのです。その方のご協力なくして、コンテナ式軍艦は生まれなかったでしょう」

作者「ですから、この場でその方へのお礼を申し上げたいと思います。誠に有り難う御座いました」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「果たして、青函連絡船たちはこの台風を凌ぎきれるのでしょうか？ 次回『制御不能』ご期待下さい」

第四十四話 制御不能

最大で風速六十メートルを超える突風（神威岬で最大瞬間風速六三・三メートルの南南西の風が観測された）が吹きつけ、小型船の甲板に匹敵するような高さを持った波が青函連絡船の船体に叩きつけられる。なんと台風十五号は日本海を北上している間にもさらにその勢いを増し、気圧は九五六ミリバール（ヘクトパスカルと同値）にまで低下していた。

「これは……停泊しておいて正解だったわね……くっ！」

波が「白神丸」の船体へと当たる度に、白神丸の体を鈍い痛みが襲う。船体を破壊されたわけではないので出血こそ無かったが、いつ終わるとも分からない断続的に襲いかかってくる痛み、彼女は気が滅入りそうになっていた。

その時、白神丸はふと自分の足が滑ったような感触に襲われる。彼女は咄嗟に自分の船体を何か良からぬ事態が襲ったのだと感づいたが、これほどの災害を経験したことのない彼女には原因となる事態というものが一体何なのか皆目見当もつかないのだ。

間もなく、彼女の船体はそれまでも増して揺れ始め、やがて波に流されていく。この時初めて、白神丸は自分の身に起きた事態を悟ることができた。と同時に、その事態の危険性を知っている彼女の顔は見る見るうちに蒼くなっていく。

「まさかこれって、走錨して……まずい、このまま流されたら立石姉さんたちと衝突する！」

走錨とは、海底に下ろされていた錨が外部からの衝撃などに耐え切れず、船体を繋ぎ止めていられなくなることである。すると錨は錨鎖もろとも船に引き摺られるような状態になり、錨を揚錨機で引き揚げることも非常な困難になるのだ。

「早く、港の外に脱出しないと……っ！」

白神丸の焦りとは裏腹に、「白神丸」は波に揉まれて右へ左へと流される。幸い車両甲板後部搬入口への防水扉の設置と、防水性に優れた丸窓の装備、さらには車両甲板と機関室の間にある開口部を全廃するといった万全の対策が施されていたために浸水は無かったが、状況は極めて悪いと言えるものであった。

同じ頃、「立石丸」も荒れ狂う波にその船体を曝していた。既に就役から二十年以上が経過した彼女の船体は、連日連夜の酷使によって各所が傷んでおり、波浪によって軋み始めた船体の継ぎ目から浸水が始まるほどであった。また青函連絡船は貨車を船内に多数搭載することから、船体内に通常の貨物船にもまして大きな空洞を作らねばならず、耐久性の上で弱点となっていた。

「くうっ……二十年物の体には、結構堪えるね……みんなは、大丈夫だと良いけれど……っ！」

予備乗組員室と名付けられた、船橋にある船魂用の居室で嵐が過ぎるのを待っていた彼女の体にはいくつも小さな切り傷や痣ができており、血が滴っている傷も一ヶ所や二か所ではなかった。そしてそれは、彼女の船体にも無視し得ない損傷と浸水が発生していることをはっきりと物語っていた。

「あそこにいるのは、白神……って、こっちに来る！」

船橋の窓越しに立石丸の目へ飛び込んできたのは、走錨が続いたまままっすぐ「立石丸」の方向へ流されてくる「白神丸」の姿だった。艦橋からは「錨を揚げろ！」という船長の声が聞こえていたが、最早手遅れであることは誰の目にも明らかであった。

またここで運良く錨を揚げられたところで、今度は「立石丸」自身がどの方向に流されるか分からない。そうなれば、「白神丸」と「立石丸」の衝突が避けられたとしても、新たな衝突を生む恐れが無きにしも非ずなのである。

「そんな、そんなことって……あんまりよ……っ！」

涙目になりながら首を左右に振る立石丸であったが、「白神丸」は動きを止めてくれない。そして「白神丸」が立石丸の視界を殆ど完全に塞いだ数秒後、辺りに大きな金属音が響き渡った。

第四十四話 制御不能（後書き）

富士「これは……厳しいな」

敷島「船内に乗客がいた状態で台風に遭った史実よりは、まだましだけどね」

大隅「これも後知恵のなせる業、ですね。関東大震災の時もそうでしたが、後知恵が生かせる場はいくらでもあります」

作者「ただ後付けの設定上、今回の震災には当てはめられなくなっただんだよなあ……勇が過去に転移した時期を、とある都合で日本海海戦から百年後の二〇〇五年って限定したからね」

三笠「とある都合というのが気になりますが、次回予告をお願いします」

作者「果たして、衝突した二隻の運命は如何に？ 次回『今生の別れ』ご期待下さい」

第四十五話 今生の別れ

漂流した「白神丸」の船首が、「立石丸」の右舷前部へと突き刺さる。老朽船である「立石丸」はこの衝撃に耐えられるはずもなく、彼女の船体には喫水線の下まで達する大きな亀裂が生じた。

「くっ……ううっ……っ」

衝突の際の振動で床に倒れた立石丸は、出血した右脇を抑えてそのまま苦悶する。そして彼女の血は床へと滴り、血溜りは少しずつ、しかし確実に大きくなっていった。

そんな彼女を、さらなる悲劇が襲う。というのも「立石丸」との衝突を避けようとかけられた「白神丸」の後進一杯がここにきてようやく効き始め、二隻の船体が離れ始めたからだ。するとそれまで栓代わりに突き刺さった「白神丸」の船体が引き抜かれたことで衝突による破孔が露になり、「立石丸」の船体には今まで以上の勢いで海水が流れ込んだ。

これは史実の一九八六年三月三十一日にノヴォロシースクの沖で発生した客船「アドミラル・ナヒモフ」（旧名ベルリン、一七〇五三トン）と鉱石運搬船「ピョートル・ワゼフ」の衝突事故と全く同じ状況であり、この結果衝突された「アドミラル・ナヒモフ」は約十五分で横転、沈没している。ましてや「アドミラル・ナヒモフ」より艦齢は新しいが遥かに小型な「立石丸」にとっては、十分致命傷と言える傷であった。

そしてそれに応じるかのように、船魂である立石丸の出血も勢いを増す。その様子は、まるで傷口に刺さっている刃物を引き抜かれ

たようにも見える。

「はあ、はあ……ううっ」

「姉さん！ 立石姉さん！」

「白神……なんで、ここに？」

立石丸は痛みのでいで顔を上げることも難しく、床にうずくまっていた返事をする。しかしこの時に限って言えば、彼女はうずくまっていた妹の顔を見なかった方がましであった。

というのも、深手を負った姉に駆け寄る白神丸もまた、右肩から夥しい量の出血をしていたからだ。姉を心配させまいとどうにか声を張り上げた白神丸だったが、その大声は結果として二人の傷に障り、彼女は直後にたまらず呻き声を漏らすのだった。

「姉さん、ごめんなさい！ 私のせいで……私のせいで……っ！」

「大丈夫……早く、自分の船に戻りなさい」

「無理よ。こんな姉さんを置いていけるわけないでしょう！」

「早く……早く行きなさい！」

傷が疼くのも構わず、立石丸は大声を張り上げて妹を追い出そうとする。そして根負けした白神丸が「白神丸」へと戻るのを見届けると、息も絶え絶えになった声で小さく呟いた。

「ごめん、白神……でも、こんな姿は見られたくないのよ……それに、そろそろ私も限界みたいだしね」

彼女の呟きが合図となったのか、「立石丸」の傾斜が一段と激しくなっていく。浸水によって一部が水面下となった一千平方メートルを越す車両甲板は、何も水を遮るものが無いために凄まじい勢い

で水を呑みこみ始め、衝突から十分後には早くも船首右舷の最上甲板が高波に洗われ始めた。

せめてもの救いとなったのは、機関室と車両甲板が分断されていたために、暫くの間は機関への浸水を免れたことである。しかし傾斜によって衝突の五分後には機関の始動が不可能になっており、また車両甲板の下にある貨物室や客室への浸水が発生したため、焼け石に水であった。

その頃「白神丸」は、幸いにして自ら錨鎖を切断することに成功。だが喫水線の下にまで傷を負っているのは「白神丸」も同じであり、その上船首に大穴が開いた彼女は前進すると浸水の勢いが増してしまいうため、動くに動けなくなっていた。

「一か八かだ、海岸に座礁させろ！」

「ですが最悪の場合、海岸への到達前に本船は横転します！」

「このまま黙って沈むぐらいなら、やれるだけのことをやるまでだ！ 前進一杯！」

船長の命令一下、一縷の望みを賭けて「白神丸」が函館港近くの七里浜へと突入を図る。そして午後七時頃、船首が大きく沈み込みながらも「白神丸」はどうか浅瀬に乗り上げることができた。

しかし「白神丸」の真の受難は、ここから始まったのである。

第四十五話 今生の別れ（後書き）

敷島「一隻大破に一隻座礁……か。まあ、史実よりはましだけど」

富士「体に突き刺さったものを迂闊に抜いたら逆効果というのは、人間も船の喫水線下も同じということか」

大隅「まして本船の場合、喫水線のすぐ上にある車両甲板へと海水が流入することもあります。そうなれば、浸水の早さは尋常ではありません」

三笠「それでは。次回予告をお願いします」

作者「今回は、青函連絡船のその後についても言及します。次回『数を減らして細々と』ご期待下さい」

第四十六話 数を減らして細々と

どうにか海岸に乗り上げた「白神丸」ではあるものの、座礁の衝撃で車両甲板に溜まっていた千トン以上の海水が船体後部へと移動。それによって今度は船尾が沈下し、「白神丸」は完全に着底した。

「ううっ……助かった……の？」

座礁の衝撃によって倒れこんだ白神丸は血まみれになった右脇腹を庇いつつ、立ち上がってゆっくりと窓から周囲を見渡す。座礁と船体に相変わらず打ち付けられる波浪の衝撃によって意識は朦朧としていたが、函館港で四隻の僚船がのた打ち回っているのが見えた。

「良かった、みんな無事……っ！」

四隻までの連絡船が健在でいるのを確認して安心した白神丸の顔が、急に青白くなる。それもそのはず、彼女の目に飛び込んできたのは完全に横倒しとなって今まさに沈没しようとしている「立石丸」の姿だったからだ。

「姉さん……立石姉さん！ そんな、まだあれから二十分も経っていないのに……っ！」

泣き叫ぶ白神丸の目前で「立石丸」の船体は船首から滑るように波間に没していき、やがて完全に沈没。就役以来十年以上共に津軽海峡を行き来してきた姉の、あまりにも突然な最期に白神丸は悲嘆に暮れるが、脇腹の痛みによって否が応にも自分のことも心配せざるを得なかった。

「私は……大丈夫よね？」

この時白神丸自身は気付いていなかったが、衝突による破孔からの浸水を避けるべく右舷船首部分から座礁した彼女の船体は、間断無く打ち寄せる高波に押されてじわじわと傾斜していた。また座礁した部分が砂浜だったために安定しておらず、数千トンの金属塊を支えるには無理が生じていたのだ。

そして「白神丸」座礁からおよそ二十分後、既に右舷側の湾曲部竜骨（即ちビルジキール）でのみ支えられていた船体が急激に傾斜。砂浜の上で横倒しとなり、船体右舷側四分の一程が水に浸かった状態で完全に停止した。また白神丸は横転時に右舷側の壁へと叩きつけられて気を失い、そのまま二度と目を覚ますことはなかったのだ。

この様子は史実において同じように七重浜で「洞爺丸」が遭難した際のそれと酷似していたが、浸水による喫水の深化が小さかったためにより浅い部分で座礁できたこと、貨車を積んでおらず重心が低かったことなどの理由で転覆だけは免れることができた。さらには船体も過半が水面から露出していたことで乗組員の脱出も容易になり、犠牲者は七十二名いた乗組員のうち衝突時や横転時の衝撃で命を落とした二十名に止まった。

最終的にこの「立石丸事故」による犠牲者は「立石丸」の乗員六十三名と「白神丸」の乗員二十名の合計八十三名となり、五隻の青函連絡船が転覆又は沈没したことで一四三〇名（うち洞爺丸は一五五名）の犠牲者を出した史実の「洞爺丸事故」と比べて被害は大幅に抑えられた。

とはいえ船体が完全に水没した「立石丸」は言うに及ばず、座礁後に横転した「白神丸」も復旧は不可能と判断されて解体が決定。

台風が去った後の十月一日から始まった解体工事は一月程度で終了し、二隻の青函連絡船が完全に失われるという無視できない損害を国鉄にもたらした。

この事故の後、民間の航空輸送や通常の商船による輸送が発達したことで青函連絡船の乗客数は減少を開始。一九六〇年からは就役時からコンテナの露天搭載（丙型コンテナで六十個）を考慮した新型船を投入するが、西暦二〇一〇年時点の現有勢力は以下のようなものとどまっている。

・同型船

二越丸、黒鷲丸、長磯丸、銚子丸、福浦丸、高磯丸

船体寸法は四〇〇〇トン級指定船に準ずるが、船体中央部に日本海軍の武装コンテナシステムと同様のコンテナ搭載甲板（長さ九メートル、幅一〇・五メートル、深さ三・五メートル）を有する。

このコンテナ甲板には線路を装着して、甲型コンテナを積んだ貨車なら四十八両を搭載できる。また線路の一部若しくは全部を取り外してコンテナを積んだトラックを搭載することも可能であり、この場合にも合計搭載数は変わらない。なお客室の配置は「立石丸」以下と同様である。

第四十六話 数を減らして細々と（後書き）

富士「青函トンネルができれば、十中八九こいつらは御役御免だと思うが」

作者「この辺は、最早現実味よりも趣味を優先した節があります。採算がとれないのであれば、国がいくらか補助してやればいいだけのことですから」

大隅「作者さん御自身は、青函連絡船にお乗りになったことは無いはずですが……なぜ、そこまで青函連絡船の存続に執着なさるのですか？」

作者「青函連絡船に対してというより、船全体に対する愛着からこうしたというのが大きいよ。とはいえ、現在進行形で我が国にとっての脅威となっている船はさすがに例外だけだ」

敷島「某国や某国の軍艦ですね、分かります」

三笠「敷島姉さんが本当に分かっているのかはさておき、次回予告をお願いします」

作者「勇と三笠が恐れていた時が、遂に訪れてしまいます。次回『黒雲再び』ご期待下さい」

第四十七話 黒雲再び

一九五五年五月二十六日、横須賀海軍記念館の「三笠」には、勇が過去から来てちょうど五十年ということで多くの艦魂が集まっていた。

因みに、場所は最上甲板から三層下の後部主砲塔の艦尾側にある会議室である。ここなら整備が行われている機関室からも、展示品の整理がされている上甲板や中甲板からも遠いため、部外者が近付いてくる恐れは極めて小さいのだ。

「もう、あれから五十年にもなるんですね」

「ああ。長かったようではあるけれど……少なくとも対米戦が終わるまでは、あれよあれよと言う間に年月が過ぎていったというのが正直な感想だよ」

本来、この時期の横須賀海軍記念館は日本海海戦の記念日に近いということもあり、特にこの「三笠」は見学者でごった返す。しかし今年は日本海海戦五十周年ということで、特に大規模な式典の開催が予定されており、前日であるこの日までは準備期間として臨時休館になっていた。

「しかし、静かだな……去年の今頃は、私たちの船体は黒山の人だかりだったはずだが」

「そのぶん、明日はものすごいことになるはずだよ」

二十七日には、展示されている艦艇のうち戦艦「三笠」を初めとした日本海海戦の参加艦艇が、見学者を乗せて航海するという予定になっている。三笠たちにとっては実に十年ぶりの航海であり、こ

うしている今も機関の最終点検が行われていた。

「おっと……もうこんな時間か。あまり遅くまでいると、出ていくときに見つかったら怪しまれかねないから、今日はもう鎮守府に戻るよ」

「あの、後で私たちも行っているのですか？」

「勿論。いっそのまま全員で鎮守府まで移動できれば楽だけれど、歩いて『三笠』に入ったところを誰かに見られているだろうから、瞬間移動するとうやうや鎮守府に戻ったのか勘繰りされかねないからね」

勇は、予備役に編入されても慎重であり続けた。今の「三笠」艦内では、間もなく日没だというのに上を下への大騒ぎが続いており、普通に考えれば一人の出入りまで全て覚えている人間はいない。陸上の出入り口には当然部外者の侵入を防ぐための守衛が配置されているが、誰かが入るときに身分証を確認するだけであり、敷地内に入った人間が全員出て行ったかなどと確認している余裕は存在しないのだ。

つまり、勇がこのまま三笠たちと一緒に瞬間移動で鎮守府に向かったとしても、まず異変に気付く人間はいない。さらに今の彼の肩書は飽くまで海軍事務嘱託に過ぎず、目立たない肩書である以上、きちんと艦内から出て行ったかなどと確認される恐れはさらに低いと言える。

それでもなお、勇は歩いて「三笠」を後にしようとする。しかし勇が「三笠」の最上甲板に上がると、上空にはどす黒い雲が一塊だけ不気味に浮かんでいた。周囲は白雲がところどころに浮かんでいるだけであり、その雲は明らかに異質であった。

「なんだ、あの雲は？」

見送りに行くと言って聞かない三笠を連れて最上甲板に上がった勇が、いち早く黒雲の存在に気付く。それにつられて上空を見上げた三笠は、雲を見た直後に激しい胸騒ぎを覚えた。

「あの雲……あの時と同じです！ 有馬さん、すぐ艦内に戻ってください！」

胸騒ぎの正体に気付いた三笠が、悲痛な叫び声を上げる。それもそのはず、今「三笠」の上空に浮かんでいる黒雲は、日本海海戦前日の一九〇五年五月二十六日に勇が降ってくる前に浮かんでいた雲と瓜二つだったからだ。

「三笠、どういうこと？」

「あれは、有馬さんが過去に飛ばされる前に私の上空に浮かんでいた雲と同じです！ それに、周りは荒れているのに一塊だけ……早く艦内に戻ってください！ 何が起こるかわかりませんが、早く！」

三笠が言い終わるが早いか、彼女の言葉を理解した勇は「三笠」艦内へと続く階段に向け走り始める。しかし階段までほんの二、三メートルというところで、彼の視界は半世紀前と同じく閃光に包まれた。

第四十七話 黒雲再び（後書き）

富士「予想はしていたが、またこのやり口か」

作者「この方法なら、勇が屋外にさえいればどこでも、いつでも使えるのです。それに現実のある建造物を通路にすると、過去にその建造物が存在していた場所にしか移動できないことが多く、『三笠』艦上への転移が困難になりますから」

大隅「それにそうしますと、有馬大將が自ら現代への移動を望まなければ、いつまでもこちらの時代にいるということになってしまいますからね」

三笠「ひっぐ……次回予告をお願いします」

作者「今回は、勇がいなくなったことに対する艦魂たちの反応が描かれます。次回『予期できる再会と雖も』」ご期待下さい

第四十八話 予期できる再会と雖も

「ひゃあっ！ ……有馬、さん？」

三笠は目の前に雷が落ちたこと思わず目を瞑ったが、やがてゆっくりと目を開ける。しかしそこには、先程までいたはずの勇の姿は見当たらなかった。

「有馬さん……まさか……そんな！」

想定していた最悪の事態が現実となったことで、三笠は気がおかしくなってしまうようなのを必死に抑えながら辺りを見回す。だが勇の姿は、普通の人間より遥かに視力のいい彼女の眼を以てしてもどこにも見つけることができず、勇の身に何が起きたのかを悟った彼女はへなへなと甲板にへたり込んだ。

「三笠、どうかしたのか……ん？」

三笠がなかなか戻ってこないのを心配した富士が、最上甲板へと上がってくる。そこで座り込んでいる三笠を見つけた富士は、事態の只ならぬことを悟った。

「三笠、どうした？ あいつに会うのなら、また後で鎮守府に行けばいいじゃないか」

「富士さん……それはもう、無理かもしれません……っ！」

それまで呆然としていた三笠は、覚束ない足取りながらもやつの思いで立ち上がると、突然富士の胸に縋りついてぼろぼろと涙を流す。そして三笠から嗚咽の入り混じった声で事の次第を聞いた富

士は、そつと三笠を抱き寄せた。

「ふ、富士さん？」

「そうか、とうとうこの日が来てしまったか……傷口に塩を塗るようなことを聞いて、済まない」

富士の想いも寄らない行動に驚いた三笠が顔を上げると、富士は泣いてこそいないものの寂しそうな表情をしていた。そして、先程まで黒雲が浮かんでいた辺りを見上げると、勇に聞こえないことは分かっていっつも呟いた。

「有馬……礼を言うぞ。貴様のお陰で、日本は廃墟にならずに済んだのだ。私ももう生まれて五十年以上になるが、未だにこうして日本の役に立てている……だから早く、戻ってこい」

富士は、気が動転するあまりともに立てない三笠の体を抱きかかえるようにして、彼女を会議室へと連れ戻す。いくら三笠が比較的小柄とはいえ、体を支えながら「三笠」艦内の急な階段を下りるのは富士を以ってしても容易ではなかったが、どうにか辿りついた。

「富士さん……有り難う御座います。もう、自分で立てます」

「そうか。だが、無理はしなくていいぞ」

そう言うと、富士は会議室の扉を開ける。会議室に残っていた面々は、三笠と様子を見に行った富士がなかなか戻ってこないことで何かあったのだろうとは予測していたものの、泣きじゃくった三笠の目が真っ赤になっているのに気付き、全員が言葉を失った。

「ふ、富士……何があったの？」

「有馬が、三笠の目の前で雷に打たれていなくなったそうだ……お

そらく、あいつがいた時代に戻ったのだろうか」

富士の報告に、会議室にいた面々は一様に驚きを隠せない。だが、いつかはこのようなことが起こるということを覚悟できており、また三笠のように直接目の当たりにしたわけではないためか、錯乱するような者はいなかった。

「とうとう、この日が来てしまったのですね……予想できたこととはいえ、残念です」

「私たちにとって、有馬大将は親のようなものですからね。またお目にかかれるとはいえ、いくらなんでも五十年は長すぎる」

「何の前触れもなく行っちゃまうなんて、ちいと酷すぎやしませんか？」

勇によって船体を設計された大隅、上総、そして岩代の三人が三者三様の反応を見せる。岩代は口でこそ勇に対する愚痴をこぼしていたとはいえ、彼女なりに勇への恩義というものは感じており、それ故に悪態をついていたのだ。

三笠以外の面々が、少なくとも表向きは冷静でいられたのは、勇がいつかは戻ってくるということを期待できていたからである。だがそのことを知っていてもなお、三笠にとっては耐えがたい出来事であり、彼女は未だに涙を流し続けていた。

「みんな、自分の艦に戻れ……今は、三笠を一人にしてやったほうがいい」

「そう……みたいだね。それじゃあ、これでお暇するよ」

自分以外誰もいなくなった会議室を眺め、三笠はこれまでのことを思い返す。そしえ気持ちにようやく一区切りつくと、「有馬さん、

必ず戻ってきてくださいね？」と呟き、重い足取りで自分の部屋へと戻っていった。

第四十八話 予期できる再会と雖も（後書き）

富士「あの階段を、三笠を抱きかかえた状態で降りる……か。確かに難しいな」

敷島「三笠だって、一五四センチあるからねえ。富士と十センチそこそこしか変わらないし、体重……ごほん、何でも無いよ」

大隅「それでも、この作品中で身長が明記された艦魂の平均よりは低いのですから、時代を考えれば概してかなり高い身長設定ですね」

富士「私など、同世代の平均身長と比べれば頭ひとつ飛び出る値だからな……まあ設定上、これぐらいの身長は必要だったのかも知れんが」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「勇がいなくなった後の観艦式で、三笠は何を思うのか。次回『一日千秋』ご期待下さい」

第四十九話 一日千秋

勇が行方不明になったことは、その日のうちに瑞穂から輝久を通じて海軍当局の、さらには日本政府の知るところとなった。そして彼はこの日横須賀の海軍病院で病死したことにされ、予定どおり診断書などの書類が偽造されたのである。

軍の大將が病死したとなれば、本来はそれなりに大きな事柄として扱われる。しかし勇の存在を後世において目立たないものとするべく、勲章の授与や大規模な葬儀は行われることは無かった。これも偏に、後世の件強者によって勇についての研究が為され、未来から来たことを感付かれないようにするための処置である。

翌日朝、横須賀海軍記念館。ここでは「日本海海戦百周年観艦式」と銘打たれた大規模な観艦式が行われており、「三笠」以下四隻の戦艦を初めとする記念艦たちも、およそ十年ぶりの航海に出ていた。甲板は抽選で運良く乗艦券を手に入れた人々で溢れ返っており、軍人たちが群衆の統制に四苦八苦している。

なおこの年より、五月二十七日が海軍記念日として、三月十日が海軍記念日として祝日になっている。これにより、この日に日本各地で行われる軍の行事は、多くの民間人が見学できるようになった。

だがそんな中で艦魂たち、特に一番の主役とも言うべき三笠は、到底この観艦式を楽しむ余裕など存在していない。彼女は昨晚一睡もできないまま過ごし、現在の調子は心身ともに最悪であると言つて差し支えなかった。

「有馬さん……有馬さんに、せめて今の光景だけでも見てから行っ

てもらいたかった」

時折涙を頬から滴らせながら、前部マストにある見張り台の手すりにもたれかかった三笠がうわごとの様に呟く。彼女にとっては、遙か下の方（二十メートル以上）に見える甲板で自分の船体を眺めている大勢の人々も、どこか現実離れした光景のように思えて仕方なかった。

せつかく自分の船体が十年ぶりに波を蹴立てて走っているというのに、三笠はそのことを喜べない自分が憎らしくさえ思えた。そんな三笠の状態にまず気付いたのは、「敷島」を挟む形で「三笠」の後に続いている富士であった。

「三笠、あんなところに……何のつもりだ？」

富士は最初、三笠の元へと移動して声をかけるべきか、とも考えた。しかし迂闊に彼女を刺激すれば血迷ってしまう恐れが無きにしても非ずであろうと考え、「富士」の露天艦橋から見守るだけにしていた。

万が一、自分が訪れたせいで三笠を錯乱させてしまい、マストから飛び降りるような真似をされれば、いくら死にはしないとはいえ当然それ相応の痛みは感じることになる。それだけは、なんとしても避けなければならないのだ。

「三笠……慕っている奴がいなくなって、辛いのは良く分かる。だが、待っていれば必ずまた会える。だから、それまで耐えてくれ……如何せん、待つ時間が長すぎる気はするがな」

三笠の様子を見るに見かねた富士が、思わずそう呟く。その後暫

くすると、いつの間にか甲板を埋め尽くしていた人々は装載艇や速射砲、及び副砲の周りに集まっていた。この観艦式最大に見せ場である、主砲の空砲発射が行われようとしていたのである。

御召艦である「秋津洲」に向け、各艦の主砲が旋回する。そして間もなく一発目の空砲が放たれるというところで、三笠はよろめきながらも立ち上がり、「秋津洲」に向け挙手の礼をした。

これは他の艦魂にも言えることだったが、彼女は自分の感情を一杯殺して、一分おきに合計二十一発の礼砲が放たれるまでの間毅然として立ち続けたのだ。日本海軍の軍艦として、加えて連合艦隊旗艦としての誇りと意地が、彼女の両足を支えていた。

礼砲の発射を見届けると、三笠はほっとした表情でその場に座り込む。だが一度緊張の糸を張りつめさせたことによって、先程までの鬱屈した気分を少しでも払拭できた所為か、先程までのように生氣を失ったような状態には戻らなかった。

「有馬さん……早く、戻ってきてくださいね？ 私は五十年でも百年でも、生きている限りはここで待っていますから」

三笠はそう呟くと、再び立ち上がる。だがその足は確りと彼女の体を支え、一切の弱さを感じさせなかった。

第四十九話 一日千秋（後書き）

富士「私たちの機関を今になって動かすとなると……かかる費用や手間が尋常ではないだろうな」

作者「金は軍の広報活動という名目で国庫から出せばどうとでもなりますし、この頃ならまだ『三笠』たちに乗って訓練を受けた将兵も大勢いるでしょうから、人材面も大丈夫でしょう。ただ心配事を挙げるとすれば、時代と共に彼女たちの運用経験が失われていくことですかね」

大隅「確かに史実の現代で、石炭で駆動するレシプロ機関の運用に携わった経験をお持ちの方がどれほどいらっしゃるかということを考えれば……厳しいと言わざるを得ませんね」

三笠「おまけにこの世界における日本海軍では、石炭を使う機関が史実以上に使われなくなっていますからね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回からは二回ほど、スエズ動乱の解説に費やします。次回『運河の恨みは倍返し』ご期待下さい」

第五十話 運河の恨みは倍返し

一九五二年、エジプトの自由将校団はクーデターでナギーブ將軍を大統領に擁立。翌年には王政から共和制へと移行したが、イギリス軍八万名をスエズ運河周辺から撤退させる協定の締結、アラブ諸国の糾合を提唱したことなどにより、米英との仲は陰悪になりつつあった。

その後、アメリカがナイル川のアスワン・ハイ・ダム建設に対する融資を拒否。一九五四年十一月十四日にエジプト大統領となったガマル・アブドゥル・ナセル（元中佐）は、一九五六年七月に十六日にスエズ運河の国有化を宣言した。

これに対し、それまでスエズ運河を管理していた英仏は侵略戦争との批判を避けるべく、エジプトによるチラン海峡の封鎖に悩んでいたイスラエルと共同でナセル政権の軍事力による打倒を目論む。その筋書きはイスラエルがエジプト領のシナイ半島を占領したところ、英仏軍が介入することでスエズ運河を両国間における緩衝地帯に仕立て上げ、英仏軍が駐留するというものであった。

一九五六年午後五時、シナイ半島のミトラ峠。

「全員、降下始め！」

「降下始め！」

イスラエル国防軍のラファエル・エイタン中佐以下三九五名の落下傘部隊（第二〇二空挺旅団）が降下し、第二次中東戦争の幕が切って落とされる。続いてアリエル・シャロン大佐の落下傘部隊が、補給路構築のため陸路シナイ半島へと雪崩れ込み、英仏から提供さ

れた重装備でエジプト軍を撃破していった。

「この防衛陣地はもう持たん！ 撤退するぞ！」

「ユダヤめ、いつの間にあんな戦車を持ちやがった！」

フランス製のAMX-13軽戦車（二百五十両）や日本から購入した百式中戦車（史実におけるスパーシャーマンの代役となった）を擁するイスラエル軍は、エジプト軍に対する数の劣位を覆して戦局を優位に運んでいた。しかし国境のウムカテフは第四及び第十歩兵旅団と第三十七機械化旅団、及び第七機甲旅団からなる第三十八師団を投入してもなかなか陥落せず、エジプト軍旅団長サムエル・ゴリンダ大佐の戦死までイスラエルの苦戦が続くこととなる。

一方ラファ陣地においては第一ゴラニ旅団、第一歩兵旅団及び第二十七機甲旅団からなる第七十七師団がエジプト軍五個大隊と交戦。地雷原や多数の円陣に苦しめられたものの、フランス軽巡「ジョルジュ・レイグ」やイスラエル空軍の百式重爆撃機（B-17に代えて導入）による支援、そして工兵隊による決死の地雷原開拓の後に機甲旅団が流れ込むことで占領に成功した。

十月三十日、イギリスはイスラエルとエジプトに対し、スエズ運河からさらに十六キロメートル内陸まで撤兵するよう通達。とはいえこの時点でスエズ運河周辺はエジプト軍が占拠しており、事実上エジプト一国への撤兵要求であった。

ナセル大統領は激怒し、スエズ運河に船を自沈させて封鎖。三十一日にはフリゲート「イブラヒム・アル・アウワル」がイスラエル北部のハイファに艦砲射撃を行ったが、フランス海軍駆逐艦「クレセント」とイスラエル海軍駆逐艦「エイラート」に「ヤッフオ」及びイスラエル軍戦闘機二機が攻撃してこれを降伏に追い込み、ハイ

ファへと曳航していった。

またシャロン大佐はモシェ・ダヤン参謀総長の命令を無視し、偵察隊と銘打ったモルデハイ・グル少佐指揮の大部隊を派遣してミトラ峠を襲撃。エジプト軍の待ち伏せによって三十八名が戦死したところと引き換えに、エジプトに二百名以上の戦死者を出させて峠を攻略したものの、以降二人の確執は強まっていた。

イスラエルと英仏連合軍の攻撃はなおも続き、ガザ地区のエジプト軍一万名以上も国連の調停により降伏。十一月五日には英仏軍がシナイ半島への侵攻を命じ、スエズ運河西岸のポートサイドにいるエジプト軍を急襲。

最早、エジプトの全面敗北は時間の問題とされていた。

第五十話 運河の恨みは倍返し（後書き）

作者「ここまでは、史実とほぼ同じです」

富士「しかし、イスラエルにまで兵器を輸出するとは……節操が無いな」

作者「これだけの需要を見過ごす手はありませんし、かといってエジプト側に輸出すれば八カ国協約が崩壊しかねません。深入りしすぎて弱みを握られなければ、こちらとしてはどうでもいいのです」

大隅「それに、スエズ運河の国有化は日本としても望まないところでしょうから、止むを得ないかもしれませんね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「スエズ動乱は、史実と異なる結末を迎えることになります。次回『八方塞』ご期待下さい」

第五十一話 八方塞

史実のスエズ動乱（第二次中東戦争）においては、同時期に勃発していたハンガリー動乱に対するソ連の介入を嫌うアメリカが、ソ連批判の正当性を確保するために英仏のスエズ運河占領にも反対した。諸外国からスエズ占領に侵略的な意図があると見られてしまえば、アメリカが一方ではソ連の介入を批判しておきながらスエズ運河占領を支持することに対し不信感を抱かれかねないからである。

その結果、英仏の拒否権発動によって機能不全に陥っていた国連安全保障理事会に代わり、平和のための結集決議（朝鮮戦争の結果誕生した制度。出席者の三分の二以上が賛成すれば平和と安全のための措置を勧告できる）による国連総会が招集。英仏とイスラエルに即時停戦を求める決議が採択されたことで、エジプトはスエズ運河とシナイ半島を失わずに済んだ。

しかしロシア革命の失敗とソ連の不存在によってハンガリー動乱が勃発しなかったことで、アメリカは遠慮なくスエズ占領を支援できるようになっていた。スエズ運河は特に石油を輸送するタンカーにとって不可欠な運河であり、石油を大量に消費する米英仏などの先進国から見れば、エジプトのスエズ運河封鎖は許すことのできない暴挙なのだ。

こうして英仏、そしてイスラエルは後顧の憂いなくスエズ運河とシナイ半島を制圧。手も足も出ないエジプト軍は十一月十五日に事実上の全面降伏を行い、以下の要求を受け入れるしかなかった。

- ・スエズ運河の英仏による国際管理と、軍の駐留を認めること
- ・シナイ半島全域およびガザ地区の、イスラエルへの割譲

・スエズ運河の修復

シナイ半島とガザ地区の占領に勢いづいたイスラエルは、日本やイギリスから兵器を大量に購入。悲願である聖地エルサレムが位置するヨルダン川西岸地区の占領を目指し、第三次中東戦争の勃発までに以下のような、人口二百万名そこその国家としてはあまりにも過大な戦力を整えていった。

陸軍（六万名）

戦車及び装甲兵員輸送車各一六〇〇両、自走砲六四〇両、自走ロケット発射機三二〇両など

海軍（五千名。ハイファ、エイラート及びスエズに三等分して配備）
駆逐艦エイラート及びヤッフォ、甲型水上艇及び二五〇トン級潜水艦各十二隻、丁型水上艇三十六隻

空軍（一万五千名）

二〇式戦闘機一六〇機、四発機四〇機、中型回転翼機及び小型回転翼機各八〇機、練習機八〇機など

日本から兵器購入によるイスラエルの軍拡に対して、ヨルダンやエジプト及びレバノンといった近隣諸国は危機感を抱く。そしてイスラエルに兵器を売却していた日本に対して、石油の優先的な輸出と引き換えにしても自国に同等以上の兵器を売却するよう要請した。

これに応じた日本は、一部油田の採掘権と引き換えで以下のような兵器を三ヶ国に輸出。また兵器を国産するための造船所や向上についても建設を支援し、イスラエルへの分も合わせた兵器輸出と安価な原油の輸入は、日本の重工業に後世「中東特需」と言われる発展をもたらした。

ヨルダン及びレバノン（それぞれ人口二百万名弱、陸軍三万名、海軍千五百名、空軍三千名）

日本の戦後型師団とほぼ同一の装備を二個師団分、甲型及び丙型水上艇各一二隻

二〇式戦闘機四〇機、中型及び小型回転翼機、練習機各二〇機

エジプト（人口三千万名、陸軍十八万名、海軍及び空軍各三万名）
戦車、装甲戦闘車及び自走ロケット弾発射機各九六〇両、自走砲一九二〇両

災害救難艦二隻、甲型水上艦二四隻、潜水艦一二隻、乙型及び丙型水上艇各七二隻

こうして軍備を目一杯整えた四ヶ国は、領土的野心を抱いて新たな粗層への準備を進めていく。最早この停戦は、次なる戦争に向けた準備期間にすぎないのであった。

第五十一話 八方塞（後書き）

敷島「こんなに最新鋭の兵器を輸出して、機密上の問題は無いの？」

作者「スペックに表れない範囲で、適度に弱体化させておけばいいのです……まあ、史実では米ソが大半の兵器を供給していたので、その代役を務められそうなのが我が国の兵器ぐらいしかなかったというのが正直なところなのですが」

富士「アメリカは史実のように兵器を供給する余裕が無く、露助の使っている兵器は日本の劣化版だからな。かといって兵器を買わないのも不自然となれば、多少不自然でも日本製で埋め合わせるしかないというわけか」

作者「ただ、艦船のノックダウン建造は譲れませんがね。主に艦魂的な意味で」

三笠「つまり『一度日本で生まれた艦魂を嫁には出さん』ということでしょうか……それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、いよいよコンテナ式軍艦の一番艦が進水します。次回『究極の汎用艦』ご期待下さい」

第五十二話 究極の汎用艦

一九五九年五月一日、横須賀海軍工廠。ここで、連合艦隊にとって空母を除けば実におよそ十五年ぶりとなる新型水上戦闘艦艇が、今まさに進水の時を迎えようとしていた。だがその姿は、今までの軍艦を見慣れた目からはおおそ戦闘用艦艇とは思えないものであった。

というのもこの「秋雨」の船体は艦橋部分を除いて大きく決られたようになっており、艦橋が無ければまるで自走式浮きドックのような形状だったからである。しかしこれが紛れもない本来の姿であり、電子機器を除けば、艤装中に何らかの固定武装が装備される予定もなかった。

この艦は史実の海運において欠かせない役割を担っているコンテナ船を基に設計された、究極の汎用艦艇とでも言うべき代物であった。即ち状況に応じて船体の凹みに武装コンテナを搭載し、水上戦闘だけでなく両用作戦や機雷戦などといった、ありとあらゆる任務に対応できることを目標にされていたのだ。

そのため彼女の建造と並行して、海軍は試作品も含めて数十種類の武装コンテナを開発。その中には水上艦艇として欠かせない艦砲や機銃から、新規開発された誘導弾や折り畳み式の起重機、さらには掃海具や医療用コンテナまで含まれていた。

同日、駆逐艦「秋雨」艦橋基部の予備会議室。ここではこの艦の艤装員長に決まっていた輝久に退役を控えた秋津洲と瑞穂、及び雛鳳が「秋雨」の進水を待っていた。

「有馬大将も、あと何年かいらっしやればこの船を見れただろうに」
「就役後に民間人として御覧になるというならともかく、進水式の時に海軍軍人として御覧になることは不可能だったでしょう。あのままでは残念ながら、七年ほど前に定年で予備役や後備役に編入されていたはずです」

「姉さん。でしたら、元帥府に列せられればいいだけでは？」

なおこの時存命中の元帥海軍大将は、対米戦を通して連合艦隊司令長官を務めた嶋田繁太郎（一九四五年三月三十一日）と同じ時期に海軍大臣を務めた山本五十六（同日）、及び第一航空艦隊司令長官として仏印紛争に功のあった山口多聞（一九五五年十二月一日）しかおらず、海軍通算でも十四名しか列せられていない。

永野修身元帥海軍大将（史実と同日）までは史実どおりに元帥府へと列せられたが、彼は史実と同じ日に病死し、古賀峯一大将は元帥府に列せられないまま定年である六十五歳になって退役していた。

「無論、あの方の功績を考えればむしろ列せられない方がおかしいかも知れません。ですが、有馬大将がこれ以上目立つ地位に就いてしまったとすれば、後々厄介なことになるでしょう」

「厄介なこと……ですか？」

姉の言葉が意味するところを図りかね、瑞穂が首をかしげる。

「大将が目立つ地位に就けば、当然後世の研究者にあれこれ詮索されてしまいます。その際、もし大将が未来から日露戦役時に時空転移をした人間であることが暴かれ、かつその情報が大将による歴史改変を快く思わない者に知られれば……最悪の場合時空転移前の大將に身の危険が及び、歴史改変が御破算にされかねません」

「だから、艦隊の司令長官にも就任なさらなかった、ということでは？」

すか？」

「ええ」

事実、勇は経歴だけ見れば階級に比べ相当に地味な部類であった。表立った役職に就いたのは精々戦艦の艦長や海軍大学校校長ぐらいのもので、あとは将官会議議員や軍事参議官、果ては軍令部や海軍省への出仕といった裏方ばかりだったのである。

中将時代に一年だけ申し訳程度に横須賀鎮守府の長官になったことはあるが、これは艦隊司令長官と鎮守府長官のどちらも経ないで海軍大將になった前例が皆無に近かったからというだけで、いわば後世の研究家からの詮索を気にしての着任であった。

「そろそろ、進水時刻か……秋津洲さん、雛鳳、秋雨の迎えを頼めるかな？」

「了解しました」

「はい」

二人が去って数分後、船台に水が流れ込んで「秋雨」の船体が浮かび上がる。さらに数分後。秋津洲と雛鳳、そして「秋雨」の艦魂と思しき三人が予備幕僚室へとやってきた。

第五十二話 究極の汎用艦（後書き）

作者「海軍艦艇の見た目がどんどん味気なくなっていく気がするけど、仕方ないか」

富士「模型として販売したとしても、最早模型というよりはブロック玩具と言った方がしっくりくるな。船体の部品に艦橋とコンテナを付属させれば、それで一丁上がりだ」

大隅「手の込んだ再現をするにしても、精々艦橋周りぐらいしかないですからね……これで艦橋がLCSのように平面で構成されれば、なおのことです」

三笠「まあ、模型業界としてはそちらの方が楽かもしれませんね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「瑞穂と雛鳳は秋雨にしどろもどろの反応をしますが、その理由とは？ 次回『言い伝えられた教訓』ご期待下さい」

第五十三話 言い伝えられた教訓

予備会議室へと降りたった駆逐艦「秋雨」の艦魂は身長が百六十センチ以上ある長身で、髪が肩にかかる辺りで切られていることを除いては上総に瓜二つであった。

「初めまして。秋雨型駆逐艦一番艦『秋雨』の艦魂です」

秋雨の鋭い目つきに、雛鳳と瑞穂はおどとした様子で視線を逸らす。これもまた上総とよく似ていたが、彼女の目つきは血気盛んな性格が滲み出ていたのに対し、秋雨の場合はどちらかと言うと秋津洲に似ていた。

「は、初めまして。空母『雛鳳』の艦魂、雛鳳です……っ」

「連合艦隊艦魂の参謀長をしています、戦艦『瑞穂』の艦魂です」

二人への慣れない威圧感は動揺を生み、言葉をたどたどしくさせる。そしてそれは、就役してからは一個駆逐戦隊を束ねるということで緊張していた秋雨にとって、このような艦魂が連合艦隊の次期旗艦や現参謀長なのかと酷く落胆させるものだった。

「瑞穂参謀長に雛鶴中将、なぜそこまで緊張なさっているのです？」

不審を通り越して侮蔑の感情が含まれた表情で自分たちを睨む秋雨に雛鳳と瑞穂は再びたじろぐが、慌てていつもの表情に戻ろうと努める。そんな三人を見かねた輝久が、慌てて助け舟を出した。

「秋雨。その……もっと柔らかい目つきはできないの？ 瑞穂と雛鳳が、さっきから怖がっているみたいだけれど」

申し訳なさそうな輝久の忠告に、今度は彼女がうろたえる番であった。それまで彼女は、瑞穂と雛鶴が舌足らずな話し方をしていたのは彼女たちが臆病だからであると思っており、よもや自分の強張った目つきに原因があるとは露ほども思っていなかったのだ。

「も、申し訳御座いません！ 私は皆さんの前で沮喪が無いようにしていたのですが、あろうことかお二方を委縮させてしまうとは……お許しください！」

彼女はそう言うと、頭を斜め四十五度以上に深々と下げる。誕生早々の失態に、秋雨は自分が上官である瑞穂や雛鳳に嫌われたのではないかと気を失いそうになった。

「あ、頭を上げてください。私は、ただ……その、敷島中将与上総元長官の間にあったという一件の二の舞になってほしくなかっただけですから」

「敷島中將に上総元長官とは……どなたのことですか？」

瑞穂は自分の説明不足を恥じながら、二人を含めて主だった艦魂たちの紹介をする。そして、本題である戦艦「上総」進水時のいざこざについても、自分が勇や本人たちから聞いた範囲で詳しく述べた。

「そうですか、そんなことが……以後気を付けます」

「ええ。そうしてもらえると助かります」

瑞穂は極力柔らかい口調で話したが、自責の念に駆られている秋雨は未だに硬い表情を崩さない。そんな彼女の様子を見て、瑞穂は数年前上総に聞かされた、ベトナムから戻ってきた後の赤龍の様子

というのを思い出していた。

「お気になさらず。むしろ、こちらこそ見苦しいところをお見せしてしまいましたね」

「いえ、元を辿れば私の気負いが招いたこと。瑞穂参謀長が頭を下げる理由は御座いません」

二人とも相手を気にかけるが故に、瑞穂と秋雨はお互いに謝意を述べる。そんな二人を見た輝久は、秋雨がただの頑固者ではないことを知り、人知れず胸を撫で下ろしていた。

兎も角こうして誕生した秋雨は、「秋津洲」及び「瑞穂」の退役と入れ替わる形での就役を待って、第一駆逐戦隊（水雷戦隊という名前は実態に相応しくないとして変更された。なお英訳は水雷戦隊と同じくDestroyer Squadron）旗艦に就任。以降は横須賀に配備され、連合艦隊旗艦となった「雛鳳」と共に、幾度となく海外へと派遣されるのであった。

第五十三話 言い伝えられた教訓（後書き）

敷島「ギギギ」

富士「反応に困るが……取り敢えず『くやしいのう』とは言つてやる」

三笠「そのネタは、さすがにどうかと思います」

大隅「話は変わりますが、雛鳳と秋雨の艦魂は逆の方が良いのでは？」

作者「それだと、秋津洲と瑞穂の関係と重複する恐れがあるからやめたよ。それに指揮官があまりにも厳格すぎる性格だと、時と場合によっては逆効果になることも考えられるからね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「今度は、哨戒を主任務とする小型のコンテナ軍艦が進水します。次回『小型艦と雖も』ご期待下さい」

第五十四話 小型艦と雖も

一九五九年三月五日、横須賀海軍工廠。この日、同じ海軍工廠で半年前に進水した「秋雨」をそのまま小さくしたような艦艇が進水式を迎えようとしていた。艦艇類別を警備艇とされた彼女は「燕」と命名され、同型艇四隻で警備隊(Patrol Group)、三個警備隊で一個警備艦隊(Patrol Squadron)を編成して各基地周辺海域の哨戒に当たることとされていた。

同日、護衛艇「燕」艦橋基部の予備会議室。ここには輝久に秋津洲、それに瑞穂と言った面々の他、船体がすぐ近くの棧橋で艤装工事中の秋雨も来ていた。とはいえ予備会議室の面積は精々三メートル四方であり、どうやっても十人程度入るのがやっとという状況であった。

この船体の小ささからくる狭さは、予備会議室に限った話ではない。乗員には士官を含めて二十七名全員(他に護衛隊司令用の居室と予備士官室)分の個室が与えられているものの、下士官兵に至っては一室当たりの床面積は幅七十センチ、長さ二メートル弱の一・二平米程度でしかなかった。船体の中央部に幅三メートル半のコンテナ搭載場所が設けられているために、左右の居住区はそれぞれ居室と廊下だけで一杯になってしまうのだ。

「それにしても、狭いなあ」

「戦闘指揮所も、この面積だと聞いております……艦橋の当直が数える程とはいえ、不安は拭えません」

輝久と秋津洲が、相次いで不満を漏らす。なお下士官兵の寝台は足元の部分を下方に傾斜させ、枕元から背中にかけての部分を上方

へと引き起こし背もたれにすることによって固定式の椅子とすることもできた。また足元の部分には簡単な机が設けられており、引き起こして背もたれにする部分の下には被服や私物を入れる場所もあった。

こうして書くとき分りにくいのが、史実の現代におけるリクライニングシートを寝やすいよう平らにしたものとも言えいいであろうか。兎も角こうすることにより、最低限の面積で昼夜を問えず過ごせる個室が誕生したのである。

「ですが、我が国はこのような変わった艦艇ばかり建造していて大丈夫なのですか？」

秋雨の言葉に輝久は内心「君もその一隻なんだけど」などと思っただが、敢えて口には出さなかった。将来駆逐艦十二隻から編成される駆逐戦隊の旗艦となる彼女のやる気をここで削ぐような言動をすれば、彼女の船体に悪影響が出る恐れも否定できないからだ。それは即ち、日本の国防そのものへの悪影響でもあった。

「アメリカもイギリスも、誘導弾を搭載した艦艇は未だに極少数。となれば、暫くの間は『秋風』型駆逐艦が主力でも問題ありません」

なお計画では、一九八〇年まで対米戦に参加していた巡洋艦や駆逐艦が現役に留まることになっており、それを二十年かけて建造する災害救難艦（強襲揚陸艦）八隻、駆逐艦及び潜水艦各四十八隻、警備艇（乙型水上艇）九十六隻が代替することになっていた。より細かく分けると、五年で以下のような整備計画を完了させることになる。

一年目

災害救難艦一隻、駆逐艦四隻、潜水艦四隻、警備艇四隻

二年目

駆逐艦四隻、補給艦一隻、警備艇八隻

三年目

災害救難艦一隻、駆逐艦四隻

四年目

原潜一隻、潜水艦四隻

五年目

潜水艦四隻、補給艦一隻、海洋観測艦一隻

他、二十年で以下の艦艇を建造

砕氷艦二隻、試験艦二隻（駆逐艦型一隻、警備艇型一隻）、迎賓艇一隻

史実の現代における日本円に換算して、各艦種の価格は以下を想定

災害救難艦二千億円、駆逐艦六百億円、護衛艇百億円、原潜千億円、

潜水艦三百億円、

海洋観測艦百五十億円、補給艦三百億円

合計海軍軍人九万名

その後船台への注水が始まったため、秋津洲と秋雨が船首の最上甲板へと移動。そして「燕」の船体が浮かび上がると同時に、艦首右舷側の最上甲板が光り輝いた。

第五十四話 小型艦と雖も（後書き）

富士「現代の護衛艦やら輸送艦やらが、ここまで少数種の艦艇に集約されるとはな」

作者「水上艦は船体が金属製なので磁気機雷の掃海には向きませんが、水上艇なら繊維強化プラスチック製なので磁気機雷にも対処できますよ。ただ、この時代にこの大きさの繊維強化プラスチック製船舶を作るのかという技術的不安はありますが」

大隅「いくら船体の殆どが単純な平面で構成されているとはいえ、この分野の技術を五年か十年は前倒ししなければ厳しいですね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、『燕』の艦魂の何気ない行動が瑞穂の不安を煽ります。次回『天真爛漫過ぎるが故に』ご期待下さい」

第五十五話 天真爛漫過ぎるが故に

現れた警備艇「燕」の艦魂は身長が百四十センチ程度と非常に小柄で、短い髪と大きな目が特徴的であった。体格も良く言えば引き締まっているが身長と比べてもやや華奢な感は否めず、顔つきは十代前半か精々十代半ばといった具合であった。

「初めまして！ 警備艇「燕」の艦魂です！」

彼女は澆漑としたよく響く声で自己紹介をすると、勢いよく挙手の礼をする。それに続いて秋津洲と雛鶴も自己紹介を終えると、三人揃って予備会議室へと移動した。そして輝久や瑞穂とも対面したのであるが、三人がお互いに名乗り終えた後、燕は早速あっけらかんとした表情でこう言っただけだ。

「自分で言うのもなんですけど……狭いですね」

彼女の予想だにしない言葉に、先程まで愚痴をこぼしていた輝久や瑞穂は罪悪感に苛まれる。

「いや、そんなことは無い……はず」

「う、うん」

二人はそう言って擁護するが、その声は非常にたどたどしい。しかしそんな二人などお構いなしに、燕自身は自分の船体を興味深げにきよろきよろと見まわし始めた。その眼は好奇心のせいか爛々と輝いており、見た目と相まってまるで初めて軍艦を見学に来た子供のようにであった。

「あの、私の部屋はどこですか？」

「ああ……そうだね。今案内するから、ついてきて」

「はい！」

そう言うと、燕は輝久の後にぴったりとくつついて歩く。彼女の足取りは極めて軽く、秋津洲や瑞穂といった比較的大人しい艦魂に慣れていた輝久は、内心動揺しながら艦橋と船体の連絡通路を通じて左舷上甲板へと歩を進めていった。

しかしこの時、輝久は予備会議室に残った瑞穂が不機嫌な表情をしていることに気付かなかった。燕が終始嬉しそうな顔をしていることさえ、今の彼女にとっては神経を逆撫でするだけであつたのだ。

左舷艇尾にある階段を登り、暫く歩くと「燕」の予備士官室、即ち艦魂である燕の部屋があつた。輝久が場所を取らないよう引き戸となっている扉を開いてやると、細長い部屋が姿を現す。

「ここが君の部屋だ。予備士官室は原則どの船でも使われないようになっているから、安心して使うと良い」

「有り難う御座います！」

すると、燕の目が机の上に備え付けられてる本棚に留まる。そこには彼女が就役までに知っておくべき情報が書かれた大量の書類や書籍が置かれており、燕はおもむろにそれを手にとって読み始めた。

「ああ、その書類は就役までに目を通しておいて。今年の四月には大湊に配属になってもらうから」

「四月……って、もう一か月しかありませんよ！」

「ごめん。それまでは他にやるべきことはないから、ね？」

「うう……わかりました」

これは彼女に固定武装が無いことで、艀装が通常の戦闘艦艇より遙かに早く済んでしまうことが原因であった。なお武装コンテナは鉄道で大湊まで運ばれることになっており、「燕」が大湊に回航され次第任務に応じて装備するという形になっていた。

こうして燕の案内を終えた輝久は、再び予備会議室へと戻ってくる。既に秋津洲に雛鳳、さらには夕波も自分の艦に戻っていたが、瑞穂だけは不貞腐れた表情で机に突っ伏しながら輝久が戻ってくるのを待っていた。

「ごめん。待たせたかな？」

「いいえ……お気になさらず。お部屋まで送ります」

こうして輝久と瑞穂は「瑞穂」の艦長室へと戻ってきたが、瑞穂はそのまま何も言わずに部屋を出ていこうとする。そんな彼女の態度に不信感を抱いた輝久は、不貞腐れている理由を詰問しようと慌てて瑞穂を呼び止めた。

「どうした？ 何か……不味いことでもしたかな？」

「こんなことを申し上げるのは、非常に浅ましいことかも知れませんが……それでもいいですか？」

「ああ」

「先程、燕が艦長と一緒に予備士官室へと向かわれた際……言いようのない不安に襲われたのです。その後艦長をお待ち申し上げている間も、時間が異常に長く感じられて……到底、平常心ではいられませんでした」

「そうか……こちらの配慮が至らなかったばかりに、済まない」

輝久は一言謝ると、深々と頭を下げる。

「そ、そんな……頭を上げて下さい！ 確かにあのときは動揺していましたが、今は……今はもう、大丈夫ですから」

とはいえ、そういう瑞穂も内心では未だに蟠りが残っていることを自覚していた。結局この一件の後、二人は暫くの間話しづらい状況になったのである。

第五十五話 天真爛漫過ぎるが故に（後書き）

大隅「これはまた、素直すぎるぐらい素直な艦魂ですね」

作者「見た目の年齢からしても、良きにつけ悪しきにつけこれぐらいの方がしっくりくるかな、と」

敷島「見た目の年齢と性格に差異があるのも、それはそれで……（富士から睨まれ）なんでもないよ」

富士「敷島、そこを突き詰めるとわけのわからんことになるから止めてくれ」

三笠「敷島姉さんが何を言おうとしたのかは分かりませんが、ともかく次回予告をお願いします」

作者「次回、富士の行動が燕の能力を顕現させる切っ掛けになります。次回『名は体を表す』ご期待下さい」

第五十六話 名は体を表す

警備艇「燕」の進水式が行われた後、富士には一つ気がかりなことがあった。そこで自らの不安を払拭すべく、予備役入りが近い戦艦「秋津洲」の予備士官室へと赴いたのである。

「失礼する。ひとつ話があるのだが……いいか？」
「どうぞ」

秋津洲の了承を得た富士は部屋に入ると、開口一番「燕はどこに配属されるんだ？」と尋ねた。それはあまりにも唐突な質問であったが、冷静な秋津洲はいつもどおりの口調で「大湊に新設される第一警備戦隊第一警備隊、その一番艇になるはずです」と返した。

「となると、アメ公や露助の連中と鉢合わせする恐れが大きいな」
「はい」

「そうなった時、万が一敵の艦魂が『燕』の船体に取り込んでくるようなことがあれば厄介だ……そこであいつに剣術でも仕込んでやろうと思うのだが、いいか？」

「ご自由に。ですが貴方が本気で相手をすれば、大抵の艦魂はすぐに音を上げてしまいます。そのことだけは御留意下さい」

「ああ。わかっている」

秋津洲の了解を得た富士は、早速棧橋に係留されている「燕」の予備士官室へと向かった。そして燕に大湊へ配属された際に想定される事態を説明し、護身のために武術を身につけることが必要であると説いたのだ。

「ということだが、いいか？」

「はい！」

燕の元気な返事を聞き、富士は艦魂の力で長さ二尺ほどの木刀を二振り出現させる。その後「燕」の前部コンテナ搭載甲板へと燕を連れ出し、木刀の片方を手渡して彼女から離れると、五メートルほど離れたところで木刀を構えて正対した。

「それで、私に思い切り打ちかかってこい。手加減はいらん」

「え？ でも、もし富士さんに当たったら……まずいことになりませんか？」

「いきなり私から一本取れるようなら、それ以降訓練する必要はない。それに木刀で打たれたところで、翌日には痛みも引くはずだ」
「そうですか。なら……はあっ！」

刹那、燕は甲板を蹴って一気に距離を詰めて打ちかかる。その一撃はさほど重いものではなく、富士の力を以ってすれば容易に受け流せるものだった。とはいえ甲板を蹴った際の突進力と斬撃の速さは、これまで五十年以上様々な艦魂と剣を交えた彼女をもつてして、今までに何度も見たことの無いほどであった。

（くっ！ 速いな……機敏さだけなら、朝日や上総より上かも知れん）

（さすがに、簡単には通じない……でも！）

さらにすれ違いざまの第一撃が受け流されたと見るや、燕は俊敏な脚力で様々な方向から攻撃を繰り返す。富士はその攻撃を幾度となく涼しい顔で受け流し続けるものの、内心反撃の隙がなかなか捉えられないことにいら立ち始めていた。

（私としたことが、これでは埒が明かんど……少々大人げないかも

しれんが、止むを得んか)

富士は燕の攻撃を受け流すことを止め、木刀のうち彼女が握っている部分のすぐ近くを思い切り打ち据える。この意表を突いた攻撃には燕もたまらず「あっ!」と叫んで手を放してしまい、木刀は回転しながら高々と宙を舞って甲板へと落ちた。

「すまない。大丈夫か？」

「は、はい」

「それだけ速く打ち込めれば、大抵の艦魂には勝てるだろうな……攻撃に重さが欠けるのは問題だが、総合的に見れば連合艦隊でも五本の指に入るかも知れんぞ」

「本当ですか？」

富士からの思わぬほめ言葉に、燕は内心胸を撫で下ろす。

「だが、刀剣に限らず戦闘というのは素養だけでどうにかなるようなものではない。だからもう貴様の就役まで一月も残されていないが、その間は稽古をつけるから覚悟しておけ」

「はい!」

このあと燕は就役までの間、海軍艦魂として知識と武術を習得すべく多忙な日々を送ることになる。しかし持ち前の才覚も手伝って彼女は見る見るうちに腕を伸ばしていき、大湊に向かう頃には海軍艦魂でも有数の剣豪としてその名を知られるようになっていた。

第五十六話 名は体を表す（後書き）

敷島「これって……配属後の決闘フラグ？」

作者「今の時点では、何とも。ただ運動神経の良さが生かされるのは、なにも剣術での仕合だけとは限りません」

富士「剣術の仕合が高じて、実弾の応酬にならなければいいがな」

大隅「そこまでいくと、実弾どころか最悪の場合核の応酬になってしまうような気も……今から不安ではありますね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、退役を控えた瑞穂に吉報が舞い込みます。次回『名誉職に非ず』ご期待下さい」

第五十七話 名誉職に非ず

一九五九年十二月一日、この日付で輝久は大佐に任官された。そして同日付で、翌年に予備艦となることが決まっている戦艦「瑞穂」の艦長に任命されたのである。それまで副長や砲術長としてたびたび「瑞穂」乗り組みを命じられてきた彼が、遂に世界最大戦艦の一隻を仕切ることになったのだ。

これまで、戦艦の艦長というものは海軍少尉になってから二十年程度、海軍大佐になってからも三年から五年程度の経験を積んだ士官ばかりが任命されてきた。しかし「瑞穂」の就役から十五年以上が経過し、さらに戦艦という艦種そのものが旧式化しつつあったことで、大佐任官直後とはいえ当時の海軍でも指折りの砲術屋であった輝久に「瑞穂」艦長の座が回ってきたのである。

つまり「瑞穂」が将来前線に立ったり、あるいは長期の航海に出る可能性が皆無に近い以上、この職は一種の名誉職のような存在であった。しかし輝久にとってそれは些細なことであり、この人事を聞いた彼は内心欣喜雀躍していた。

同日、戦艦「瑞穂」艦橋の士官休憩室。ここでは瑞穂が、この日着任すると聞かされていた新しい艦長の到着を待っていた。ここならどの方向から艦長の乗った内火艇が来ても、すぐに様子を見に行けるので彼女は新艦長の着任をここで待つことにしたのだ。

「おそらく……今日来る人が私の最後の艦長ですね。一体、どんな方が来るのでしょうか？」

横須賀で記念艦となるのを一年後に控え、瑞穂の表情はどこか寂

しそうである。このときの彼女は、姉であり連合艦隊旗艦を二十年近く務めている秋津洲から新しい艦長の着任を告げられていただけで、その艦長が輝久であろうとは露ほども思っていなかった。

これは予備役入りを控えて最近落ち込んでいることの多い妹を励ますために、彼女を驚かせようとした秋津洲がわざと教えなかったのである。そして瑞穂はよもや輝久が来るとは思っていないので、艦長がどんな人間かということを一聞かなかった。

やがて、右舷から聴き慣れた機関の音が鳴り響く。瑞穂が艦橋を横断する廊下に出て辺りを見渡すと、艦尾の方向から一隻の一七・五メートル型内火艇が接近してくるのが見えた。そしてその内火艇は艦尾から「瑞穂」の艦内へと収容され、瑞穂はいよいよ自分の艦長が来艦したことを悟る。

「早く会ってみたいです……もしかしたら、艦魂が見える方でもこれまで気付いていないという場合もありますからね。着任早々驚かせてしまつては失礼ですから、もう少し待ってからにしましょうか」

一方、着任の挨拶を済ませた輝久は瑞穂に会うため足早に予備士官室へと向かう。しかし部屋の前から呼びかけてみたものの反応は無く、扉を開けてもやはりもぬけの殻であった。

「おかしいな……暫く待ってみるか」

直後、部屋の中央が強く発光する。そして現れた瑞穂は輝久を見たと瞬間こそ事態を飲み込めずにきょとんとしたものの、彼が佩びている海軍大佐の階級章に気付くと事の次第に気が付き、満面の笑みを見せた。旗艦ではない戦艦に乗り組む大佐といえば、まず艦長以外

考えられないからである。

「まさか、私の新しい艦長って……！」

「ああ。今日付で海軍大佐に任官されて、戦艦『瑞穂』の艦長になった」

「谷口中佐……いえ、艦長！ 改めて、宜しくお願い致します！」

「ああ。宜しくな、瑞穂」

この後、戦艦「瑞穂」は翌年の退役まで、国内の各種式典を除けば特にこれと言った表舞台に立つことは無かった。しかし瑞穂の顔は終始晴れやかであり、姉と共に横須賀で記念艦となる際にも、現役への未練や後悔といった感情は一切見せなかったのである。

第五十七話 名譽職に非ず（後書き）

朝日「これはまた……ネタ作りのためとはいえ、随分な荒業ですな」

作者「ただ、この後谷口大佐はどうなるのやらという気もするよ。

一度戦艦の艦長を務めた以上、巡洋艦や駆逐艦の艦長にすれば周囲からは格下げと受け取られかねないし、災害救難艦の艦長は畑違いだろうし」

大隅「となりますと……警備隊の司令辺りが妥当なところでしょうか？ 少将になれば、巡洋艦の戦隊司令なども考えられますが」

作者「だね。それに横須賀所属の警備隊司令にすれば、ずっと横須賀にいたろうから、瑞穂と会える時間も増えるし」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、コンゴ動乱が舞台になります。次回『新世代の初陣』ご期待下さい」

第五十七話 新世代の初陣

一九六〇年六月三十日、一九〇八年十一月十五日にベルギー領国王レオポルド二世の私有地をベルギーの植民地としたベルギー領コンゴがコンゴ共和国（現コンゴ民主共和国）として独立。初代大統領をジョゼフ・カサブズ、初代首相をパトリス・ルムンバとする民族主義政権が誕生した。

しかしベルギーはコンゴの喪失を潔しとせず、資源地帯であるコンゴ共和国南東部のカタンガ州を独立させることを画策。七月六日にコンゴ軍内でベルギー人将校を標的として発生したコンゴ人兵士の暴動に対しては、十日に白人保護の名目でベルギー軍を派遣した。

こうした分断工作の結果、カタンガ州は七月十一日にモイーズ・チヨンベ指導のもと独立を宣言し、白人傭兵を擁してコンゴ民主共和国政府と戦闘状態に入った。ベルギーは当然チヨンベのカタンガ州独立を支援し、空中戦や対地攻撃も可能なフーガ社（フランス。しかし当時はポテ社に買収された後）のマジステール練習機を供与した。

翌日、ルムンバは国際連合へと国連軍の派遣を要請。これを受けた国連は十四日に国連軍の派遣を決定し、日本もこれに応じて以下の編成からなる陸海混成部隊を派遣した。

陸軍（約九百名）

一九六〇年に採用された最新鋭の兵器ばかりを装備した、第一師団から抽出された部隊。同年より編成され始めた災害派遣や離島防衛、及び緊急時の海外派兵など様々な状況に備える海上機動部隊の実戦投入試験を兼ねるべく、千名にも満たない小規模部隊であるに

も関わらずほぼありとあらゆる陸軍の兵器を装備している。

コンゴまでは災害救難艦に乗り、上陸後現地で戦闘と復興支援に当たる予定。

海軍（約二千名）

一九六〇年に就役した災害救難艦「雛鳳」と第一駆逐戦隊第一駆逐隊の駆逐艦「秋雨」、「糸雨」、「樹雨」、「霧雨」からなる艦隊。その高い汎用性を生かし、今回「秋雨」型駆逐艦が搭載するコンテナの構成は以下のようになっている。

・艦首部

上層に五インチ砲一門、自動対空機関砲一基、対艦・対潜及び誘導弾発射機各二基（ボックスランチャー型）

下層に長期航海用及び支援用の物資

・艦尾部

中型回転翼機二機を搭載する格納庫と飛行甲板。格納庫上部に自動対空機関砲一基

下層に長期航海用及び支援用の物資

七月十五日、横須賀を出港した艦隊は途中ダバオ、ダーウィン、レユニオン島に寄港して物資や燃料を補給。そして喜望峰を回り、八月十八日にコンゴ民主共和国のムアンダに到着した。

その後、「雛鳳」に便乗していた陸軍部隊は「雛鳳」搭載の上陸用舟艇でコンゴ川を遡行。首都レオポルドヴィル（現キンシャサ）で装甲車やトラックに乗り換え、上陸用舟艇を「雛鳳」へと帰艦させたのち、陸路で東南方向へと進軍した。

しかし日本軍がコンゴに到着する前、コンゴ中央部にあるカサイ州のうち南西部が南カサイ鉱山国として八月六日に独立を宣言。ま

たカタンガ州は独自の「カタンガ憲法」を制定し、モイズ・チヨンベを大統領とした。これにより、当初の目標であったカタンガ州のみならずカサイ州南部の制圧もしなければならなくなったのだ。

さらには国連軍及びカタンガ独立への不干涉と、コンゴからの撤退を約束したはずのベルギー軍のうち一部が国内に残留。カタンガ側の傭兵としてコンゴ正規軍との戦闘に加わり、さらに国連軍が日本軍の来着まで持っていなかった航空機を使用して優位に戦いを進めていた。

そこで八月十九日、この年に正式採用されたばかりという最新鋭の二〇式戦闘機と二〇式中型回転翼機を二十機ずつ搭載した「雛鳳」より、二〇式戦闘機六機からなる攻撃隊が出撃。これが超音速軍用機にとって初めての実戦参加となり、目標はカタンガ州にある航空戦力の殲滅であった。

同日午前九時、空母「雛鳳」にある雛鳳の居室。

「雛鶴長官、攻撃隊の出撃をご覧にならずとも宜しいのですか？」

「うん。今まで何回も内地で見ているから、それに――」

「それに？」

億劫そうな顔をした雛鳳を見て、秋雨は不安になる。

「ここ、日差しが真上からくるでしょう？　だから暑く思えて、到底甲板に出る気分じゃないわよ」

雛鳳が予想どおりの反応をしたことで、秋雨はやはりかと落胆しながらため息をつく。実際にはこの時期におけるコンゴ周辺の最高気温は精々二十五度程度で、また雨も少なく乾燥しているのだが、

真上から照りつける太陽はそれを感じさせなかった。

「長官……そのようなことを口に出さないでください。それに艦魂であるあなたの士気が低ければ、それはそのままあなたの船体や、ひいては今出撃している攻撃隊にまで影響しかねないのですから」

「だから、今甲板に出たら暑さで余計参るってこと。それは、貴方も望まないはずでしょう？」

「それはそうですが……再度、検討して頂きたいものですね」

「前向きに検討させて頂きます」

「長官……本当に理解して頂けているのでしょうか？」

飽くまで苦言を呈そうとする秋雨だったが、今更彼女を甲板に引っ張り出したところで彼女自身や攻撃隊に良い影響があるとは思えず、結局空調の効いた艦内で攻撃隊の帰艦を待つことになった。

第五十七話 新世代の初陣（後書き）

富士「九百名でほぼあらゆる兵器を装備する部隊か……器用貧乏にならないか？」

作者「その不安は確かに存在します。ですが、冷戦期の北海道で想定されていたような広大な地域における数万人規模の大規模戦闘が発生しにくいと考えられるのであれば、自己完結性や機動性の高い小規模部隊を各地に分散配置していた方がいいのではと思えるのです」

敷島「つまり、それは今の日本にも当てはまるの？」

作者「はい。また日本は防衛しなければならない離島がそれこそ無数に存在しますし、いつ史実における竹島のような事態が起こるか分からない状況です。ですから財政的な負担は百も承知ですが、各地の戦闘団には上陸用舟艇の配備も必要かと」

大隅「千人当たり为数隻の舟艇を配備すると、全国で数百隻の舟艇を配備することになりますね……部隊が衛戍していない離島の奪還や、災害派遣にも使えるとはいえ、確かに予算を圧迫しそうです」

三笠「まあ、少なくとも本作におけるわが国ではそれも可能かもしれません……次回予告をお願いします」

作者「次回、日本の超音速戦闘機が初の実戦を経験します。次回『鎧袖一触』ご期待下さい」

第五十九話 鎧袖一触

カタンガ州北東部にあるカパンガの飛行場目掛けて飛び続けた飛行隊は、道中南カサイ鉱山国の上空に入ったところで現地の傭兵に発見される。その情報はベルギーが与えた無線によってカパンガへと伝わり、カパンガの航空基地はすぐさま迎撃のためにマジステールの出撃準備を行った。

そして二〇式戦闘機がカパンガ上空に到達したころ、一番機のリーダーが前方から接近する六機の航空機を距離二十海里で捉える。奇襲による地上撃破の失敗を悟った攻撃隊の隊長は空対空戦闘による撃破を各機に通達したが、ここでひとつの問題があった。

というのも、この時各機が装備していた対空誘導弾はセミアクティブレーダーホーミングのものと赤外線誘導のものが二発ずつ（最大搭載数は合計八発）しかなかったのだ。この時期の対空誘導弾はまだまだ信頼性に欠けており、命中率は良くて二割から三割と推定されていた。

「全機、敵機が電探式誘導弾の射程に入り次第発射を許可する。目視外戦闘でも構わん」

「了解！」

およそ十秒後、彼我の距離は電探式誘導弾の射程距離である十海里にまで接近。各機はアンテナパターンを搜索から追尾に切り替えて、敵機を照準環の中央に捉えたのち、誘導弾の発射が可能なことを示す緑色灯が点灯すると一斉に誘導弾を発射した。

実は誘導弾を発射しても、機首の電探で敵機を捕捉し続けなければ

ばならない。こうしなければ、セミアクティブレーダーホーミングの誘導弾は敵機を追尾し続けることができないのである。誘導弾自身が発探を用いて追尾できるアクティブレーダーホーミングの誘導弾が登場するのは、今暫し後のことだ。

「ん……なんだ、あれは？」

「このままでは衝突するぞ、全機回避しろ！」

慌てて六機のマジステールが回避運動に移るが、音速の倍速で飛んでくる誘導弾を目視で気付いてから回避することは至難の業である。ましてや直前までマジステールと誘導弾は正対する形で飛行していたのだから、誘導弾がマジステールの編隊に突入するまでには五秒ほどこしか要しなかった。

「何だこいつ、避けたらついてきやが——」

「くそっ、来るな、来るなあっ！」

忽ち、三機のマジステールに誘導弾が命中する。一機は左翼を吹き飛ばされたせいで錐揉み状態に陥りながら失速し、もう一機は回避のために上昇しようとしていたところ機体の中央を貫かれ、そして最後の機は操縦席へと直撃弾を受けて操縦士諸共爆発四散した。

「な……なんだってんだ、あれは！」

「知るか！ とにかく、逃げなきゃ俺たちも木端微塵だぞ！」

残った三機のマジステールは慌てて遁走するが、そこに間髪入れず新たな誘導弾が飛んでくる。二〇式戦闘機の翼に搭載されていた赤外線式誘導弾が発射され、今まさに赤外線の発生源であるエンジンの排気口を後ろに向けたマジステールたちに襲い掛かったのだ。

十二発もの誘導弾が、フレアも持たず音速も出せないたった三機の練習機へと差し向けられては、最早ともに逃れる術はない。三機は相次いで尾部に誘導弾の直撃を受け、操縦士は脱出したものの機体は完全に失われてしまった。

「敵機の反応、電探より消失！」

「よし。あとは飛行場に爆弾を投下して帰艦するぞ」

しかし飛行場に敵機の姿は見えず、攻撃隊は地上に並んでいるであろう航空機を薙ぎ払うために装備した対地拡散爆弾をばらまいて帰投。午後三時に空母「雛鳳」へと全機が無事着艦し、こうして史実で当初航空機を持たなかった国連軍を悩ませたマジステール部隊は、一挙に殲滅されたのだった。

第五十九話 鎧袖一触（後書き）

富士「まあ、相手が超音速飛行も対空誘導弾の搭載もできないような機体となれば、こうなるのは目に見えているな」

敷島「操縦性や乗り心地は、申し分なかったらしいけれど……練習機や対地攻撃が関の山だと思うよ」

作者「あとは、各国で曲芸飛行に用いられたこともあったようです
ね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「コンゴに投入された、新世代の兵器を運用する陸軍。しかし、その行軍は決して楽なものではありませんでした。次回『早すぎた革新』ご期待下さい」

第六十話 早すぎた革新

コンゴの首都であるレオポルドヴィルに航空隊や支援部隊が駐屯した第一師団コンゴ民主共和国派遣戦闘団は、南カサイ鉱山国制圧のため八月二十一日にはキクウィに進駐。コンゴ国内を縦横に走る河を水陸両用車で渡りながら、南カサイ鉱山国首都のバクワンガ目指して一日数十キロメートルという高機動作戦を行った。

「いいか、上陸したところで車輪を撃て！」

民兵の指揮官に従い、塹壕から渡河を終えた装甲兵員輸送車の車輪目掛けて小銃が次々と撃ち掛けられる。しかし装甲兵員輸送車はそれをものともせず、逆にその前方を進んでいた戦車隊が塹壕を踏み潰していく。最早コンゴ国内の反政府軍にとって、機械化された日本軍に有効な打撃を与える方法は皆無と言って差し支えない状態であった。

そして二十三日にはチカパ、二十四日にはルルアンブール（現カナンガ）を制圧。二十五日には首都のバクワンガ（現ムブジマイ）へと突入し、戦車を見たことも無い民兵や傭兵は二〇式戦車の車列に恐れをなして次々と降伏、あるいは逃亡していった。

バクワンガに突入した車列は、戦闘団の戦車小隊（定数四両、予備一両）だけではない。左右では戦車の随伴歩兵を載せる装甲戦闘車が脇を固め、後には十六両の装甲兵員輸送車に分乗した一個中隊の歩兵が続いた。

「畜生……喰らえ！」

南カサイ鉦山国の兵士が建物の残骸から軽機関銃を放つが、装甲兵員輸送車には通じない。逆に装甲戦闘車の銃眼から突き出た小銃によって、兵士はあっけなく射殺された。

「だめだ……あんな奴らに勝てるわけが無い」

「俺は逃げるぞ！ 金欲しさに死んだら元も子もないからな！」

残っていた傭兵や民兵は次々と戦意を喪失して逃亡し、七月二十五日にこうして南カサイ鉦山国は事実上滅亡。しかしカタンガ州は未だに事実上の独立状態にあり、またコンゴ国内にいる反政府組織もまだまだ侮れない勢力を有していた。

そこで日本軍は戦闘団のうち歩兵、機甲、特科の各中隊をカタンガ州に進軍させた。同時に本部小隊と支援中隊、及び基地中隊はバクワンガに進駐し、そこで現地の復興支援に当たることとなる。

施設作業車が瓦礫を取り除き、浄水車が川の水を浄化して安全な飲み水を作り出す。遠隔地には航空隊が物資を空中投下し、衛生隊は各地に派遣されて伝染病患者や負傷者の治療に奔走する。史実では数十年後によく形作られた国際貢献のやり方が、ここでは早くも実践されていたのだ。

とはいえ、戦闘団の装備品は大半が今年に入ってから受領したものばかり。未だ操作に不慣れた将兵も多かったせいか、浄水車や炊事車は規格どおりの動きを見せないことも多かった。だが何より現地の将兵を苦しめたのは、不衛生と高温から来るマラリアを初めとした伝染病への対応である。

他にもクリミア・コンゴ出血熱、リフトバレー熱など注意すべき病気は数多い。特に前者は現代でさえワクチンが無く、二日から九

日程度の潜伏期間を経て発症した後の対症療法しかできないという厄介な存在であった。

「くそっ、他の国連軍は何をやっているんだ？」

「反政府軍を潰すのに必死で、現地の連中のことなんてどうでもいいんだろう。こう言っちゃ悪いが、こいつらの面倒を見たところで、確かに金になるわけでもないからな」

「でも、国連軍は俺たちを含めて二万名近いんだろう？ 十人に一人を割いただけで、陸軍だけなら俺たちの二倍以上じゃないか」

「とはいえ、他の連中が送ってきた部隊は俺たちの対米戦の頃より古い装備の連中ばかりだ。衛生隊や工兵隊がそれなりにいるとはいえ、浄水車や立派な衛生設備は持っていない」

「ちえっ……しけた連中だ」

なお国連軍の内訳はエチオピア、ガーナ、ギニア、モロッコ、ナイジェリア及びチュニジアといったアフリカ勢とスウェーデン、ノルウェー及びアイルランドの北欧勢が殆ど（他にインド軍）であり、国際連合の常任理事国である日米英仏独伊中露でまともな軍隊の派遣を行っているのは日本だけであった。

これは地理的な要因のみならず、派遣した軍の将兵に病気などの問題が発生したり、将兵が現地住民との間でいざこざを起こしてそれが国際的な非難の的になったりすることを恐れたためであるとも考えられる。このためカタンガ州への進撃を開始した後も、日本軍は決して楽ではない行軍を強いられることになった。

第六十話 早すぎた革新（後書き）

富士「一体全体、この戦闘団とはどういう編成なのだ」

作者「近々編成表を資料集の方に掲載するので、それまでお待ちください。一個大隊強の人員にあらゆる兵器を装備させるとなると、編成を考えるのにずいぶん長い時間を要したのです……さすがに、弾道弾迎撃用のミサイルは別編成ですが」

大隅「ところで、師団の編成は？」

作者「戦闘団が四個で旅団、旅団が四個で師団だよ。平時は戦闘団単位で駐留するけれど、有事の際には同じ旅団や師団に所属する戦闘団の中から部隊を抽出して、機甲大隊や歩兵連隊も組める」

三笠「機動性は申し分なさそうですが、各個撃破の心配が無きにしても非ずですね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「コンゴに送られた雛鳳は暇でしたが、ある悩みを抱えておりました。次回『年功序列の悲哀』ご期待下さい」

第六十一話 年功序列の悲哀

コンゴ沿岸に派遣されている第一艦隊は、戦闘団による南カサイ鉱山国の攻略開始以後は後方支援に徹することになった。一応の偵察は行ったものの反政府組織の機甲部隊や航空隊は発見できず、戦闘機を用いた航空攻撃を行うような目標が見つからなかったからである。

八月二十三日、空母「雛鳳」予備士官室。

「はあ」

「如何なさいました、長官」

「最近任務が輸送ばかりだから、暇なのよ。船体はほとんど動かないし」

雛鳳の言葉どおり、目下のところ「雛鳳」航空隊の任務は殆ど回転翼機による前線への物資の空輸のみ。搭載していた上陸用舟艇も物資の陸揚げに駆り出されるばかりであり、雛鳳自身は大した仕事もないまま、毎日いくらかの書類に目を通すぐらいのことしかやることがなかったのだ。

「内地に帰れば、そのようなことも言っていられなくなるのでは？
なにせ長官が今なさっている作業は全て『コンゴ派遣艦隊旗艦』
としての任務なのであって、『連合艦隊旗艦』としての任務は内地で溜まっていく一方なのですから」

秋雨の言うとおり、雛鳳が今務めている役職は「連合艦隊旗艦」と「第一艦隊旗艦」、そして「コンゴ派遣艦隊旗艦」と旗艦職だけで三つになる。本来確認しなければならぬ書類の量は並大抵では

なく、ましてや就任から一年と経たないうちに内地で職務を行えない状況に追い込まれたのであるから、彼女が内地に帰ってからの激務は想像に余りあるものと言えた。

「せめて、あと一年秋津洲元長官が現役でいてくれれば……元帥府に列せられたなら、生涯現役じゃないの？」

「船体が現役を離れば、例え海軍三等水兵だろうと元帥海軍大将であろうとそれまでです。秋津洲元長官も瑞穂予備役中將も、余程のことが無い限り現役には戻りません」

「連合艦隊旗艦が内地どころか太平洋から一カ月以上離れるのは、十分『余程のこと』だと思っただけけれど」

事実だが無愛想な秋雨の物言いに、機嫌を損ねた雛鳳は口を尖らせる。彼女から見れば、自分より秋雨の方が連合艦隊旗艦として適任であり、できることなら今すぐにでも代わってもらいたいというのが正直なところであった。

「ですから、そういうことではなくてですね……なんと申し上げれば良いやら」

秋雨としても、自分のほうが事務処理能力や統率に長けているのではなからうかという思いは確かに存在していた。だが彼女はそれ以上に上下関係を重んじるため、上官である雛鳳の前でそのことはおくびにも出さないように努めていた。

「秋雨、連合艦隊の旗艦を代わってもらうのは……無理？」

「あ、当たり前です！ 私はあくまで一介の駆逐艦、艦魂の階級で言えば大佐に過ぎません。駆逐艦の艦魂が連合艦隊旗艦を務めた例など、寡聞にして聞いたことはありません！」

「とは言っても、『秋雨』型駆逐艦は一昔前の巡洋艦と殆ど同じ大

きさ。巡洋艦なら日清戦役時の松島元長官の例があるみたいだから、不可能な話ではないと思うけれど」

どうにかして連合艦隊旗艦の職責を免れようとする雛鳳に対し、規律に五月蠅い秋雨の堪忍袋の緒は今にも音を立てて切れそうである。しかし飽くまで雛鳳を補佐する副官たり得んとする彼女の矜持が、既の所で彼女の理性を保たせていた。

「あの頃は、松島元長官たちが我が軍における最大の戦闘艦だったというだけです」

「災害救難艦っていう名前でも、戦闘艦なの？」

「戦闘機や上陸用舟艇を積んで、艦隊旗艦としての設備も持つ艦が戦闘艦とまらない訳が御座いません」

「むう……いっそ、私と秋雨の宿る船体が逆だったら楽なのに」

「今さら仰っても、詮無きことです」

洪々作業を再開する雛鳳を見て、秋雨は内心彼女に同意する。さりとして彼女の言ったように、今更あれこれ言ったところで何の解決にもなりはしないのであった。

第六十一話 年功序列の悲哀（後書き）

富士「まあ、反乱軍は海上戦力を持っていないのだから、こうなるのも無理は無いな」

作者「そもそも、ザイル自体海岸線をほんのわずかしか持っていないので、政府軍であろうと海上戦力の必要性は低いのですけどね」

敷島「だからといって、史実の現有戦闘艦艇が『シエルシェン』級魚雷艇一隻だけっていうのはお粗末すぎる気がするよ。引き渡しも三十年以上前みたいだし」

作者「ですから、コンゴ動乱が収まったら日本から兵器を輸出するつもりです。いつもどおり、資源と引き換えでね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回でコンゴ動乱が終了します。次回『待ち受ける旗艦の重責』ご期待下さい」

第六十二話 待ち受ける旗艦の重責

戦闘団がカタンガ州で戦闘している間、日本政府はコンゴとの間で反政府組織鎮圧のために武器を輸出することをコンゴ政府に提案。しかし、その反政府組織の影響で未だに国内が大きく混乱しているコンゴ政府としては満足に武器の代金を支払うことができず、このままでは日本から十分な軍事支援が受けられないことを苦慮していた。

そこで、日本はコンゴ国内にある鉱山に注目。旧カサイ鉱山国にあるチカパ周辺のダイヤモンド鉱山や、カタンガ州にあるウラン鉱山の採掘権を代金の代わりにすることで、一九八〇年までの二十年間で以下のような兵器を輸出または現地生産することになった。

陸軍向け（三個師団分）

戦車二四〇両、自走砲四八〇両、小銃及び拳銃合計五万五千丁、航空機九六〇機等

海軍向け（多くは国境の河川や湖沼に配備）

甲型水上艦及び潜水艦各二隻、乙型及び丙型水上艇各三六隻

空軍向け

二〇式戦闘機、練習機、中型回転翼及び小型回転翼機各一二〇機

（人口一五三八万人、陸軍四万五千名、海軍及び空軍各一万五千名）

なお世界の共産主義勢力が日本の手で早期に放逐されたことや、日本が反政府組織の鎮圧に大きく貢献したことから、史実で共産主義のソビエトに接近していたルムンバは資本主義の日本に接近。結果としてルムンバによる大統領解任決議（九月）や九月十四日に発生するはずであったジョゼフ・モブツ（史実では後にモブツ・セセ・セコと改名）参謀長による反共クーデターは発生せず、ルムンバの

拘束（同日）や暗殺（翌年一月十七日深夜）も無かった。

この大統領と首相の仲違いが消滅したことは、コンゴにその後も大きな影響を及ぼすことになる。一九六〇年十二月十二日のルムンバ派側近アントワヌ・ギゼンガによるスタンレーヴィル（キサンガニ）での新政府樹立、翌年一月のギゼンガ政権による北部カタンガ共和国吸収、七月十六日のアドウラ政府成立といった出来事が全て無くなったのだ。

反政府勢力の乱立による混乱や、またそれらの結集も無かったことで、日本の軍事支援を受けたコンゴ政府は反政府勢力の各個撃破に成功。日本軍が一九六〇年十一月三十日に第一次派遣部隊を引き揚げたものの、「雛鳳」が搭載していた大量の武器弾薬を購入することで翌年中にはおおむね国内の平定に成功した。なお、派遣期間中の日本軍の損害は以下のとおり。

陸軍

装甲車三両、偵察警戒車一両、中型回転翼機一機、小形回転翼機及び観測機各二機喪失

（大半が不整地や操縦の失敗による事故及び故障で、戦闘による損失はごく一部）

戦死四十八名、負傷百四十四名

（負傷者に病人は含めないが、戦死者には戦病死を含む）

海軍

中型回転翼機二機海中投棄、その他数機損傷

（輸送任務中对空砲火により損傷し、修理困難とされ廃棄されたものの）

戦死者無し、負傷二名

（被弾した機体の搭乗員）

一九六〇年十一月三十日、約三か月の任務を終えたコンゴ派遣戦闘団を収容した第一艦隊はコンゴ沖を出発。途中往路と同じ港湾で補給を受けながら、将兵がそれぞれの家で新年を迎えられるよう、一九六〇年中には横須賀へと帰港する運びになった。

「やっと終わった……どうにか、内地で新年を迎えられそうね」

「ええ……というより、そのつもりで予定を調整したようですがね」

仏印紛争での五式戦闘機を除けば戦後世代の新兵器を初めて大規模に投入した海外派兵は、いくらかの犠牲を出したものの大きな災厄も無く終わった。一安心といった様子で自室の机に突っ伏している雛鳳を見て、秋雨は自分たちが内地に帰ってからの残務処理を心配しながら、「失礼致します」と告げて予備士官室を後にした。

この後、第一艦隊は十二月二十九日に横須賀へと帰港。しかし秋雨の予想どおり、第一艦隊の艦魂たちは年明け早々半年近くの間溜まっていた無数の書類と格闘しなければならなくなった。

第六十二話 待ち受ける旗艦の重責（後書き）

作者「南無三。時系列が混乱しすぎて、第二次太平洋戦争とブルーリボンの話をすっ飛ばしてしまった」

富士「第二次太平洋……ああ、南米の話か。だが、史実ではそんな衝突は無かったはずだが？」

作者「第三国が介入して、南米のパワーバランスに変化が生じれば十分あり得ます。無論、この場合先に仕掛けるのは、失地回復を目指すボリビアやペルーと言うことになりますね」

敷島「で、その介入する第三国って……まさか」

作者「ボリビアとペルーには金、銀、銅、鉛、錫、鉄、モリブデンと資源が目白押しですからねえ……おっと、口が滑りました」

三笠「そこまでがめついと、いつか竹箆返しがありそうで怖いですが……次回予告をお願いします」

作者「まずは、第二次太平洋戦争編を先に投稿致します。次回『海を目指して』ご期待下さい」

第六十三話 海を目指して

日本はワシントン及びロンドン海軍軍縮条約の期間中、ブラジルやメキシコなどへと軍事技術の支援などを実行。これは中南米の各国にある程度の軍事力を持たせることで、対抗上アメリカ軍が本土の南部にもある程度の戦力を割かなければならない状態に追い込む目的があった。

この目論見は功を奏し、アメリカは太平洋上の要衝であるハワイやフィリピンに十分な戦力を配置することが困難な状態に置かれ続けた。そして当初は援助の対象となっていなかった国々も、ブラジルやメキシコなどに対抗するため、対米戦後には日本に援助を求め始めたのだ。

この中には、一八八四年に調印されたバルパライソ条約により、内陸国となってしまったボリビアも含まれていた。既に相手国であったチリは対米戦前から援助を受けており、このままでは再びチリに領土を奪われてしまうのではないかという不安も無いわけではなかった。

ボリビアは自国で産出される金銀や錫、さらには鉛といった金属の優先的な輸出と引き換えに、日本から軍事支援を受けることに成功。同じくチリとの戦争で港湾都市のアリカ等を失ったペルーとともに、失地回復の時を狙っていた。

そして戦後第一世代の兵器が本格的に就役を始める直前の一九五九年の時点で、ボリビアとチリ、及びペルーは以下のような戦力を保有していたのである。

・ボリビア（人口三三五万人）

陸軍三万名、二個師団（ラパス、サンタクルス）、戦車一六〇両

沿岸警備隊一五〇〇名（河川やチチカカ湖に配備）

空軍二四〇〇名、五式戦闘機及び攻撃機、練習機各四〇機

・ペルー（人口九九三万人）

陸軍九万名、六個師団（リマ、ピウラ、イキトス、ワヌコ、プーノ、タクナ）、戦車四八〇両

海軍四五〇〇名、四千トン級軽巡洋艦二隻、千トン級駆逐艦一二隻

（トルヒーヨとカヤオに配置）

沿岸警備隊三〇〇〇名（船艇保有数は日本の四分の一）

空軍一六〇〇名、五式戦闘機四〇機、五式攻撃機及び練習機各二〇機

・チリ（人口七六四万人）

陸軍六万名、四個師団（サンティアゴ、イキケ、ラ・セレナ、ブンタアレナス）、戦車三二〇両

海軍四五〇〇名、四千トン級軽巡洋艦二隻、千トン級駆逐艦一二隻

（イキケとブンタアレナスに配置）

沿岸警備隊六〇〇〇名（船艇保有数は日本の半分）

空軍四五〇〇名、五式戦闘機八〇機、五式攻撃機、練習機及び双発輸送機各四〇機

一九五九年四月三日、ボリビアとペルーはチリに宣戦布告。同日中にペルー陸軍の二個師団とボリビア陸軍の一個師団がそれぞれチリ領内へと侵攻し、国境のアリカがペルー軍によって、オヤグエが簿伊ビア軍によって即日占領された。

同日、ペルー海軍軽巡洋艦「チチカカ」。

「撃ち方始め！」

ペルー海軍のうち軽巡洋艦一隻と駆逐艦四隻が、アリカの市街地へと砲撃を加える。対するチリ軍も陸上に配置されているカノン砲で応戦するが、日本が対米戦で使っていた移動式の六インチカノン砲がたった四門では、まともな命中精度など期待すべくも無かった。

チリ軍への攻撃は陸海からのものに止まらず、噴進弾を搭載した五式戦闘機が航空攻撃を開始。チリ空軍は東のアルゼンチンにも備えるため、南北四千キロメートル以上に亘る長大な国土に限られた航空戦力を分散配置せねばならず、迎撃機を出してもなかなか国境まで到着できないのだ。

そして国境への往復で燃料の大半を消費してしまうため、戦闘地域の上空で迎撃できる時間も限られる。燃料が少なくなれば帰還のために基地へと戻らなければならず、その隊に否が応でも敵に後ろを見せなければならない。

また航続距離の都合から、ペルーやボリビアとの国境に向かうことができるのはイキケの一個航空隊のみ。ペルーやボリビアが差し向けられる戦闘機の半分にしかならず、特に航空戦に関して言えば、チリは圧倒的な苦戦を強いられることが確定的であった。

このような状況では、チリ陸軍の将兵の士気は下がる一方である。そこでチリは、どうかして目に見える形で戦果を挙げ、前線の将兵や国民を鼓舞しなければならなかった。

開戦翌日の四月四日、かつてボリビア領であったアントファガス夕港を、チリ海軍の軽巡洋艦一隻と駆逐艦四隻が出撃。目標は北部沿岸地帯に艦砲射撃を行っているペルー艦隊であり、劣勢に追い込まれたチリとしては何としても負けられない戦闘であった。双方

の艦船名は以下のとおり。

・ペルー海軍

軽巡洋艦チチカカ、駆逐艦ナポ、クラライ、マラニョン、ティグレ
・チリ海軍

軽巡洋艦サン・ペドロ、駆逐艦ランコ、マイフエ、リニフエ、コリ
コ

第六十三話 海を目指して（後書き）

富士「こう言っては悪いが……海戦とは言っても、対米戦に比べる
と酷く小規模だな」

作者「八カ国協約や核兵器によって列強同士の戦争がほぼ完全に抑
止されている以上、戦争当事国はどうしても中小国になりがちです。
それに、後々もつと小規模な海戦も出てきますよ」

三笠「これより小規模と言いますと、最早沿岸警備隊同士の戦闘ぐ
らいしか思い浮かびませんが……次回予告をお願いします」

作者「ペルー艦隊を追ったチリ艦隊の命運や如何に？ 次回『乗員
不足の宿命』ご期待下さい」

第六十四話 乗員不足の宿命

午前十一時、チリ艦隊とペルー艦隊は、アrikaの沖においてお互いを電探で捕捉。この時の距離はおよそ二十海里であり、チリ艦隊が北方に、ペルー艦隊が南方にそれぞれ向かう形で反航する状態であつた。

「全艦取舵二十、前進全速！ ペルー艦隊を、一刻も早く射程に捉えろ！」

チリ艦隊は自分たちの右舷側をペルー艦隊に向けることで、全ての艦砲と発射管が敵の方向へと向けられるようにした。未だに砲撃を開始するには距離が離れすぎていたが、ペルー艦隊が今なおこちらに向かつて来ている以上、遅かれ早かれ射程圏内に突っ込んでくると踏んだのだ。

同時刻、ペルー海軍軽巡洋艦「チチカカ」。

「面舵一杯、前進全速」

一方のペルー艦隊としては、ここでチリ艦隊と戦闘を行って、陸戦の支援に回せる貴重な艦隊戦力をすり減らしたくはなかった。なのでまずは魚雷の一斉射と短時間の艦砲射撃を浴びせ、その後は全速力で洗淨を離脱し、ペルー本土への帰還を目論んだ。

だが細身な軽巡洋艦は、船体の大きさに比べ、旋回には時間がかかる。そのため百八十度の回頭には二分近い時間がかかり、その間に着々と距離を詰められてしまった。

とはいえ、一度回頭を終えてしまえばペルー艦隊に分がある。そこでチリ艦隊は高速な駆逐艦だけを突撃させ、一海里でも距離を詰めさせた後に魚雷を発射、魚雷に命中によってペルー艦隊の足止めを行おうとした。

その後、四隻の駆逐艦は三十分以上に亘ってペルー艦隊を追撃。いつしか九隻はペルーの沿岸に入っていたが、目に見える戦果を欲していたチリ艦隊は、多少の危険を承知の上で突撃を続けた。だがその時、チリ海軍の駆逐艦「ランコ」の対空伝単に反応が出る。

「ほ、北北西より航空機の編隊が来ます！ 速力二百海里、数はおよそ十機、距離百海里！」

これは水上艦隊からの報告を受け、アレキパから出撃した十二機の五式攻撃機であった。十二機はそれぞれ一本の航空魚雷を搭載しており、小癩にも自国の目と鼻の先に出てきたチリ艦隊が、二度と出てこれないよう痛撃を見舞おうとしていた。

「全機突撃！ ここで四隻とも叩くぞ！」

四隻の駆逐艦を目視で捉えた攻撃隊は、一斉に低空へと舞い降りる。そして四隻の駆逐艦にそれぞれ三機が向かい、立て続けに魚雷を投下した。

駆逐艦たちは必死に対空砲火で応戦するが、乗員を減らすために対空火器を主砲と二基の四〇ミリ四連装機関砲だけにしてしまった状態では、まともな弾幕は展開できない。結局一機たりとも撃墜することができなかったどころか、全機に魚雷の投下を許してしまった。

こうなつては、最早ペルー艦隊を追撃するどころの話ではない。四隻の駆逐艦はそれぞれ思い思いの方向へと転舵して、魚雷を回避しなければならなかった。

そしてまず、単縦陣の二番目を進んでいた「マイフエ」に一本が命中。轟沈こそしなかったものの、左舷側の推進軸に繋がっていた前部機関室が水没し、機関出力が半減したことで速力は一気に二十五ノットにまで低下した。

続いて魚雷の餌食となったのは、四番艦の「コリコ」だ。彼女は一本目の魚雷が艦首のほぼ先端に命中したことで、そこから倉庫や錨鎖庫へと大量の海水が流入。続いて二本目が今度は艦尾の左舷側に食らいつき、爆発の衝撃で左舷の推進軸と舵が破壊されたのだ。

こうなつては、最早彼女に行動の自由は無い。「コリコ」の艦長はすぐさま総員退艦を発令し、自らも装載艇に乗って脱出を始めた。やがて「コリコ」は、乗員全員が脱出する間もなく急速に左舷へと傾斜していき、間もなくその場で横転した。

「攻撃隊、撤退していきます」

「そうか、良かった……よし、『コリコ』の乗員を救出後、イキケに戻るぞ！」

駆逐艦一隻を失い、さらに一隻を撃破されたとはいえ、ペルー艦隊を本土から追い払うという最低限の目標は達成された。少なくともチリ海軍の将兵たちはこの時こう考えていたが、その機体はあっさりと撃ち碎かれることになる。

第六十四話 乗員不足の宿命（後書き）

大隅「一個中隊の攻撃で一隻撃沈、一隻撃破ですか……対米戦時の命中率と大差ないですが、艦隊の対空火力が貧弱なことを考えると少ない気がしますね」

作者「艦隊側の火力不足と、攻撃隊側の練度不足で帳消しということだよ。ただ練度不足は艦隊側も同じだから、一機も撃墜できなかったけど」

富士「まあ、近接信管が無ければそんなものか」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「チリ海軍を待ち受けていた、さらなる困難とは？ 次回『泣きっ面に艦隊』ご期待下さい」

第六十五話 泣きっ面に艦隊

「ぜ、前方より大型艦二隻！　さらに小型艦八隻がこちらに向かって来ます！」

手負いのチリ艦隊へと向かって来た、十隻の艦隊。それは先程までチリ艦隊が追撃していた五隻に加え、軽巡洋艦「コロコヴァド」、駆逐艦「カラフクエン」、「パングイプリ」、「ピレフエイコ」及び「コンスタンシア」を含めたペルー艦隊であった。

「馬鹿な、ペルー艦隊に増援が……距離と速力は？」

「距離二十海里、測量三十ノットです」

「全艦、取舵一杯！　急いでこの海域を離脱するぞ！」

だがこの時、三番艦の「リニフエ」は「コリコ」から脱出してきた装載艇の収容を行っており、すぐに動ける状態ではなかった。そして二番艦の「マイフエ」は、なんと「ランコ」からの命令を無視してペルー艦隊へと突撃を始めた。

「おい、『マイフエ』は何をしている！」

「そ、それが……『マイフエ』から『我、突撃セントス。二隻は至急離脱サレタシ』との通信です！」

「そうか、『マイフエ』は逃げても追いつかれるから……止むを得んか」

十分後、彼我の距離が十海里にまで近づいたところで、まずはペルー海軍の軽巡洋艦が砲撃を開始。電探を用いた射撃とあって命中精度は高く、初弾から至近弾が続出した。

「敵艦隊、砲撃を開始しました！」

「取舵三十！ 魚雷発射準備急げ！」

この時、既に「マイフエ」の艦長は戦死を覚悟していた。そこでせめて二隻の軽巡洋艦に魚雷を命中させることによって、ペルー艦隊の統率を乱し、「ランコ」と「リニフエ」が撤退するまでの時間を稼ごうとしたのだ。

そして二隻の砲撃開始から一分と経たぬ間に、「マイフエ」の一番主砲塔に六インチ砲弾が命中。砲塔は正面の上方から叩き潰される形になり、さらには火災が発生したことで、砲塔内の弾薬がいつ引火してもおかしくない状況に追い込まれた。

「艦長、このままでは一番砲内部の弾薬に誘爆しかねません！」

「消火作業急げ！」

「一番から六番、魚雷発射準備完了しました！」

「よし、目標は敵一番艦及び二番艦！ 魚雷一番から六番、発射！」

六本の魚雷が扇形に放たれた直後、火災が「マイフエ」一番主砲塔の下にある弾薬庫へと到達、開戦に備えて安全装置を外されていた砲弾が一斉に誘爆し、彼女の艦首は長さおよそ二十メートルに亘って吹き飛ばされた。

艦首の断面から、艦首の居住区へと海水が流入する。そして艦首は瞬く間に沈下を始め、やがて機関室や重油が漏れ出た重油タンクにまで浸水が及んだことで、艦全体が沈み込んでいった。

「右舷前方より雷跡、数は六本！」

「面舵十五、前進全速！」

だが扇形に放たれた六本もの魚雷を回避することは難しく、一本が「サン・ペドロ」の左舷艦尾を浅い角度で決る。左舷推進軸と二枚の舵は破壊されて用を為さなくなり、また艦尾の艦底にあった重油タンクからは、大量の重油が漏れ出し始めた。

「残った魚雷が、『コルコヴァド』に向かいます！」

「上手く避けてくれれば良いが……厳しいか」

だが「コルコヴァド」にとって、魚雷の回避は前方の「サン・ペドロ」以上に困難であった。というのも、「サン・ペドロ」が魚雷を回避する直前まで、五本のうち三本の魚雷は「コルコヴァド」から見て「サン・ペドロ」の陰にあったからである。

「面舵十五、前進一杯！」

「駄目です、避けきれません！」

一本目が前部機関室に、二本目が第三主砲塔の真下に、三本目が舵に命中し、「コルコヴァド」の船体は大きく振動する。これによって前部機関室と舵が破壊され、さらには三番主砲塔と四番主砲塔の下にあった弾薬庫に浸水が発生し、彼女は一瞬にして戦闘能力を失った。

「『コルコヴァド』より入電、『総員退艦発令』！」

「全艦、『コルコヴァド』の生存者を救出次第帰投しろ！ どのみちあの駆逐艦はもう駄目だ、これ以上の追手は来ないだろう」

その後、ペルー艦隊は「コルコヴァド」の乗員を救助して予定どおりカマナの海軍基地へと帰投。だが主力艦であった軽巡洋艦二隻が撃沈破され、この後は陸上戦闘を支援するための艦砲射撃を行うことが難しくなってしまった。なお、双方の損害は以下のとおり。

・ペルー側損害

軽巡洋艦「コルクヴァド」沈没、「サン・ペドロ」中破

・チリ側損害

駆逐艦「コリコ」及び「マイフエ」沈没

第六十五話 泣きっ面に艦隊（後書き）

朝日「何やら、随分あっさりと船が沈んでいる気が致しますな」

作者「作中で何度か書いたけれど、日本が輸出しているのは飽くまで船の部品だけ。最終的な建造は輸入した国が行うことになるから、工作精度の低さによる耐久性の低下は十分考えられるよ」

富士「まあ、何隻も軍艦を建造していれば技術は向上していくだろうが……なぜ、素直に日本で完成させた艦を輸出しないのだ？」

作者「これはほぼ感情論になってしまいましたが、日本で生まれた艦艇や艦魂を外国に行かせるのがどうも忍びないのです」

敷島「つまり、うちの娘を嫁にはやらんぞ……ってこと？」

作者「身も蓋もない言い方をすれば、そうなります。ましてや賠償艦なんて言うのは、私からしてみれば娘が無理やり連れ去られるようなものですから、対米戦の講和時にも軍艦の譲渡を強いることはしませんでした」

三笠「それで、祖国に反感を持つ理由がある船だけを鹵獲という形式で編入したということですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回で、一先ず第二次太平洋戦争は終わりです。次回『悲願成就』ご期待下さい」

第六十六話 悲願成就

アリカ沖での海戦の後、艦砲射撃に有用な軽巡洋艦が二隻とも戦闘不能に陥ったペルー海軍は、駆逐艦を用いた沿岸警備に徹するようになる。駆逐艦を用いた陸上への艦砲射撃も不可能ではなかったものの、これ以上海軍艦艇を失うわけにはいかなかった。

一方のチリ海軍も、ペルーの支配領域へと艦艇を向かわせて危険に晒すような余裕は無い。十分な対空火器を持たない駆逐艦が、どれほど航空攻撃に対して脆弱であるかということがはっきりと証明されてしまった以上、やはり陸上への支援砲撃によって得られるであろう戦果に比べて危険が大きすぎるのだ。

チリ海軍の健在な二隻の軽巡洋艦にしたところで、人員と費用を節減するために、対空火器は四〇ミリ四連装機関砲を八基装備していたのみ。二〇ミリ機銃を日本と同じ数だけ積んでしまうと、それだけ一隻につき百名近い乗員の確保が必要になってしまうため、負担は小さくないとして取り止めになった。

この結果、互いに限られた航空支援だけが存在する陸戦が続いたことで、絶対的な戦力に劣るチリ軍はじわじわと後退を余儀なくされる。使っている兵器の質や練度に大きな差が無い以上は、兵力の違いがほぼそのまま双方の戦力差となった。

チリは山がちな地形であるため、平原で両軍の大部隊が真っ向くらぶつかり合うような戦闘は少ない。そのため、戦術次第である程度兵力の不利を補う余地もあったが、狭い山道に誘い込んでの各個撃破や森林地帯での遊撃戦による足止めは可能な場所が限られていた。

特にチリ軍が苦戦させられたのが、比較的障害物の少ない沿岸部での陸戦である。ここでペルー軍はまず優勢な機甲戦力を突撃させ、チリ軍の防衛線を各地で突破した後に、防衛線と正対している歩兵部隊と連携して挟み撃ちにするという戦術を採った。

侵攻するボリビア・ペルー連合軍を苦しめたものとしては、アンデス山脈による進軍の遅れが挙げられる。特に火砲を牽引した牽引車などにとっては、数千メートル級の山々を突破することは非常に困難であり、ボリビア軍は火砲の大半を国内に残した状態で侵攻しなければならなかった。

そこで、日本から派遣された軍事顧問が、牽引車に物資や医薬品を牽引させることを提案。これは水の現地補給が困難なアンデス山脈やアタカマ砂漠の存在も念頭に置いた策であり、結果としてボリビア軍の遠征能力を大幅に向上させた。

その後、チリ軍とボリビア軍は局地的な苦戦こそあれ、おおむね優勢のまま戦いを進めた。そして五月十五日にかつれのペルー領であったタラパカ地方の全域が、五月二十七日にボリビア領であったアントファガスタが陥落したことで、ボリビア・ペルー連合軍は完全な失地回復に成功したのである。

この進撃速度を実現させたのは、やはり両国が鉱山資源と引き換えに手に入れた、高度に自動車化された部隊の存在が大きいだろう。このおかげで兵士たちは、砂漠や山岳地帯もさほど疲労せずに突破することができたのである。

アントファガスタ陥落の後、既に二個師団が壊滅的な損害を受けて北部の防衛戦を継続することが不可能になっていたチリは、ボリ

ビアとペルーの両国に講和要約の締結を打診。六月二十三日に、チリからボリビアへとアントファガスタ地方を、そしてペルーへとタラパカ地方をそれぞれ「返還」することを主な内容とする講和条約が締結された。

この条約によって、ボリビアは太平洋戦争以来の悲願であった内陸国からの脱却に成功。日本からの支援を受け、本格的な海軍を整備するに至った。なお、西暦二〇〇〇年現在における三国の戦力とおおよその人口は以下のとおり。

・ペルー（人口三〇〇〇万人）

陸軍八個師団、十二万名、戦車六四〇両
海軍五千名、水上艦一七隻、水上艇二〇八隻、潜水艦一二隻
空軍二万二千名、戦闘機一六〇機等

・ボリビア（人口九〇〇万人）

陸軍二個師団、三万名、戦車一六〇両
海軍五千名、水上艦一七隻、水上艇二〇八隻、潜水艦一二隻
空軍七千名、戦闘機四〇機等

・チリ（人口一三〇〇万人）

陸軍三個師団、四万五千名、戦車二四〇両
海軍五千名、水上艦一七隻、水上艇二〇八隻、潜水艦一二隻
空軍一万二千名、戦闘機八〇機等

第六十六話 悲願成就（後書き）

富士「三国の海軍の規模が一緒なのは……手抜きか？」

作者「ペルーは周囲にさほど大きな海軍がいませんし、チリは国力から言ってこれ以上は厳しいかと。ボリビアは……手に入れた海岸線を奪われたくないという執念の表れです、多分」

大隅「しかし、日本以外の他国から兵器を輸入しないというのも不自然な気が致します」

作者「だから、敢えて適度に表現をぼやかしておいた。海軍は日本の艦艇ばかりとも読めるけれど、戦車や戦闘機は全く内訳を詳述していないよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、三話かけてブルーリボン賞編を描きます。次回『計画造船は続く』ご期待下さい」

第六十七話 計画造船は続く

こうして指定船の様相が大きく変化していく中で、日本は自国製艦船の性能を誇示する機会を欲するようになった。そして日本政府と海軍に目をつけられたのが、最速で大西洋を横断した客船に与えられるブルーリボン賞の獲得である。

ところがこのブルーリボン賞は、一九五〇年現在で東回り航路と西回り航路共に、イギリスの「クイーン・メリー」が十年以上その座を守っていた。彼女の記録した平均速力は、両航路で三十ノットを上回っており、少なくとも既存の日本客船では太刀打ちできない数字であった。

そこで日本政府は、細い船体を持ち比較的高速を発揮させやすい一万六千トン級指定船を基にした、ブルーリボン賞奪取用の高速客船を計画。建造費の半額と燃料代の一部を日本政府が負担するという条件で、日本郵船が「北海丸」を発注することになった。

彼女には一基八千馬力のディーゼル機関が八基搭載され、四軸に二基ずつの機関が宛がわれていた。これは一般的な一万六千トン級指定船の四倍に当たる出力であり、計算上はなんと四十ノットかそれ以上の速力が発揮可能であった。

このディーゼル機関は、軍事上機密にしておくべきだと判断された部分を除いて、将来の水上戦闘艦艇に搭載される予定のものをほぼそのまま採用している。つまり「北海丸」の建造と運用には、新型機関の実験という意味も多分に込められていたのだ。

設計の変更により、燃料槽の容量は原形となった指定船と比較し

ていくらか減少。とはいえ以下のように、イギリスの南西端にある
ビショップ岩礁から、ニューヨーク港の入口にいるアンブローズ灯
台船までの片道三千マイルは十分走破可能な航続距離を持っていた。

燃料容量一二八〇トン

ディーゼル八基四軸、合計出力六四〇〇〇馬力、計画速力四〇ノット
航続距離四〇ノットで三八四〇海里

三菱長崎造船所で一九五七年四月十五日に起工した「北海丸」は、
ほぼ一年後の一九五八年四月十日に進水。さらに一年後の一九五九
年四月一日に竣工し、幾度にも及ぶ試験運転と乗員の訓練が始まっ
た。

一万六千総トンの船体が、尋常ではない艦首波を蹴立てて疾駆す
る。これまでの試験航行において、彼女は最大四二・五ノットの速
力を記録しており、海外からもブルーリボン賞の獲得は時間の問題
であると噂されていた。

これは排水型の単胴船、ましてや船底が尖ってさえない船とし
ては限界に近い速度である。現に史実において、平均四十ノット以
上の記録を出してブルーリボン賞を獲得した船は、双胴船の「キャ
ットリンクファイブ」しかない。

「本当に、私がブルーリボン賞をもらってもいいのかな？」

船橋の上でこそばゆそうな表情を浮かべているのは、船魂の北海
丸だ。年の頃は十五ぐらいに見え、髪は風であらぬ方向に靡くのを
嫌って短く切つてある。そんな彼女が着ている服の胸元には、他の
客船の船魂が験担ぎでつけてくれた小さなブルーリボンがあった。

そう自問自答したところで、リボンが目に入った彼女は慌ててぶんと首を横に振る。このリボンをくれた友の期待を、そして日本や日本郵船がどのような目的で自分を生んだかを思い起こし、自分の為すべきことを再確認したからだ。

「少し、照れ臭い気もするけれど……ブルーリボンが取れるのは、日本では私だけ。なら、意地でも持って帰らないと！」

服の胸元を握り締めながら、彼女は決意の言葉を口にする。それが自分に期待を寄せている船魂たちに応えることであり、そして自分を生んだ日本と日本郵船へと、自分ができる一番の恩返しであると信じて。

その後、年が変わって間もなく、彼女は欧州へと旅立つ。そして一九六〇年の三月一日午後三時ちょうどに、イギリス沖のビショップ岩礁を発ったのであった。

第六十七話 計画造船は続く（後書き）

富士「こいつは、ブルーリボン賞をとれたらとれたで良いとして……その後はどうするんだ？」

作者「普通の客船と比べればほぼ半分の時間で大西洋を横断できますから、彼女に対する需要が無くなることは無いでしょう。ただ、航空機に対しては如何せん分が悪すぎますが」

敷島「客船だから時間がかかるし、食事代や人件費を考えれば料金もこっちの方が高くつくからねえ。航空機だけで急ぎの客を全員運べるようになったら、この娘にとってはまずいことになるよ」

三笠「ボーイングやダグラス、それにロッキードといったメーカーが第二次世界大戦で被害を受けているとすれば、旅客機の歴史も大きく変わっているかもしれませんね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、『北海丸』はアメリカ東海岸に到着しますが……次回『栄光と憎悪の交錯』ご期待下さい」

第六十八話 栄光と憎悪の交錯

ビシヨップ岩礁を離れた「北海丸」は一気に加速し、やがてその速力は四十ノットを僅かにではあるが超える数値を叩き出す。それを確認した北海丸は、自分の船体に異常が発生していないかと不安になったが、何の違和感もないと知って安堵の表情を浮かべた。

「肝心要の本番で何かあったらどうしようかと思っていたけれど……良かった」

後ろを見ると、つい先ほど発ったと思っていたビシヨップ岩礁が、早くも水平線の向こうに消えようとしていた。そして彼女は、船橋にある予備士官室へと戻ったのである。

その頃「北海丸」の船内では、ブルーリボン賞獲得の瞬間に立ち会おうと乗り込んできた乗客たちが揃って驚き、また感嘆の声を上げていた。そして改めて、この船がブルーリボン賞の栄冠に浴することを確信したのである。

四十ノットという破格の高速で航行している割に、船体の揺れは小さい。これは、日本政府が三菱造船にいた開発者の元良信太郎博士へと援助したことによって一九二〇年に実用化され、今や大半の商船に装備されているフィンスタビライザーのおかげであった。

フィンスタビライザーとは、ビルジキールと同じく船底近くの両舷についている小さなひれのことである。これが船の揺れに対応して角度を変えると、航行時に船体に沿って流れる水流を利用して揚力を発生させ、揺れを最小限に抑えることができるのである。

そしてフィンスタビライザーの効果は、船の速度が上昇するほど大きくなり、船が停止すると完全に失われる。つまり、ほぼ常に四十ノット前後の速度で航行することが予定されている「北海丸」には無くてはならない装備なのだ。

この後、彼女はおよそ三日間に亘って大西洋を西進。そして三月四日の午後三時三十九分に灯台船の元へと辿り着き、以下のような記録を樹立して、まずは西回り航路のブルーリボン賞を奪取したのであった。

航行距離……二九〇六海里（ビショップ岩礁とアンブローズの間）
航行時間……三日と三九分
平均速力……四〇ノット

栈橋に横付けされた「北海丸」から、多くの旅客が舷梯を降りていく。彼らは大半が晴れやかな顔をしており、自分がブルーリボン賞を獲得した客船の初めての商業航海に立ち会えたことを喜んでいたが、「北海丸」を出迎える人々は必ずしもそうではなかった。

「戦争でも日本にしてやられ、ブルーリボン賞も日本に奪われ……くそっ！」

アメリカのユナイテッド・ステーツ・ライン社の関係者たちが、「北海丸」を憎しみのこもった目で見つめる。それもそのはず、彼女の前に西回り航路のブルーリボン賞を保持していた客船は、ユナイテッド・ステーツ・ライン社の「ユナイテッド・ステーツ」だったからだ。

彼女は「北海丸」とほぼ同じ航路を通り、三日と十二時間十二分、平均速力三四・四一ノットの記録で一九五二年七月十五日に西回り

航路の平均速度記録を更新。それまでヨーロッパ勢が独占してきたブルーリボン賞を獲得したとあって、「ユナイテッド・ステーツ」とユナイテッド・ステーツ・ライン社の名声は一気に高まった。

そんな中で、まるで「ユナイテッド・ステーツ」の記録を潰すために仕組んだようにも思える「北海丸」の建造が為されたのである。また彼女が、それまでブルーリボン賞を獲得していた「ノルマンディー」や「クイーン・メリー」らと比較して遥かに小型であったことも、ユナイテッド・ステーツ・ライン社を初めとした一部のアメリカ人の神経を逆撫ですることになった。

「こんな記録、無効だ！ あんな二万トンもない船体にただディーゼルをたくさん積んだだけの客船に、ブルーリボン賞を取られてたまるか！」

だが、これは些か無理難題であると言わざるを得まい。もし「北海丸」の雛型を、彼女より一段階大型な二万四千トン級指定船に求めるのであれば、同じ速度を出すために必要な機関の出力は倍以上に跳ね上がってしまうのだ。

ましてや制定されたばかりの四万八千トン級や九万六千トン級ともなれば、その数字は十五万馬力や二十万馬力。それほど大出力の機関であれば燃料消費量も尋常ではなく、最早航空機による旅客輸送の発展に伴って将来的に大型客船の需要が低下すると見込まれていた当時ではどう考えても割に合わなくなる。

またおよそ半世紀前にブルーリボン賞を保持していた「ドイツ・ユラント」は一六五〇二総トンであり、その船体規模は「北海丸」とほぼ同等。このことから、船体の小ささを理由にした彼の批判は言いがかりだと言えるのであるが、彼自身にとってそれは些細な

ことであつた。

そんな彼らの意図を知ってか知らずか、「北海丸」は東回り航路での航海に備え、ニューヨークで食及び燃料を補給。三月六日の午前九時ちようにアンブローズ灯台船を通過し、「ユナイテッド・ステーツ」の持つ平均速力三五・五九ノットの記録に挑んだ。

第六十八話 栄光と憎悪の交錯（後書き）

富士「まあ、確かに『北海丸』は小さいが……そういえば、史実の現在でブルーリボン賞を有しているのはどんな船だ？」

作者「西回りは、ユナイテッド・ステーツが未だにその座を守っています。ですが東回りはその後、何れも『北海丸』より小さい三隻の双胴船が塗り替えていますね」

敷島「なんで西回りは更新されていないの？」

作者「私にも、はつきりとした理由は分かりかねます。ですが東回りの方が、西回りより高速が出しやすいなので、ひよっとしたら西回り航路を完走するにはある程度の凌波性も要求されるのかもしれないかもしれません」

三笠「あるいはただ単にユナイテッド・ステーツに遠慮しているのか、それとも……それはさておき、次回予告をお願いします」

作者「次回で、ブルーリボン編は一先ず完結です。次回『暴かれた嘘』ご期待下さい」

第六十九話 暴かれた嘘

休息を終えた「北海丸」の船体が、ニューヨークの港を後にする。そしてアンブローズ灯台船の側を過ぎ去ったところで、東回り航路のブルーリボン賞を奪取するための、彼女の二度目の戦いが始まった。

「あと半分……あと半分！」

西回り航路を順調に完走したとあって、北海丸は上機嫌だ。そんな彼女の意気軒昂ぶりを反映してか、「北海丸」のディーゼル機関は西回り航路の時よりも好調であり、ほぼ常に四十ノット以上の速力を発揮し続けた。

また彼女の機関が好調を示した背景には、西回り航路での高速航行が船員の練度を引き上げ、乗員たちを大出力の機関の運用に慣れさせたことも大きい。当初は六万四千馬力という大馬力の機関に苦戦していた乗員たちも、どうにかこつを掴みはじめたのだ。

最初「北海丸」を欧州へと回航する際、日本政府は四十ノット前後の航行を当初から行っておくことで、乗員たちを一日も早く大出力の発揮に慣熟させるべきであると主張した。だが日本郵船が、主にふたつの理由からこれに反対したため、回航は低速のまま行われたのだ。

第一に、回航費用が高くついてしまうこと。通常船舶の機関は、同じ距離を二倍の速度で航行させると燃料の消費量も二倍前後に跳ね上がってしまい、まず燃料代が増加する。そして頻繁に燃料を補給しなければならなくなるために、途中各地の港に停泊する回

数も増えてしまう結果、停泊時にかかる費用も加算されてしまうのだ。

第二に、試作品に近いような機関に不必要な高速航行をさせた結果、機関に疲労が蓄積してしまうこと。確率はほぼ無視して構わない程度であるとはいえ、最悪の場合就航前に機関が損傷してしまうえば、ブルーリボンの獲得が不可能になってしまう恐れもあるからである。不安要素は、少しでも取り除いておきたいのだ。

そんな彼らの思惑を知ってか知らずか、北海丸は喜々とした表情で自分の船体が東進する様子を見守っている。今の彼女は、他の船魂や人間と話ができない寂しさも、自分がブルーリボン賞を奪取することに對する恐れ多さも、殆ど気にならなかった。

北海丸の緊張がすっかり解されていた頃、それが乗客たちにも伝わったのか、当初は「北海丸」によるブルーリボン賞獲得を疑問視していた人々の不安も消え失せつつあった。

「それにしても、なんでこんなに他の船と合わないんだろう？」

北海丸は欧州に回航される前、内地にいた商船の船魂たちから、欧州航路に就役している商船の多さというものについて何度か話を聞いていた。ところが実際に来てみると、大西洋を行き交う船、特に客船の数は予想外に少なかった。

これは大西洋を横断する旅客便が、対米戦の早期終結に伴って史実以上の発展を見せたことにより、客船の需要低下も早まったためである。特に本土が空襲で大きな被害を受けたアメリカと異なり、航空機の製造工場がほぼ無傷であったイギリスやドイツによる空路の開拓は目覚ましいものがあった。

そして日本も、対米戦後に多数の軍用輸送機や軍事施設跡地が民間へと払い下げられたことで、民間空港の整備を含めた航空輸送路の整備が促進。内地だけで民間用空港は五十ヶ所（史実の同時期は二十三ヶ所）に上り、外地を含めればさらに十ヶ所を数えていた。

こうして他の船と殆ど会うことが無いまま、北海丸は三月九日午前十時三十三分にビショップ岩礁へと到着。以下の記録で東回り航路のブルーリボン賞も獲得し、日本のみならず世界の造船史に名を残すこととなった。

航行距離……二九四二海里（アンブローズとビショップ岩礁の間）
航行時間……三日と一時間三三分
平均速力……四〇ノット

この「北海丸」によるブルーリボン賞の奪取後、戦争の影響で予てより日本に反感を持っていたアメリカ人の一部からは、「ユナイテッド・ステーツ」の最高速力が四三ノットと公表されていたことを頼みにしてすぐさまブルーリボン賞を奪還すべきであることが上がった。

だが、この四三ノットというのはユナイテッド・ステーツ・ラインが過大に発表した数字に過ぎなかったのである。実際には公試の時にも三八・三三ノットを発揮するのが精一杯であり、ユナイテッド・ステーツ・ラインはここに至って、史実で一九七七年まで守り通してきた嘘を告白しなくなかった。

これにより「ユナイテッド・ステーツ」、ひいてはユナイテッド・ステーツ・ラインへの信頼は少なからず失墜。一方その頃日本では、将来に亘って日本がブルーリボン賞を保持し続けるために、新たな

高速客船の開発を開始していた。

第六十九話 暴かれた嘘（後書き）

大隅「法螺を吹いたばかりに自滅ですか。記録を破られたことに対する怒りにはまだ同情の余地がありますが、こればかりは自業自得と言う他ありませんね」

作者「そもそもスクリューを使って動く単胴船では、四〇ノット程度が限界らしい。だからそれが事実なら、最初から非現実的な数字だったということになるね」

富士「ミサイル艇の中には四〇ノットを超えているものが少なくないが、あれは船体の形状が違うからな。商船でやるのは絶対に不可能と言うわけではないしろ、少なくとも採算を取ろうと思えばおいそれとできる方法ではない」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、千島列島やアリュシャンの近海が舞台になります。次回『極北の邂逅』ご期待下さい」

第七十話 極北の邂逅

戦後、日本は世界各国へと兵器を輸出したが、その中にはブラジルやメキシコといった中南米の国々も含まれていた。そしてこれらの国が新型の兵器を保有することはアメリカにとって無視できないものであり、特に日本が隣国のメキシコへと兵器の輸出を開始した際には、中南米の緊張を高めるものであるとして露骨な嫌悪感を示した。

そしてまるで日本に脅しをかけるように、アリユーションのダッチハーバーやアラスカのアンカレッジから軍用艦艇が交代で出撃。カムチャツカ半島や千島列島の沖合に展開し、しばしば日本の沿岸警備隊やロシア海軍の艦艇とにらみ合う状況が発生した。

この状況を受け、日本海軍の大湊警備府に所属する第一警備戦隊は一個警備隊ずつを交代で千島列島の警備に当てることを決定。一週間ほどで大湊から千島列島の沿岸まで往復するという経路であり、出撃する警備艇には武装コンテナの他に臨検用の舟艇も搭載された。

一九六一年四月三日、千島列島沖を北上中だった「燕」以下四隻の警備艇はアメリカ海軍のディーレイ級護衛駆逐艦ディーレイ、クROMウェル、ハンマーバーグ、コートニーからなる第一〇一駆逐隊を発見。第一警備隊は西進する第一〇一駆逐隊と千島列島の間に割り込む形で、アメリカ側がこれ以上千島に接近することを防ごうとした。

「日本軍のLSMもどきが……小癪な真似をっ！」

自分たちの進路を塞ぎに来た第一警備隊を見て、富士に匹敵する

ような長身を持つ「ディーレイ」の艦魂が苦々しげに吐き捨てる。
アメリカ海軍の艦魂から見れば、日本は自分の祖国を不況に追いこんで戦争に仕向けた不倶戴天の敵であり、またかつての植民地であったフィリピンをまんまと自国の影響下に置いた忌々しい存在であった。

「おそらく、先頭を進んでいるのが旗艦のはず……なら、あんな小娘！」

ディーレイは「燕」の船魂と思しき少女を見つけると、そう言っ
て自分の露天艦橋から姿を消した。

同時刻、警備艇「燕」の船魂である燕は自分の艦橋の前に立って
「ディーレイ」の様子をつぶさに観察しながら、時折写真を撮っていた。彼女は大湊への着任以来、珍しい光景や船舶を見つけてはこうして写真を撮り、大湊にいる警備艇の船魂や時々訪れる駆逐艦などの艦魂に見せては情報交換をしていたのだ。

と、彼女のすぐ近くで突然眩い光が灯る。そしてそこから大柄の人影が突然燕のところに突進してきたが、日本海軍艦魂の中でも有数の動体視力と反射神経を持つ彼女は間一髪のところでは避けてみせた。その人影は悔しそうに舌打ちをし、やがて光が収まるとその姿がはつきりと見えた。

「あなたは？」

「あんたに名乗る必要も無いし、名乗りたくもない！」

ディーレイはなおも、腰に佩びていた刃渡り一ヤードのサーベルで切りかかる。燕はただ避けているだけでは埒が明かないと見るや、腰の鞘から刃渡り二尺の軍刀を抜き放って体の真ん前に構え、ディ

ーレイと正対した。

「そう言えば、さっき先頭の一〇〇六って書かれた護衛駆逐艦の艦橋から人影が消えたような……っていうことは、あなたはDE-1006『ディーレイ』の艦魂？」

「よく分かったわね……はあっ！」

ディーレイの刺突を、燕は屈みながら素早く左に避ける。そして軍刀を逆刃に持ち替えると、軍刀の峰をディーレイがサーベルを握っていた右手の甲に勢いよく叩きつけた。予期せぬ衝撃に彼女は手を放してしまい、飛ばされたサーベルは「燕」の甲板に回転しながら落ちていった。

「まさか、私が剣術でこうも後れを取るなんて……あんた……いえ、貴方は？」

「大日本帝国海軍第一警備戦隊第一警備隊の一番艇『燕』の船魂。階級は海軍兵曹長」

「そう……私はお察しのとおり、アメリカ海軍護衛駆逐艦『ディーレイ』の艦魂よ。覚えておきなさい」

ディーレイはそれだけ告げると、そそくさと自分の艦に戻ってしまふ。だが燕は、光に包まれて消える直前のディーレイが、非常に悔しそうな表情をしていたことに気付いた。

「もし、あの時の突きが平突きだったら……危なかったあ」

平突きとは、刀剣の刀身を水平にした状態で繰り出す突きのことである。こうすれば横に避けられたとしても、敵が刃の方向に避ければ横に薙ぎ、峰の方向に逃げれば峰を叩きつけることで追撃することができからである。元は、新撰組副長である土方歳三が考案

した技であるとされている。

この時は幸い大事に至らず、その後第一警備隊は四日後に大湊へと帰港。しかし燕とディーレイは、この後因縁浅からぬ間柄となるのだった。

第七十話 極北の邂逅（後書き）

富士「出会い頭に斬りかかるとは、失礼な奴だな」

大隅「その割には、燕も咄嗟によく反応しましたね。ただ、戦い方が喧嘩流の剣術にも思えますが」

（敷島、富士をじっと見て）「富士、燕に何を仕込んだの？」

富士「私は、私なりの方法で武術を教えただけだ。別段やましい意図は無い」

三笠「これは、今のうちに次回予告を済ませておいた方がよさそうですね。それではお願いします」

作者「次回、またもや燕とディーレイが鉢合わせします。次回『舷々相摩す』ご期待下さい」

第七十一話 舷々相摩す

千島沖での一件の後、アメリカは第一警備隊の行動が第一〇一駆逐隊の針路を阻害し、事故や武力衝突を誘発しかねない挑発的なものだったと日本政府に抗議。しかし日本政府にとってこの抗議は予想できていたとはいえ理解しがたいものであり、すぐさま「アメリカ海軍艦船が無許可で我が国の領海に侵入しようとしていたため、それを防止する目的であった」と反論した。

この一件において、護衛駆逐艦「デューレイ」が最も千島列島に接近した際の距離は、基線からおよそ十五海里。日本やその影響下にあるフィリピン、南洋諸島、ブルネイ及び北ニューギニアは領海を十二海里と主張しており、さらには五十年来の同盟国である中華民國やロシア帝国もこれに倣っているなど、領海を基線から十二海里としている国は史実以上に多かった。

一方でアメリカやイギリス、フランスなどが当時設定していた領海は、標準的なカノン砲の射程距離を基準とした基線から三海里までの範囲。こちらの説を採用するならば「デューレイ」と日本の領海にはまだ十分な距離があったことになり、第一警備隊による威嚇行動は正当性を欠いてしまうのだ。

そこで日本は四月二十日、領海や排他的経済水域の基準を国際的に統一する国際条約の締結を提唱。領海を十二海里と主張している国々は、自国の主張に裏付けが欲しかったので日本の呼び掛けに賛同し、またフランスやイギリスも無用の国際紛争を避けるためどちらかといえば肯定的であった。

しかし国際条約締結に向けた交渉が行われようとしている間にも、

アメリカの護衛駆逐艦や海洋調査船等がしばしばカムチャツカ半島や千島列島の近海に接近。その度に幌筵島の柏原にある幌筵警備部の巡視船艇や第一警備艇隊、海軍や空軍の航空部隊が共同で牽制していた。とはいえ沿岸警備隊の方は違法操業を企てるロシアの漁船なども警戒せねばならず、また第一警備艇隊は周辺海域へ展開できる期間が限られるせいで、常にアメリカの艦艇ばかり警戒しているというわけにもいかなかった。

四月二十四日、占守島東北東二十海里の海上。ここで再び、第一警備隊と第一〇一駆逐隊が相見えることになった。

「またアメリカの護衛駆逐艦……えーと、艦番号は……ええっ！」

三インチ速射砲の上に座っていた燕の持つ双眼鏡が先頭を進む護衛駆逐艦の艦番号を捉えると、燕は驚いた後に落胆の表情を浮かべる。四隻の艦番号は全て三週間前に出会った護衛駆逐艦であり、先頭の艦は紛れも無いあの「ディーレイ」だったからだ。

「まさか、向こうも一週間交代の三個駆逐隊で来てるの？」

燕の読みどおり、彼我の哨戒周期は共に一週間。そしてアンカレッジには「ディーレイ」級護衛駆逐艦十三隻が三個駆逐隊に分かれて配備されているため、「燕」と「ディーレイ」は原則としてお互い哨戒の度に鉢合わせしてしまう計算になるのだ。

「また、あの『ツバメ』が来たのね……今度こそ！」

そう呟くと、ディーレイは「燕」の艇首最上甲板へと向かった。しかし今度は移動した瞬間に切りつけるというような真似はせず、しっかりと燕が自分の存在を確認してから切りかかった。

「はあっ！」

「くっ……しまった！」

だが燕に一瞬とはいえ時間を与えたことで、彼女は反射的にディーレイの斬撃を思い切り受け止めることになってしまった。前回は受けるのに十分な時間が無く、刀をきちんと構える前に斬撃を受けたせいで偶然受け流せたものの、今回は僅かな時間の余裕が逆になつたのだ。

（このままじゃあ、どう頑張っても力負けする……どうしよう？）

ディーレイが上からサーベルを押し付けるようにしてくるのを、左手で切っ先の峰を支えてまで懸命に耐える燕だったが、体格の差があり過ぎてじわじわと追いつめられる。ここで、彼女は一か八かの賭けに出た。

第七十一話 魑々相摩す（後書き）

富士「またこいつか」

作者「私に技量があれば、艦魂を増やして四対四の乱戦なども表現できるのですけどね。今となっては本編の執筆そのものさえ断絶状態で、今までの貯蓄を食い潰している有様です」

敷島「合計八人での白兵戦……書き方を間違えれば、しっちゃかめっちゃかなことになるよ」

三笠「一応、現代まで書き終えているというのが不幸中の幸いではありますが……それでは、次回予告をお願いします」

作者「燕が放った起死回生の策と、それに対するディーレイの反応は如何に？ 次回『護るためなら』ご期待下さい」

第七十二話 護るためなら

「せえいっ！」

燕が左手を刀身から放したことで、ディーレイのサーベルは勢い余って燕の左側に逸れる。そして燕は右足を軸にして体を一回転させ、左足の踵を思い切りディーレイの左足、それも「弁慶の泣き所」である向う脛に叩きつけた。

「ぐうっ！」

「きゃあっ！」

ディーレイは燕の回し蹴りによる痛みには耐えきれず、また燕は無理な体勢から回し蹴りを放ったことでそれぞれろくな受け身も取れないまま倒れ込む。その拍子に二人とも獲物を落としてしまい、そしてどちらも手を伸ばしただけでは取れないようなところに飛んで行ってしまったため、二人ともそれを拾っただけで戦うのをやめた。

「回し蹴りだなんて……卑怯よ。誰に教わったの？」

「富士さん。日本海海戦に参加した、戦艦『富士』の艦魂から」

「日本海海戦？ ああ、バトル・オブ・ツシマのことね。長生きだから、色々な戦い方を知っているわけか」

これでは身体能力が互角でも不利だろうかと、ディーレイは悔しさの混じったため息を漏らす。彼女はと言えば就役以来アラスカやアリユーション方面の哨戒にかかりきりで、対日戦で生き残った艦魂たちと接する時間はろくに与えられていないのが現状であった。そのため、護身のためとして始めた剣術もほぼ我流で習得するしかなかったのだ。

一方の燕は、予想だになかった「卑怯」という言葉を氣にかけずっと俯いたままである。富士から教わった、実戦に特化している喧嘩流交じりの剣術は、彼女にとって戦法のひとつではあっても「卑怯な戦い方」ではないと思えていたからだ。

「回し蹴り……やっぱり、不味かった？」

「へ？ 何よ、気にしているの？」

自分の愚痴に燕が予想外の反応をしたことで、ディーレイは呆氣にとられてしまう。彼女にとって燕は、刀剣での戦いであろうと回し蹴りを躊躇なしに使うような、勝つためには手段を選ばない性格の持ち主であると映っていたからだ。よもや自分が何気なくこぼした一言をいちいち氣にする繊細さを持ち合わせているとは、微塵も思っていなかったのである。

「まさか、『卑怯』なんて言われるとは思っていなかったから」

「そりゃあ、正直に言えば氣に食わなかったわよ……でも正式な競技としての試合ならまだしも、流派も形式も無い戦いで、卑怯だとか言っていられる余裕は無いと思うけど？」

今度は、再び燕が思いもしなかった反応に驚く番であった。そんな燕の心境を知ってか知らずか、ディーレイは先程の不満を取り消すかのように、さらに言葉を続ける。

「それに、私たちは飽くまで軍艦の艦魂。人間で言えば生まれた瞬間に軍人であることを宿命づけられているようなものだから、そんな私たちが卑怯だとか姑息だとか言って自分の戦う手段を自分でいちいち封じていたら、最善の方法を見失って護るべきものも護れなくなるわよ？」

既に最前線に立つ艦魂としてある程度の年月（一九五四年六月三日就役）を生きてきたからこそ、ディーレイは自信を持ってこの言葉の口にした。しかし彼女は自覚していないものの、この言葉には手段を選ばず自分の祖国を袋叩きにした、自分が知らないかつての日本への皮肉も込められていた。

「なんてね……私だって十年も生きていないのに、分かったような口で何を言っているんだか」

得意になって語った自分を慌てて戒めようと、ディーレイは自嘲の意味も込めて苦笑する。そして自分の艦が千島列島から去っている、「燕」との距離が離れ始めたのに気付くと、「それじゃあね」と告げて「ディーレイ」へと戻っていった。

「手段を選べば……護るべきものも、護れない……かあ」

ディーレイの言葉を自分に言い聞かせるようにして復唱しながら、燕はとぼとぼ歩いて自分の部屋に向かう。頭ではディーレイの言葉にも一理あることは承知していたが、心の中には依然として大きなわだかまりが残ったままであった。

第七十二話 護るためなら（後書き）

敷島「それにしても、随分型破りな戦い方をするんだねえ」

作者「回し蹴りの一件は、かつて私が実際に使っていた我流の護身術を基にしております。私も燕ほどではないにせよ非常に小柄ですから、普通の戦い方では身を守れないのです」

大隅「相撲で言えば、往時の舞の海関のような状況でしょうか？」

作者「身長と体重の比率を考えれば、こっちの方がきついかもしくない。というより、身長と体重さえあればとくに自衛官の道を歩んでいるだろうね」

三笠「ということは、作者さんの身長と体重は……それはさておき、次回予告をお願いします」

作者「次回、日本の兵器輸出がアメリカを悩ませていきます。次回『予期せぬ包囲網』ご期待下さい」

第七十三話 予期せぬ包囲網

こうして燕とデューレイが哨戒の度に剣技を競うようになっていった間にも、日本とアメリカの仲は険悪になりつつあった。というのも、史実でアメリカやソ連から兵器の供給を受けていた国々に対し、日本が兵器の輸出を行ったり、現地生産をさせたりしていたからである。

そしてその中には、アメリカと陸路で国境を接しているメキシコや、同じく目と鼻の先にあるキューバも含まれていた。これらの国々が兵力を増強させることは、アメリカ本土の安全保障上無視できない問題であることは言うまでもない。

アメリカは日本に対し、度々武器輸出の自粛を要求。しかし天然資源と引き換えに軍事援助を引き受けた日本としても、今更その約束をふいにすることはできなかった。もしアメリカの要求を呑んで軍事援助を止めれば、その国の日本に対する印象が悪化することは避けられないからである。なお、日本が中米各国から提供されていた主な資源は以下のとおり。

- ・メキシコ
- 金、銀、銅、鉛、亜鉛、モリブデン、マンガン、アンチモニー、原油
- ・ドミニカ共和国
- ニッケル
- ・グアテマラ
- アンチモニー
- ・ホンジュラス
- 銀、亜鉛
- ・ニカラグア

金、銀

・キューバ

ニッケル、コバルト

特にメキシコは兵器の導入数も多く、日本への資源の提供量もまた然りであった。そのためにいくら国内の武装組織や麻薬の密売を阻止するという目的のため、艦艇は小型のものが中心だからとはいえ、侮り難い勢力を持っていた。

この結果として、アメリカは史実より遥かに限られた数の艦艇を、本土の沿岸にも少なからず配備しなければならなくなる。そのぶんアリューシャンや東部太平洋といった国境地域に回せる戦力が減少し、アメリカはいつ日本やロシアの艦艇がアメリカの沿岸に近づいてくるのかと恐れていた。

そして何よりアメリカにとって気がかりだったのは、日露だけでなく中米やカリブ海といった地域に配備されている艦艇まで、多くが誘導弾を搭載できるコンテナ式軍艦だということである。彼女たちは例え竣工から二十年が経過しようと、電子機器の詰まった艦橋と武装コンテナを交換すれば、ソナー以外はいつでも最新鋭の軍艦としての能力を取り戻せるのだ。

つまり、例え老朽化した船体を買ひ替える余裕が無くとも、必要な武装コンテナを必要な数だけ発注すればそれだけで近代化改装ができてしまう。さらには、甲型水上艦のコンテナを全て交換する場合にも数日あれば事足りるという、時間的な優位もあった。

そのため、中小国や発展途上国は挙ってこのコンテナ式軍艦をノックダウン生産するか、あるいは製造権を買って自国で建造。反対に欧米製の兵器は売り上げが伸び悩んだ結果、アメリカほどではな

いものの、イギリスやフランスにも日本の兵器輸出を快く思わない者はいたのである。

加えて、対米戦の早期終結や冷戦の不存在も、欧米が兵器市場で苦戦する要因となった。これにより、各国で退役して余剰になる兵器が少なくなったために、各国は自国製の中古兵器を安価で輸出できる量が限られてしまうようになったのだ。

とはいえ輸出用に兵器を新造すれば、費用対効果の面で日本製の兵器群に勝つことは難しい。同種の兵器の単価は互角でも、日本製の兵器はほぼ全てが一種類で様々な形での運用が可能なよう考慮されているので、使いまわしが利くのである。

また中古兵器を輸出するために、初めから自国用に製造する兵器の数を増やしてしまえば、財政上の負担が増加してしまう。そうなれば、結局のところは資金と資源の浪費になってしまい、文字通りの本末転倒であった。

対応に窮した欧米は、実戦で日本製の兵器に対して優位な戦闘を繰り広げることで、自国製兵器の性能を証明しようと画策。そこで自国の植民地が独立する際に赤字覚悟で兵器を売却し、軍需産業の顧客獲得に奔走した。

第七十三話 予期せぬ包囲網（後書き）

作者「しげん うま」

大隅「作者さん、いきなりバイオ○ザードのネタを持ちだすのはどうかと」

富士「しかし、ここまで資源に貪欲な日本と言うのも……まあ国内造船所の数は、ノックダウン生産やライセンス生産をさせている以上気にする数字ではないし、機密漏洩に対しては、輸出版の兵器を適度に弱体化させればいい話だが」

敷島「ところで、一昨日はやっぱり……行っただの？」

作者「ええ。丁度、某首相が沖縄でカンペを棒読みしていた頃に参拝しました……ただ案の定、一昨日と昨日はやけに体が重かったですが」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、アメリカがアリューション列島で核実験を行います。次回『因縁は続く』ご期待下さい」

第七十四話 因縁は続く

一九六五年十月二九日、アメリカ軍はアリューシャン列島のアムチトカ島において、「ロングショット」と名付けた地下核実験を実行。この実験は地下七一四メートルの地点で行われ、トリニトロトルエン換算で八十キロトン相当の核出力が計測された。

自国領土の目と鼻の先で行われた核実験に対し、日露は共同でこれを非難する内容の声明を出す。だがアメリカは抗議に一切の反応を見せず、二年後にはアムチトカ島がアメリカ原子力委員会によって地下核実験場とされるなど、対立姿勢を明確にしつつあった。

さらにアメリカ海軍は、一九五九年から日露に先駆けて弾道ミサイル搭載原子力潜水艦の就役を開始させる。そして最新鋭の「ラ・ファイエット」級では日本の「神武」級やその準同型艦であるロシアの「コリャーク」級がそれぞれ二十年で八隻と十二隻の建造予定に止まる中で、既に約三十隻もの弾道ミサイル搭載原子力潜水艦を完成させていたのだ。

こうした背景から、日本はそれまで北方の警戒に参加していた第一警備戦隊に加え、第一駆逐戦隊及び第一潜水戦隊を交代で千島沖に投入。さらには常時二隻を展開している原子力潜水艦についても最低一隻を東北以北へ差し向けることとし、最大限の監視体制をとった。

一九六九年十月二日、占守島東方を航行する駆逐艦「秋雨」予備士官室。

「雛鳳長官、大丈夫でしょうか」

横須賀に在るであろう、未だにどこか頼りない上官の名を呟き、秋雨はふうとため息を漏らす。一応横須賀には最低四隻の駆逐艦が常駐しているから、いざとなれば命令の伝達や部下の監督は彼女たちに手伝ってもらうこともできる。

とはいえ全ての任務を丸投げすることはできず、他の艦魂もやっているような文書の確認や情報収集は自力でやらなくてはならない。雛鳳はそれさえも面倒くさがる時があるので、彼女の側近となっている第一艦隊参謀長の秋雨としては頭の痛い問題であった。

「姉さん、入っていい？」

「霧雨？ いいわよ」

扉が開くと、日本では珍しい金髪を持った艦魂が、急いだ様子で現れる。彼女は「秋雨」型駆逐艦の四番艦であり、一番艦の「秋雨」と同年に就役した「霧雨」の艦魂、霧雨だ。身長は五尺を僅かに超え、体は燕ほどではないが華奢な感じは否めなかった。

「どうしたの？」

「あいつらだよ。燕にちょっかいを出してたとかいうアメリカの駆逐艦だ……案の定って言うのかな、あの『ディーレイ』ってやつもいるみたいだぜ」

霧雨の報告に、秋雨は顔をしかめる。燕がこの十年近い間に幾度となく寄せた報告では、「ディーレイ」の艦魂は艦魂の中でも相当に高い身体能力を有していることが明らかだったからだ。少なくとも自分が一騎打ちを挑めばただでは済まない相手であることは、秋雨自身よく承知していた。

その点、霧雨は燕ほどの身軽さは持ち合わせていないものの、単
純な移動速度や体力では

「どうする？ 燕がいれば、乗り込まれても安心なんだろうけどさ
……私じゃあ、良くて五分五分だろうね」

「一先ず、皆を自分の艦全体が見渡せるような場所に移らせて。但
し、向こうの艦魂を刺激しないために、屋外にはいさせないこと」
「了解。及び腰な気はするけど、それしかないか」

一方その頃、「ディーレイ」以下四隻の護衛駆逐艦も第一駆逐隊
を捕捉。ディーレイは艦首にある三インチ連装砲塔の上に座って、
四隻を虎視眈々と見つめていた。

「あの『ツバメ』クラスをそのまま大きくしたような艦……『アキ
サメ』クラスね。なら、敵情視察を試してみる価値はありそう」

そう言うと、彼女はそこから姿を消す。彼女が目指したのは、
砲や誘導弾発射機が並ぶ「秋雨」の艦首甲板であった。

第七十四話 因縁は続く（後書き）

大隅「あの、この霧雨という艦魂は、まさか……？」

作者「レーザーを撃ったり箒に乗ったりはしませんから、飽くまで参考にしたまだけでよ」

富士「その発言は、自らが故意犯であると認めているようなものだと思いますぞ」

敷島「確信犯？」

富士「それは誤用だ……まあ、貴様のことだからどうせ所謂『釣り』なのだろうが」

敷島「こんな餌に俺様が釣られクマー（AA略）」

三笠「いつも以上に壊れている敷島姉さんはさておき、次回予告をお願いします」

作者（三笠に一蹴された敷島を憐れみつつ）「初顔合わせで三人がとった、三者三様の行動とは？ 次回『金髪で悪いか』ご期待下さい」

第七十五話 金髪で悪いか

艦橋から自分の艦首を見下ろしていた秋雨は、ディーレイが「秋雨」の甲板に降り立つや否や彼女に気付く。そして「やはり乗り込んできたか」と言わんばかりに息をつき、これから起こりうる最悪の事態にも対処できるよう覚悟を決め、ディーレイの元へと移動した。

「あなたが、アメリカ海軍護衛駆逐艦『ディーレイ』の艦魂ですか？」

「ええ。あなたは、この『アキサメ』の艦魂ね？」
「はい」

不遜な態度のディーレイに内心苛立ちつつ、秋雨は極力冷静を装う。燕とディーレイが初めて会った時のことを考えると、ここで怒りの感情を表に出し、もしそれがディーレイに感付かれてしまえば、すぐさま白兵戦を強いられる恐れがあるからだ。

一方のディーレイはと言えば、冷静さは見て取れるとはいえあまり覇気の感じられない秋雨を、どこか軽蔑してさえいた。燕は小さい体ながらも自分の奇襲に素早く応戦していたが、この秋雨に奇襲を仕掛けたところで、まともな反撃はできないだろうと踏んだのである。

「そう、なら……お手並み拝見と行きますか！」

そう言うや否や、ディーレイは秋雨に全力で当て身を見舞おうとする。だがその一撃は、光と共に突如として二人の間に現れた何かによって阻まれることとなった。

「くう……っ！」

「ぐっ！」

「きゃあっ！」

予期せぬ衝撃に踏ん張りきれなかったディーレイと、ディーレイの当て身を遮った何か、そしてディーレイとの衝突によって突っ込んできたその何かにぶつかった秋雨は、それぞれの方向に倒れ伏した。

「いってて。姉さん、大丈夫か？」

「その声は、霧雨……って、大丈夫？」

秋雨も予想だになかった事態を前に、何事かと混乱する。だが先程放たれた光の正体が妹の霧雨であり、彼女は自分を庇うためにディーレイとの間に割って入ったのだということに一瞬で気づくと、慌てて霧雨に駆け寄った。

「あ、ああ……おいお前！ いきなり姉さんに何てことしてくれるんだ！」

「ちょ、ちよつと霧雨、落ち着いて……っ？」

大声でディーレイにまくしたてる霧雨を止めようとした秋雨だが、「姉さんは黙ってて」とでも言いたげに眼前へと突き出された平手を見て押し黙る。するとようやく衝撃から立ち直ったディーレイが、よろよろと立ちあがった。

「私はただ、その艦魂の力量を見定めようと思っただけ……ところで、あなたは『キリサメ』の艦魂？」

「ああそうだ。それより、まずは姉さんに謝ってもらおうか！」

「そう……ごめんなさい。ところで、日本生まれでも金髪の艦魂がいるのね」

まともに頭を下げないどころかすぐさま話を変えようとするデイレイに、霧雨はいよいよ堪忍袋の緒が切れそうになる。だがここで手を出せば艦魂同士の乱闘にもつながりかねず、そうなればこちらが膝を屈する羽目になりかねないと考えた霧雨は、辛うじて怒りを堪えた。

「ああ。私は見てのとおり金髪だよ。だが日本で生まれた、歴とした日本海軍の艦魂だ。それで悪いか」

実のところ、霧雨は日本海軍の中でも珍しい自分の金髪に、幾許かの疎外感を持っていた。三笠や富士のような西洋生まれの艦魂を別にすれば、金髪の艦魂は極めて珍しい存在であり、これまでの百年近くに数えるほどしかいなかったからである。

「ともかく、早いところ自分の艦に戻ってくれないか……私と一対一で仕合いたいって言うなら、別だけどさ」

「それは、やまやまだけど……止めておくわ。また今度ね」

デイレイが口惜しそうに自分の艦へと戻るのを見届けた霧雨は、「また今度……だど？　けっ、お前みたいな無礼な奴、こっちから願い下げだ」と言いながら、心のどこかで一騎打ちを望んでいる節が無きにしも非ずであった。

第七十五話 金髪で悪いか（後書き）

富士「こいつ、燕の時とは態度がえらく違わないか？」

作者「あれは燕と戦った結果、彼女の实力を知ったからこそその態度です。かつての敵国の艦魂で、よく知らない相手とくれば、多少不躰な態度になってしまうのは仕方が無いかと」

敷島「ましてやディーレイの場合、自分の身体能力に自信を持っているみたいだからね。何かに自信を持っている場合は、その分野に不得手そうな相手を見ると無意識のうちに相手を見下しかねないよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「燕が今度は、反捕鯨団体と相対します。次回『力さえあれば』ご期待下さい」

第七十六話 力さえあれば

その後日米関係の悪化は、やがて民間レベルにおいても、お互いに対する嫌悪感の増大という形で影響を及ぼすようになっていく。そして事あるごとに、双方の政治団体等が非難声明を出したり、あるいは脅迫にも思えるような警告を発したりしていた。

そんな中でアメリカ国内の市民団体によって槍玉に挙げられ始めたのが日本の捕鯨、特にアメリカのアリユーション列島から目と鼻の先で行われている北洋捕鯨であった。一部のアメリカ人は日本の捕鯨を妨害することで、日本の国内市場に流通する鯨肉の量を減少させ、それに取って代わる形で自国の畜産物を輸出しようとしたのである。

こうすれば、兵器の輸出が低調であるという現状を変えるよりも効率的に、自国の貿易赤字を縮小することができる。さらには同時に日本の貿易黒字を減らすことで、日本の外貨準備高増加に待ったをかけることも可能なのだ。

加えて、畜産が盛んなオーストラリアなどもこれに同調。捕鯨に反対する各国の団体は、相互の連絡や協力によって国家の枠を超えた活動を始め、ひいては日本製品の不買運動や在外邦人への嫌がらせなどにも繋がりがつつあった。

一方で、当時日本が保有していた捕鯨母船は、二万四千トン級だけで六隻に及ぶ。そして捕鯨船は五百トン級だけで百隻を優に超えており、史実のような戦災による大打撃が無かった分、対米戦後も一貫して相当数の鯨を採り続けていたのだ。

日本国内における賃金水準の向上によって、鯨肉の価格は少しずつ上昇していたとはいえ、それまでで充分日本人の食生活に根付いていた鯨肉の需要は殆ど減ることが無かった。そのため事実上鯨油の売り上げだけで捕鯨船団の運用資金を賄わなければならない他国とは異なり、少なくとも経済的には捕鯨を辞める理由が存在しなかったのである。

そんな日本に対して欧米の環境保護団体は、過度の捕鯨が鯨類の絶滅に繋がるとの大義名分を振り翳して捕鯨の中止を要求。日本側が自分たちの要求を受け入れないと見るや、船舶で捕鯨船団に異常接近するなどの妨害行為に打って出た。

この事態を受け、日本海軍と沿岸警備隊は共同で捕鯨船団の護衛を計画。第一警備戦隊の警備艇や、沿岸警備隊第一管区の巡視船が交代で任に当たることとされた。そして大湊にいる警備隊「燕」にも、第一警備隊の僚艇とともに、捕鯨船団を護衛する命が下されたのである。

「軍艦をうろつかせたと思ったら、今度は民間船に手を出すなんて……許せない！」

捕鯨船団の周囲を巡回する「燕」の甲板で、双眼鏡を手にした燕が怒りを露にする。彼女のコンテナ搭載甲板には、今回の任務に合わせて威嚇用の放水銃や探照灯、さらには万が一に備えて機関砲や三インチ砲まで搭載されていた。

「お……おい、あれは日本の軍艦じゃあないか？」

「何だって？ ……くっ、これではおちおち近づけんぞ」

これに驚いたのは、意気揚々と近づいてきた反捕鯨団体の方であ

る。捕鯨船だけならさほど危険も無いまま至近距離にまで近づくこともできるが、軍艦に接近すれば威嚇射撃どころか、正当防衛として実弾の危害発砲もされかねないからだ。

「どうする？ 一か八か、一度だけ突っ込んでみるか？」

「そんなことをすれば自殺行為だ。元も子もない」

四隻の警備艇に恐れをなした反捕鯨団体は、遠くから拡声器でかなり立てるのが精一杯。反対に捕鯨船団は、そんな彼らを尻目に悠々と鯨を捕獲していき、自分たちを護衛している警備艇に向かって発光信号で謝意を表す余裕さえあった。

「良かった……これで、大人しくなってくれるといいんだけど」

発光信号を見た燕が、嬉しそうに手を振ってそれに応える。抗議船はその間にも捕鯨船団に近づいたり離れたりを繰り返していたが、近付けば警備艇が放水銃を放って威嚇してくるため、結局は最後まで警備艇の防衛網を突破できなかった。

この一件に対し、一部の団体からは非難声明こそ出されたものの、これ以降反捕鯨団体による抗議行動は急速に鎮静化。その後日本は自主的に捕鯨海域や頭数の制限を設けていくことになるが、西暦二〇一〇年現在に至るまで、日本や北欧諸国の捕鯨船団による商業捕鯨は世界各地で行われている。

第七十六話 力さえあれば（後書き）

富士「畜産物流入のきっかけが無ければ、鯨肉の需要も減らずということか」

作者「それに、学校給食も和食の割合が史実より増えるはずですから。子供の頃に鯨を食べ慣れていれば、成人してから食べようとする機会も多くなるでしょう」

大隅「本当は、作者さんが鯨を食べたいだけでは？」

作者「それは否定しない。鯨の龍田揚げは滅多に食べる機会が無いから、余計にね」

三笠「わざわざ『竜田揚げ』ではなく『龍田揚げ』とするところが、作者さんらしいと言えそうですが……次回予告をお願いします」

作者「次回からは、ビアフラ紛争の話です。次回『アフリカではよくあること』ご期待下さい」

第七十七話 アフリカではよくあること

アフリカ北部のナイジェリア連邦共和国は、一九六〇年十月一日に北部州、西部州および東部州の三州からなる連邦制国家として独立。一九六三年には英連邦を離れて大統領制となり、憲法を制定するとともに西部州から中西部州が分離して四州による連邦制となった。

しかし北部のムスリム主体であるハウサ族と、西部のムスリムとキリスト教徒が混在するヨルバ族に比べ、東部に住むキリスト教徒主体のイボ族は英連邦時代から教育水準が高く、軍人や官吏を輩出したため「黒いユダヤ人」と称されるなど部族間で明らかな格差が残っていた。そしてそれは独立後の東部における油田の発見でさらに拡大し、力をつけたイボ族は国内を支配しようと考えたのだ。

一九六六年一月、自らと同じイボ族中堅将校の反乱を鎮圧したジョンソン・アグイイ・イロンシ将軍は、その反乱によって連邦と北部州および西部州の首相が暗殺されたことで軍事政権を樹立。連邦制ではなく地方を十二州に分割した中央集権国家を作り上げ、またイボ族を重用したことで北部の他部族が反発し、イボ族が数千人虐殺されるという事態を招いた。

そして同年七月二十八日、ハウサ族のヤクブ・ゴウォン中佐による反乱が勃発。イロンシ将軍は翌日にナイジェリア南西部のイバダで殺害され、政権を握ったゴウォン中佐がイボ族の軍人を殺害や追放したことでイボ族への迫害は一層激しくなり、百万名以上のイボ族が東部州へと逃れた。

これを受け、東部州の軍政知事であったチュクエメカ・オドメグ・

オジク中佐は州内の連邦資産を接收し、税収を州で独自に管理するなど独立性を強化。そして一九六七年五月三十日、ビアフラ共和国と銘打って東部州の独立を宣言した。

しかしこれを承認した国家はガボン、コートジボワール、ザンビア、タンザニア及びハイチの五ヶ国のみ。またナイジェリア政府軍はすぐさま攻撃と経済封鎖を開始したものの、ビアフラ軍の士気が高かったことや彼らがフランスや南アフリカによる支援を受けていたこと、そして白人傭兵がビアフラ側で参戦していたことにより戦局は当初膠着状態にあった。

一方で、かつての植民地が分割することを嫌うイギリスは政府側を支援。日本もナイジェリアに兵器の供与と軍の派遣を打診し、ビアフラ共和国の制圧後にナイジェリア南東部の油田採掘権を日本に譲渡するという事で合意した。

これに従い、日本は一九六二年に就役した第一戦隊の災害救難艦「神鳳」、第二駆逐隊の「小雨」、「速雨」、「春雨」及び「氷雨」を派遣。六月十五日に横須賀を発ち、七月二十日にナイジェリアへと到着する予定であった。

なお一九六二年には「雛鳳」と「神鳳」の第一戦隊、十二隻の駆逐艦で編成された三個駆逐隊からなる第一駆逐戦隊の編成が完了。一九六四年には横須賀と大湊に以下のような艦艇が配備され、関東以北の防衛に当たることになっていた。

連合艦隊直属

砕氷艦棚氷、初氷、迎賓艇千歳、所沢

東部方面艦隊（横須賀）

直属……補給艦奥羽、日高、海洋観測艦小笠原、試験艦時雨、鶯

第一艦隊（横須賀）

第一航空戦隊……雛鳳、神鳳

第一駆逐戦隊

第一駆逐隊……秋雨、糸雨、樹雨、霧雨

第二駆逐隊……小雨、速雨、春雨、氷雨

第三駆逐隊……村雨、藪雨、横雨、夜雨

第一警備戦隊（大湊）

第一警備隊……燕、穴燕、雨燕、岩燕

第二警備隊……海燕、尾白燕、黒燕、子燕

第三警備隊……德利燕、緑燕、紫燕、森燕

第二警備戦隊（横須賀）

第四警備隊……雀、稻雀、海雀、御山雀

第五警備隊……寒雀、小雀、里雀、庭雀

第六警備隊……蜂雀、初雀、紅雀、群雀

第一潜水艦隊

直属……潜水母艦千島

第一戦略潜水隊……神武、菊水

第一潜水戦隊

第一潜水隊……女木島、姫島、初島、母島

第二潜水隊……福島、深島、柱島、端島

第三潜水隊……彦島、平島、弓削島、与路島

第七十七話 アフリカではよくあること（後書き）

富士「武器供与のみならず、また実動部隊まで差し向けるとは……資源さえもらえれば、何でもするのだな」

作者「あとは、兵器を初めとした工業製品の輸出先の確保ですね。外需ばかりに頼った経済成長というのは脆弱な感じもありますが、特定の国や地域にばかり依存しなければ、むしろ内需だけを頼みにするより安定しているはずです」

敷島「ところでこの原潜の命名基準って、まさか……？」

作者「実戦で使うには、それぐらいの覚悟が必要だということを表現したつもりですが……我ながら、不謹慎な感じは否めませんね」

三笠「となりますと、後の艦は旭光、精華、八紘……等と続くのでしょうね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、海軍の回転翼機が空対空戦闘に参加します。次回『無情の一撃』ご期待下さい」

第七十八話 無情の一撃

日本軍の到着前にビアフラ共和国へと先制攻撃を加えたナイジェリア軍は、ビアフラ北東部の要所であるオゴジャとヌスカをそれぞれ一週間足らずで占領。七月二十五日には、石油パイプラインの終着点であるボニーに部隊を上陸させて攻撃しようとした。

しかしここで、エチオピア海軍の教官を経てコンゴ動乱時に国連事務総長機のパイロットを務めたカール・グスタフ・フォン・ローゼン率いる航空隊が立ち上がる。彼はビアフラへの救援活動を支援するための飛行活動に携わっていたが、ナイジェリア空軍が彼の活動を妨害したことに怒り、ビアフラ側に立って戦うことを決意したのだ。

ローゼンは五機の小型飛行機を手に入れると、迷彩塗装やロケット弾ポッドの装備といった改造を実施。なおこの時ローゼンらが使用したマルメMFI-9Bの要目は以下のとおりで、この機体はそもそも複座型初等練習機として開発されたものであり、小規模な対地攻撃を除けば第一線での使用は極めて困難な代物であった。

全長五・九メートル、幅七・四メートル、機体重量三七九キログラム、最大重量六〇〇キログラム
出力一〇〇馬力、最高時速二〇〇キロメートル、航続距離九五〇キロメートル
パラソル式となっている両翼の下にロケット弾を装備可能

しかしこのローゼンの行動は、後知恵を持つ日本軍へと内密に知れ渡っていた。同日、「神鳳」から十二機の二〇式中型回転翼機が出撃。両脇のウイングに一発ずつの甲型電探式空対空誘導弾を装着

し、ボニーの上空でビアフラ空軍の来襲に備えたのだ。

「なあ、本当に回転翼機で撃墜できるのか？」

「なんでも豆粒みたいな飛行機で、最高時速が百海里そこそこだとは聞いたが、不安だな……つと、電探に反応だ！」

二〇式中型回転翼機の電探が、前方から五機の小型機が接近してくるのを捉える。しかしその反応はあまりにも小さく、移動速度も精々時速二〇〇キロメートルといった程度であった。予め知らされていたとはいえ、標的が予想以上に小さかったことで搭乗員たちは落胆の色を隠せない。

五機の超小型機に向け、まずは第一波として各機から一発ずつの誘導弾が放たれる。本来このような目標に対して高価なセミアクティブレーダーホーミングの誘導弾を使うことは非効率なのだが、赤外線誘導の誘導弾では排熱量の少ないMFI-9Bを捕捉できない恐れがあり、また戦闘機や回転翼機の機銃では撃墜に失敗する恐れがあるためにこのような方法が採られた。

放たれた十二発の誘導弾は、次々と目標のMFI-9Bに命中。超音速のジェット機相手では未だ命中率に不安がある誘導弾であったが、当時先進国で採用されていたジェット戦闘機の一割程度の最高速度しか出せない鈍足な機体には何の問題も無く命中し、全機が瞬く間に粉碎された。

これによりボニーへの上陸作戦は円滑に行われ、ナイジェリア軍はビアフラ攻略の新たな橋頭堡を構築。しかし周辺は湿地帯だったために以降の進撃は困難になり、沿岸部の制圧によるビアフラ共和国の完全な封鎖には至らなかった。

ビアフラ空軍を壊滅に追い込んだ日本海軍は、ナイジェリア政府の求めに応じてビアフラ沿岸の海上封鎖を開始。「神鳳」が搭載していた上陸用舟艇に機銃を装備して、一隻につき一個小隊程度の歩兵部隊を乗せ、特設の哨戒艇として海上の搜索に当たることとされた。

とはいえナイジェリアの沿岸で日本軍が他国の商船を直接臨検したり拿捕したりすれば、国際問題になりかねない。そこで日本軍は不審な船舶の搜索だけを行い、発見後はナイジェリアに報告して以後の処置を全て任せるという方法をとった。

さらにナイジェリアが独力で商船の臨検や拿捕を行えるよう、進水直前の段階まで製造して「神鳳」や駆逐艦に搭載していた数十隻の舟艇を、ナイジェリア国内に持ち込んで組み立て。これをそのままナイジェリア海軍の艦艇として用いることで、名目上は飽くまでナイジェリア海軍が海上封鎖を行って、商船に対し臨検や拿捕を行ったということにできるのだ。

だがこの作戦は、ビアフラ軍の補給線を断つことによりビアフラ戦争の早期終結を狙える一方で、史実でビアフラ共和国が内陸に追い詰められた時と同じように多数の餓死者を出す恐れもあった。そのため日本軍は実行前にナイジェリア政府へとこの作戦の危険性を説明したが、背に腹は代えられないナイジェリア政府はこれを受け入れ、日本軍に海上監視を依頼したのだ。

ビアフラ共和国の勢力圏内へと航行する商船を搜索するために、災害救難艦と駆逐艦に搭載された合計約三十機の中型回転翼機を用いたこの海上封鎖は、日本軍の目論みどおりビアフラ軍への物資流入を大幅に防いだ。さらに臨検した船が軍需物資を搭載している場合にはナイジェリア政府が半ば強制的に買い上げたため、ビアフラ

軍は史実以上の物資不足に悩まされることになる。

第七十八話 無情の一撃（後書き）

富士「現代でも逸話潰しは相変わらず、か」

作者「かといって、見過ごしておけばナイジェリアに対して義理を欠くことになってしまいます。そうなれば、以降の二国間関係に悪影響を及ぼしかねません」

敷島「船が関係無いとなると、とたんに冷徹になるんだねえ……良く言えば私情に絆されないともなるけれど、小説でも徹底すると味気なくなるよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回で、ビアフラ紛争編は完結です。次回『兵糧攻め』ご期待下さい」

第七十九話 兵糧攻め

日本軍とナイジェリア軍が共同で行った海上封鎖の影響により、軍需と民需の別を問わず物資が不足し始めたビアフラ共和国は困窮。天然資源と経済力には恵まれているビアフラだったが、ナイジェリア国内の農業生産は北部や西部が殆どを占めていたため、ビアフラ共和国国内では餓死者が続出し始めた。

また物資の欠乏と日本軍の航空支援によってビアフラ共和国の陸軍も弱体化し、史実で見せたようなベニンシティの占領と、それに続くビアフラ共和国の傀儡政権であるベニン共和国としての中西部州の独立宣言も無くなった。そして年末までにビアフラ州南岸のポートハートコートやカラバー、そこからやや内陸に位置するアバマでナイジェリア軍に占領され、ビアフラ共和国内の物資不足と飢餓は深刻さを増す一方となっていた。

同年末、ナイジェリア軍の占領下にあるアバの市街地。ここでは日本軍が現地住民を保護し、ナイジェリアからの依頼によって食料の配給や警戒活動、さらには時折攻撃を加えてくるビアフラ軍に対する迎撃も行っていた。

「しかし、ここは酷いな……コンゴのほうがまだましだったぞ」

「隊長は、コンゴにも派遣されたのですか？」

「ああ。陸軍士官学校を出て少尉になって、小隊長に任じられたと思った早々の海外派遣だ。あれだけでも環境が酷すぎてトラウマになりかけたっていうのに、まさかそれより酷いとはなあ」

前線で監視に当たっているナイジェリア派遣戦闘団歩兵中隊の中隊長が、当時を思い出して忌々しそうな表情を浮かべる。今では彼

も経験を積んで大尉になったため比較的落ち着いていたが、彼のように若くしてコンゴに派遣された将兵の中には精神を病んでしまったり、そうでなくとも暫くの間業務に支障が出る者が少なくなかった。

「確かに、街を見回りしていても見かけるのは痩せた人間ばかり：：おまけに子供は腹だけ出ていることもありますから、余計気味が悪いです」

「何でも、飯を食べなさすぎると逆に腹が膨れて見えるそうだ。俺には学が無いから理由は分かんが、どの道哀れであることに変わりはない」

これは蛋白質の欠乏からくるクワシオルコル症という病気に見られる症状のひとつで、他の症状には肝臓の肥大や足の浮腫、細い毛髪や歯の脱落及び皮膚炎が挙げられる。日本軍とナイジェリア軍が共同で設置した、ナイジェリアが占領したビアフラ共和国領域内の避難所などでは、こうした症状を呈する子供が非常に多く見られていた。

「どうにか、ならないのですかね？」

「だとしたら、一日も早くこの戦闘を終わらせることだろうな。そうすれば復興も早く進んで、ここの艦橋も早く改善できるようになるだろう」

「結局はそこですか：：：いつまでかかりますことやら」

その後戦闘団と派遣艦隊は十一月二十日にナイジェリアを離れ、十二月二十五日に内地へと帰還。しかしその後も日本からの武器供与は内戦が終結するまで続けられ、戦車や戦闘機といった兵器が多数ナイジェリア軍へと引き渡された。

また同じ国際連合の常任理事国である日英の批判を恐れたフランスがビアフラ共和国に大規模な支援を行わなかったこともあり、オジク將軍が亡命したビアフラ共和国は史実よりちょうど一年早い一九六九年一月十五日に降伏。ビアフラの降伏後はイボ族に対する大規模な報復や虐殺は行われなかったものの、史実より少ないとはいえ数十万名の人間が飢餓や病気及び戦闘で命を落としたとされている。

なおビアフラの占領後も、ナイジェリア軍はしばしば日本に兵器を発注。一九八〇年までに以下のような兵器が引き渡され、ナイジェリア軍の主力を担うことになった。

陸軍（八個師団）

戦車六四〇両、自走砲一二八〇両、小銃及び拳銃合計十四万四千丁、航空機一九二〇機

海軍

水上艦合計五二隻、水上艇合計六二四隻

空軍

戦闘機、双発輸送機、中型回転翼機、小型回転翼機及び練習機各一二〇機

（人口七千万人、陸軍十二万名、海軍及び空軍各一万五千名）

第七十九話 兵糧攻め（後書き）

大隅「これは……陸軍の航空機が多すぎるのでは？」

作者「とはいえ二種類の回転翼機だけだから、費用や人手はそんなにかからないはずだよ。それに日本と軍の編成を共通化すると、こうせざるを得ない」

富士「ああ、あのずんぐりむっくりが攻撃へりも兼ねるのか」

作者「まあ、確かに胴体だけの大きさで言えばチヌークさんを一回り小さくした程度ですが……エンジンの左右分割配置等、それなりに工夫はしてあるつもりです」

三笠「チ、チヌークさんって……それはさておき、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、サッカー戦争についてです。次回『爆発した鬱憤』ご期待下さい」

第八十話 爆発した鬱憤

一九四八年より、中央アメリカの太平洋岸に位置するエルサルバドル共和国は工業化を推進。だが封建的な地主制度に手を付けないまま工業化に着手してしまったため、そのままでは遠からず工業化の限界に突き当たることが明らかであった。

そこでエルサルバドルは、面積の割に増えすぎってしまった人口を、東と北で接しているホンジュラスにおよそ五十万人も移住させ始めた。ホンジュラスはエルサルバドルの五倍近い国土を有しているものの、人口はエルサルバドルの七割前後で推移しており、土地が余っていたからである。

不法に入国してきたエルサルバドル人による土地の占有を危惧したホンジュラス大統領ロペス・アレジャーノは、一九六二年に土地改革法を施行。これによりエルサルバドルからの移民が占有していた農地がホンジュラス人に分け与えられ、その後も入国者に対する滞在許可の更新を停止するなどの対抗措置を強化していった。

また両国は、隣国同士の間には付き物である領土問題も抱えていた。このように、両国の関係は長い間険悪であり続けていたとはいえ、幸い武力衝突には至らないままであった。だが、この平和は思わぬきっかけから崩れ去ることになる。

一九六九年六月八日、翌年にメキシコで開催されるサッカーワールドカップの出場権を巡り、ホンジュラスの首都テグシガルパでホンジュラス代表とエルサルバドル代表が対決。一対〇でホンジュラスが勝利したものの、エルサルバドルにいた十八歳の女性がこの結果を苦に拳銃自殺をしたのである。

彼女の葬儀にはエルサルバドル代表選手や大統領までもが参列し、騒動は大規模化。十五日にエルサルバドルの首都サンサルバドルで行われた試合ではエルサルバドルが三対〇で勝利したため、本選出場国の決定は最終戦に持ち越された。

そして二十七日の最終戦において、エルサルバドルは延長戦の末に三対二で勝利。だが試合前に国交断絶をにおわせたエルサルバドルの脅迫に対して、ホンジュラスが不法移民の追放と資産の没収、そしてエルサルバドルとの国交断絶を通告したのである。

七月十四日、エルサルバドル空軍の一〇式戦闘機と双発輸送機各八機が、二手に分かれてホンジュラスの南東部に位置する首都テグシガルパと、北岸のラ・セイバにある空軍基地を攻撃。これが、エルサルバドル空軍にとって初めての実戦となった。

なお、双方の人口と戦力は以下のとおり。太平洋にのみ面しているエルサルバドルと異なり、太平洋とカリブ海の双方を守らなければならないホンジュラスは、特に海上戦力の集中度において、エルサルバドルに大きく差をつけられていた。

・エルサルバドル軍（人口三七四万人、面積二・一万平方キロメートル）

陸軍……一個師団、約一万五千名

海軍……日本の沿岸警備隊一個管区相当（巡視船四隻、巡視艇五二隻、約千名）

空軍……五式及び一〇式戦闘機各二〇機、練習機及び双発輸送機各四〇機

・ホンジュラス軍（人口二六九万人、面積一一・二万平方キロメートル）

陸軍……三個旅団、約一万一千名
海軍……エルサルバドルと同規模。但し太平洋には、丙型巡視船一隻と巡視艇一三隻のみ
空軍……エルサルバドルと同規模

第八十話 爆発した鬱憤（後書き）

い朝日「これはまた……随分とお粗末な陣容ですな」

作者「それでも、史実よりは幾分かましなはずだよ。なにせ、コルセアが未だに戦闘機として現役を張っていたぐらいだから」

大隅「対地攻撃機としてなら、まだ使えるかもしれませんが……ミサイルが当たり前のように飛び交っているであろう時代に、奇異なものですな」

敷島「わかんないよ。コルセアだって、魔改造すればサイドワインダーぐらいはいけるかも」

三笠「それは、果たしてコルセアと呼んでいい代物なのでしょうか……さて、それでは次回予告をお願いします」

作者「今回は爆撃行ですが、なんともかんと……次回『それでも虎の子』」ご期待下さい

第八十一話　　これでも虎の子

ホンジュラスの上空に侵入した攻撃隊は、半数ずつに分かれてテグシガルパとラ・セイバの飛行場を襲撃。だがその攻撃は、輸送機の尾部にある扉を開けて、そこから爆弾を転がして落とすという極めてお粗末なものであった。

「爆弾投下始め！」

まずはホンジュラス侵入の十分後に、五式双発軽爆撃機を改造した四機の輸送機が、テグシガルパ飛行場へと爆弾投下を開始。六〇キロ爆弾をばらまいたが、ろくに狙いも付けずただ飛行場の上空を通過しながら爆弾を落としただけだったということで、この攻撃によって失われたホンジュラス空軍機は僅か六機に止まった。

そしてこの攻撃によりエルサルバドル軍の接近を知ったラ・セイバの五式戦闘機部隊は、エルサルバドル空軍機のホンジュラス侵入から二十分後に、四機を出撃させた。そして出撃した直後に、四機ずつの一〇式戦闘機と輸送機を迎え撃ったのである。

「サンチョ・パンサ（百姓の意味。転じてホンジュラス人への蔑称）め、そんな機体で止められると思うなよ！」

エルサルバドル空軍の搭乗員は、相手が自分たちより旧式の航空機であるとするや、当てずっぽうに機銃を撃ちかける。だがこれまでともな訓練を行ってこなかったため、彼が放った機銃弾は見当違いの方向に飛んでいくばかりであった。

「戦闘機は相手にするな！　大型機だけを撃墜できればそれでいい

！
」

そんな中、歴史改変によって五式戦闘機の小隊長となったフェルディナント・ソト大尉が、二〇ミリ機銃弾を輸送機の尾部目掛けて浴びせかける。史実においてコルセアを駆り、二度の戦闘で三機のコルセアを撃墜した腕前は歴史が変わってなお健在であり、間もなく一機の輸送機に火を噴かせた。

エンジンから火を噴き出した輸送機は暫くの間飛び続けたが、やがて被弾したエンジンが完全に停止し失速。五式輸送機は片肺飛行も不可能ではない機体であったが、被弾した状態で練度の低い搭乗員には困難な芸当であり、間もなく錐揉み状態に陥ってそのまま墜落した。

「よし、次！」

隊長機を打ち取ったソト大尉が、二番機へと目標を切り替える。しかしその頃には、三機の輸送機は既に帰還を始めていた。そこで限られた燃料の消費を抑えるということもあり、四機の五式戦闘機はラ・セイバの飛行場に戻ったのである。

初の出撃で貴重な輸送機を失ったとあって、エルサルバドル空軍は以後の出撃に消極的な態度をとるようになった。おまけに戦果も数十発の爆弾を投下したにも関わらず不満足なものであり、このこともエルサルバドル軍にさらなる攻撃を躊躇させる原因となった。

また一方のホンジュラス空軍も、経済力の乏しさが災いして燃料や弾薬が十分に用意されていなかった。このためエルサルバドルの飛行場などに対して積極的に打って出ることは無く、陸上部隊の支援に専従することとなる。

エルサルバドル軍による攻撃は、空からとは限らなかった。同日、エルサルバドル海軍の乙型巡視船一隻と丙型巡視船三隻が、ホンジュラスのサンロレンツォ基地とアマパラ基地を相次いで襲撃したのである。なお、この戦闘に参加した双方の艦艇は以下のとおり。

・エルサルバドル軍

乙型巡視船サン・サルバドル、丙型巡視船レムパ、ジオバ、グランデ

・ホンジュラス軍サンロレンツォ基地

丙型巡視船ウティラ、乙型巡視艇アトランティダ、バジエ

丙型巡視艇ラ・セイバ、ナカオメ、丁型巡視艇サン・ニコラス、タウラベ

・ホンジュラス軍アマパラ基地

甲型巡視パトウカ、乙型巡視艇チオルテカ、コロソ

丙型巡視艇フティカルパ、トルヒーリヨ、丁型巡視艇サラマ、グアリザマ

第八十一話　　これでも虎の子（後書き）

富士「今回の空戦も地味だが、次回の海戦も推して知るべしだな」

作者「とはいえ、両国の国力を考えるとこれぐらいが限界でしょうから。戦争と言うより、規模的には地域紛争と言った方がしっくりくるのは仕方のないことです」

大隅「で、これでは余りに地味過ぎるから両国の船艇にも律儀に名前をお付けになった、と」

作者「史実で建造された艦艇は省略するにしても、歴史改変で生まれた艦が登場する場合には、随時名前を公開するよ。一応命名基準もあったはずだけど……忘れた」

三笠「馬鹿律儀と言いますか、なんと言いますか……次回予告をお願いします」

作者「上手く描けたかは分かりませんが、巡視船艇同士の戦闘です。次回『命懸けの報告』ご期待下さい」

第八十二話 命懸けの報告

開戦と同時の第一撃に備え、エルサルバドル海軍が保有する四隻の巡視船は、七月十二日までに海上の国境から十キロメートルと離れていないラ・ウニオンの港へと集結。十四日の午前六時に出港し、まずは東南東におよそ十二海里離れたアマパラへと向かった。

当時、アマパラからは丙型巡視艇「フティカルパ」、サンロレンソオからは乙型巡視艇「バジェ」がそれぞれ出撃し、国境の警備に当たっていた。これが功を奏し、午前六時半に「フティカルパ」はエルサルバドル艦隊を捉えたのである。

午前六時半、巡視艇「フティカルパ」船橋。

「艇長！ 前方に、まっすぐこちらに向かってくる大型船一隻！ その後方に、小型船三隻が続いています！」

「距離と速度、それと船の種類は？」

「距離は十海里、速力十五ノット。種類は……全て、エルサルバドル海軍の巡視船です！」

「馬鹿な、巡視船の全てだと！ このままの針路なら、おそらく目標はアマパラかサンロレンソオだ……一先ず、アマパラ基地とサンロレンソオ基地にこのことを連絡しておけ！」

「了解！」

正面からまっすぐ自分の方向に向かってくる四隻の巡視船を前に、艇長は撤退を決意。二〇ミリ機銃が船首楼に一門搭載されているだけというこの艇では、巡視船四隻に対抗することなどできるわけもない。そんな現状では、これが最善の策に思えた。

「面舵一杯！ 敵船から離れろ！」

その直後、エルサルバドル軍巡視船「サン・サルバドル」に搭載されていた五インチ砲のうち三門が砲撃を開始。船首楼に同じく五インチ砲を搭載していた三隻の丙型巡視船もこれに続き、「フティカルパ」の周囲には水柱が林立し始めた。

「敵船のうち、最後尾の船がこちらに向かってきます！」

「敵四番船、機銃を発砲！」

丙型巡視船「グランデ」は全速力の二十ノットで「フティカルパ」に向かうと、五インチ砲だけでなく二〇ミリ機銃も発射。間もなくしてその一連射が彼女に命中し、「フティカルパ」の船体には横一列に連なった無数の穴が開いた。

さらには、この一連射が船橋の後面に命中したことで、艇長と操舵手が同時に戦死。操縦の自由を失った「フティカルパ」は、十ノットという低速で直進したまま、その後も暫くの間は五インチ砲弾や二〇ミリ機銃弾の洗礼を受け続けなければならなかった。

そして一発の五インチ砲弾が、遂に「フティカルパ」の艇尾部分の甲板に命中。搭載していた数発の爆雷に誘爆し、彼女の艇尾には水面下まで達する大穴が開いた。

艇尾の破孔から海水が流れ込み、艇内の最後部にあった機関室は瞬く間に浸水。およそ三トンの海水が機関室に流れ込んだことで機関は完全に停止したが、機関室から船内に続く防水扉が閉まっていたおかげで、「フティカルパ」は艇尾が大きく沈み込みながらも完全な沈没だけは免れた。

だが、それも一瞬の気休めに過ぎない。足が止まってしまった彼女には、その後一分足らずで五発の五インチ砲弾が命中するか、若しくは至近距離に着弾したのである。

命中弾は甲板や船橋に穴を開けるだけであつたが、至近弾の炸裂による損傷は水面下にまで到達。「フティカルパ」の船体には、機関室へのものとは比較にならない量の海水が流れ込み、彼女はそのまま艇首から急速に沈んでいった。

こうして「フティカルパ」を難なく沈めた「グランデ」は、再び三隻の僚艦に続行。アマパラ警備署に停泊しているであろう船艇の撃滅を目指したが、沈没と引き換えに伝わった「フティカルパ」からの無電は無駄ではなかった。

また、一度隊列から離れてしまった「グランデ」の合流を待っていたエルサルバドル艦隊は行動が遅延。これによって、アマパラとサンロレンツォにいた以下の艦隊が出撃し、そして迎撃態勢を整えるための時間を与えてしまうことになる。

・サンロレンツォ

丙型巡視船ウティラ、乙型巡視艇アトランティダ

・アマパラ

甲型巡視パトウカ、乙型巡視艇チョルテカ、コロン

第八十二話 命懸けの報告（後書き）

富士「一方的だな。まあ、戦力差を考えれば仕方ないが」

敷島「これ、なんて第二十三日東丸？」

作者「とはいえ、ホンジュラス海軍はカリブ海と太平洋の両方に戦力を配置しなければならぬので、海岸線の短い太平洋側の戦力が乏しくなってしまうのは仕方ありません」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、両国海軍の主力が激突します。次回『目には目を、奇襲には奇襲を』ご期待下さい」

第八十三話 目には目を、奇襲には奇襲を

アマパラとサンロレンツォを発った五隻のホンジュラス海軍船艇は、およそ五キロ四方の大きさがあるアマパラ島の、さらに二海里北西にある小島の南東岸に移動。ここならラ・ウニオンから向かってくるエルサルバドル艦隊からは死角になるからである。

おまけに、こちらはアマパラ島からエルサルバドル艦隊の接近を、アマパラの陸上施設から無電で教えてもらうことができる。この目論見は的中し、ホンジュラス艦隊が待ち伏せを始めて十分後に、アマパラの陸上施設からエルサルバドル艦隊が間もなくホンジュラス艦隊の視界に入る旨が報告された。

アマパラ警備署に発見された直後の、エルサルバドル海軍乙型巡視船「サン・サルバドル」。

「基地の周辺に、ホンジュラス海軍の船艇は見つからんのか？」

「はい。ただアマパラ島は湾が入り組んでいるので、その湾に隠れている恐れもあります」

「そうか……各員、アマパラ島の方をよく警戒しておけ！」

その直後、「サン・サルバドル」の左舷方向で発砲音が鳴り響く。そして砲弾は何と彼女の船首楼に命中し、そこに装備されていた五インチ砲を一撃で炎に包んだ。

「な、何事だ！」

「左手にある小島の影に、ホンジュラス海軍の船艇が潜んでいた模様です！」

「すぐに撃ち返せ！ くそっ……奇襲をするつもりが、まさかこち

らが奇襲されるとはな！」

丙型巡視艇「ウティラ」の第一弾を合図とし、ホンジュラス艦隊は単縦陣で取舵を切りながら、エルサルバドル艦隊へと肉薄。頭を押さえるような形で先頭の「サン・サルバドル」へと集中攻撃を加えたため、間もなく彼女の船体の随所で火災が発生した。

さらに炎上した「サン・サルバドル」の船体から黒煙が立ち上ったことで、後方にいた三隻の巡視船は視界を塞がれてしまう。だが旧式とはいえ、航海用の電探を装備していたおかげで、ホンジュラス海軍の船艇を完全に見失うことはなかった。

とはいえ、両軍の船艇にまともな射撃指揮装置は搭載されていない。その結果、エルサルバドル軍の丙型巡視船三隻は、「サン・サルバドル」から噴き出る黒煙から脱出するまで砲撃を行えないという状態に陥ってしまった。

一方のホンジュラス軍も、この黒煙によって先頭の「サン・サルバドル」以外に狙いを定めることが困難になってしまい、彼女に集中攻撃を開始。「サン・サルバドル」の火災は悪化する一方であり、ホンジュラス軍の第一弾から二十分後には、とうとう総員退船が発令された。

だがこの間に、残った三隻のエルサルバドル軍丙型巡視船は離脱に成功。「サン・サルバドル」乗員九十六名のうち、生き残った三十六名は全員がホンジュラス軍の捕虜となり、こうして両軍初の海戦は終わりを告げたのである。なお、双方の損害は以下のとおり。

・エルサルバドル軍

乙型巡視船「サン・サルバドル」沈没

・ホンジュラス軍

丙型巡視艇「フティカルパ」沈没、丙型巡視船「ウティラ」損傷

こうしてエルサルバドル軍は、空戦に続き海戦でも、自分たちの側から攻撃を仕掛けておきながら予想外の損害を強いられることになった。そしてエルサルバドル海軍は、この後ホンジュラス領海に侵入することは無くなった。

またホンジュラス海軍も、劣勢な自国の海軍戦力を気にして、積極的な攻勢には打って出なかったのである。これにより、この戦争で双方の海軍が彼らからしてみれば大規模な戦闘を行うことは、とうとう二度と無かった。

第八十三話 目には目を、奇襲には奇襲を（後書き）

富士「商船に毛の生えたような船で海戦、か。寂しいな」

敷島「沿岸警備隊と海軍を別に整備できるぐらいの国力があれば、コンテナ式軍艦も買えるんだろうけどねえ」

作者「日本の介入以外は史実と大差ないのでから、難しいかと。できたとしても、それぞれの規模が小さくなりすぎてしまいかねませんから、一括して運用した方が効率的でしょうし」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、サッカー戦争が終結します。次回『その場凌ぎ』ご期待下さい」

第八十四話 その場凌ぎ

海と空で最初の戦闘が行われていた頃、エルサルバドル陸軍は本土の防衛に一個旅団のみを残置。そして三個の旅団が、それぞれ北方のサンタ・ロサデ・コパンやテグシガルパ、及び東方のサン・ロレンツォを目指して侵攻した。

一方のホンジュラス陸軍も、侵攻してきたエルサルバドル陸軍と同じ三個旅団を有していた。ところが第二旅団は西部のサン・ペドロ・スーラでグアテマラ軍に、第三旅団は東部のフティカルパでニカラグア軍にそれぞれ睨みを利かせていたため、すぐに迎撃を行えたのは首都テグシガルパに司令部を置く第一旅団だけであった。

日本軍の使っていた百式中戦車が先頭を切って突撃し、自動車に乗った随伴歩兵が接近してくるホンジュラス軍の歩兵を掃討する。それに主力の歩兵部隊が続いて集落や施設を占拠し、後方からは砲兵大隊が砲弾の雨を前線へと降らせていった。

こうして、エルサルバドル軍が戦力の集中運用で着々と戦果を拡大していった。これに対し、ホンジュラス軍は不法な移民への対処を重視していたため、広大な国土に限られた戦力を分散配置せざるを得ない状況に陥っていたのである。

ひとつの基地に配置されている部隊は中隊か大隊程度の規模が精々であり、旅団が纏まって行動するエルサルバドル軍の前に各個撃破されていく。そして僅か一日で、国境から十キロメートル前後も離れたサン・マルコやサン・アントニオ、サン・アンドレスなどがエルサルバドル軍の手に落ちた。

このままエルサルバドル軍の侵攻が続けば、最悪の場合首都のテグシガルパが陥落することもあり得る。そう考えたホンジュラスは、自国やエルサルバドルを含めた中南米諸国と、兵器や資源の貿易で深い関係にある日本へと仲介を依頼した。

史実においては、このサッカー戦争は米州機構が仲介した。ところが反共同盟としての性格がある米州同盟にとって共通の敵であるソ連が存在しなくなったことや、アメリカがかつての敵国である日本と強い結びつきを持つ中南米諸国との協定を嫌ったため、米州機構は存在しないのであった。

日本はエルサルバドルに対してこの一件を打診したが、講和の条件が現状の回復を基本としたものであったため、優勢であったエルサルバドルは難色を示す。そこで、日本が未だに工業化の途上にあるエルサルバドルへと技術支援を行うとともに、この戦争で損耗した分の兵器を日本が輸出するという条件を提示したのである。

日本からしてみれば、この条件は悪くないものであると言えた。むしろ、これから退役する対米戦期や戦後第一世代の兵器をすぐさま買い取ってもらえるというのは、ただスクラップにすることに比べれば余程有り難いことである。

そして七月二十九日に、史実において米州機構の仲介でなされた停戦と同じ条件に加え、史実では二〇〇六年まで遅れた国境線の画定も盛り込まれた講和条約が締結されたのである。これにより、戦後の二国間関係は幾許か改善することになった。

この後、エルサルバドルは日本の支援で史実以上の工業化を果たすかに思われた。しかしホンジュラスへの移民が禁止されたことや、ホンジュラス国民がエルサルバドル製品の不買運動を繰り広げたこ

とで、エルサルバドルは工業製品の貴重な市場を失うことになる。

ホンジュラス市場の喪失からくる需要の縮小によって職を失った工場労働者や、ホンジュラスから追放された農民は反政府運動を展開。やがてこの反政府運動は、アメリカや隣国のニカラグアからの影響もあつて、容易には解決し難い混沌とした様相を呈していくことになる。

第八十四話 その場凌ぎ（後書き）

作者「このままだと、既に書いた話を投稿するだけ投稿して完結しそうです」

富士「他にネタは無いのか？」

作者「とはいえ一九八〇年ごろには燕や雛鳳、そして輝久も退役してしまいますからねえ。かといってアニメや漫画おおすみをあまり見たり読んだりしてこなかったせいかな、新しい登場人物のネタも浮かびませんし」

大隅「登場場面が多ければ、似たような設定の艦魂でもそれぞれの個性を表現できるのでしょうけれど……難しいですね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、第二次印パ戦争編です。次回『固執と拒絶』ご期待下さい」

第八十五話 固執と拒絶

パキスタンは当初、イスラマバードを中心とするインダス川周辺の他に、ダッカなどを含むブラマプトラ川河口付近もその領土として独立した。しかし政治的な実権は前者の西パキスタンがほぼ全てを握っており、後者の東パキスタンは半ば植民地のように扱われていたのだ。

そんな中で、一九七〇年にサイクロンが東パキスタンを襲う。東パキスタンは国土の多くが水没し、サイクロンによる犠牲者は三十万人とも五十万人とも言われたが、西パキスタンは何ら有効な対策を講じなかったのだ。

これがきっかけとなり、東パキスタンでは西パキスタンからの分離を望む独立運動が活発化。十二月に行われた選挙では、東パキスタンの独立を目指すアワミ連盟が勢力を伸ばしたため、これを危険視したパキスタンのヤヒヤ大統領は翌年三月に東パキスタンへと軍を差し向けた。

パキスタン軍による独立運動の鎮圧で、東パキスタンを追われた人々は難民となる。そして彼らが、隣国のインドになだれ込むという事態が発生したのだ。

あまり経済的に豊かとは言えないインドにとって、東パキスタンからやってきた難民を抱えるだけの余裕は無い。そこでインドは東部パキスタンを独立させることで、自国に東パキスタンからの難民が押し寄せてくるのを止めるべく、十二月三日にパキスタンと戦闘状態に入ったのだった。

陸軍戦力で優位に立つインド軍は、デリーや海岸地帯の防衛に合計四個師団だけを残して全てを対パキスタン戦に投入。西パキスタンにはパキスタン軍と同等の八個師団が、東パキスタンには優勢な十二個師団が差し向けられた。

しかし、二〇式戦車の輸出版などといった新兵器が配備されている師団は西パキスタンとの国境へと優先的に差し向けられることになる。これはパキスタン軍が、西パキスタンにいる部隊へと優先的に新兵器を配備しているためで、質でもパキスタン軍と同等の戦力を宛がうためであった。

東パキスタン上空では、開戦当日から一〇式戦闘機同士による空中戦が展開されることになる。さらにこれらの一〇式戦闘機は、合計重量が一トンまでなら誘導弾の搭載にも対応しており、甲型空対空誘導弾であれば四発が搭載可能であった。

開戦当日の午前十時、ベンガル湾に面した東パキスタン第二の都市チッタゴン上空。

「全機、敵機を捕捉次第誘導弾を放て！」

アイジャル基地から東パキスタンにいるパキスタン陸軍へと攻撃を加えるべく出撃した、四十八機もの一〇式戦闘機と、迎撃に出たパキスタン軍の一〇式戦闘機二十四機がほぼ同時に電探式誘導弾を放つ。一〇式戦闘機は機種の上部に内蔵式の電探を搭載しているため、小規模な改造で誘導弾の誘導も可能なのだ。

なお、両軍の一〇式戦闘機が搭載していた外部武装は以下のとおり。片道が精々百海里から二百海里しかない範囲での作戦であったため、双方ともに外部燃料タンクは装備せず、積めるだけの外部武

装を搭載しての出撃であった。

・インド軍

主翼下面外側に電探式甲型空対空誘導弾（一機当たり二発）

主翼下面内側に近接信管付きの空対地五インチ噴進弾（一機当たり八発）

・パキスタン軍

主翼下面外側に電探式甲型空対空誘導弾（一機当たり二発）

主翼下面内側に赤外線式甲型誘導弾（一機当たり二発）

「前方より、敵誘導弾多数！」

「分かっている！ 全機、チャフを散布しつつ回避行動に移れ！」

双方の戦闘機隊は懸命に回避行動を行うが、マッハ一程度の最高速度では限界も自ずと見えてくる。そしてこの戦争の幕開けを告げるように、二十回もの爆発が立て続けに起こったのであった。

第八十五話 固執と拒絶（後書き）

富士「また日本製兵器か」

作者「当時のミリタリー・バランスでもあれば良いのですが……ですが史実において、少なくとも両国の海軍はイギリスの余剰艦艇を使用していますから、彼女たちが完成しなくなった以上日本製兵器で代替しても構わないかと」

大隅「史実で日本軍が無条件降伏した後、既に進水していた駆逐艦も少なからずを解体していますからね。除籍された駆逐艦も数十隻いますから、よほど艦艇がだぶついていたのでしょう」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「今回は、この空戦の続きです。次回『微弱なりと雖も』ご期待下さい」

第八十六話 微弱なりと雖も

一回目の電探誘導弾による攻撃で失われた一〇式戦闘機は、インド側が八機に対してパキスタン側が十二機。そしてこの回避運動で編隊を崩してしまった双方の航空隊は、一機から精々一個小隊という少数機に分かれての乱戦へと突入していく。

そんな中で、全体数において四十機対十二機と優勢を保っていたインド軍は、一機また一機と空中戦から離脱。本来の任務であった地上部隊支援のため、付近にある軍事施設と思しき建造物に対して噴進弾の発射を開始した。

合計で二百発を超える噴進弾が地上へと撃ち込まれ、近接信管によって空中で炸裂した噴進弾から無数の機銃弾が辺りへとばら撒かれる。さらに運悪く近接信管が作動しなかった噴進弾も、地上や建造物への激突によって炸裂し、周囲の目標を次々と穴だらけにしていった。

「アイジャル戦闘飛行隊第一小隊は、敵飛行場を叩くぞ！」

「インパール戦闘飛行隊は、停泊中の敵艦船を攻撃する！」

目標となる施設は、陸軍の施設に止まらない。駐機してある航空機やその格納庫、さらには港湾やそこに停泊していた海軍艦艇までもが攻撃対象になった。

格納庫に向かって放たれた噴進弾が上空で炸裂し、銃弾を拡散させる。その銃弾は格納庫の天井や壁諸共、格納庫に駐機してあった航空機を穴だらけにしてしまい、多くの機体がそのまま二度と使えなくなるほどの深手を負うことになった。

一方、炸裂した噴進弾から飛来する機銃弾は、艦船の船体にはさほど大きな打撃を与えられなかった。とはいえ精密機器である電探を破壊したり、また艦の外にいた人員を殺傷するのには十分すぎる威力を発揮したのである。

そしてここでもまた、何発かの噴進弾は近接信管が反応することなく格納庫や艦船に命中し、内部に突入した後には炸裂。だがそれは即ち、格納庫や艦船の外壁によって機銃弾の威力が殺がれることの無いまま内部の航空機や機材を損傷させることであり、結果としてはより大きな損害を負わせたのである。

当時チッタゴンに停泊していたのは、軽巡洋艦「ジャムナ」と駆逐艦「ダッカ」「チッタゴン」「クールナ」「ラージシャヒ」など。駆逐艦「バリサル」と「シレット」は哨戒に出撃していたため、千トンを超える海軍の戦闘艦艇はこの五隻だけであった。

「全機、敵巡洋艦と駆逐艦を叩くぞ！」

まずは一個小隊、四機の一〇式戦闘機が噴進弾の発射準備に入る。だがそこで、既に日本海軍の艦艇に準ずる近代化改装を済ませていた五隻に搭載されていた合計十基もの自動対空機関砲が、インド軍航空隊目掛けて一斉に火を噴いたのだ。

「まずい、全機攻撃を中止しろ！」

「だめです、敵の弾が多すぎて避けられません……うわああああっ！」

輸出用ということで電探の性能を弱体化させられていた自動機関砲とはいえ、マッハ一程度の戦闘機を撃ち落とすことは難しくない。

この一個小隊は瞬く間に二機が撃墜され、残った二機も攻撃を諦めて命からがら逃げるのが精一杯であった。

結局、この日の航空攻撃ではパキスタン海軍に目立った損害を与えるには至らなかった。とはいえ陸上施設や航空戦力へ加えた打撃は大きなものであり、これが影響してパキスタン陸軍は以後より一層の苦戦を強いられることになる。なお、双方の損害は以下のとおり。

・インド側損害

一〇式戦闘機十八機喪失

・パキスタン側損害

一〇式戦闘機二十機喪失、チッタゴン飛行場が離着陸不可能に
チッタゴンに駐留していた陸軍将兵のうち約二百名が戦死、約五十名が負傷

その他、車両や火砲に大きな被害

こうして空からの攻撃によってパキスタン陸軍の戦力が削られたことで、優勢なインド陸軍はパキスタン軍を随所で撃破。東パキスタン内の独立派と共同でパキスタンの独立、そして難民流入の阻止を図ったのである。

第八十六話 微弱なりと雖も（後書き）

作者「今回の副題はある作品のセリフの一部なのですが、果たして元ネタが分かる方はいらっしゃるのだろうか？」

敷島「待たせたな、ヒヨツ子ども！」

大隅「ええと……『つまり、ばらまくのだ！』でしたっけ？」

作者「鬱だ。オツゴに乗ってくる」

三笠「作者さんの訓練期間では、オツゴは……という冗談はさておき、次回予告をお願いします」

作者「次回、インド海軍が停泊中のパキスタン艦艇を攻撃します。次回『先手必勝』ご期待下さい」

第八十七話 先手必勝

インド軍は、パキスタンの千トン級駆逐艦に近代化改装が施されていることを、午前中の航空攻撃で初めて知ることになる。当初は東パキスタンに配備されていた水上艦艇を侮っていたインド軍であったが、このままでは東パキスタンを制圧するための重大な障害になると考え、彼女たちの撃滅を企図した。

午前十二時、開戦に備えて印パ国境に集結していた以下の艦艇が、国境を越えて東パキスタンの沖合へと侵入。東パキスタンとの西部国境からおよそ三百キロメートル離れたチッタゴンへと赴き、水上戦闘によって、東パキスタンに配備されている海上戦力の撃破を目標論んだのである。

軽巡洋艦クリシュナ

第一駆逐隊アツサム、ビハール、ゴア、ケーララ

もし東パキスタンに十分な哨戒艦艇がいるか、海上に哨戒機を飛ばしていれば、インド艦隊の接近を事前に察することもできたであろう。そうすれば、チッタゴンの艦艇を避難させてインド海軍の襲撃を空振りに終わらせたり、水上で迎撃態勢を整えたりといった対策も行える。

だがパキスタン海軍は、せめて主力水上艦艇の数だけでもインド海軍に近い数を保有しようと、哨戒艦艇や沿岸警備隊の整備を軽視してしまったのだ。これは史実の日本海軍がアメリカ海軍を仮想敵としてとってきた方針に極めて近いものであり、仮想敵との間にある国力の差が生み出した悲劇だとも言えよう。

また、空軍についても同じである。主力水上艦艇を戦闘機や作戦機に、哨戒艦艇と沿岸警備隊を哨戒機や偵察機に置き換えれば、パキスタンが行ってきた軍の整備計画は、海空の別を問わず完全に同じ特徴を持っていたと言えるのだ。

こうして、単横陣を組んだインド艦隊は悠々とチッタゴンの沖合に到達。午後七時にチッタゴン在泊のパキスタン艦隊を電探で補足すると同時に、各艦の武装コンテナから三発ずつの対艦誘導弾を「最も近い目標」に向ける形で発射したのだ。

これにより、チッタゴンに停泊していた軽巡洋艦と駆逐艦の合計五隻には、それぞれ三発ずつの対艦誘導弾が襲いかかることになる。彼女たちは、自動対空機関砲を除けばともに誘導弾を迎撃できるような装備を一切装備しておらず、迎撃できる時間は僅か五秒ほどであった。

午後七時過ぎ、チッタゴンのパキスタン海軍軽巡洋艦「ジャムナ」。

「敵誘導弾、本艦まで五海里を切りました！」
「チャフを放て！」

艦橋の手前両舷に搭載されている発射機から、艦の前方に向けて細切れにされた金属箔が散布される。後方にいた四隻の駆逐艦もこれに倣い、岸壁に沿って縦一列に並んでいた五隻の前方にはそれぞれ金属箔の雲が形成された。

何発かの誘導弾は、チャフによって誘導装置を攪乱され、目標と勘違いした周囲の岸壁や海面に突入していく。しかし大多数である十二発の誘導弾は方向を変えず、そのまま真っすぐに五隻の目標か

ら一海里的距離にまで接近した。

降り注いでくる誘導弾へと、五隻を守るための最後の手段である対空自動機関砲が放たれる。迎撃できる時間は僅か数秒であるにも拘らず、六発もの誘導弾の撃墜に成功したことは、パキスタン海軍にとって不幸中の幸いであった。

だが撃墜できた誘導弾が六発であるということは、言い換えれば六発の誘導弾を撃ち損じたということでもある。そして六発の誘導弾は目標を正確に捉え、機関砲弾の雨霞も掻い潜り、当初の目的どおり正確に目標へと命中したのである。

軽巡洋艦「ジャムナ」は、艦橋の真下に当たる左舷側の船体と、一番煙突と二番煙突の中間部分に被弾。一発目の命中による船体の損傷は水面下にまで達し、被弾した跡からは海水が船体の内部へと流れ込み始めた。

それよりも深刻だったのが、二発目となる煙突基部への命中である。命中した誘導弾は煙突を二本とも薙ぎ倒しただけに止まらず、何と艦の心臓とも言える機関室にまで達してから炸裂し、左舷の推進軸を動かすために設置されていたボイラーを二基とも粉碎してしまったのだ。

火災は船内の重油タンクにも延焼し、やがて艦橋さえも炎に包まれようとする。そしてこの時炎に包まれていたのは、彼女一隻に限った話ではなかった。

第八十七話 先手必勝（後書き）

富士「対米戦時と同型の艦に誘導弾や自動機関砲を載せると、見た目が変なことになりそうだな」

作者「近年まで現役だった、台湾の魔改造ギアリングよりはまし……かと思いましたが、武装を見る限り大差なさそうです」

大隅「単装砲に誘導弾、自動機関砲に回転翼機……ほとんどそのままではないですか」

三笠「この艦が多く、国で建造されたとしたら、ひよっとするとどこかの海軍では今でも現役だったかもしれませんね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「パキスタン海軍の損害は、尋常ではありませんでした。次回『二正面作戦』ご期待下さい」

第八十八話 二正面作戦

軽巡洋艦「ジャルナ」の直後にいた「ダッカ」は、幸い一発の直撃弾も受けることは無かった。だがチャフによって欺瞞した誘導弾のうち一発が、至近の海面へと突入した後に炸裂したことで、衝撃によって艦首に亀裂が発生したのである。

三番艦の「チッタゴン」は、チャフや自動機関砲を用いたものの、一発の対艦誘導弾も妨害することができなかった。そして三発の誘導弾に襲われ、それぞれ艦首左舷、一番煙突の根元及び後部艦上構造物に命中した。

うち一番煙突の根元に食らいついた誘導弾は、一発で左舷推進軸を回転させるためのボイラーとタービンを破壊。艦首左舷の一発は艦首に搭載されていた三インチ単装砲を、艦尾の一発は信号室等をそれぞれ破壊したが、幸い損傷が水面下に達することは無かった。

四番艦「クールナ」は他艦と共同で一発の誘導弾を欺瞞し、残った二発の対艦誘導弾についても、自動対空機関砲で撃墜することに成功。「ダッカ」とは異なり至近弾による損傷も無く、この攻撃においてパキスタン海軍で唯一損傷を免れた主力水上戦闘艦艇となった。

最後尾にいた「ラーシジャヒ」は一発の被弾に止まったものの、その一発が運悪く誘導弾発射機に命中。対艦誘導弾と対潜水艦誘導弾の合計十八発が続けに誘爆し、一瞬にして彼女の船体は真っ二つに折れてしまった。

船体の折れた部分から、前部機関室へと海水が流れ込む。その海

水は爆発によって生まれた損傷から、前部ボイラー室や後部ボイラーにまで侵入し、二つに分かれた船体は見えるうちに沈み始めた。

パキスタン艦隊が大混乱に陥っている隙に、インド艦隊は南方の海域へと離脱。暫く南下を続けた後に北西へと針路を変え、インド海軍設立以来の根拠地であるカルカタへの帰還を目指した。なお、この戦闘における双方の損害は以下のとおり。

・インド軍損害

特に無し

・パキスタン軍損害

沈没

駆逐艦「ラーシジャヒ」（船体断裂。乗員の過半に当たる百名以上が戦死）

大破

駆逐艦「チッタゴン」（艦首三インチ砲及び自動機関砲、前部機関室及び誘導弾発射機、後部艦橋破損）

中破

軽巡洋艦「ジャルナ」（一番及び二番ボイラー破壊。浸水発生）

小破

駆逐艦「ダッカ」（艦首損傷。艦首倉庫及び錨鎖庫に浸水発生）

こうして、本来の目標である東パキスタンにおいては、インド軍が数を恃みに優勢な戦いを続けていた。しかし西パキスタンとの国境における戦闘では予断を許さない状況が続いており、特にカシミール地方での戦闘では一進一退の攻防が続いていた。

そのため、パキスタンは西パキスタンからインド領内に進攻した後に、そこからパキスタン軍を撤退させるのと引き換えにしてインド軍を東パキスタンから撤退させることを模索。十二月四日午前十

時に、西パキスタンのカラチから以下の艦隊を出港させた。

災害救難艦イスラマバード

（一個戦闘団乗り組み）

乙型水上艦バルーチスターン、パンジャブ、アザド・カシミール、シンド

（各一個戦闘中隊、合計一個戦闘団乗り組み）

目的地は、国境からおよそ二百キロメートルの距離にあるカッチ湾沿岸の諸都市。ここに部隊を上陸させてインド軍の不意を突き、同時に陸路からも陸上部隊が侵攻することで、沿岸部の国境にいるインド軍を撃破しようとしたのだ。

だが国境の沖合には、インド海軍の災害救難艦「スバルナレカ」と乙型水上艦「マニプル」、「ミゾラム」、「オリッサ」及び「シッキム」が展開していたのだ。そして出港から僅か四時間後の午後四時には、お互いを対水上レーダーで捉えることになった。

第八十八話 二正面作戦（後書き）

作者「はてさて、本作が完結した後何を書こうやら」

朝日「候補はあるのですかな？」

作者「勇が現代に戻った後の話か、あるいは『MS IGLOO』
みたいに、数話ずつで試作兵器の紹介をしていくかだね」

敷島「今の、伏せ字の意味あるの？」

富士「で、その試作兵器とやらは作ってあるのか？」

作者「はい。魚雷艇や潜水航空戦艦、小型潜水艇といったように、
堅実なものから作れるかどうか怪しい代物まで揃っています」

三笠「潜水航空戦艦というのは、国威発揚以外の意味があるのでし
ょうか……それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、双方の機動部隊が艦載機を使わずに激突します。次回
『新興国の悲哀』ご期待下さい」

第八十九話 新興国の悲哀

同時刻、パキスタン海軍乙型水上艦「バルーチスターン」。

「ほ、本艦の正面二十海里の地点に、単横陣を組んでいる百メートル程度の小型艦四！ さらにその後方に、二百メートル程度の大型艦一！」

「馬鹿な、我々の接近を悟られていたというのか……くっ、各艦、最も近い目標に向け対艦誘導弾を放て！」

この時、双方の陣形は完全に一致していた。だが予めパキスタン海軍の襲来を予測していたインド軍に対し、奇襲上陸を計画していたパキスタン軍は完全に油断しており、それがそのまま判断の一瞬の遅れにつながったのである。

そしてその一瞬を突き、インド艦隊はパキスタン艦隊と同じく「最も近い目標」に誘導形式を設定したうえで対艦誘導弾を発射。発射数も各艦から三発ずつであり、第一撃のやり方までパキスタン海軍と完全に一致していた。

「敵水上艦、誘導弾を発射！ 数は各艦より三発ずつ！」

「敵も同じことをしてきたか……よし、対空誘導弾撃ち方始め！」

この対空誘導弾による迎撃についても、前方に向けられるイルミネーターの数の都合から、発射された数はそれぞれの乙型水上艦から一発ずつと同様であった。つまり、一度にそれぞれの艦隊が誘導できる乙型対空誘導弾の数は四発ずつということになる。

二十海里の距離から、飛行速度がマッハ一の対艦誘導弾が飛来し

た場合、命中までには二分近い時間がかかる。そのため、例え一隻が同時に誘導できる対空誘導弾が一発のみであろうと、命中したか否かを確認した直後に次の誘導弾を放てば七発前後の誘導弾を送り込めることになるのだ。

つまり、艦と対空誘導弾の性能が最大限発揮されれば、お互いに対艦誘導弾を全て迎撃することも十分可能な計算になる。もし一隻につき一発か二発が向かってきたとしても、自動対空機関砲やチャフを使えば大半の無効化が可能なはずであった。

だが予算の都合から、この時印パ両軍の乙型水上艦が搭載していた乙型対空誘導弾は三発ずつのみ。整備も行き届いていないために、命中率は予定どおりの数字など期待すべくも無く、さらに練度不足による操作の遅れも発生した。

「早く、早く次の対空誘導弾を発射しろ！」

「は、はい！」

部下が思うように動いてくれず、「バルーチスターン」の艦長を含む両軍の指揮官は、じれったい思いをすることになる。これまで行ってきた演習は操作方法を復習するばかりであり、実弾はおろか演習弾さえ使われない場合が大半だったのだ。そのため、いざ実弾を発射するとなって混乱をきたしたのである。

これらの原因が重なり、パキスタン側はどうか各艦から三発ずつの対空誘導弾を発射できたものの、破壊できたインド軍の誘導弾は三発のみ。初期型の誘導弾であるということを考えてなお、あまりに低すぎる命中率であった。

練度の低さや整備不良は、インド軍も程度の差こそあれ抱えてい

る問題であった。それでも五発の誘導弾を迎撃することに成功している。このことも、以下にパキスタン海軍の整備と練度に問題があったかということをはっきりと示していると言えるだろう。

「敵誘導弾、本艦から五海里の距離にまで接近！」

「チャフを放て！ 誘導弾の時に様にぬかるなよ！」

先程まで部下が晒していた醜態に痺れを切らしかけていた「バルーチスターン」の艦長だったが、気を取り直して檄を飛ばす。彼の号令一下、艦橋の両脇に固定装備として搭載されているチャフが立て続けに散布されていった。

幸い、チャフの散布は両軍ともに大した支障も無く成功裏に終わる。これによって欺瞞できた誘導弾の数は、パキスタン側が三発、インド側が二発となった。そしてパキスタン艦隊から放たれた五発と、インド艦隊が発射した七発の対艦誘導弾が、自動機関砲の射程へと飛び込んだのだ。

「自動機関砲、射撃を開始しました！」

「そうか……頼む、一発残らず撃ち落してくれ……っ！」

彼の呟きは、この海戦に参加している全将兵が同じように抱いていた願いでもあった。そしてその願いは、ある艦の乗組員のものは叶えられ、そしてまたある艦の乗員のものは空しく碎け散ったのである。

第八十九話 新興国の悲哀（後書き）

富士「対空誘導弾の同時発射数がイルミネーターの数次第とは、もどかしいな」

作者「イージス・システムもどきでも作れば、だいぶ改善されるのですけどね。とはいえ作ったところで、導入できる国はごくわずかでしょうが」

大隅「それに機密上の問題もありますから、輸出版の性能は必然的にダウングレードされるはずです。日本の兵器輸出で史実以上に対艦誘導弾が広まっていますから、需要も見込めるのですけれど」

作者「中国やロシアに輸出したら、敵に回したときに怖いしなあ：：ひょっとしたら、アメリカに対抗する目的でメキシコやカナダ辺りが興味を示すかも」

三笠「中南米の軍拡は、戦後もアメリカにとって頭痛の種でしょうね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、双方の艦艇が惨状を呈します。次回『差し違え』ご期待下さい」

第九十話 差し違え

爆発が幾度となく発生し、その度に艦が一隻また一隻と黒煙に包まれる。轟音は合計で六度に亘って響き渡り、五隻の艦が誘導弾の餌食となった。

同じ頃、インド海軍災害救難艦「スバルナレカ」指揮所。

「我が艦隊の被害は？」

「乙型水上艦『マニプル』より報告。『艦首錨甲板二命中弾一、火災発生』とのことですよ」

幸い、彼女が被弾した場所は、弾薬庫や機関室などといった急所からはいくらか離れていた。そのため火災が発生したもの、健在であった艦内の消火設備によって、間もなく消火作業に取り掛かることができたのだ。

「そうか……他の艦は？」

「し、司令！ 『シッキム』より、『艦首三インチ砲二直撃弾一。火災発生』との通信が入りました！」

「くっ……誘爆だけは避けてもらいたいが」

日本海軍などが使用する武装コンテナ形式の三インチ砲は、基部を一個の甲型コンテナに収めるため、部品の寸法や空間が可能な限り圧縮されている。その結果として、砲塔のすぐ下に百発以上の予備弾が保管されている状態になっており、砲塔への直撃弾はすぐさま誘爆を招きかねないものであった。

直後、「シッキム」の艦内に収められていた三インチ砲弾が誘爆

を開始。さらには発射準備を整えて安全装置を外していた各種の誘導弾も、爆発による衝撃や火災によって次々と爆発し始めたのだ。

「総員退艦！ 総員退艦！」

艦長の命令が下るや否や、「シッキム」の乗員たちは一斉に安全な艦尾へと駆け出す。そして甲板から海面に飛び込んだり、あるいは艦尾の扉を開けて、そこから艦尾のコンテナ搭載甲板に積んでいた装載艇での脱出を試みたりした。

これに前後して、パキスタン艦隊の乙型水上艦部隊は、合計で四発の対艦誘導弾を被弾。四隻の中で「バルーチスターン」だけは難を逃れたものの、「アザド・カシミール」が二発を、残る二隻がそれぞれ一発を被弾することになった。

一番被害の大きかった「アザド・カシミール」は、艦橋のうち最上甲板とほぼ同じ高さの正面部分と、揚陸予定である車両を搭載していた前部コンテナ甲板に被弾。艦橋への直撃によって、航海艦橋と戦闘指揮所が同時に大きく破壊されてしまい、艦長を含めた士官の過半数が戦死する事態に陥った。

そしてコンテナ甲板に命中した誘導弾は、コンテナ搭載場所の両側にあった居住区も破壊。損傷は船体外側の水面下にまで及び、浸水は居住区のみならず、奇襲上陸作戦という建前からくる油断によって閉められていなかった防水扉から船体下部にまで達した。

乙型水上艦の船体下部には、艦尾の機関室を除けば、艦を縦断する一本の廊下を挟むようにして調理室や医療区画などが配置されている。そのため、廊下に何ヶ所か設けられている防水扉を閉めていない状態で一度浸水を許すと、一気に艦首から艦尾までの艦全体に

海水が流れ込むことになるのだ。

浸水によって「アザド・カシミール」の船体は艦首から沈んでいくが、総員退艦を発令すべき艦長は既にいない。そのため乗員は事態が呑み込めずにそのまま艦に残る者と、危険を察して独断で艦を離れるものに分かれ、それがそのまま生死の分かれ目になった。

彼女に比べれば、他の二隻はまだましな状況であった。「パンジヤブ」は艦橋の上部に誘導弾が命中し、薙ぎ倒されたマスト諸共ほぼ全ての電探が破壊されたが、その後船体への進水や火災どころか一人の死傷者もないままの帰還に成功している。

そして「シンド」は艦首扉の上部に命中弾を受け、扉のほぼ上半分が破壊された。だが波が荒れていたり、高速を出したりしない限り、航行する際に発生する艦首波がコンテナ搭載甲板に流れ込むことは心配せずに済むという程度の損傷で済んだ。

パキスタン海軍は、砲撃戦をしながらインド艦隊を強行突破して上陸地点に雪崩れこむということも不可能ではなかった。だがこれ以上は艦の増援を望めないパキスタン海軍に対し、インド海軍は付近に八隻もの乙型水上艦を配備しているため、無事に上陸を行える望みは薄かった。

そのため、パキスタン海軍は沈没した「アザド・カシミール」の乗員を収容するとその場から撤退。インド軍は追撃も考えたが、最終的には「シッキム」乗員の救助を優先し、パキスタン海軍への水上艦艇による追撃を取り止めている。

だがこの機にパキスタンの域を挫こうとしたインド軍は、なんとかしてパキスタン海軍に追撃をしようと模索する。そしてパキスタ

ン艦隊の離脱を確認した後の午後六時に、災害救難艦「スバルナレカ」から十二機の二〇式戦闘機の艦上機仕様を出撃させたのである。

第九十話 差し違え（後書き）

富士「防水扉を閉めておかんとは、どうしようもないな」

作者「全ての防水扉を閉鎖しておけば、一発の被弾で沈むことがま
ず無いような設計をしていますけどね。ただ、さすがに艦底で魚雷
が炸裂して、船体が折られてしまうようなことがあればどの道お陀
仏ですが」

敷島「船体の中央部がくりぬかれたような形になっているから、そ
の類の攻撃には脆そうだよ」

朝日「とはいえ、それは通常の水上演習艦艇も変わりますまい。廃
艦を標的とした魚雷の発射実験を見れば、水上艦艇が如何に魚雷に
弱いかということは明らかであります」

三笠「かといって、魚雷の炸裂によるホギングとサギングに耐えら
れるような設計をすれば、重量がかさみますからね……それでは、
次回予告をお願いします」

作者「印パ戦争編は次回で終わりです。次回『戦火は未だ絶えず』
ご期待下さい」

第九十一話 戦火は未だ絶えず

出撃したインド軍の攻撃隊は、パキスタン側の対空レーダーに捕捉されることを可能な限り遅らせられるよう、パキスタン艦隊の推定位置まではマッハーにも満たない速度で低空飛行を行った。そして予定どおりパキスタン艦隊を捕捉すると、対艦誘導弾を一発ずつ発射してすぐさま反転したのだ。

目標は、「電探が捉えた最大の目標」。つまり、三隻の乙型水上艦に護衛されている、パキスタン海軍災害救難艦「イスラマバード」であった。

同時刻、パキスタン海軍災害救難艦「イスラマバード」。

「後方より、所属不明の航空機が飛来……誘導弾を発射しました！」

「馬鹿な、距離と速度……それよりも高度は！」

「高度は三十メートル！ 距離二十海里、速度はおおよそマッハーで反転していきます！」

三十メートルと言えば、水上艦が搭載しているマストの高さと大差ない。それ故に誘導弾の発射直前まで、パキスタン艦隊から見た水平線の向こうに隠れ続けることができていたのである。もし通常の高度であれば百海里前後の距離で捕捉されてしまうだけに、その差は大きい。

「我が軍に、対空誘導弾は……本艦が積んでいるだけか」

「はい。至急、本艦の対空誘導弾を発射させてください」

「よし、『イスラマバード』は対空誘導弾を発射せよ！」

「対空誘導弾、発射始め！ 全弾撃ち尽くしても構わん！」

対艦誘導弾が発射されておよそ一分後、艦長の命令でようやく対空誘導弾の発射が始まる。だが一基の発射機に装填されている対空誘導弾の数はやはり三発のみであり、十二発の対艦誘導弾はどう足掻いたところで迎撃できないのである。

「誘導弾、発射完了しました！」

「敵対艦誘導弾の残存数は？」

「八発です！」

「チャフ発射！ ……一発でも多く、逸らしてくれればいいが」

だがチャフを展開したところで、全長二百メートルを超える「イスラマバード」のレーダー反応を欺瞞することは難しい。途中、一発が乙型水上艦の自動機関砲によって撃墜され、さらに三発が誘導装置を欺瞞されて周囲の海面に突っ込んだものの、四発は「イスラマバード」から一海里的距離にまで肉薄した。

「自動対空機関砲、射撃開始しました！」

「く……っ！」

やがて訪れるであろう衝撃と轟音を覚悟し、パキスタン艦隊の指揮官は目を瞑る。そして自動機関砲の射撃開始から五秒後、二回の爆発音があった後に「イスラマバード」の船体が激しく揺れた。

「被弾箇所は！」

「お待ちください……一発は後部昇降機を貫通し、格納庫内で炸裂！ もう一発は艦尾右舷に命中し、右舷後方の自動機関砲が破壊されたとのことです！」

「格納庫は火災が発生しているはずだ。消火作業を急げ！」

格納庫を襲った誘導弾の炸裂によって、艦内にあった中型回転翼機四機が破壊されるか、あるいは燃え始める。幸い誘導弾の格納庫は艦底にあったため、誘爆だけは免れることができたものの、航空機の着艦が非常に困難なものとなってしまった。

この攻撃の後、双方の艦隊はそれぞれの母港に帰還。だが東パキスタンではパキスタン陸軍が大損害を受けており、また西パキスタンからの反攻作戦も頓挫したことで、最早パキスタンは東パキスタンの独立を認めるしかなかった。

十二月十六日、インドとパキスタンは以下の内容で停戦に合意。だが西部戦線でも特に激戦が繰り広げられたカシミールの国境については半ば棚上げされたままであり、この後も現代に至るまで幾度となく、小規模な武力衝突が発生することになる。

- ・パキスタン軍は、東パキスタンから完全に撤退すること
- ・パキスタンは、東パキスタンの「バングラデシュ人民共和国」としての独立を承認すること
- ・パキスタン軍及びインド軍は、国境及び第一次印パ戦争後に制定された停戦ライン以内の地域に撤退すること

第九十一話 戦火は未だ絶えず（後書き）

作者「歌詞の無断転載って、どこからが駄目なのかがさっぱり分かんよ。それに、なんで今になって即時の作者ID削除なんぞ始めたのやら」

敷島「カスラック……もとい、JASR○C辺りが騒いだとか？」

作者「作詞者が今生きているならまだしも、既に死んだ人の著作権を何十年も守って誰が得をするんでしょうかねえ……あ、著作権料の一部は自分らの懐に行くのか。そりゃあ必死になるわけだ」

富士「やけに毒づいているが、何か恨みでもあるのか？」

三笠「おそらく、かつて幾度となくy○u○t○u○b○eやニコニ○動画で軍歌を使用した動画がまとめて削除されたせいではないかと……それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、シナイ半島を巡る争いを描きます。次回『贖罪と油断』ご期待下さい」

第九十二話 贖罪と油断

一九七三年十月六日、日本からの武器輸入によって力を蓄えたレバノンとヨルダン、及びエジプトを主力とする連合軍がイスラエルに侵攻を開始。この日はユダヤ教で言うところのヨム・キプル（贖罪の日）に当たり、飲食や一切の労働が禁じられていたため、奇襲を受けたイスラエル軍は大混乱に陥った。

「着岸しました！」

「よし。各艦、艦首扉開け！」

「全軍進め！ シナイ半島とスエズ運河を、何としてでも我らの手に！」

スエズ運河沿いのドウムヤートやスエズから出撃したエジプト海軍の甲型水上艦が、三十ノットの俊足を生かして目と鼻の先にあるシナイ半島へと押し寄せる。そして砂浜へと乗り上げ、二〇式戦車の輸出版を次々と陸揚げし始めた。

この時彼女たちは船体前半を車両甲板とし、後半に艦橋と武装を搭載していた。このように改装することで、回転翼機を搭載していないこと以外は同規模の水上戦闘艦艇と互角の戦闘能力を持っているながら、車両の揚陸も可能という代物がたった数日で完成するのである。

「くっ……あれが本当に、あの弱かったアラブ軍なのか！」

「いや、違う！ 戦車も大砲も、全部我々のものと同じだ！」

「日本はアラブにも武器を売っていると聞いたが、本当だったのか！」

第二次中東戦争の際にイスラエル軍が易々とアラブ諸国の軍を破ったことや、一九七〇年に対ユダヤ強硬派であったエジプトのナセル大統領が急死したことで、エジプトに備えているイスラエル軍は完全に油断していた。そこに各方面から合計で千両を超える戦車による攻撃を受けた結果、シナイ半島方面のイスラエル軍は開戦早々総崩れとなる。

「戦車の恨みは、戦車で返してやる！　喰らえ！」

エジプト軍に所属する二〇式戦車の放った砲弾が、浮き足立ったイスラエル軍の二〇式戦車を次々と撃ち抜き、破片は車内で跳ね回って事態の呑み込めていない乗員を即死させる。こうしたアラブ軍の猛攻は、何も陸上からだけのものとは限らなかった。

「全機、各自の判断で対戦車ミサイルを撃て！」

二〇式中型回転翼機は、胴体両側面に補助翼を設けることで簡易対戦車ヘリとしても運用できる。この場合は補助翼の下に合計で一六発の対戦車ミサイルを懸架することができ、鈍重なことを除けば本格的な対戦車ヘリに劣らない攻撃能力を有しているのだ。

有線指令によって誘導されたミサイルが、戦車の中でも一番脆弱な砲塔上面を貫く。主砲以外の火器は七・七ミリ機銃しか持たない二〇式戦車は、対空攻撃能力が絶無に近かった。忽ちの内に部隊単位で戦車が撃破され、中には内部の砲弾が誘爆して派手に火柱を噴き上げるものもある。

「よし、四両目撃破……ってうわあああっ！」

「三番機、どうした……がはっ！」

そこにイスラエル軍の特科連隊が到着し、自走高射機関砲と自走対空誘導弾による激しい反撃が行われる。二種類の防空車両を組み合わせることで、様々な高度と距離の敵機に対応できる日本式の防空部隊は、鈍足な回転翼機にとって非常な脅威であった。

「撃て撃て、撃ちまくれーっ！」

「味方の戦車隊を、これ以上やらせるな！」

ある機体は機体を蜂の巣にされ、またある機体は操縦席に誘導弾の直撃を受けてすぐさま墜落していく。とはいえこれら特科連隊の車両はまともな装甲を持っておらず、ひとたび体勢を立て直した回転翼機部隊のミサイルや機銃掃射によって、少なからずが撃破されることになる。

当時各地にいたイスラエル陸軍の常設部隊はシナイ半島に二個師団、ヨルダン川西岸の制圧用と本土防衛に各一個師団のみ。一方エジプト軍はイスラエル軍より遥かに強大な陸海空軍のうち過半をこのシナイ半島に差し向けており、一度陸上部隊を送り込んだ水上艦もスエズ運河の両岸を往復して矢継ぎ早に増援を送り込んでいた。

そして対艦誘導弾など各種の武装を搭載した水上艇部隊は、第一撃でイスラエル海軍艦艇の駐留する三ヶ所の港を強襲。各地に六隻ずつの水上艇を差し向け、駆逐艦「エイラート」と「ヤッフォ」以下の艦艇を一挙に殲滅しようと試みた。

第九十二話 贖罪と油断（後書き）

朝日「これは……いつぞやの快進撃が嘘のようすな」

作者「勝ち過ぎると、用心深い性格のは別として、どうしても敵を軽く見てしまう将兵が出てくる。それで失敗した前例はいくらでもあるはずなのに、いつまでたっても同じ轍を踏むのが後を絶たないんだよなあ」

富士「しかし、貴様は史実で使われていた兵器が分からなければ片っ端から日本製兵器を宛がうのだな」

作者「史実で双方の主力が米ソのものでしたから、アメリカはともかくソ連の分は日本が補うことになるかと。価格はともかく汎用性は高いので、史実のソ連兵器の代役をしっかりと務めてくれるはずですよ」

三笠「それに、民間への転用も不可能ではない兵器が多いですからね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「イスラエル軍の油断は、陸軍に限った話ではありませんでした。次回『友軍のために』ご期待下さい」

第九十三話 友軍のために

十月六日午前九時、イスラエル南部のエイラート港をエジプト軍の大型水上艇六隻が襲撃。そこにはイギリス製の駆逐艦「エイラート」及び「ヤッフオ」、さらには四隻の甲型水上艇と十二隻の丙型水上艇が無防備な姿を晒していた。

「全艇、ミサイル発射始め！」

エジプト軍の六隻から、第一波として合計六発の対艦ミサイルが放たれる。ミサイルは慣性飛行の後にレーダーで目標を捕捉し、自動対空機関砲（CIWS）の電源さえ入れていないという体たらくを晒しているイスラエル海軍艦艇へと降り注いだ。

六発のうち、一番目立つ目標であった「エイラート」と「ヤッフオ」には三発ずつが命中。イギリス海軍が対米戦終結時に建造中だった駆逐艦を買い取っただけの二隻は、現代戦に必要な誘導弾などの武装を全く搭載しておらず、誘導弾にとってはまさに格好の的であった。

さらにボイラーとタービンをそれぞれ一ヶ所にまとめて配置していたことで、一発の被弾で機関停止に追い込まれる恐れが大きいという弱点も持っている。現に彼女たちの煙突は船体中央部に太いものが一本だけ設けられており、その上主砲も五十五度までの仰角しかとれず、建造時期の割に旧態依然とした駆逐艦であることは否定できないのだ。

しかし、この場合そのような小細工を弄していたところで如何ほどの意味があっただろうか。二隻の艦上は瞬く間に大火災に包まれ、

数分と経たぬ間に「エイラート」の魚雷が誘爆。彼女の船体は真つ二つに両断され、ミサイルの命中から五分と経たぬ間に轟沈した。

続いて「ヤッフオ」も、被弾による損傷で左舷から浸水が発生。船体中央部で大きな容積を占めている機関室へと浸水が発生し、やがて横転したのちに艦尾から沈没していった。こうして対艦ミサイルの威力が実証され、以後各国はアメリカのハーブーンやフランスのエグゼ、さらにはノルウェーのペンギンといった対艦ミサイルの開発に邁進することになる。

二隻が沈没しつつある頃、イスラエルの大型水上艇「ネタニヤ」艦橋。

「まだ、攻撃態勢は整わないのか！」

「整いました。いつでも誘導弾を発射できます」

しかしそこで、沿岸十海里程度まで近づいた再びミサイルが発射される。エジプト側が最初の一撃で一斉に手持ちの誘導弾を放たなかったのは、二〇式誘導弾の誘導方法が原因であった。

日本製の艦対艦誘導弾は、発射前に「最大の目標を狙う」か「最も近い目標を狙う」かを選択して設定し、発射後は慣性によって飛行を続ける。そして海面から十メートルほどの高さを保ったまま一定距離を進むとレーダーが作動し、アクティブレーダーホーミングと赤外線誘導の併用によって目標を追尾するのだ。

つまり同時に同一の目標識別方法で複数の対艦誘導弾を発射した場合、その全てが同一の目標に命中してしまい、オーバーキルとなつて誘導弾の浪費につながってしまう恐れがあるのだ。そして二回目の攻撃では、エイラートに停泊する小型艇をまんべんなく攻撃す

るために、目標選択方法を「最も近い目標を狙う」としたうえで近距離から発射しなければならなかった。

「エジプト艦隊からミサイル第二波、来ます！」

「取り舵一杯、前進全速！　チャフをばらまきつつ、敵艦隊へと突っ込むぞ！」

「そのようなことをすれば、むざむざ当たりに行くようなものでは？」

「第一撃で『エイラート』と『ヤッフオ』がやられた以上、残った我が軍の艦艇は同型の水上艇ばかり。そんな状況で『もっとも大型の艦艇』に向けて誘導弾を放てば、ミサイルが一隻に集中してオーバーキルとなり、ミサイルの無駄になってしまう恐れがある。なら、次に敵は対艦誘導弾を『最も近い艦艇』に向かうようにしたうえで、発射したはずだ。だとすると、自動機関砲の電源を入れてミサイルへの対処ができるようになっていいる我々が突出しておいた方が、敵のミサイルが未だ戦闘準備の整っていない艇に向かうことを防げるはずだ」

「了解……取り舵一杯、前進全速！　チャフ発射用意！」

先陣を切った「ネタニヤ」に続いて、出撃準備を大慌てで整えた数隻の水上艇がエジプト艦隊へと突進する。そしてそんな彼女たちへと、多数の対艦誘導弾が亜音速で突っ込んできた。

第九十三話 友軍のために（後書き）

富士「この艇長、死ぬ気か？　だが、確かに味方の損害を局限する方法としては間違っていないな」

作者「歴史を見てみれば国や宗教を問わず、必要とあれば自己犠牲を覚悟した戦法が採られることもあります。勿論、程度の差というものがあります」

敷島「それで本来の目標が達成できたり、味方の被害を最小限に抑えられると思われた場合には、という前提がつくけどね」

三笠「そうでなくとも、自己犠牲の行動を宣伝することで、戦意の高揚にはつながりますからね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「果たして、イスラエル海軍ミサイル艇部隊の命運や如何に？

次回『エイラート事件』ご期待下さい」

第九十四話 エイラート事件

エジプト軍の対艦ミサイルへと、イスラエル海軍大型水上艇部隊の自動対空機関砲が火を噴く。当時彼女たちは艦橋の前後に一基ずつの自動対空機関砲を装備しており、加えて対潜水艦誘導魚雷や対艦誘導弾、及び三インチ速射砲といった一通りの武装を搭載していた。

様々な方向から、レーダーで目標を捉えたミサイルが飛来する。それを自動対空機関砲の上部に設けられている搜索兼管制用レーダーが捕捉し、危険度が高いとされる目標から順に二十ミリ弾を分速数千発という速度で浴びせかけた。

機銃弾に貫かれた誘導弾が相次いで空中爆発するものの、たった数隻の艇で十八発もの誘導弾を捌ききることは不可能である。彼女たちが持つ自動機関砲の射程は一海里に過ぎず、マッハーで飛来する対艦誘導弾を迎撃できる時間は、どう長く見積もっても五秒か六秒程度しかないためだ。

規模が小さいとはいえ、この時エジプト側がとった戦術は、史実の冷戦期にソ連が考案したミサイルによる飽和攻撃そのものであった。これは敵の迎撃能力を超える誘導弾を差し向けることで、途中何割かの誘導弾が撃墜されたとしても、残った誘導弾で確実に敵艦を仕留めようという戦法である。

そしてこの攻撃においてイスラエル軍が撃墜できた誘導弾は、全体の三分の一にさえならない五発。残り二十発の誘導弾は、突出していた大型水上艇「ネタニヤ」と「アルアリーシュ」、さらにエイラートに停泊していた小型水上艇のうち、同じようにいち早く出港

を済ませた「オフアクイム」と「ディオナ」に襲いかかった。

まず「オフアクイム」と「ディオナ」は、それぞれ三発の誘導弾が向かっていったものの、最初の一発が命中すると同時に船体が爆散。二隻合わせて十六名の乗員は、船体諸共その身を粉微塵に吹き飛ばされて命を落とす結果になった。

「これ以上接近されては、避けられません！」

「チャフ発射！」

艦橋ブロックの両脇に設けられているチャフ発射機からチャフが放たれるものの、ほぼ真ん前から海面と並行に飛来する誘導弾には、艇の移動と共に相対的に艇の後方へと流れてしまうチャフは大した効果を現さなかった。このチャフで逸れたミサイルは、ミサイルの誘導装置そのものがすでに旧式化しつつあったものということも手伝って六発に上ったが、七発のうち五発が「ネタニヤ」へ、二発が「アルアリーシュ」へと命中した。

ミサイルの直撃を受けた二隻は、轟沈こそしなかったものの艦全体が火災に包まれ、やがて発射態勢を整えていた誘導弾が誘爆。何れも船体を両断されて五分と経たぬ間に沈没し、乗員は「ネタニヤ」の一名と「アルアリーシャ」の二名を残して全員が戦死した。

もしこの余勢を駆ってエジプト海軍がさらなる攻撃を仕掛けていれば、エイラートのイスラエル海軍艦艇は全滅の憂き目を見た恐れもある。しかし第二次中東戦争の結果、エジプト軍はイスラエル海軍に対して過剰ともいえる警戒心を抱くようになり、反撃を恐れてミサイルの発射直後に反転離脱してしまった。

この戦闘で、一発が五百キログラムというさほど大型でもないミ

サイルであったとしても、艦船には十分な打撃を与えられることが証明された。また同時に、それを搭載しての一撃離脱が可能であるミサイル艇の威力も実証され、以降欧米各国は対艦ミサイルや誘導弾の開発に力を注ぐこととなる。

この事件は後に、撃沈された艦艇のうち最大艦の名から、そして海戦が行われた港湾の名から「エイラート事件」と呼ばれることになる。また各国の戦略に与えた影響は極めて大きく、水上艦艇における砲兵装は以後それまでもまして急速に廃れていった。

そしてこの日に襲撃を受けた港湾は、前述のとおりエイラートだけに止まらなかった。

第九十四話 エイラート事件（後書き）

敷島「しかし、よくこんなにミサイルを用意できたもんだねえ」

作者「これで、威力が実戦で証明された日本製誘導弾の売れ行きも向上することでしょう」

富士「そして、それを搭載できるコンテナ式軍艦も……か。今回の海戦で脆弱性が浮き彫りになった気はするが、それは小型艦艇である以上大同小異だからな」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「エジプト軍の攻撃は、なおも続きます。次回『必死必殺』ご期待下さい」

第九十五話 必死必殺

エイラートのイスラエル海軍艦艇が攻撃を受けるのとはほぼ同時に、スエズのイスラエル海軍基地にもエジプト軍の甲型水上艇六隻が襲来。しかしこちらのイスラエル海軍艦艇は、エイラートにいた艦艇以上に悪い状況に立たされていた。

というのも、エイラートでの一件では結果的に大型艦である「エイラート」と「ヤッフォ」がエジプト側の初弾を引き受けたことで残された小型艇が戦闘準備を整える時間を稼ぐことができた。これに対しスエズには合計八隻の小型艇しか在泊しておらず、第一撃でエジプト側の全力攻撃を全艇が受ける羽目に陥ったからである。

「敵丙型水上艇、誘導弾の射程に入りました！」

「よし！ 全艦、最近の敵水上艇に向け誘導弾発射！」

泊地にいる船艇を万遍なく攻撃できるよう、単横陣を組んだ六隻の甲型水上艇から、相次いでそれぞれ三発ずつの対艦誘導弾が発射される。エジプトはこれらの作戦に備えて、日本側にスエズ湾の油田採掘権を優先的に与えるなどして便宜を図り、その見返りとして大量の弾薬を安価に購入していた。だからこそ、海戦の第一撃で十分イスラエル海軍を壊滅に追い込めるだけの誘導弾を用意できたのだ。

八隻の水上艇は自動機関砲が火を噴くことも無く、チャフやフレアで誘導弾の誘導装置を錯乱しようとすることも無く、無抵抗のまま誘導弾の直撃を受けるしかない。三発ずつの誘導弾が四隻の甲型水上艇と二隻の丙型水上艇に向かい、全てが命中するか、あるいは至近の海面に着弾した。

忽ち六隻は轟沈したり、あるいは炎上したりして戦闘能力を完全に喪失。しかし直後に残った二隻の丙型艇「ゼファー」及び「ハデラ」は機関を始動させ、死なば諸共の覚悟でエジプト海軍艦艇へと突撃。攻撃を終えて離脱を図るエジプト軍に追いつき、乙型コンテナの縦横をそれぞれ半分（ガイド含めて一・七五メートル）にした単装誘導弾発射機から、二隻で合計四発の対艦誘導弾を放った。

「敵水上艇、誘導弾を発射！ 数は四発！」

「うろたえるな！ 自動機関砲とチャフで対応すればよい！」

だがそのミサイルは発射と同時に、エジプト側の水上艇によって探知されてしまう。予想もしていない反撃にエジプト側は一時騒然としたものの、自動機関砲の電源は入っていたので慌てることなくスエズからの離脱を続行した。

「敵誘導弾、間もなく自動機関砲の射程に入ります」

「チャフ発射！ 自動機関砲を掻い潜られてもいいように万全を期すぞ！」

間もなく二発の誘導弾が機関砲によって破壊され、一発はチャフによって誘導装置を幻惑されて空しく海面に突入する。しかし残りの一発はエジプト側水上艇部隊で一番手前にいた「アルクセイル」の艇尾に命中し、彼女の船体後部を吹き飛ばして見せた。

被弾した「アルクセイル」では火災が発生し、やがて搭載していた対艦誘導弾や対潜水艦魚雷に火災が波及。最終的にはこれらが誘爆して巨大な火柱を噴き上げた。このときの衝撃波は艦橋を倒壊させ、爆発した周囲は巨大な爪で抉り取られたようにも見えたという。

「誘導弾、敵甲型水上艇に命中！ 間もなく沈没する模様です！」
「そうか……どうにか、完全な敗北は避けることができたな」

丙型水上艇「ゼファー」の艇長が、安心と自責の入り混じった気持ちで息を吐く。彼自身エジプトから戦争を、ましてやここまで大規模な第一撃を見舞ってくるとは予想しておらず、現に宣戦布告があつてなお彼らは自動機関砲の電源を入れていなかったのだ。イスラエルの油断は、エジプトと事が起これば最前線になるはずのスエズでさえ、ここまで深刻なものになっていた。

その後、反撃を受けた「アレクセイル」の船体は艇の前半部に至るまで一切原形を留めない状態で沈没。エジプト軍はイスラエル海軍艦艇への第二撃を加えることなくスエズを離脱し、エイラートでの戦闘ほどではないもののイスラエル海軍の一方的な敗北に終わった。

第九十五話 必死必殺（後書き）

富士「何処も彼処も日本製兵器ばかりだと、さすがに味気ないな」

作者「とはいえ、史実において当時の各国が保有していた装備は、アメリカ製やソ連製を除けば殆ど資料が無い状態なのです。それに出自が明らかな米ソ製兵器も陸や空のものばかりで、艦艇はそれこそ『エイラート』と『ヤッフオ』ぐらいしか詳細が判明していないのです」

敷島「外国語の文章がすらすら読めれば、少しはましになる……かな？」

作者「耳が痛いです。私は英語やドイツ語及び中国語を除けば、それこそいくつかの単語と兵器の名前、それと地名ぐらいしか知りませんから……それに今挙げた三言語も、日常会話さえできるかどうか」

三笠「そう言えば、この前はスウェーデン海軍の公式サイトを見て頭を抱えていたような……次回予告をお願いします」

作者「三度イスラエル海軍の港灣を襲うエジプト海軍でしたが、今回は事情が違いました。次回『躊躇が与えた余裕』ご期待下さい」

第九十六話 躊躇が与えた余裕

イスラエル南部のエイラートとかつてのエジプト領であったスエズにおいて、エジプト海軍の奇襲を受けたイスラエル海軍水上部隊は壊滅。しかし同時に行われたイスラエル北部の港湾都市であるハイファへの攻撃は、他の二ヶ所と状況が大きく異なっていた。

というのも、ハイファへ向かうエジプト海軍の甲型水上艇六隻は宣戦布告前の攻撃を恐れて、エイラートやスエズへの攻撃後一時間ほどしてから突入する手はずになっていたからである。そしてこの一時間の間にハイファのイスラエル海軍水上艇部隊合計八隻は出撃準備を整え、エジプト海軍とハイファの港外で鉢合わせすることになったのだ。

この時の陣形はエジプト側が港湾襲撃を想定した単横陣で、イスラエル海軍は甲型水上艇四隻と丙型水上艇四隻がそれぞれ離れて単縦陣を組んだ陣形。この陣形には、イスラエル海軍のある冷徹な目論見が隠されていた。

「イスラエル海軍艦艇と思しき高速艇、前方より接近！ 我々の左右で、それぞれ四隻の単縦陣を組んでいます！」

「くっ、迎撃態勢を整えられてしまったか……射程に入り次第、誘導弾発射！ 左右のそれぞれ一番艇から順に叩くぞ！」

この時エジプト海軍は、一刻も早く誘導弾を発射できるようにと先走るあまり、対艦誘導弾の目標優先順位を変更せずに発射しようとしていた。しかしこれこそがイスラエル海軍の狙いであり、エジプト海軍は完全のその術中へとはまってしまったことになる。

もしこの隊列のままエジプト海軍が「最も近い艦艇に向かって」対艦誘導弾を発射すれば、被害は大型水上艇と小型水上艇のうちそれぞれ先頭を進んでいる艇に集中する。しかしイスラエル海軍が同時に「最大の艦船に向かって」対艦誘導弾を発射すれば、全ての艇が同じ大きさであるエジプト海軍は第一撃で不特定多数の甲型水上艇が被弾する恐れがあるのに対し、イスラエル側はエジプト側の誘導弾が誤作動しない限り被弾するのは先頭の二隻だけで済むのだ。

即ち、イスラエル海軍は第一撃で甲型水上艇と丙型水上艇各一隻を確実に失ってでも、最終的な勝利を目指したことになる。非情であると言ってしまうばそれまでであるが、戦争はそもそも双方にある程度の損害が発生するということが明白である以上、問題はその比率がどの程度か、そして如何に自国の国益を守りきるかということなのだ。

イスラエル軍の読みどおり、エジプト海軍の甲型水上艇六隻が放った十八発の対艦誘導弾は甲型水上艇「ガザ」と丙型水上艇「テヴェリヤ」に集中。二隻に九発ずつが襲いかかり、彼女たちは自動機関砲やチャフを用いて必死の抵抗をしたが、今更一発や二発の誘導弾を逸らしたり破壊したりしたところで気休めにもなり得なかった。

「ミサイル七発、間もなく本艇に命中します！」

「みんな……済まない！」

丙型水上艇「テヴェリヤ」は、一発目の命中で船体前半部が爆散して轟沈。後の六発は立て続けに目標がいたはずの海面へと突き刺さり、まるで彼女の船体をこの世から跡形も無く吹き飛ばそうとしているかのように、水柱を激しく立ち昇らせた。

そして「ガザ」も三発目の直撃までは原形を留めていたものの、

それに続いた四発の誘導弾は空しく海面を叩くのみ。こうして二隻の乗員である合計三十三名は、友軍が一矢報いるための盾となるべく、遺体さえ残らない状態で水漬く屍と成り果てた。

しかしほぼ同時に、イスラエル軍が放った二十発の誘導弾がエジプト軍水上艇部隊に飛来。当初の狙いどおり、誘導に混乱を来たした誘導弾は六隻の水上艇にばらけて向かっていき、エジプト軍水上艇部隊は大混乱に陥った。

「敵誘導弾、こちらの全艇に分散して突っ込んできます！ 合計で二十発！」

「チャフをあるだけ発射しろ！ このままでは全滅だ！」

エジプト軍水上艇部隊は自動対空機関砲とチャフで応戦するが、音速で飛来する誘導弾に対して自動対空機関砲で応戦できる時間は五秒前後。また誘導装置がわざと混乱させられた結果様々な方向から誘導弾が不規則に飛来したため、一発の誘導弾を破壊しても次の誘導弾に対応するだけの時間は全くとって良いほど残されていなかった。

「ミサイル、間もなく本艇に命中します！」
「最早、これまでか……無念だ！」

エジプト軍甲型水上艇「アルハリジャ」、「デイスーク」、「ロゼッタ」及び「イドフー」の四隻がこの第一撃で一発から三発の誘導弾を被弾し、炎上。幸い「エル・アラメイン」と「バーリス」の二隻だけが難を逃れたものの、最早反転してイスラエル海軍に二回目の攻撃を加えるだけの余裕は残されておらず、四十ノットの速力を生かして撤退するのが精一杯であった。

一方のイスラエル海軍は二回目の誘導弾発射に踏み切ろうとしたが、その前にエジプト海軍が誘導弾の射程外へと離脱したために断念。とはいえイスラエル海軍は緒戦で貴重な勝利を手にすることができ、イスラエル軍当局は戦意高揚を図るべく、この戦果を全軍や国民に向けて盛んに報道したのだった。

とはいっても、三ヶ所における戦闘でエジプト海軍の失った艦艇が大型水上艇五隻であるのに対し、イスラエルは駆逐艦「エイラート」と「ヤッフォ」、さらには甲型水上艇七隻と丙型水上艇五隻を喪失。彼女たちの乗組員だけで犠牲者は四百名を超え、艦艇も戦力の過半を失ったのだった。

第九十六話 躊躇が与えた余裕（後書き）

作者「外国の架空艦に名前を付けるのが、これほど面倒だとは思わなんだ」

富士「と言いつつ、止める様子は無いな」

作者「性欲というものは恐ろし（富士にサーベルを突きつけられ）……何でもないです」

三笠「現実の女性に手を出す心配が無いだけましとは、言えるかもしれないが……次回予告をお願いします」

作者「この戦争で影響を受けたのは、参戦した国だけではありません。次回『痛み分けにつけこめ』ご期待下さい」

第九十七話 痛み分けにつけこめ

このようにして、エジプト軍は多少の損害を出しながらも、その物量を背景としてシナイ半島を瞬く間に奪還しつつあった。ところが目を北に移すと、彼我の優劣は全くと言ってよいほど異なっていたのである。

エジプト軍と同時にイスラエルへと宣戦を布告したヨルダンとレバノンは、それぞれ陸軍の半数に当たる一個師団をイスラエルへの攻撃に従事させた。しかしレバノン軍の師団はイスラエル軍の本土防衛師団と、ヨルダン軍の師団はイスラエルがヨルダン川西岸地区占領に差し向けた一個師団をそれぞれ激突することになり、同じ兵器を用いた同じ一個師団同士の戦闘にも拘らず大敗を喫しつつあった。

これは双方の師団の編成が大きく異なっていたためであり、ヨルダン軍とレバノン軍はそれぞれ日本と同じく一個師団に一個戦車大隊と四個歩兵大隊が所属している。一方イスラエル軍の一個師団は戦車大隊を五個も保有しており、火力に圧倒的な差が存在していたからだ。

イスラエル軍の戦車と歩兵戦闘車が、ヨルダン軍の歩兵部隊へと殴り込みをかける。ヨルダン軍歩兵部隊は携帯用の対戦車誘導弾を除けば、戦車はおろか歩兵戦闘車さえ撃破する手段を持っていなかったが、イスラエル軍はヨルダン軍の装甲兵員輸送車を戦車砲や対戦車誘導弾のみならず歩兵戦闘車の機関砲でさえ次々と撃破していた。

「いいか！ なんとんでも『西の壁』を異教徒どもの手から奪い

返すのだ！」

イスラエル軍戦車の主砲弾がヨルダン軍の装甲兵員輸送車やトラックを貫き、次々と黒煙を噴き上げさせる。自分たちの聖地を、例え如何なる犠牲を払ってでも手中に収めようというイスラエル軍の士気は極めて高く、その戦いぶりに恐怖を抱いたヨルダン軍は甚大な被害を受けながら脆くも撤退していく一方であった。

またこの状況はレバノン軍も同様であり、イスラエル軍は片方の戦線では快進撃を続けながらも一方の戦線ではずると後退を強いられるという奇妙な状態に陥っていた。とはいえ、もしレバノンやヨルダンと交戦している師団の片方をシナイ半島へと差し向ければ、シナイ半島の戦局がさほど好転しないまま現在北方で保っている勢いを失ってしまう恐れがあったため、この趨勢は終戦まで一貫して続くことになる。

その後一週間と経たずに、エジプトは第二次中東戦争以来の悲願であったシナイ半島全域の奪還に成功。シナイ半島における戦闘でイスラエル陸軍はほぼ一個師団に相当する戦力を失い、壊滅した二個師団を再編して急遽編成された師団も、かつての国境であったエイラートやガザを防衛するのが手一杯という有様であった。

幸いだったのは、自国空軍の壊滅と引き換えではあるものの、陸軍や空軍の防空部隊によって進行してきたエジプト空軍へと多大な損害を強いることができたという点である。こうすることで不利な陸戦の際に敵からの航空攻撃を受けずに済み、損害を最小限に抑えることが可能となったのだ。

さらには開戦劈頭の海戦以来、エジプトはイスラエル海軍に対する警戒を弱めた。その隙にイスラエル海軍は残存戦力のほぼ全てを

上陸作業中のエジプト海軍へと差し向け、残存水上艇の全てと潜水艦六隻を失う代わりに大型水上艦四隻、大型水上艇一隻、小型水上艇六隻を沈める大戦果を手中に収めたのだ。

そこで日本を初めとする各国は、イスラエルとアラブ連合軍の双方へと講和を打診。一九七三年十月十八日に以下の内容からなる講和条約が調印され、頼りないものとはいえ中東に再び平和が訪れたのだった。

- 一、シナイ半島はエジプト領とする。
- 二、ヨルダン川西岸地区はイスラエル領とするが、イスラエルは当該地区へのアラブ人の聖地巡礼に配慮すること。
- 三、スエズ運河の管理体制は変更しない。

これは中東の動乱による石油価格の上昇を嫌った日英仏などの国々が干渉した結果、半ば強引に締結させられ講和条約であり、イスラエルにもアラブ諸国にも不満の残る内容であった。その結果中東諸国は相次いで地下資源の国有化を宣言し、皮肉なことに石油の入手を一層困難なものにさせた。

そんな中で日本は、軍事的に大損害を被った諸国への兵器供与と引き換えに原油の優先的な供給を受けることに成功。この兵器供与は数千億円規模に上り、財政に無視できない負担を敷いたが、目論見どおり史実の石油危機で見られたような混乱は抑えることができた。

第九十七話 痛み分けにつけこめ（後書き）

富士「これで、トイレットペーパーの争奪戦が無くなるのか？」

作者「おそらくは。プラモデルの箱に値下げでは無く値上げのシールが貼られる事態も、どうにか回避できそうです」

大隅「そう言えば、本作における日本では半ば国策で模型の製造が奨励されていたんでしたっけ……自分の模型が売られているのを想像すると、何やら複雑な気持ちが致します」

作者「1／700大隅型戦艦、ねえ……戦艦時代と工作艦時代のコンパチにできればいいけれど、一箱に入れる部品が増えて値が張るかなあ。とはいえ別の商品にすると発注や外箱のデザインに手間がかかるから、やっぱりコンパチの方がいいか」

三笠「こうして、ただでさえ少ない模型の種類はさらに統合されていくのでした……という冗談はさておき、次回予告をお願いします」

作者「次回からは、日本の介入によって誘発されてしまった戦争を描きます。次回『持たざる者の嫉妬』ご期待下さい」

第九十八話 持たざる者の嫉妬

対米戦の終結後、日本は資源との交換による工業や軍事での技術援助を、当時はまだ独立国が少なかったアフリカに対しても開始。リベリアの鉄やエジプトの原油、南アフリカの各種鉱山資源など、これによって日本が確保できた天然資源の供給量は莫大なものとなった。

そんな中、フランスはシャルル・ド・ゴール政権下において植民地の放棄を開始。アフリカにおいては一九五六年のモロッコとチュニジアを皮切りとして、一九六〇年にはコモロやアルジェリアを除く大半の植民地が独立することとなる。

リベリアの西にあるコートジボワールも、「アフリカの年」と呼ばれる一九六〇年の八月六日に独立した、かつてのフランスの植民地であった。なおコートジボワールという国名は、フランス語で「象牙海岸」という意味を持つ。

この国はコートジボワール民主党の一党制と、フェリックス・ウフェ・ボワニ大統領の元で開放的な政策が採られ、「イボワールの奇跡」と称される経済成長を遂げる。それは平均八パーセントの経済成長が二十年近くにわたって続くという、まさしく驚異的なものであった。

だがコートジボワールには、これといった天然資源が存在していなかった。小規模ながら石油やダイヤモンドを産出していたものの、輸出の中心は飽くまでカカオ豆であり、日本の支援を受けているリベリアと比べて工業化は進んでいなかった。

仕方なく、コートジボワールはカカオ豆の輸出と引き換えにした支援を求めた。ところが史実ほど欧米の文化が流れ込んでいない日本において、カカオ豆の需要は限られており、日本側にとってさほど利益が見込めないこの要請は断られてしまった。

さらに軍事力でも、フランス軍から申し訳程度の旧式兵器を譲り受けたコートジボワール軍と異なり、リベリア軍はコンテナ型軍艦を初めとした小規模ながら強力な軍を保有。人口では三倍程度の差があったものの、正規軍の兵数差は五割増し程度でしかなかった。

そこでコートジボワールは、国境からほど近いリベリアのニンバにある鉄鉱山を無力化することで、リベリアの自国に対する軍事的脅威を排除しようと画策。戦後に開発されたフランス製の兵器を苦心して買い集め、リベリア軍に対抗した。

さらに、同じくリベリアの軍拡を危険視していたギニアもこれに同調。ギニアはボーキサイト鉱山を有していたため、コートジボワールと異なり自前の資源が無いということではなかったが、リベリアに遠慮した日本が技術支援のみに止めたことを根に持っていたのだ。

コートジボワールの経済成長が鈍化しつつあった一九七九年四月七日、コートジボワールとギニアがリベリアに宣戦布告。表向きの理由は、一九四四年にリベリア領以外の部分が厳正自然保護区となったニンバ山について、リベリアがコートジボワール領内でも鉄鉱石の採掘を行っているというものであった。

これは完全な言いがかりであったが、コートジボワール軍とギニア軍は宣戦布告と同日に攻撃を開始したため、リベリアは抗議する余裕も無いままの応戦を余儀なくされるのであった。なお、三国の

人口と戦力は以下のとおり。

・リベリア（人口一九一万人）

陸軍七三〇〇名、二個旅団（日本式）、戦車四〇両

海軍七五〇名、水上艦四隻、水上艇五二隻

（及び、同規模の沿岸警備隊を保有）

空軍七五〇名、二〇式戦闘機（高等練習機兼用）及び練習機各二〇機

・ギニア（人口四六二万人）

陸軍六〇〇〇名、一個旅団（フランス式。四個歩兵大隊、一個砲兵大隊、一個工兵大隊）

海軍約一〇〇〇名、但し千トン未満の小型艦のみで、誘導弾も装備せず

空軍約四五〇〇名、ミラージュ三型、マジステール、ガゼル各四〇機

・コートジボワール（人口八四一万人）

陸軍一二〇〇〇名、二個旅団（フランス式）

海軍約一〇〇〇名、但し千トン未満の小型艦のみで、誘導弾も装備せず

空軍約八〇〇〇名、ミラージュ三型、マジステール、ガゼル各六〇機

第九十八話 持たざる者の嫉妬（後書き）

富士「陸海軍はともかく、空軍はリベリアが劣勢に見えるが大丈夫なのか？」

作者「リベリアも、ある程度の犠牲は出すでしょう。ですが戦闘機の最高速度で劣っているように、且つリベリア軍と同じように誘導弾を搭載できる機体であろうと、それが無条件で敗北につながるとは限りません」

敷島「どうということ？」

作者「いくら性能のよい戦闘機であったとしても、それがきちんと発揮されなければ意味は無いということです」

三笠「つまり、ミラージュ側に何らかの問題があるということでしょうか……それでは、次回予告をお願いします」

作者「二〇式戦闘機とミラージュ、戦闘の結果は如何に？ 次回『間合いが決めた生死』ご期待下さい」

第九十九話 間合いが決めた生死

開戦当日の午前七時、コートジボワールの首都ヤムスクロとギニア東部のカンカンより、それぞれ十二機のミラージュ三型が出撃。目標はリベリア空軍の全戦力が配備されているモンロビア飛行場であり、双方の攻撃隊は午前七時四十五分頃にニンバ山の上空で合流した。

二十四機は合流直後にリベリアの領空を侵犯したが、ここでリベリア軍の対空レーダーが攻撃隊を捕捉。モンロビアから十二機の二〇式練習戦闘機が出撃し、攻撃隊がモンロビアの上空へと到達するころには、どうにか全機の出撃を完了していた。

この二〇式練習戦闘機は、練習機という名前こそ持っているものの、操縦席と操縦系統以外は完全に作戦機としての二〇式戦闘機と同一である。そのため搭載する装備によって対空戦闘や対艦攻撃、さらには偵察や対地攻撃といった様々な任務の遂行が可能であった。

「いいか！ 敵機と遭遇したら、何としても敵の後ろに回り込め！」

この時攻撃隊のミラージュが搭載していた対空誘導弾は、一九七五年に量産が始まったフランス製の赤外線誘導ミサイル「マジック」の初期型である。しかしこれは射程距離が三キロメートルしかなく、さらにはオールアスペクト能力を持たない赤外線誘導であるために敵機の後方からしか撃てないなど、性能面での旧式化は否めなかった。

なおこの頃のフランス軍にはR530という対空ミサイルもあり、

こちらのセミアクティブレーダーホーミング型は十海里程度の射程距離を有していた。だがセミアクティブレーダーホーミングにした分価格が高騰してため、ギニアやコートジボワールは少数しか導入できていなかった。

「全機、敵機が射程に入り次第誘導弾を発射しろ！」

双方の距離が十海里を切ったところで、リベリア軍の航空隊は日本製の電探式誘導弾を一斉に発射。ミラージュたちは即座に回避を試みたが、チャフを散布することはかなわなかった。というのも、ミラージュ三型は機体に固定式のチャフ散布装置を持っていなかったからである。

「ええい、まだ追ってくるのか！」

「来るな、来ないでくれえっ！」

思い思いの方向に逃げていくミラージュたちへと、十二発の誘導弾が襲いかかる。そして四機のミラージュが、この第一撃で墜落させられた。

リベリア空軍の迎撃隊は、それぞれの航空機が思い思いのミラージュを捕捉し、再度電探式の誘導弾を見舞う。第二射の発射時においても、双方の距離は五キロメートル程度離れており、ましてや誘導弾を回避すべく様々な方向へと散らばったミラージュたちには反撃のしようが無かった。

今度は至近距離からの発射ということもあり、八機ものミラージュが被弾。だが、直後に双方の航空隊は空中で入り乱れての巴戦に陥り、以降は赤外線誘導のミサイルが飛び交う状況になった。

戦闘機の数、十二機ずつで互角。さらには一機の戦闘機が搭載している赤外線式誘導弾の数も、四発ずつで同じ。こうなれば勝敗を決める要因は一機当たりの性能と搭乗員の練度であり、本来はミラージュもそれなりの性能を有しているにも拘らず、この場合は何れもリベリア軍に分があった。

というのも、爆撃隊は空対空誘導弾のみならず通常爆弾も搭載していたためである。これによりミラージュの運動性能は大きく低下しており、双発戦闘機にしては軽快な二〇式戦闘機の後方へと回り込むのには、非常な困難が伴うことになった。

「攻撃は失敗だ！ 全機撤退しろ！」

形勢不利と見たコートジボワールとギニアの航空隊は空中戦もそこそこに、爆弾を捨ててそれぞれの基地へと帰還。この空戦における戦闘機の喪失数は、コートジボワールが八機とギニアが十機に対し、リベリアが失った戦闘機は僅かに四機であった。

この一戦で、コートジボワールとギニアは、以後リベリアへの航空攻撃を断念。マジステールやガゼルを用いた地上部隊の支援のみを行うようになり、ニンバ山を巡る戦争におけるまともな空戦は、後にも先にもこの一回だけであった。

またリベリア軍も、これ以上戦闘機を失えば本土の防空に差し支えるため、二〇式戦闘機を用いた積極的な航空攻撃は行わなかった。

第九十九話 間合いが決めた生死（後書き）

作者「靖国神社は、相変わらず若い人が少ないなあ」

富士「貴様は普段暑さに弱いくせに、こういう時だけは耐えられるのだな」

作者「そりゃあ、この場合は最高気温が四十度だろうが行きますよ。ただひとつ気になる点を挙げるなら、家族いわく前夜に私が寝ながらに叫んでいたらしいということですが」

敷島「記憶にないの？」

作者「一切記憶に御座いません。本当です」

三笠「そういえば、前もそんな話があったような……それでは、次回予告をお願いします」

作者「空戦では勝利したりベリア軍ですが、陸戦では如何に？ 次回『息切れを狙え』ご期待下さい」

第百話 息切れを狙え

開戦時、リベリアは陸軍の一個旅団を四個戦闘団に分割。うち二個戦闘団をニンバ山周辺に、後の二個師団を首都のモンロビアと東部のグリーンヴィルに配置していた。つまり、陸軍の半数がこのニンバ山攻防戦に参加したのである。

コートジボワール軍がニンバ山の占領に投入した戦力は、二個旅団のうち四個歩兵大隊と一個工兵大隊。ギニア軍は一個旅団から二個歩兵大隊と一個工兵大隊であり、山岳地帯での移動に不便な砲兵大隊は随伴させていなかった。

このように重装備が皆無に近かったコートジボワール軍とギニア軍に対し、リベリア軍は戦車や自走砲といった重装備を投入。車両は装甲車やトラック、火器は五〇口径の重機関銃程度しか配備されていなかった侵攻部隊は、何ら有効な策を打てなかった。

山中を走っていたギニア軍トラックの車列へと、二両の二〇式戦車が待ち伏せをかける。日本で使用されているものと異なり複合装甲が無かろうと、技量不足で砲の発射速度が落ちようと、ギニア軍にこの戦車たちを撃破する術は皆無に近かった。

「目標、前方の敵車列。撃てっ！」

満を持して放たれた砲弾は、発射後すぐに外面を覆っていたカバーがばらばらに砕け散る。そしてその中から現れた無数の金属球は、徐々に拡散しながらギニア軍の輸送部隊へと襲いかかった。

「敵襲です！ 三時の方向より、敵戦車二台！」

「トラックは捨てても構わん！ 早く逃げろ！」

だが乗っていた兵員が脱出するまでもなく、トラックは次々と穴だらけにされていく。そして輸送部隊が大混乱に陥ったことを知った二両の戦車は、上半身をキューポラから出した車長が砲塔上部の機銃を発射しながら、トラックの列へと突撃していった。

「よし、粗方片付いたな……増援が来ると厄介だ。そろそろ引き揚げるぞ！」

そして散々暴れまわると、全速力でどこかへと去っていくのである。二個戦闘団に配備されている戦車は十両のみであり、さらにそのうち二両は予備なので実質八両にしかないのであるが、彼らは幾度となくリベリア軍の車列を襲っては、大量の車両や物資を使い物にならなくさせた。

車両が多数破壊されれば、山岳地帯にいる部隊への補給は難しくなる。また軍事支援の一環として、自国に兵器の製造設備を作ってもらったりベリアとは異なり、ギニアとコートジボワールは失われた車両の補充さえ、自力ではできないのであった。

加えて侵攻側が合計で八千名という大兵力を展開していたことで、物資の補給が途絶えた部隊は相次いで戦闘能力を喪失。同じ歩兵部隊同士での戦闘でも劣勢を強いられるようになり、食糧の欠乏から自ら進んで降伏する部隊も出始めた。

これに対抗して、コートジボワール軍とギニア軍も、リベリア軍の兵站線を破壊しようと画策。だがリベリア軍の輸送トラックは、二個戦闘団に配備されているものだけで予備を含めて四十台に達し、十台程度を破壊したとしても大きな影響はなかったのだ。

またリベリア軍は、輸送部隊の他にも多数の支援部隊を抱えており、その数は戦闘要員とほぼ同数であった。即ち、二個戦闘団のうち実に一千名近くが後方支援要員だったのである。

この中には炊事や洗濯、手術や入浴といった、長期の戦闘には欠かせない業務を専門とする車両や人員も配属されていた。彼らは普段自分たちの機材をトラックに乗せて運び、部隊の移動に応じて展開していたのである。

その結果、リベリア軍は戦闘が数か月に及んでなお、そこが本来の駐屯地であるかのように戦闘を続けることができた。反対に、工兵部隊程度しか支援用の部隊を有していなかったコートジボワール軍やギニア軍には、長期の遠征は不可能であった。

そして宣戦布告からおよそ四ヶ月後の八月十日、ギニア軍とコートジボワール軍はリベリア領内から撤退。講和条約が結ばれないまま、ニンバ山を巡る戦闘は自然に解消したのである。なお、各国軍の損害は以下のとおり。

・リベリア軍

戦死二百三十名、負傷六百九十名

・ギニア軍

戦死九百名、負傷二千七百名

・コートジボワール軍

戦死一千名、負傷二千名

ニンバ山を巡る戦闘が収束に向かいつつあったころ、リベリアは日本に対して、コートジボワールやギニアに対する軍事面での抑止を要請。そこで日本は、両国と国境を接する内陸国のマリ共和国、

さらにはギニアの北西に位置するギニアビサウ共和国への軍事支援を計画した。

日本からの申し出に対し、マリ共和国は自国の金を日本に輸出することと引き換えにした軍事支援を依頼。だが問題はギニアビサウの方であり、この国は天然資源が皆無に近かっただけではなく、なんと自国の食糧さえ生産がままならないという困窮ぶりであった。

そのため、ギニアビサウは日本からの大規模な支援を断念。落花生を初めとする農産物の輸出と引き換えに、国力相応の軍備と弾薬を製造する工場を整備するのが精一杯であった。なお、西暦二〇〇〇年現在におけるマリ軍とギニアビサウ軍の概要は以下のとおり。

・マリ軍（人口一〇五二万人）

陸軍三個師団、四五〇〇〇名、戦車二四〇両

海軍七五〇名、巡視船四隻、巡視艇五二隻（河川や湖に配備）

空軍六〇〇〇名、戦闘機、練習戦闘機、練習機及び四発輸送機各六〇機

・ギニアビサウ軍（人口一三〇万人）

陸軍一個旅団、三七〇〇名、戦車二〇両

海軍七五〇名、水上艦二四隻、水上艇五二隻

沿岸警備隊七五〇名、巡視船四隻、巡視艇五二隻

空軍一〇〇〇名、戦闘機、練習戦闘機及び練習機各二〇機

第百話 息切れを狙え（後書き）

富士「日本式陸軍部隊は、余程機械化が進んでいるのだな」

作者「量より質ですから、この時代のアフリカに適合するかは微妙ですけれどもね。部隊自体は少数でも、財政的な負担は相当なものはずです」

敷島「そこで、欲しければ資源を寄越せと詰め寄るわけか。まあ、周囲の国より兵数で劣るような資源産出国としてはいいのかな？」

三笠「それですと、リベリアはまさしくうってつけということになりますね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次の題材は、カビンダ地方を巡る衝突です。次回『作られた国境』ご期待下さい」

第百一話 作られた国境

一九七五年十一月十一日、アフリカ南東部において、それまでポルトガルの植民地であったアンゴラが独立。だがこの国には、北部にカビンダ地方と呼ばれる飛び地が存在していた。

ここは南ではザイル（現コンゴ民主共和国）、北ではコンゴ共和国に接しており、植民地となる前にはこれらの国々と同じくコンゴ人が住んでいた。しかし列強が幾度となく領土争いや植民地の交換を繰り返したことで、ひとつの民族が複数の国に分けられてしまったのだ。

アンゴラの独立に先んじて、カビンダは同年の八月に「カビンダ共和国」として独立を宣言。ところがアンゴラによって占領されたことで、独立運動は続いているものの、少なくとも形の上ではアンゴラ領ということで落ち着くかと思われた。

そしてアンゴラは、この地に埋まっている大量の石油を使った経済発展を計画。日本への優先的な石油の輸出と引き換えに、油田の開発や軍事面における支援を取り付けた。

その結果、国内総生産の約半分がこの石油によってもたらされ、アンゴラ経済は順調に成長。また僅か五年で、二個師団の陸軍を筆頭に以下のような正規軍を整備し、カビンダの防衛にも一個旅団を含めた大部隊が差し向けられることとなった。

陸軍二個師団、三万名、戦車一六〇両

海軍一千名、水上艦四隻、水上艇五二隻

沿岸警備隊一千名、巡視船四隻、巡視艇五二隻

空軍七千名、戦闘機、練習戦闘機、練習機、中型及び小型回転翼機各八〇機

この状況は、カビンダの北にクイルー地方という油田地帯を抱えているコンゴ共和国にとって危険なものに思えた。コンゴ共和国からしてみれば、そもそもカビンダは自国と同じコンゴ人の住む土地であり、欧米による植民地争いさえなえれば自分たちの領土になっていたかもしれない地域である。

それが歴史のいたずらによって、アンゴラのオヴィンブンド人やキンブンド人の支配下に置かれている。それどころか、このままアンゴラの軍備拡張を黙認しては、将来自国経済を支えているクイルー地方まで奪われてしまうのではないかという危機感があつた。

そこでアンゴラの独立に前後して、コンゴ共和国もまた軍備の拡張を開始。アンゴラの人口が八百万人近いのに対し、人口が二百万人に満たないという不利な状況の中で、一九八〇年の時点で以下のような軍備を有していた。

陸軍一個歩兵旅団、六千名（四個歩兵大隊、一個砲兵大隊、一個工兵大隊）

海軍一千名、砲や機銃を搭載した哨戒艦艇のみ

空軍二千名、ミラージュ三型、マジステール、ガゼル各二〇機

そして一九七九年十二月十五日、カビンダ地方のコンゴ人を救済するという名目で、陸軍のうち一個歩兵大隊を除いた全戦力がカビンダ地方へと侵攻。午前六時にはコンゴ沿岸部のポアント・ノアル飛行場からミラージュ三型十二機が飛び立ち、僅か百キロメートルの距離にあるアンゴラ軍のカビンダ飛行場を襲撃した。

亜音速での巡行を続けた爆撃隊は、アンゴラ上空への侵入から五分でカビンダ飛行場へと爆弾投下を開始。この時カビンダの戦闘機隊は、コンゴ軍の侵入に備えていつでも出撃できるようにしてあった二機だけであった。

「隊長、下から戦闘機が来ます！」

「早く爆弾を投下しろ！ 反撃はそれからだ！」

対空誘導弾四発のみを搭載した二〇式戦闘機は、殆ど翼の揚力に頼らない、直角に近い姿勢で爆撃隊目がけて上昇する。そして爆撃にこだわるあまり対応が遅れた爆撃隊へと、二発ずつの赤外線誘導式対空誘導弾を放った。

「全機、爆弾を捨てて散開しろ！ 爆撃は中止だ！」

ミラージュ隊は爆撃を諦め、慌てて最高速度での離脱を試みるが、如何せん対応が遅すぎた。後方から放たれた四発の誘導弾は、フレアによる妨害を受けることもなく、なんと全誘導弾が別々のミラージュに命中したのである。

第百一話 作られた国境（後書き）

富士「相変わらず、相手の国力に対して大規模な軍事支援だな」

作者「史実の冷戦期における各国の軍備を考えれば、これでも多くはないかと。人口のパーセント以上が軍人という国は、史実では珍しくなかったはずです」

敷島「史実の日本の近くには、現在進行形で人口のうち五パーセントかそれ以上が軍人というところもあるからねえ……まあ、半ば崩壊しているけど」

三笠「あそこは、いくらなんでも極端すぎる気がします……それでは、次回予告をお願いします」

作者「カビンダ編は次回で終了ですが、その次からはいよいよフォークランド紛争です。次回『技術力の差』ご期待下さい」

第二百二話 技術力の差

一気に四機のミラージュが撃墜されたことを受け、残った八機は反撃もせずに逃走を図る。その後ろに付いた二機の二〇式戦闘機は、追い討ちをかけて再度の攻撃を断念させるべく、一発ずつの電探式誘導弾を放った。

だがそれは、二発ともあらぬ方向に逸れて空を切るばかり。赤外線式の誘導弾に比べて機構が複雑な電探式誘導弾は整備も困難であり、日本からの支援を受け始めて日が浅かったアンゴラ空軍には、聊か手に余る代物であったのだ。

とはいえ、この戦闘においてコンゴ空軍は保有していたミラージュ三型の二割を喪失。一方アンゴラ空軍の被撃墜は皆無であり、この損害に恐れをなしたコンゴ空軍は以後、迎撃が来てもすぐに離脱できる国境地帯への爆撃に終始した。

同じ頃、コンゴ海軍は手持ちの哨戒艦艇を用いて、アンゴラ海軍のカビンダ基地を襲撃。しかし地上のレーダーで接近を気付かれ、アンゴラ海軍の艦艇を砲の射程に収める前に誘導弾を発射され、全艦が撃沈されるという醜態を晒すことになった。

またカビンダ地方制圧のために派遣された五個大隊も、戦車中隊（十六両及び予備四両）や装甲兵員輸送車、さらには自走砲といった現代兵器を有するアンゴラ陸軍の一個旅団に苦戦。数では四千名弱に対して約五千名と五割近い優位に立っていたものの、機械化の度合いが違い過ぎた。

逆に国境周辺に集まったアンゴラ軍自走砲部隊は、国境から三十

キロメートル足らずの距離にあるポイント・ノアールやルオボモの市街地を砲撃。焼夷榴弾によって民家が次々と炎上し、通常の榴弾が着弾した地点には直径数メートルはあろうかという大穴が穿たれた。

「う、うわあっ！ この弾は、どこから飛んでくるんだ！」

「アンゴラの連中が撃ってきたにしては、飛んでくる距離が長すぎるぞ！」

砲弾が着弾するたびに丸太と椰子の葉で、良くて煉瓦とトタン屋根で作られた建物が次々と吹き飛ばされていく。市街地も対象にしたアンゴラ軍の「無差別砲撃」は、コンゴの民間人たちを酷く混乱させた。

加えて、榴弾砲や速射砲を搭載したアンゴラ軍のコンテナ式軍艦が、立ち塞がる海軍艦艇のいなくなった、コンゴ共和国沿岸へと進出。海軍の再建を妨害すべく、ポイント・ノアール等の港湾設備に対して艦砲射撃を行うことにしたのだ。

「撃ち方始め！」

海岸から数キロメートルの至近距離にまで近づいた水上艦部隊が、まともに狙いもつけないまま砲を乱射する。それでも市街地への艦砲射撃には十分すぎる威力であり、運悪く砲弾の直撃を受けた漁船や貨物船が次々と爆発、あるいは沈没していった。

砲兵部隊は国境での戦闘にかかりきりで、要塞砲はもともと存在しない。ましてや陸上から発射する形式の対艦ミサイルなどコンゴ共和国にあるはずも無く、ポイント・ノアールはアンゴラ海軍が手持ちの弾を撃ち尽くすまで、一方的に撃たれ続けねばならなかった。

こうした自国の市街地に対する攻撃を前に、コンゴ共和国政府は戦意を喪失。十二月二十五日に原状回復を基軸とする講和条約の締結を申し入れ、アンゴラがこれに応じたため、十二月二十八日にカビンダ地方を巡る武力衝突は終結した。

わずか十日程度の戦闘で多くの戦力、特に海軍艦艇を失ったコンゴ共和国は、石油輸出と引き換えに日本から海軍艦艇の調達を実施。だが先に兵器の輸出を行っていたアンゴラへの遠慮からか、輸出された艦艇は全て商船規格の巡視船艇であり、戦力としては不十分なものであった。なお、双方の損害と西暦二〇〇〇年現在のコンゴ共和国軍は以下のとおり。

・アンゴラ軍損害

戦死二百三十名、負傷六百八十名

・コンゴ共和国軍損害

戦死五百名、負傷千五百名

コンゴ共和国軍（人口三〇三万人）

陸軍三個旅団、一一〇〇〇名

海軍七五〇名、巡視船四隻、巡視艇五二隻

空軍三二〇〇名、戦闘機、練習戦闘機及び練習機各六〇機

第百二話 技術力の差（後書き）

富士「貴重な電探式誘導弾も、役に立つかは技術次第か」

作者「それに、この時代の誘導弾はまだまだ信頼性に問題があります。ですから日本の戦闘機が使ったところで、半分も当たれば御の字かもしれませんね」

敷島「射程距離が長いとはいえ、価格も桁違いだからねえ……アンゴラが導入を決めたのは、急ぎ過ぎた感じがするよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回から、予告どおりフォークランド紛争編が始まります。次回『百五十年越しの悲願』ご期待下さい」

第三百三話 百五十年越しの悲願

アルゼンチンの沖合にあるフォークランド諸島（アルゼンチン側呼称はマルビナス諸島）は、一八三三年以来イギリスが実効支配していた。しかしそれは、四年前にフォークランド諸島の沖を通った三隻のアメリカ捕鯨船が通行料をアルゼンチンに払わなかったことに対し、ブエノスアイレス州知事であったファン・マヌエル・デ・ロサスが三隻を拿捕したところ米海兵隊が島を占拠したものを英軍が再占領したものであった。

それ以来、フォークランド諸島の奪還を望むアルゼンチン国民は少なからずいた。だが、左翼民族主義者のファン・ドミンゴ・ペロンが一九五五年の陸海軍による反乱の結果九月二十一日に亡命するまでは穏健的な交渉だったために、イギリスはフォークランドをアルゼンチンの支援も受けながら統治し続けた。

軍の反乱後、アルゼンチン国内は軍部による政治混乱と物価の高騰に襲われる。そんな中一九八一年十二月二十二日に軍事政権を引き継いだレオポルド・フォルトウナート・ガルチェリ・カステッリは、政治と経済の混乱に対する国民の不満を逸らすべくマルビナス諸島の領土問題を煽った。

一方のイギリスは、フォークランド諸島にホーン岬経由で太平洋に出るための中継地点として、また南極観測の前哨基地としての価値を認めてはいたが、対米戦終結後の植民地喪失によって国力が衰えたことでフォークランド諸島の管理を十分に行えずにいた。とはいえ一九七九年にイギリス首相となったマーガレット・サッチャーは、飽くまでフォークランド諸島がイギリスに帰属することを主張し、アルゼンチンへの態度を硬化させていった。

そして一九八二年三月十九日、フォークランド諸島から東南東におよそ千三百キロメートル離れたサウスジョージア島に、蜂起された捕鯨工場を解体する屑鉄業者と称して四十八名の民間人が日本の「秋雨」型とほぼ同型の甲型水上艦「ベルメホ」に乗って上陸。イギリスは抗議を行うとともに、巡視船「エンデュアランス」と海兵隊員二十二名、回転翼機のウエストランド・ワスパ二機を派遣した。なお、当時のアルゼンチン海軍主要艦艇は以下のとおり。

災害救難艦

メダノサ、トレス・ブントス

甲型水上艦

ベルメホ、サラード、ネグロ、ラプラタ、パラナ、ウルグアイ、サラド、ドウルセ

ジャチャル、アトウエル、コイグ、デセアド、イビクイ、イバイ、ジャグイ、ネウケン

チコ、サンタクルス、ネグロ、コロラド、リマイ、アグリオ、コロンダ、コラスティーネ

甲型水上艇

ブエノスアイレス、ロサリオ、リバダビア、ネウケン、バイアブランカ、サルタ、カタマルカ、メンドサ

コリエンテス、レシステンシア、ラリオハ、コルドバ、パラナ、サンタフェ、アスル、サンタロサ

マラルゲ、サンルイス、サンファン、レクレオ、チレシト、ポサーダス、ゴヤ、レコンキスタ

潜水艦

マールチキータ、リオネグロ、プラマイ、カブラル、ベルトラン、ラ・フレッチア

メルセデス、パズエロ、ヴィラマ、パラル、ブランカ、パロ・プラド

これに対し、アルゼンチンは一度「ベルメホ」を撤退させるものの民間人は現地に残留。二十六日には災害救難艦「トレス・ブントス」に海兵隊員一個大隊、合計八百名近くを乗せ、サウスジョージア島のリースハーバーへと居座らせた。

さらに、後続の「メダノサ」と「パラナ」以下十二隻の甲型水上艦が合計三六四八名（災害救難艦に一個戦闘団九一二名、中型水上艦に合計三個戦闘団二七三六名）の陸上部隊を乗せ、三月三十日に出撃。そして四月一日夜、先遣隊である一個中隊、一九二名がフォークランド島へと上陸したのである。

第百三話 百五十年越しの悲願（後書き）

敷島「（艦名の列举は）この小説ではよくあること……だね」

富士「それは兎も角、いくらなんでも戦力が大きすぎないか？」

作者「ですが人口に対する兵員の割合はそこまで高くありませんし、史実では巡洋艦『ヘネラル・ベルグラノ』なんかも運用していましたが、その分の人員を回せば運用できない数ではないはずです」

朝日「あの艦は、一隻で千人以上の乗員を必要としますからな。それに当の『フェニックス』は先の講和条約で終戦直後に除籍されておりますから、アルゼンチンが史実どおり購入するのは不可能でありましょう」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回から、アルゼンチンの軍事行動が本格的なものとなります。次回『一番槍』ご期待下さい」

第四百話 一番槍

着岸した甲型水上艦「パラナ」の艦首にある扉が開き、陸軍将兵の乗っ兵員輸送車が海岸へとなだれ込む。だが英軍に気付かれないようその進軍は粛々としたものであり、現に英軍は戦闘開始までアルゼンチン軍の上陸に気付くことはできなかった。

もちろん、イギリス海軍の来襲に備えて艦尾には五インチ単装砲、対空誘導弾、対艦誘導弾及び対潜水艦誘導弾という一通りの武装コンテナが搭載されている。そして艦橋の前後には全自動対空機関砲（Closed In Weapon System，略称CIWS）も備え付けられていたが、回転翼機の搭載は災害救難艦に任せるということで、甲型水上艦の艦首はおよそ八十メートルに亘って上陸部隊の搭載甲板になっていた。

「やっと、やっとマルビナス諸島を奪還できる……っ！」

甲型水上艦「パラナ」の艦魂が、失地回復の一番槍を仰せつかったことにより興奮を抑えきれないでいた。しかし艦首に仁王立ちする彼女の目の前で英軍の施設目掛けて息を殺して進む車両の群れを見て、パラナは不安にならざるを得ない。

「でも、私に乗っている部隊だけで大丈夫かな？」

「心配しないの。すぐに私たちに乗っている部隊も続くし、マルビナスにはあの半分もないんだから」

後ろから「メダノサ」の艦魂に声をかけられ、パラナが振り向く。彼女は一九七〇年に日本の支援で建造された災害救難艦であり、日本の協力によって二十年周期で艦艇の更新が行われている現在のア

ルゼンチン海軍においては、既に指折りの古参艦になっていた。

「でも、一門の大砲もなしですよ？」

「向こうも同じよ、たぶんね」

このとき上陸部隊が乗ったのは、一個分隊が乗れる装甲兵員輸送車合計十六両。「メダノサ」等には合計で二十両の戦車が搭載されていたものの、多数の艦艇が長時間に亘って海岸にいれば、守備隊が上陸を早い段階で気付いてしまう恐れがあったために投入されなかった。

上陸した中隊は二個小隊ずつに分かれ、イギリス海兵隊の兵舎とフォークランド諸島の総督がいる邸宅に突入した。しかし一隊がイギリス海兵隊の兵舎に到着したところで、彼らは我が目を疑うことになる。

「おい、誰もいないぞ？」

「馬鹿な、そんなはずは……まさか、これは敵の罠か？」

「いいえ、周辺に敵部隊は一人もいません」

その後も二個小隊の兵士たちは兵舎を隈無く探して見たものの、海兵隊員どころか人っ子一人見当たらない。そこで海兵隊員がどこにいるのか考えあぐねていた彼らのもとに、総督邸に向かった一隊から緊急の無線が届く。

「こちら総督邸攻撃部隊。そちらの状況は？」

「こちら兵舎攻撃部隊。海兵隊員どころか、人間は誰もいない」

「なら援護に来てくれ！ こっちは約四十人（海兵隊三十一名、水兵十一名の合計四十二名）の敵と交戦中だ！」

「分かった、待っている！」

総督邸攻撃部隊の要請を受けた兵舎攻撃部隊は、母艦である「パラナ」に連絡をした上で再び輸送車に乗り、総督邸に向かう。そして総督邸に辿り着くと数の優位を背景に降伏勧告を行い、午前六時半にレックス・ハント総督は降伏を受け入れた。

この戦闘では、アルゼンチン軍に数名の負傷者こそいたものの、アルゼンチン軍の死者とイギリス側の死傷者は皆無であった。これは国際世論を気にするアルゼンチン軍が、彼我の人的損害を最低限に抑えて降伏させるよう尽力したためである。

同じ頃、「メダノサ」以下十一隻から合計三十四五名の部隊が島の灯台とスタンレー空港、そして島で唯一の市街地であるスタンレーを目標に上陸。先の上陸部隊と合わせれば編成上一个旅団にも及ぶ大部隊が、一気にフォークランドへと流れ込んだ。

「おかしいな……灯台も無人とは」

「空港には敵が潜んでいるかもしれませんが。ここはやはり予定どおりに、灯台の光で友軍を誘導しましょう」

「ああ」

一個中隊の先遣隊に無人のまま占拠された灯台が、海岸から空港までの道を照らす。それのお陰で後続の三千名以上は無事にスタンレー空港へとたどり着くことができた。しかし、そこにも軍民問わず誰ひとりいなかったもので、アルゼンチン軍は拍子抜けすることになる。

こうして、イギリス軍が殆ど抵抗らしい抵抗もしないまま、フォークランド諸島はアルゼンチン軍の手に堕ちることとなった。とはいえ本当のフォークランドを巡る戦いは、これから始まるのである。

第百四話 一番槍（後書き）

作者「今回の戦闘結果については、おおむね史実どおりです。総督邸以外に英軍の部隊がいなかったというのも、同じですね」

富士「つまり、英軍は全員健在の状態で降伏したということか」

作者「ええ。ただ増援が来て兵数の差が五対一近くともなれば、いくら防衛側とはいえ不利は否めないかと」

敷島「犠牲が少ないに越したことは無いけれど、なんだかなあ」

三笠「日本式の機械化部隊ということで、イギリスは史実以上の苦戦を強いられそうですね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「イギリス艦隊がフォークランド奪回に動きます。しかし……次回『全力投入』ご期待下さい」

第百五話 全力投入

アルゼンチン軍によるサウスジョージア島及びフォークランド諸島占領を受け、イギリス議会の下院は四月二日に機動部隊の派遣を承諾。欧州共同体（EC）はアルゼンチン軍にフォークランド諸島からの撤退を求める決議を行い、アルゼンチンと険悪な関係にあったチリはアルゼンチンを「侵略者」として批判した。

アルゼンチンも四月四日に国内のイギリス資産を凍結するなど、双方の関係は悪化の一途を辿る。翌日にはイギリスが空母「ハーミズ」（シーハリアー十二機搭載）と「インヴェインシブル」（同八機搭載）を中核とする以下のような機動部隊をポーツマスより出撃させた。

空母

ハーミズ、インヴェインシブル

カウンティ級駆逐艦

デヴォンシャー（バッチ一）、ファイフ、グランモーガン。アントリム（バッチ二）

シェフィールド級駆逐艦（タイプ四二バッチ一）

シェフィールド、バーミンガム、ニューカッスル、グラスゴー、カーディフ、コヴェントリー

エグゼター級駆逐艦（タイプ四二バッチ二）

エグゼター、サウザンプトン

アマゾン級フリゲート（タイプ二一）

アマゾン、アンテロープ、アクティブ、アンバスケイド、アロー、アラクリティ、アーデント、アヴェンジャー

リアンダー級フリゲート（タイプ一二。全艦がバッチ三）

アキリーズ、ダイアミード、アンドロメダ、ハーマイオニー、ジュ

ピター、アポロ、スキュラ、アリアドネ、カリユブデイス

他、補給艦及び揚陸艦など

そして道中のアセンション島ワイドアーク基地を中継基地として、ニムロッド偵察機やヴィクター給油機などを派遣。さらには潜水艦隊を用いたオークランド諸島の海上封鎖も試みられたものの、日本が輸出した輸送機による物資や兵員の空輸によって大した効果はなかった。その結果、イギリス艦隊が到達するまでにフォークランドとサウスジョージアの守備隊は以下のように膨れ上がっていた。

フォークランド諸島

陸軍三個旅団一〇九四四名、戦闘機二〇機、旅団所属航空機として
中型及び小型回転翼機一六機

サウスジョージア島

陸軍一個旅団三六四八名、旅団所属航空機として中型及び小型回転
翼機各一六機

四月二十一日、イギリス軍の特殊部隊はサウスジョージアへの上陸偵察を試みるも失敗し、撤退時にウェセックスHU-5（シコルスキーS-58とほぼ同型）ヘリコプター二機が荒天により墜落。翌日深夜にゴムボートで上陸しようとした特殊部隊も遭難した。

二十三日、イギリスはフォークランドにアルゼンチンの潜水艦が接近中であるとの情報を得る。そこで機動部隊を一時退避させ、翌二十四日から艦載ヘリコプターによる対潜水艦哨戒を行ったが、日本からの技術提供によって建造された千トン級潜水艦は探知が困難であり、史実で二十五日に潜水艦「サンタフェ」を損傷（のちサウスジョージア島に座礁し、放棄された）させたような戦果は得られなかった。

同じく四月二十五日、イギリス海軍の駆逐艦「エグゼター」及び「サウザンプトン」はサウスジョージア島への艦砲射撃と特殊部隊の上陸を実施しようとした。ところが、そこでイギリス軍は思わぬ反撃を受けることになる。

「目標、イギリス駆逐艦！ 撃ち方始め！」

サウスジョージア島守備隊の保有する三十二門の自走榴弾砲（一五五ミリと二〇三ミリが同数）が、一斉に火を噴く。巡洋艦一個戦隊にも相当する火力がイギリス海軍へと叩きつけられ、一一四ミリ砲を一門ずつしか搭載していない「エグゼター」と「サウザンプトン」は上陸を諦めて撤退するしかなかった。

「な、なんだこの砲弾は！」

「サウスジョージア島にいるアルゼンチン軍の砲火と思われます！」

これでは、こちらの砲が届く射程内に近付くことさえ危険です！」

「おのれ、アルゼンチン軍め……ここにいては的になるだけだ、撤退するぞ！」

史実では数十名の守備隊しか駐留させていなかったため、アルゼンチンがサウスジョージア島を重要視していなかったこともあって守備隊は即日降伏した。しかし兵器の売却と共に派遣された日本軍の軍事顧問が最大限の戦力投入を提案し、フォークランド諸島と合わせて一個師団という大戦力が投入されることになった。

上陸作戦の失敗を受け、イギリス海軍は「ハーミズ」及び「インヴィンシブル」から全てのシーハリヤーを出撃させてサウスジョージア島への対地攻撃を計画。四月二十六日午前九時、サウスジョージア島の上空に二十機のシーハリヤーが到達した。

第百五話 全力投入（後書き）

富士「待て、アルゼンチン軍の機械化の度合いがおかしくないか？」

作者「とはいえ、このような装備を保有できるのは精々二個師団でしょう。全軍をこれぐらい機械化するとなれば、四個師団程度を有するのが手一杯でしょうね」

大隅「史実の現代におけるアルゼンチン陸軍は、人口四千万人超えにもかかわらず四万名強しかいないようですね。精々三個師団相当といったところでしょうか」

三笠「その割には、戦車や装甲車の数が随分多いですね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「イギリス軍がアルゼンチン軍に航空攻撃を仕掛けますが、結果や如何に？ 次回『型落ちと雖も』ご期待下さい」

第百六話 型落ちと雖も

シーハリアーがサウスジョージア島へと接近し、爆弾投下の時が刻一刻と近づく。しかしその時、地上から放たれた無数の機関砲弾が彼らに襲い掛かった。

「な……なんだ、あれはっ！」

「各機散開！ ばらばらで構わんから、爆弾を投下して早く引き揚げろぞ！」

機関砲弾の出処は、十六両の二〇式自走対空機関砲である。この車両はドイツのゲパルト対空戦車に先駆けて、砲塔の左右に設置された機関砲と搜索電探、さらに射撃管制電探を備えた車両であった。そのため当然価格は高騰し、二〇年以上前の型落ち品であるにも拘らずアルゼンチン軍での配備部隊は二個師団の各一個中隊だけとなっていたが、フォークランドとサウスジョージアに展開したのはそのうちの一個師団だったのだ。

十六両の自走対空機関砲から放たれる四十ミリ機関砲弾の数は、一秒間に百六十発（一門当たり分速三百発）にも上る。それがレーダーで管制されているのだから、音速の出せないシーハリアーにとっては非常に大きな脅威であると言えた。

忽ち、運の悪い一機のシーハリアーが操縦席を貫かれて高度を下げ始める。やがてそのシーハリアーは真っ逆さまに地面へと墜ちていき、地面へと衝突して爆発四散した。史実では五月四日に対空砲火で初の被撃墜を記録したシーハリアーだが、ここでも初の損害を対空砲火で受けることとなった。

幸いだったのは、アルゼンチン軍の保有する自走対空機関砲が日本軍のそれと完全に同一の仕様というわけではなく、価格と品質を落とした輸出版だったことであろう。そしてアルゼンチン軍の練度の低さもあって、実際の命中率は本来のそれを大きく下回っていた。

「無理です！ 滑走路と市街地の周りに機関砲座（搭乗員の誤認）があつて近付けません！」

「当てずっぽうでもいい！ 爆弾を投下したらすぐに逃げろ！」

ある機体は機関砲弾の届かない数千メートルの高度に上昇してから、またある機体は最高速度で弾幕の中を突っ切りながら爆弾を投下する。しかしそのような方法でともに滑走路を破壊できるわけもなく、この日の爆撃は一機のシーハリアーを失っただけで、何らの戦果も挙げずに終わった。

もしここで全機が弾幕を掻い潜って爆弾を投下しようとしていれば、被撃墜数が増えるのと引き換えに滑走路を破壊することもできたであろう。しかしアルゼンチン軍が自走高射機関砲を陸揚げしているとは想定していなかったイギリス軍は、冷静な対応がとれずに撤退を選んだのである。

次いでイギリス軍は、フォークランド諸島のスタンレー空港をアブロ・バルカン爆撃機で破壊することを計画。サウスジョージア島はフォークランドの奪還後に攻略すればよいとして、五月一日にアセンション島のバルカン爆撃機一機と予備機一機、ヴィクター給油機十一機と予備機四機による爆撃が行われることになった。

空中給油機がこれほど必要になったのは、アセンション島とフォークランドの距離が長すぎて爆撃機に対する一度の給油では足りず、そうなると今度は給油に赴く給油機にも給油する必要が生じるから

である。この作戦はブラックバック作戦と呼ばれ、爆撃機にはそれぞれ二十一発の千ポンド爆弾が搭載されることになった。

道中、爆撃機と給油機各一機が故障により離脱し、爆撃は予備機が実行することになる。さらにはフォークランド諸島の周囲を警戒中であった甲型水上艦「パラナ」に爆撃機や給油機が捕捉され、爆撃機の到達前にフォークランド諸島の上空には四機の戦闘機が待機するという不運に見舞われた。

「お……おい！ 前方の反応って……まさか！」

「畜生！ 戦闘機に追い回されて勝てるわけ無いだろうが！ 一か八かこのまま突っ切るぞ！」

直進を続けるバルカンへと、四機の二〇式戦闘機が襲いかかる。

旧式とはいえ誘導弾の運用能力やマツハ二の最高速度など当時の戦闘機に最低限要求されるような性能は有しており、最高時速八三〇キロメートルにしかないバルカンを撃墜することなど造作も無かった。

「全機、各個の判断で誘導弾発射！」

隊長機を皮切りに、四機の戦闘機から各一発の電探式誘導弾が発射される。射程が二十キロメートルにも満たない型落ちの誘導弾ではあったが、ほぼ全弾がレーダーに捉えられやすい大型機であるバルカンへと向かっていき、最終的に三発が機体へと突き刺さった。

「だ、だめだ！ もう持たない！」

「せめて、脱出を……うわああああっ！」

機首がへし折れ、尾翼が吹き飛び、機体の至る所から火の手が上

がる。哀れバルカンはそのまま重さ数十トンの燃えるスクラップと化し、フォークランド島北方の海面に激突。乗員五名は全員機体諸共戦死し、ここにバルカン爆撃機にとって唯一の実戦参加はあまりにも無残な結果に終わった。

第百六話 型落ちと雖も（後書き）

富士「じ、自走対空機関砲が一個旅団に一個中隊配備だと？」

作者「アルゼンチンには金銀銅の鉱山に加え、油田やガス田までありますから、軍事支援の代償にする資源は豊富なのです。ましてやアルゼンチンは対米戦前から日本の兵器を購入していますから、日本にとっても得意先なのですよ」

大隅「そういえば前作で、アメリカの戦力を本土に拘束するために、中南米諸国へ兵器を輸出したと書いてありましたね」

作者「対米戦が終結したとはいえ、八カ国協約締結国の間で外交問題が全て無くなるわけではない。だからバハマやプエルトリコ、グアンタナモ辺りは、今でもアメリカに睨みを利かせる軍事上の要所だろうね」

三笠「そして日本は中南米への兵器輸出を続けることで、アメリカへ間接的に圧力をかけるといことですか。それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、いよいよ双方の機動部隊が接近します。次回『一発あれば』ご期待下さい」

第百七話 一発あれば

シーハリアーやバルカン爆撃機による対地攻撃が失敗したことを受け、イギリス海軍はフォークランド諸島とサウスジョージア島を海上封鎖することで物資に搬入を防ぎ、アルゼンチン軍の物資不足と士気喪失を待つ戦法に変更。アマゾン級フリゲートとエグゼター級駆逐艦をサウスジョージア島の封鎖に、それ以外の全戦力をフォークランド諸島の封鎖に当てることとした。

アルゼンチン海軍も五月一日、以下の艦からなる二個艦隊をフォークランドに向け出港させる。しかし日本海軍の影響を受けていたアルゼンチン海軍は戦力の分割を良しとせず、二個艦隊をほぼ一個の艦隊のようにまとめて行動させた。

第一艦隊

災害救難艦メダノサ、甲型水上艦ベルメホ、サラード、ネグロ、ラプラタ、パラナ、ウルグアイ

第二艦隊

災害救難艦トレス・ブントス、甲型水上艦サラド、ドウルセ、ジャチャル、アトウエル、コイグ、デセアド

また予備機も含めて二〇式艦上戦闘機及び二〇式中型回転翼機各四十機からなる航空隊のうち、イギリス水上艦隊の搜索に偵察用の機材を積んだ戦闘機十二機を、潜水艦隊の搜索にほぼ全ての回転翼機を投入。これは五月一日の航空攻撃でシーハリアー一機を撃墜され、さらに二機が損傷により飛行不能となっていたイギリス艦隊の航空戦力とほぼ互角であり、航空機の最高速度と航続距離ではアルゼンチンに分があった。

翌日午前七時、フォークランド北方にてアルゼンチン艦隊を待ち受ける空母「ハーミズ」艦橋。

「東北東より航空機二機が接近中！ 距離百海里で速力五百海里、アルゼンチンの戦闘機と思われます！」

「本艦の甲板に準備してあるシーハリアー二機を出せ！」

空母「ハーミズ」艦長の命令で、翼と胴体に合計で四発のサイドワインダー空対空ミサイルを搭載したシーハリアーが、艦首にある坂のような部分の手前へと引き出される。そしてエンジンを始動させ、スキージャンプ甲板と呼ばれる離艦距離短縮用の傾斜を駆け上がって飛び立った。

「日本のお下がりが戦闘機ごときに負けられるか！」

「大型機にミサイルを当てられたからって、いい気になるなよ！」

シーハリアーが装備する当時のサイドワインダー（AIM-9L）は、エンジンの排熱による赤外線を検知して誘導する形式ではなく、機体が生み出す空気摩擦による発熱も赤外線として感知できるようになっていた。そのためエンジンの排熱しか感知せず後方からしか狙えない旧式の赤外線誘導ミサイルとは異なり、あらゆる方向から発射できるのである。

「戦闘機が来たということは、敵艦隊はこの方向か……手前なんざ一発あれば十分だ、喰らえっ！」

二機の二〇式戦闘機から、それぞれ一発ずつの二〇式甲型空対空電探誘導弾が放たれる。これは二〇式戦闘機と同じ一九六〇年に採用された、セミアクティブレーダーホーミングミサイルだ。

「ヘッドオン（正面对向）の状態で撃ってきたということは、レーダーホーミングのミサイルか……いや、こちらと同じようにオールアスペクト（全方向から撃てる赤外線誘導ミサイル）能力を持った赤外線誘導ミサイルかもしれないな。よし、チャフとフレアを同時に展開するぞ！」

これを確認したシーハリアーは慌てて退避し、同時に二〇式戦闘機の電探を欺瞞すべくチャフとフレアを散布する。こうすることで敵機のレーダーにチャフを撒いた地点を、赤外線誘導ミサイルにフレアを撒いた位置をそれぞれ自機の現在位置だと錯覚させ、ミサイルが飛ぶ方向を逸らすことができるのだ。

「よし、ミサイルは二発とも逸れた！」

だが間髪入れず、二〇式戦闘機から背を向けたシーハリアーに一発ずつの赤外線誘導弾が発射される。さらに二機が狙った標的は同じ機体であり、目標となったシーハリアーは至近距離から二発の誘導弾に追われることになった。

「まずい、この距離では……うわあああっ！」

直後、二発の誘導弾が同時にシーハリアーの尾部へと命中する。シーハリアーはそのまま落下していき、海面へと衝突して失われたが、幸いにして搭乗員は脱出することができていた。

「よくも……よくもやってくれたなっ！」

僚機を撃墜され、もう一機のシーハリアーに乗っていた搭乗員が激昂する。そして尾部を向けていた一機の二〇式戦闘機にサイドワインダーを放ち、二〇式戦闘機はフレアを放つ間もなく撃墜された。

「くそっ……だが、今は敵機動部隊の発見が先だ！」

残った二〇式戦闘機はアフターバーナーを吹かし、シーハリアーの飛んできた方向に向け突進する。すると暫くして、彼の機体が機動部隊の外周を囲んでいる駆逐艦を捉えた。

「よし！ 急いで母艦に連絡して、とっととずらかるぞ！」

二〇式戦闘機の搭乗員が災害救難艦「メダノサ」へと敵艦隊の進路や位置を報告した直後、一発のサイドワインダーが二〇式戦闘機を撃ち抜く。そして機内の燃料や誘導弾に誘爆して大爆発を起こし、搭乗員諸共粉微塵に砕け散った。

「お前なんざ……一発あれば、十分だ」

事態を飲み込めないまま散った彼の愛機を撃墜したシーハリアーの搭乗員が、満足気に呟いた。

第百七話 一発あれば（後書き）

敷島「鹵獲されたザ○とヒルド○ブですね、わかります」

富士「また、分かる人間が限定されるネタを盛り込みおって」

大隅「本当に、戦が関係するとあれば節操無しに食いつくのですね」

作者「物心つく前からそうだった。反省しても無駄かなと思って
る」

三笠「開き直っていないで、次回予告をお願いします」

作者「アルゼンチン海軍航空隊は攻撃隊を放ちますが、結果は如何
に？ 次回『ファーストストライク』ご期待下さい」

第百八話 ファーストストライク

撃墜された二〇式戦闘機の報告を受け、アルゼンチン海軍は午前七時半から八時にかけて二隻の災害救難艦より合計二十四機の戦闘機を出撃させた。これらの機体にはそれぞれ両翼下面に電探式空対空誘導弾と赤外線式空対空誘導弾が二発ずつ（一機当たり合計四発）、胴体両脇に対艦誘導弾が一発ずつ（一機当たり合計二発）、そして胴体下部に増槽が装備されていた。

これは二〇式戦闘機が搭載し得るほぼ最大限の武装であり、アルゼンチン海軍が第一撃でイギリス艦隊を覆滅しようとしていることの表れでもあった。また陸戦同様日本から派遣された軍事顧問の影響で、アルゼンチン軍は戦力の分散を嫌い、投入できるほぼ全戦力を一回の戦闘に投入する癖がついていた。

午前八時にアルゼンチン艦隊の上空で編隊を整えた二十四機の戦闘機は、一路フォークランドを海上封鎖しているイギリス艦隊を目指す。だがやはり、午前九時半に駆逐艦「シェフィールド」のレーダーによって、艦隊まであと百海里という時点で捕捉されてしまった。

同時刻、駆逐艦「シェフィールド」より報告を受けた空母「インヴィンシブル」。

「駆逐艦『シェフィールド』が、西北西から接近してくる敵航空隊を捕捉！ 距離百海里、時速五百ノット、数は二十四！」

「今、すぐに出撃できるシーハリアーの数は？」

「本艦、及び『ハーミズ』ともにそれぞれ四機が精一杯です」

「なら、それを全て出撃させろ！」

二十四機の戦闘機に僅か八機で対抗しなければならない状況に追い込まれ、愛機に駆け寄るシーハリアーの搭乗員は一樣に陰しい表情をしている。しかし二隻の空母に搭載されている十八機のうち既に二機のシーハリアーが撃墜され、また残った機体も整備や修理で動けないものが少なからずいる現状では、彼らがいかにそのことを嘆いたところで何にもならないのであった。

また敵航空隊をいち早く捉えた「シェフィールド」も、即座に何らかの対抗処置を行うことはできない。彼女が搭載している対空誘導弾「シーダート」の射程距離は、イギリス艦隊が当時保有していた対空誘導弾の中で最も長い射程を有していたが、それでも最大で三十海里程度であるため、暫くの間は手も足も出ないのだ。

「時速五百海里そこそこの飛行なら、向こうの攻撃隊が対艦ミサイルを持っていたとしても後五分はこちらを射程内に捉えられないはずだ……なら、シーハリアーでの迎撃もできるだろう」

実際には、アルゼンチン海軍の保有する対艦ミサイルの射程は二十五海里であるため、時速五百海里で飛行したとすれば射程圏内に接近するまで九分程度かかる計算になる。しかし「シェフィールド」のレーダーがアルゼンチン軍攻撃隊を捉えた直後、二十四機の戦闘機は一斉にアフターバーナーを吹かし、マッハ二の速度でイギリス艦隊目掛け突き進んだ。

「敵攻撃隊、速度を上げて向ってきます！ 現在の速度は……マッハ二前後！」

「くっ、アフターバーナーを吹かしてきたか！ となると、下手をすると三分弱（実際には三分半）でミサイルを撃ってくるぞ！」

駆逐艦「シェフィールド」が攻撃隊をレーダーに捉えて三分後、数隻の艦艇がアルゼンチン軍の攻撃隊をシーダートの射程圏内に捉える。そしてシェフィールド級の六隻が、それぞれ二発ずつのシーダートを発射した。

シーダートは母艦のタイプ九〇九射撃レーダーによって誘導されるセミアクティブレーダーホーミングを採用しており、一基のレーダーで一発のシーダートを誘導できる。シェフィールド級駆逐艦バッチーは白いレドームで保護された射撃レーダーを艦橋とヘリコプター格納庫の上に、シーダート連装発射機を艦橋の前にそれぞれ装備している。

「前方から、ミサイル多数飛来！」

「あれはレーダー誘導のはずだ！ 全機、チャフを散布しつつ回避行動に移れ！」

十二発のシーダートを確認したアルゼンチン軍攻撃隊は、全機がチャフを展開して散開。しかし全てのシーダートを回避するには至らず、四機の二〇式戦闘機がミサイルの直撃を受けて墜落していった。また残った機体も回避運動のために編隊が乱れ、ばらばらの状態で艦隊に突入することを余儀なくされる。

とはいえ、シーダートとアルゼンチンが保有する対艦誘導弾の間で射程距離の差はわずかに五海里。直後にアルゼンチン側もレーダーでイギリス側の艦艇を捕捉し、二十機の戦闘機がそれぞれ一発のミサイルを思い思いの目標へと立て続けに発射した。

第百八話 ファーストストライク（後書き）

富士「F-2並みとは言わんが、相当な重装備だな」

作者「対艦誘導弾を搭載しなければ、対空誘導弾を追加で胴体両脇に二発ずつ、つまり合計で八発の対空誘導弾を搭載できるという設定です。ただ、翼への対艦誘導弾の搭載は難しいでしょうね」

敷島「さすがに、対艦番長は年代が違いすぎるからね。超音速の戦闘機が複数発の対艦ミサイルを積めるというだけでも、当時としては実現できるか怪しいものだよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「なおも、イギリス艦隊の迎撃は続きます。次回『弾はあってもレーダー無し』ご期待下さい」

第百九話 弾はあってもレーダー無し

イギリス艦隊へと二十発にも上る対艦ミサイルが襲いかかるものの、彼女たちが採り得る対抗手段は非常に限られている。シェフィールド級駆逐艦六隻は虎の子であるシーダートを発射した直後であり、他の艦が有する対空兵装も、発艦作業中である二隻の空母を除けば以下のようにお世辞にも十分とは言えないものであった。

カウンティ級駆逐艦バッチー（一隻）、バッチ二（三隻）

シーキャット（射程五キロ、指令誘導） 四連装発射機一基（四隻共通）

シー・スラグマーカー（射程二七キロ、ビームライダー誘導） 連装発射機一基（バッチーのみ）

シー・スラグマーカー二（射程三二キロ、ビームライダー誘導） 連装発射機一基（バッチ二のみ）

リアンダー級フリゲート（九隻）

シーウルフ（射程六キロ半、指令誘導） 六連装発射機一基

まずは、四隻のカウンティ級駆逐艦が射程の長いシー・スラグを放つ。しかし連装発射機となっているにも関わらず、誘導するため九〇一型射撃レーダー（白い円盤型）はヘリコプター格納庫の上に一基しか無いため、同時に複数発のミサイルを離れた目標へと誘導することができないのだ。

「シー・スラグ、間もなく目標に着弾……命中！」

「残った敵の誘導弾は？」

「十七発！」

「ええい、二発目の発射を急げ！ 我々が一発でも多く落とさなければ、それだけ艦隊の全艦が危険に晒されるのだぞ！」

そのため、一度に放たれたシー・スラグは合計四発のみ。幸いアルゼンチン側のミサイルが複雑な機動を行わず、それぞれの目標に向け直進してきたために三発の誘導弾を撃墜できたが、未だに十七発が生き残っていることを考えれば焼け石に水であった。

さらに接近しつつある十七発のミサイルへと、第二射となる四発のシー・スラグが差し向けられる。だが第二波でも撃墜できた誘導弾は三発に止まり、十四発が残ったまま後は射程数キロの個艦防空ミサイルにしか頼れない状況にまで追い込まれた。

「なお敵誘導弾十四発、来ます！」

「シーキヤットは目視での誘導しかできないから、使い物にならないか……チャフを散布しろ！」

ミサイルでのハードキル（敵のミサイルを物理的に破壊する迎撃法）が不可能であることを悟った指揮官が、チャフによるソフトキル（ミサイルの誘導を電子的に欺瞞して無力化する迎撃法）を指示する。すぐさまそれぞれの艦から金属箔が撒かれ、各艦の周囲にはアルミ箔の雲が作られた。

十分な電波妨害への対策を施されていない二〇式対艦誘導弾が、何発もチャフの雲へと逸れていく。だが最終的には、十発の対空誘導弾が正確に目標へと突き刺さることになった。

まず対艦誘導弾の餌食となったのは、マスト下部と船体右舷中央部に直撃を受けた「シェフィールド」だ。マストの根元に命中した一発はそのままマストを薙ぎ倒し、船体への命中による直径十メートルはあろうかという破孔は、喫水線の下にまで達した。

船体の破孔から海水が浸入し、「シェフィールド」の船体はみるみる傾斜していく。しかし彼女が爆炎と水煙に包まれた直後、駆逐艦「コヴェントリー」は四本の誘導弾を受け爆発炎上。瞬く間に艦全体が火災に包まれ、浸水は「シェフィールド」ほどではなかったものの、一瞬にして復旧は絶望的な状態にまで追い込まれてしまった。

加えて一本ずつがシェフィールド級駆逐艦「バーミンガム」、カウンティ級駆逐艦「ファイフ」、「グランモーガン」及び「アントリム」に命中。彼女たちの手傷は先の二隻に比べて浅く、沈没こそ免れたものの、レーダーや火器に損害を受けた艦が多いため戦闘への支障が出ることは避けがたかった。

そして彼女たちを襲う災厄は、これで終わったわけではない。シーハリアーが輪形陣の外周で迎撃戦闘に移る前に、さらに二十発の対艦誘導弾が放たれたのだ。

第百九話 弾はあってもレーダー無し（後書き）

作者「素人が国民目線でやるのが本当の文民統制って……何なの？
馬鹿なの？ 死ぬの？」

富士「いざという時に死ぬのはあいつらではなく、自衛官の方々や
その他大勢の一般国民の方になりそうだがな。第一、あいつは農水
畑らしいじゃないか」

敷島「農業高校と大学の農学部を出て、入った省庁も農水省だよ」

作者「なんでそんな経歴で、かつ自分から素人だと言いだすような
人間をを防衛大臣に……木に竹を接ぐという言葉すら生ぬるい気が
します」

三笠「お気持ちは分かりますが、次回予告をお願いします」

作者「アルゼンチンが放った第二波のミサイル、果たしてその目標
とは？ 次回『本丸攻め』ご期待下さい……ぎぎぎ」

第百十話 本丸攻め

誘導弾を放った二十機の戦闘機は、すぐに踵を返して母艦への帰還を目指す。二〇式空対艦誘導弾は慣性誘導の後にアクティブレーダーホーミングで目標を追尾するため、二〇式空対空誘導弾と異なり母機が発射後も目標を電探で捉え続ける必要が無いのだ。

だがイギリス軍も、彼らの離脱を前に指を咥えて見ているだけではない。このころようやく「ハーミズ」及び「インヴィンシブル」から出撃した八機のシーハリアーがアルゼンチン軍の攻撃隊を捉え、ミサイルの発射態勢に入ったのだ。

「逃がすか、貴様らっ!」

「わざわざこっちに尻尾を向けやがって! それじゃあ、遠慮なくサイドワインダーを撃たせてもらうぜ!」

八機のシーハリアーから一発ずつのサイドワインダーが放たれ、名前の元となったヨコバイガラガラヘビと同じように蛇行しつつ攻撃隊に向かう。しかしほぼ同一方向に進んでいる彼我の速度差は時速にして六百キロメートル(音速の半分)程度であり、命中までには一分ほどかかることになった。

「全機、フレア発射!」

二十機の攻撃隊は散開しつつフレアを展開し、一発でも多くの誘導弾を錯乱しようと試みる。だがサイドワインダーのシーカーが最も赤外線を感知しやすい後方からの攻撃とあっては、フレアによる回避も極めて困難であり、なんと八発中六発が命中した。

被弾した機体のうち二機にはそれぞれ二発ずつが向かったため、被弾したアルゼンチン海軍機は合計六機。何れも機体後部にあるエンジン周辺への命中とあって墜落は避けられず、この時点で二十四機の攻撃隊は十四機にまで撃ち減らされることとなる。

一方でシーハリアーの放ったサイドワインダーがアルゼンチン軍攻撃隊を襲った直後、二十発の対艦誘導弾もまたイギリス艦隊を襲っていた。第一波攻撃で装填してある対空誘導弾を使い果たしていた艦は少なからずおり、先程にも増して彼女たちの迎撃行動は限定されたものになる。

ところが、対艦誘導弾は彼女たちの頭上を通り過ぎていった。このことを沈みゆく「シェフィールド」を初めとした駆逐艦やフリゲートの乗員たちは不審に思っていたが、すぐさまアルゼンチン軍の狙った目標に気付くと顔面蒼白となった。

「まずい……あのミサイルは『ハーミズ』と『インヴェンシブル』を狙っているぞ！」

同時刻、空母「ハーミズ」。

「ミサイル、本艦と『インヴェンシブル』に向かいます！」
「チャフを放て！ くっ……二十年以上前に開発された対艦ミサイルの威力がこれほどとは……っ！」

アメリカやイギリスといった欧米諸国は、日本が一九六〇年に対艦誘導弾の実戦配備を始めてなお、その開発に消極的であり続けた。中東戦争によって日本製対艦誘導弾の威力が実証され、ようやく重い腰を上げた欧米だったが、未だに日本以外が実用化した対艦誘導弾はエグゾセやシー・スクアなど十種類にも満たなかった。

「シーダートを放て！ 『ハーミズ』に飛んでくる誘導弾を優先して迎撃しろ！」

後方の「ハーミズ」に向かっていた八発の対艦誘導弾へと、「インヴィンシブル」の艦首に装備されたシーダート連装発射機から、二発のシーダートが立て続けに放たれる。そして「インヴィンシブル」渾身の迎撃は二発の対艦誘導弾を破壊するという成功を収めたが、なおも六発の誘導弾が「ハーミズ」に、そして何より「インヴィンシブル」自身にも十二発の誘導弾が向かっていた。

幸い「インヴィンシブル」は三基の近接防御火器システム「フランクス」を装備しているが、「ハーミズ」の対空火器はボフォース社の四〇ミリ連装機関砲が五基のみ。当然、音速で飛んでくる対艦誘導弾を撃墜できるはずが無かった。

ここで「インヴィンシブル」は、ファランクスで五発もの誘導弾を破壊し、さらにチャフで三発の誘導弾を攪乱するという奮闘ぶりを見せる。しかしそれは逆に言えば、残り四発の誘導弾は相変わらず彼女に向かって飛び続けたということでもあるのだ。

間断なき轟音が立て続けに響き渡り、二隻の空母が黒煙に包まれる。史実で八面六臂の活躍を見せた二隻の空母は、今まさに窮地に立たされた。

第一百十話 本丸攻め（後書き）

富士「なるほど。第一撃で水上艦による輪形陣に穴を開け、第二撃で迎撃の手薄になった部分から本丸を衝いたわけか」

作者「まあ、『シェフイールド』さんや『コヴェントリー』さんは史実において数年後に同名の艦が就役しているので、否が応でも退場してもらったという事情があるのですけれど」

大隅「紛争後に就役した、ボクサー級フリゲートの二隻ですね……それはともかく、外国の艦船にもさん付けですか」

作者「基本的には、どこの国の艦船であろうと敬称を付ける。ただ現在進行形で日本に敵対している国や、その艦船がいた時代に日本に敵対していた国の艦船には当然例外もあるよ」

敷島「じゃあ現代の例外は……おおかたあの三か国と、国と呼んでいいのか微妙なあそこの船か」

三笠「そしてかつての例外は、おそらく……という話はさておき、次回予告をお願いします」

作者「この戦闘は、双方に大きな被害をもたらしました。次回『戦闘機のない空』ご期待下さい」

第百十一話 戦闘機のいない空

炎上するに空母を尻目に、アルゼンチン軍の攻撃隊は悠々と離脱。シーハリアー隊による懸命の追跡が行われたが、マッハー一にさえ届かない最高速度では、マッハー二で飛行する二〇式戦闘機にさらなる追撃を見舞うことはできなかった。

だが真にシーハリアーの搭乗員たちにとって問題だったのは、着艦するはずの空母が二隻とも炎上しているため、このままでは燃料切れを待つしかないという現実であった。またシーハリアーはもともと航続距離がさほど長い機体ではなく、時間の猶予は限られていた。

「くっ……早いところ、機体を捨てて脱出するか？」

「いや、限界まで待とう。まだしばらくは上空で待てるから、今機体を捨てるのは勿体ない」

特にこの時は艦隊防空しか想定していなかったために、身軽さを重視して燃料を最大限まで搭載しておらず、ただでさえ短い航続距離が余計に短くなっていたのだ。そしてほんの十数分とはいえ最高速度での空戦を行ったのであるから、残されている時間は何時間もない。

幸いだったのは、「インヴェンシブル」に命中した誘導弾の多くが舷側の高い部分に命中した結果、大規模な浸水による傾斜や飛行甲板の損傷が見られなかったことである。この状態であれば、消火さえできればシーハリアーを着艦させることも不可能ではないのだ。

とはいえ彼女はまだしも、多数の誘導弾を受けた「ハーミズ」は

艦全体が火炎に覆われており、飛行甲板にも三発の誘導弾が命中したせいで穴だらけである。そのため彼女の復旧は早々に諦められ、被弾から一時間後には総員退艦がほぼ終了していた。

「上空で待機している『インヴェインシブル』及び『ハーミズ』の航空隊に告ぐ。既に『ハーミズ』は総員退艦を終え、『インヴェインシブル』も着艦が不可能である。よって各員、機体から脱出してくれ」「ここまでか……くそっ！ 俺たちが飛べなくなったら、誰が艦隊の空を守るんだ！」

「落ち着け。もう残りの燃料も少ないだろうから、脱出しないと愛機諸共死ぬ羽目になるぞ」

シーハリアーから次々と射出座席が飛び出し、主を失ったシーハリアーが海面に激突する。そして高々と水柱を噴き上げながら、南大西洋の海底深く沈んでいった。こうして、フォーランド紛争に派遣された二十機のシーハリアーは全て失われてしまった。なお、この戦闘における双方の損害は以下のとおり。

アルゼンチン側損害

戦闘機十機喪失

イギリス側損害

沈没

空母ハーミズ（ハーミズ級）

駆逐艦シェフィールド、コヴェントリー（シェフィールド級）

損傷

空母インヴェインシブル（インヴェインシブル級）

駆逐艦バーミンガム（シェフィールド級）、ファイフ、アントリム、

グランモーガン（カウンティ級）

こうしてアルゼンチン海軍は大戦果を収めたものの、自らの艦内

航空戦力もまた半減してしまった。また対艦誘導弾は今回の攻撃に用いたものが災害救難艦に搭載されている在庫の大半であり、以後大規模な対艦航空攻撃は二度と行えなくなったのである。

つまり、この攻撃はアルゼンチン海軍の総力を挙げた攻撃と言っても過言ではなく、この攻撃が失敗に終わっていればこの紛争そのものの結果が大きく変わっていたことも考えられるのだ。しかし、アルゼンチン軍は一世一代の大勝負に勝ち、イギリス軍に大打撃を見舞うことができた。

アルゼンチン軍がこの大博打に打って出たのも、日本からの軍事顧問が戦力の逐次投入についての危険性を説いていたことが大きく影響していると言われている。そしてアルゼンチン軍が主力圧していた兵器は、間違いなく以前の日本軍と完全に同じものだった。

そのため後世においては、「イギリス軍はアルゼンチン軍に負けたのではなく、日本軍に負けたのだ」と唱える研究者さえ現れる始末であった。そして、イギリス国民の一部にはアルゼンチンに兵器を輸出した日本への反感を持つ者もいたのである。

第百十一話 戦闘機のいない空（後書き）

作者「さて、こうして一時的とはいえ、双方が艦隊航空戦力を事実上喪失しました」

富士「しかし、最後のあれはまずくないか？」

作者「とはいえ、交戦状態に入ってからのはどちらにも与していませんから、今さらイギリスがどうこう言っても言いがかりにしかありません。少なくとも、これを理由として日本に実害を及ぼすような行動をとるのは無理でしょう」

敷島「迂闊に経済制裁でもしようものなら、最悪の場合核戦争だからねえ。おまけに八ヶ国協約の締結国も絡んでくるから、第三次世界大戦は確実だよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「航空機を失ったアルゼンチン軍は、潜水艦と水上艦による追撃を試みます。次回『新旧激突』ご期待下さい」

第百十二話 新旧激突

フォークランド沖海戦での大敗は、イギリス国内に大きな混乱をもたらした。空母「インヴィンシブル」やシーハリアー、「シェフールド」級駆逐艦といった最新鋭の兵器が、二十年以上前に日本で開発された兵器の改良版に敗れたのであるから当然である。

特に開発当初から評価が分かれていたシーハリアーの大量喪失は、「音速すら出せない戦闘機など役立たずだ」という論調を一層強いものにした。そしてシーハリアーの母艦として建造された「インヴィンシブル」級空母に対しても、兵器としての有用性を疑問視する声が上がりはじめた。

一方最前線のイギリス軍は、フォークランド沖にいた艦隊を、フリゲートを残して撤退させる他なかった。空母一隻と駆逐艦二隻の撃沈に加え、空母一隻と駆逐艦四隻を手負いにされてしまったのは、最早まともな作戦行動は不可能である。

これを知ったアルゼンチン軍は追撃を検討したが、二隻の災害救難艦に搭載されていた対艦誘導弾はほぼ底をついており、これ以上の航空攻撃は無誘導の通常爆弾でしか行えない。それでは迎撃される危険が大きすぎるため、航空機での追加攻撃は断念されることになった。

そこで、それまでは本土の沿岸でイギリス軍の奇襲に備えていた潜水艦のうち六隻を、イギリス艦隊の追撃に差し向けることになった。なお、この時イギリス艦隊の攻撃に充てられた潜水艦の名は以下のとおりであり、この六隻はフォークランド沖海戦の翌日である五月三日にブエノスアイレスを出港している。

第三潜水隊メルセデス、パズエロ、ヴィラマ
第四潜水隊パラル、ブランカ、パロ・プラド

しかし、潜水艦部隊がフォークランドから撤退する部隊を捕捉するより先に、アルゼンチン海軍の第一艦隊と第二艦隊が彼女たちに接近。フォークランド沖海戦の翌日に、フォークランドの西北西およそ二百海里の地点にいるイギリス艦隊をレーダーで発見した。

午前九時、アルゼンチン海軍第一艦隊の甲型水上艦「ラプラタ」艦橋。

「西南西より、接近してくる艦隊を発見！ 五隻を四隻で囲んだ輪形陣、距離百海里、速力十ノット！」

「敵艦隊に突っ込め！ 何としてでも、ここで敵艦隊を再起不能にするぞ！」

一方のイギリス艦隊も、既にアルゼンチン艦隊を捉えていた。しかし損傷した艦が多いために十ノット程度での航行が精々であり、さらには対艦ミサイル「エグゾセ」を搭載した貴重な駆逐艦「ファイフ」、「グランモーガン」及び「ファイフ」は、何れも損傷していた。

そのため、イギリス残存艦隊はアルゼンチン艦隊を振り切ること、強行突破することも難しい状況であった。幸い三隻はエグゾセの発射も不可能ではなかったが、どのみち良くて差し違えという結果を覚悟せねばならなかった。

もしイギリス艦隊が損傷した艦を処分していれば、健在な艦だけが高速で航行することで、アルゼンチン艦隊を振り切ることも十分

可能であつたろう。しかしここで一隻の空母と四隻の駆逐艦を追加で失うことは、まさしくイギリス海軍にとって壊滅的な損害であり、大きな危険を冒してでも避けなければならないことであつた。

「最早、アルゼンチン艦隊との交戦無くして離脱は不可能か……エグゾセの発射準備をしろ！ 敵艦隊が射程に入つた瞬間に一撃を見舞つて、その後は全速力でアルゼンチン艦隊から離脱する！」

やがて南に進むアルゼンチン艦隊と、北方に進むイギリス艦隊の距離が、少しずつ縮んでいく。そして保有する対艦ミサイルの射程が五十キロメートルとわずかに長いイギリス艦隊が、先にアルゼンチン艦隊を射程圏内に捉えた。

「敵艦隊、こちらの射程に入りました！」

「よし、エグゾセを撃てるだけ撃て！」

三隻の駆逐艦から、十二発のエグゾセが立て続けに放たれる。イギリス艦隊にとってこのエグゾセは、アルゼンチン海軍に一矢報いるための最後の希望であつた。

第百十二話 新旧激突（後書き）

富士「先手を取ってはいるが、数が少ないな」

作者「当時のイギリス駆逐艦は、一隻当たり多くて四基しかエグゾセ発射機を搭載していませんでしたからね」

敷島「それと比べると、コンテナ式軍艦の火力は反則ものだよ」

大隅「早期から誘導弾の搭載に積極的であることは、史実のソ連海軍に似ていますね」

三笠「違いと言えば、一発の威力と搭載数のどちらを重視したかということですかね。それでは、次回予告をお願いします」

作者「イギリス海軍が放ったエグゾセの運命や如何に？ 次回『火力の差』ご期待下さい」

第百十三話 火力の差

「イギリス艦隊がミサイルを発射しました！ 数は十二、速度はおよそマッハー！」

「乙型対空誘導弾で迎撃する！ 各艦、射程に入り次第発射しろ！」

アメリカ海軍が開発した対空ミサイル「ターター」は、電探や管制システムを含めた運用に対して、複雑でかつ繊細な取り扱いを要求され。そのため、史実の護衛艦「あまつかぜ」では尊崇と皮肉の念を込めて込めて「ター様」と呼ばれていた。

一方でこの乙型対空誘導弾は、搜索を三次元電探に一任してミサイル自体も僅かに軽量化するなど、射程や到達高度をいくらか犠牲にした代わりに使い勝手を重視したものになっている。またイルミネーターは武装コンテナの一種として装備され、任務に合わせて着脱できるのだ。

「目標、射程内に入りました！」

「全艦、乙型対空誘導弾発射！」

エグゾセを射程圏内の収めた艦から、対空誘導弾が断続的に放たれる。しかし一度に誘導してやれる対空誘導弾の数は、母艦が搭載しているイルミネーターの数に依存するため、一度に三発も四発も発射することはできないのだ。

それでも、アルゼンチン海軍の二個艦隊には十二隻の甲型水上艦がいる。彼女たちから一発ずつでも乙型誘導弾を放てば、エグゾセと同数の対空誘導弾となり、問題なく誘導れば大半のエグゾセを破壊できるはずであった。

一発また一発と、乙型対空誘導弾がエグゾセに命中し、お互いを爆散させる。ところがその役目を果たした対空誘導弾はむしろ少数派であり、七発のエグゾセがなおもアルゼンチン艦隊に接近しつつあった。この時、アルゼンチン艦隊先頭艦とエグゾセとの距離は、およそ十キロメートル。

「目標、七発残存！」

「ミサイル第二波発射！」

再び十二発の乙型対空誘導弾が、七発のエグゾセ目掛けて発射される。これでもし生き残ったエグゾセがあれば、あとは自動対空機関砲とチャフでしか迎撃できず、それも失敗してしまえばアルゼンチン艦隊は万事休すである。

対空誘導弾に捕まったエグゾセが爆発し、レーダーのコンソールから反応が消えていく。そして反応は最後の一個まで消えるかと思われたが、三発のエグゾセがまたもや難を逃れ、アルゼンチン艦隊の外周から五海里も無い地点にまで迫ってきていた。

「ミサイル、なおも三发来ます！」

「チャフ展開！ 一発も当てさせるな！」

チャフと自動機関砲によって精一杯の迎撃を試みるが、三発のエグゾセは全てイギリス艦隊から最も近い位置にいた「ラプラタ」に突入。これに対し「ラプラタ」は艦橋の前に搭載されている一基の自動対空機関砲だけでの迎撃を余儀なくされ、整備不良などの影響もあり迎撃できた誘導弾は一発だけであった。

二発のエグゾセは艦橋の前面の根元付近へと命中し、炸裂。これ

によって「ラプラタ」は艦橋下部にあった戦闘指揮所（CIC）まで破壊され、艦長を含めて艦の主だった士官は多くが死傷した。そして間もなく、周囲に火災が発生する。

「被弾した『ラプラタ』の状況は？」

「それが、戦闘指揮所を破壊された影響で混乱しているらしく……応答がありません」

艦長以下の士官が多数死傷した「ラプラタ」では、生存者のうち誰の階級が最も高いかということが不明のままであった。そのため艦内における指揮の引き継ぎもままならず、さらには火災への対応も遅々として進まなかったのである。

「ええい……『ラプラタ』以外の艦は健在だな？」

「はい。たった今、『メンドサ』から敵艦を対艦誘導弾の射程内に捉えたとの報告がありました」

「よし。各艦は準備が完了し次第、対艦誘導弾を発射せよ！ 目標、イギリス艦隊！」

艦隊司令長官の命を受けた「ラプラタ」以下の甲型水上艦部隊から、相次いで対艦誘導弾が放たれる。CISの装備が進んでいないイギリス軍にとって、この波状攻撃を迎撃するのはあまりに荷が重すぎた。

第百十三話 火力の差（後書き）

富士「一隻は仕留めた……のか？」

作者「それは、次回で明らかにするつもりです」

敷島「どちらにしろ、最後の言葉はイギリス艦隊の死亡フラグにか見えないよ」

作者「彼女たちの対空火力を考えれば、言い過ぎでもないでしょう。それにしても、当時のイギリス軍艦艇は船体の大きさに比べて武装が少ない気がします」

三笠「というよりは、作者さんが武装を載せすぎのような気も……
それでは、次回予告をお願いします」

作者「千載一遇の好機に、アルゼンチン軍が狙った目標とは？ 次回『狙いは大将首』ご期待下さい」

第百十四話 狙いは大将首

波状攻撃の様にして襲い掛かってくるミサイルに対し、イギリス側が取れる対抗措置はやはり限られていた。とはいえ手を拱いているわけにもいかず、まずは「シェフィールド」級の五隻から二発ずつのシーダートが放たれた。

これにより、乙型対艦誘導弾は六発が撃墜される。しかしこの時点で発射された乙型対艦誘導弾は合計で三十三発にも上っており、なおも二十七発という信じがたい数の誘導弾がイギリス艦隊目掛け飛び続けていた。

「目標、先頭の『グランモーガン』まで二万五千メートルの距離にまで接近！」

「カウンティ級駆逐艦にシー・スラグを撃たせろ！ 三隻だけだが、一発で多く仕留めてくれよ！」

三隻の「カウンティ」級駆逐艦から、一発ずつのシー・スラグが発射される。ビームライダー方式は比較的旧式な誘導方法であるが、対艦誘導弾がイギリス艦隊に直進してきたことが幸いして、発射からおよそ三十秒後に三発全てが対艦誘導弾を巻き込んで爆発した。

「目標、残り二十四発！ 距離一万五千メートル！」

「シー・スラグ第二射、急げ！」

再び三発のシー・スラグが放たれ、再び三発の乙型対艦誘導弾が火球となって碎け散る。だが第二射のシー・スラグが対艦誘導弾と刺し違った時には、残った二十一発の対艦誘導弾が残り五千メートル程度の距離のまで接近してきており、次の対空誘導弾を装填して

発射するだけの時間は残されていなかった。

「誘導弾二十一発、なおも接近！ 距離は本艦隊の外周より五千メートル！」

「全艦、チャフ発射！ 誰に当たるかわからんから、油断するなよ！」

やがて、対艦誘導弾は何発かが逸れながらもイギリス艦隊から一海里的距離にまで接近。ここでイギリス艦隊の各艦に搭載されたC I W Sが火を噴いたが、「インヴィンシブル」や「シェフィールド」級駆逐艦は全艦が損傷しており、中には稼働しないものや、物理的に破壊されてしまっていたものも多かった。

それでもなお、チャフによって五発の誘導弾が誘導装置を攪乱され、空しく海面に突入。さらにはC I W Sによって八発もの対艦誘導弾が撃墜された。これにより、これまでの戦闘における戦訓と合わせてC I W Sは一躍その有用性を認められることになるが、八発の対艦誘導弾に襲われる羽目になったイギリス艦隊にとっては、何の慰めにもならない。

この時、アルゼンチン側の対艦誘導弾は全てが「誘導弾の電探が捉えた最大の艦船」を目標とするよう設定されていた。即ちこの設定どおりに誘導弾が飛行すれば、八発とも「インヴィンシブル」に向かうはずだったことになる。

ところが、八発のうち二発はイギリス側のチャフで中途半端に錯乱されてしまい、チャフを展開していた駆逐艦「ファイフ」を最大の艦船であると誤認。そのまま彼女のチャフを掻い潜り、期せずして命中することになった。

これにより、既に損傷していた「ファイフ」は爆発炎上。すぐさま総員退艦命令が出され、シェフィールド級の「シェフィールド」及び「コヴェントリー」に続き、イギリス海軍にとってこの紛争における三隻目の駆逐艦沈没となった。

つまり、予定どおり「インヴェインシブル」に命中した誘導弾は六発。とはいえ全てが甲板への命中であり、彼女は修理に一年はかかるという損傷を負ったが、機関や喫水線の下への損傷は見られなかったために航行を続けることができた。

加えて、フォークランド沖海戦の後に爆弾や誘導弾を全て海中に投棄していたことで、弾薬庫の誘爆も免れた。こうして、イギリス海軍は虎の子の空母が全滅するという、最悪の事態だけは逃れることができたのである。

またアルゼンチン海軍としても、ここで第二射の対艦誘導弾を放つより、フォークランドやサウスジョージアの沖に残っているイギリス海軍への攻撃に回す方が得策であると判断。かくしてこの海戦は短時間で終結し、アルゼンチン海軍はサウスジョージア沖を、イギリス残存艦隊は本土を目指したのである。

なお、双方の損害は以下のとおり。

アルゼンチン側損害

沈没

中型水上艦「ラプラタ」

イギリス側損害

沈没

駆逐艦「ファイフ」（カウンティ級）

損傷

空母「インヴェインシブル」（インヴェインシブル級）

第百十四話 狙いは大将首（後書き）

富士「ほう、ここでもまた空母を狙ったか」

作者「既に、イギリス側の護衛艦艇は戦闘能力をほぼ失っています。ならここで普段は叩きにくい空母へ深手を負わせておけば、より長い間修理のために本土へ縛りつけておけるのではないかと」

敷島「しかし、イギリス軍は災難続きだねえ。イギリス生まれの身としては、ちょっと複雑だよ」

作者「あー、えーと、その……次回はイギリス軍が反撃に転じますので、ご勘弁を」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、アルゼンチン艦隊のもとに刺客が忍び寄ります。次回『復仇の狙撃手』ご期待下さい」

第百十六話 復仇の狙撃手

フォークランドから撤退していたイギリス残存艦隊が、アルゼンチン海軍主力艦隊の追撃を受けたと知ったイギリス海軍は、潜水艦によるアルゼンチン艦隊の撃破を計画。近海を航行していた「スウィフトシュア」級原子力潜水艦三隻に、アルゼンチン艦隊の追跡を命じた。

この時白羽の矢が立ったのは、「スウィフトシュア」、「ソブリン」及び「シュパーブ」の三隻。なお、「スウィフトシュア」級原子力潜水艦は一九七三年から一九八一年にかけて六隻が建造された、比較的新型の原子力攻撃潜水艦である。要目は以下のとおり。

全長八二・九メートル、幅九・八メートル、喫水八・五メートル
基準排水量四四〇〇トン、満載排水量四九〇〇トン、乗員一一六名
原子炉一基及びタービン二基、一軸推進、出力一五〇〇〇馬力、水上二〇ノット、水中三〇ノット
五三・三センチ魚雷発射管五門（魚雷及びハープーン対艦ミサイル合計二〇本）

五月四日、フォークランド北方の潜水艦「シュパーブ」発令所。

「前方に、アルゼンチン海軍のものと思しき推進音！ 南南西の方角に向かっていきます！」

「距離と速度は？」

「速力二十ノット、本艦との距離は十海里です」

「よし、最も近い二隻に向けてハープーン発射！ 撃てるだけ撃つて、すぐ撤退するぞ！」

暫くして艦首の発射管から、断続的に五本のハーブーンが放たれる。だがその時、アルゼンチン側も既に「シュパーブ」を水中探信儀で捉えていた。

「五時方向より敵潜水艦、速力二十ノット、距離十五海里！」

「よし、『パラナ』と『ウルグアイ』に攻撃させろ！ 他の艦は、敵の魚雷やミサイルに備えろ！」

しかし、「シュパーブ」が放ったハーブーンの目標は紛れもなくその「パラナ」と「ウルグアイ」であった。輪形陣の奥にいる災害救難艦の「メダノサ」や「トレス・ブントス」を狙うには、よりアルゼンチン艦隊に接近しなければならないので、その危険性を嫌った「シュパーブ」の艦長が最も近くにいる二隻を狙わせたのである。

ハーブーンは旧式な二〇式対艦誘導弾と異なり、最初に目標の位置を指示することで、慣性飛行の後にアクティブレダーホーミングで指定の目標へと命中させることができる。さらには目標を指定せずに、ミサイルのレーダーが作動した段階で一番近くにいる敵艦へと突入させることもできるのだ。

海面へと突き出た五発のハーブーンは、そのまま「パラナ」と「ウルグアイ」に襲い掛かる。ハーブーンは、空気抵抗の減少からくる射程の延長を狙って高空巡航をさせることも可能だが、この場合射程の延伸に意味は無い。

また高空巡航だと、敵艦から見た水平線の下から早く出てしまう結果、レーダーで早く発見されてしまうようになる。そのため、今回はハーブーンの飛行方法として一般的なシースキミング（海面すれすれを飛行する方法）が採られた。

そしてシースキミングの場合、ハーブーンは敵艦の手前で飛び上がってから敵艦の上部に命中する（ホップアップ）か、そのまま低高度で敵艦に突入するかを選ぶことができる。前者は命中率を、後者は敵艦から迎撃される時間の短縮を優先したものだ。

ところが、この時「シュパーブ」が装備していたハーブーンは、もともと初期の潜水艦発射型であるUGM-84A。これはホップアップを経た命中しか選ぶことができず、二隻に向かった五発のハーブーンは目標の手前で飛び上がるしかないのだ。

「敵潜水艦、誘導弾五発を発射しました！」

「乙型対空誘導弾を放て！ 残った誘導弾にはチャフと自動機関砲で対処しろ！」

二隻から一発ずつ放たれた誘導弾は、二十秒程経ってから見事にそれぞれハーブーンを破壊する。そしてこの時点でも、ハーブーンと二隻の間にはまだ二十キロメートル程度の距離があったため、アルゼンチン側の二隻はもう二発ずつ乙型対空誘導弾を放つことができた。

こうして一発まで撃ち減らされたハーブーンだったが、自動機関砲による迎撃やチャフによる電波妨害を凌いで「ウルグアイ」に命中。その瞬間彼女の船首で大爆発が発生し、「ウルグアイ」の船体を黒煙がすっぽり包み込んだのだった。

第百十六話 復仇の狙撃手（後書き）

作者「この頃の潜水艦がどれぐらいの距離で探知されるかなんて、見当もつかんよ……まあ、水上艦側のソナーの性能や海の状態によって千差万別と言えはそれまでだろうけど」

朝日「あとは、潜水艦側の静粛性次第ですな」

作者「史実のフォークランドじゃあ、アルゼンチン側の使っていた兵器が旧式すぎるから参考にならないし……かといって、それ以外に現代的な海戦の実例というのもそう多くない……詰んだ」

富士「特に、原潜が絡む戦闘は皆無に近いからな」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「イギリス海軍が繰り出した反撃の結末や如何に？ 次回『油断が拡げた傷口』ご期待下さい」

第百十七話 油断が拡げた傷口

ハーブーンが命中したことによる破孔は、喫水線の下にまで到達。船体に大穴を穿たれた「ウルグアイ」は、急な戦闘とあって防水扉が密閉されていなかったせいで、艦首から艦尾までを貫いている右舷居住区の通路へと大規模な浸水を招いてしまった。

「『ウルグアイ』より通信、『潜水艦ノ追撃ヲ貴艦ニ一任セントス』」

「両舷、全速前進！ 敵潜水艦の推定位置から十海里の距離にまで到達次第、対潜誘導弾を放て！」

僚艦の落伍にもめげず、懸命に「シュパーブ」を追撃する「パラナ」。しかし「シュパーブ」は水中で最大三十ノット以上の航行が可能であり、「パラナ」では振り切られないように距離を保ったまま追隨するのが精一杯であった。

「敵潜水艦との距離、変わらず十五海里！」

「本艦では、追撃は無理だというのか……くそっ！」

いくら目標である潜水艦の機関が大きな音を立てていても、短魚雷を搭載した対潜ロケットの射程に収められなければ攻撃はできない。おまけに「パラナ」たちアルゼンチン艦隊にはこの後、本来の任務であるフォークランド諸島周辺にいるイギリス艦隊の撃破が控えており、燃料を温存するためにも最高速度での長時間に亘る航行は避けたかった。

同時刻、アルゼンチン艦隊災害救難艦「トレス・ブentas」戦闘指揮所。

「甲型水上艦『パラナ』より、敵潜水艦が三十ノット前後の速力で航行しているとの情報が入りました」

「それでは、当分の間追いつけないな……仕方ない。敵潜水艦の追撃は本艦と『メンドサ』の搭載機に任せ、『パラナ』には艦隊に戻ってもらうか」

機関である「トレス・ブentas」からの命令により、「パラナ」は止む無く「シュパーブ」の追撃を断念。艦隊へと戻ったが、その時「ウルグアイ」は明らかに右舷の艦首が沈み込んでいた。

「『ウルグアイ』より通信です……『機関室へノ浸水ニヨリ航行不能』！」

「何だと！」

予想していなかった事態に、艦隊司令は思わず大声を上げる。この時は、「ウルグアイ」の艦内にあった居住区と機関室を繋ぐ階段から海水が流れ込み、機関室への進水を許してしまったのだ。当然戦闘配置ともなれば防水扉によって閉鎖されるのだが、彼女にはその時間すらなかった。

とはいえ、戦争中の航海である以上、いつ敵に遭遇してもいいようにしておくのが普通である。この一件に関して言えば、アルゼンチン海軍が各艦の防水扉を閉めていなかったことは、油断の表れであると言われても何ら不思議ではなかった。

「続いて『ウルグアイ』より、『本艦ハ復旧ノ見込ミ無シ。総員退艦ヲ発令セリ』です！」

「そう、か……『パラナ』に、『ウルグアイ』の乗員を収容させろ」

沈没しつつある「ウルグアイ」の艦尾にある扉が降ろされ、乗員を乗せた装載艇やゴムボートが次々と海面に滑り降りてくる。すると、それを確認した「パラナ」も同じく艦尾の扉を下ろして、生存者の乗った舟艇を艦尾のコンテナ甲板へと引き揚げていた。

乗員の救出から一時間後、「ウルグアイ」は右舷を下にする形で横転。やがて艦首からゆっくりと沈んでいき、貴重な誘導弾ともどもアルゼンチン本土の沖合に沈んでいった。なお、この戦闘における双方の損害は以下のとおり。

イギリス側損害

特になし

アルゼンチン側損害

沈没

甲型水上艦「ウルグアイ」（乗員のうち約四十名戦死）

この後、アルゼンチン海軍が擁する二隻の災害救難艦は、搭載機を用いて「シュパーブ」を搜索。しかし、実戦ではほぼ初めてという不慣れな対潜水艦作戦とあって発見には至らず、仕方なくそのままフォークランドへと向かうのだった。

第百十七話 油断が拡げた傷口（後書き）

富士「普段はそれなりにやってくるかと思えば、変なところでくじめるのだな」

作者「これだけ優勢であれば、油断が生じる恐れは当然あるでしょう。それにどちらかが勝ってばかりでは、小説としても面白みに欠けますからね」

大隅「今のところイギリス軍で善戦しているのが、潜水艦ばかりという気は致しますが」

作者「そう言われてもなあ。水上艦同士の戦闘じゃあ、なかなかアルゼンチン軍が苦戦する筋書きを思いつかないんだよ」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「潜水艦の襲撃を受けた、アルゼンチン海軍の行先は？ 次回『空を握れど』ご期待下さい」

第百十七話 空を握れど

潜水艦「シュパーブ」の攻撃を凌いだアルゼンチン艦隊は、イギリス側の予想に反してサウスジョージア島へと変針した。これは、フォークランド諸島に対する補給はアルゼンチン本土からの輸送機で十分事足りるのに対し、サウスジョージア島への輸送手段は限られていたからである。

唯一の輸送手段は、日本から輸出された二式戦略爆撃機の発展型である輸送機を使った空輸。しかしアルゼンチンは、予備機を含めてこの輸送機を二十機しか保有しておらず、一個旅団の兵站線を確保するには不安があったのである。

そこでアルゼンチン海軍は、サウスジョージア島周辺のイギリス海軍を撃退することでサウスジョージア島への安全な海上輸送を可能にし、安定した兵站線を築こうとした。そのため、出航前に二隻の災害救難艦には大量の物資が搭載されている。

五月七日、サウスジョージア島の北西二百海里の距離にまで接近した災害救難艦「トレス・ブントス」は、二〇式戦闘機六機によるサウスジョージア島近海の偵察を実行。それまでも陸上部隊の報告である程度の陣容は分かっていたが、流石にそれだけでは限られた情報しか入ってこない。

一方のイギリスは、アルゼンチン海軍の水上艦部隊が来ないうちに部隊を上陸させ、せめてサウスジョージア島だけでも奪還しようとしていた。しかし上陸船団はアルゼンチン陸軍の自走榴弾砲に阻まれ、航空機による攻撃も行えない現状では、この脅威を取り除くことができずにいた。

アルゼンチン軍は当初、寒冷なこの島の気候に苦しめられた。しかし日本式の装備で固めた旅団は除雪車を含めた各種工作車両を多数取り揃えており、対米戦のアリユーション上陸戦を機会に広まった仮設住宅の使用と相まって、陣地の設営は大いにはかどったのだ。

午前十一時、イギリス海軍フリゲート「アルゴノート」。彼女は姉妹艦である「リアンダー」級フリゲートバッチ二の七隻とともに、アルゼンチン軍によるサウスジョージア島への海上輸送を阻止する任務に当たっていた。

「レーダーに感あり。北方より、所属不明の航空機二機が接近中！」
「速度と距離は？」

「速力五百海里、距離百海里です」

「アルゼンチンが使っている、日本製の戦闘機か……各艦に伝えておけ。本艦では何もできない」

彼女たち「リアンダー」級フリゲートバッチ二が搭載している対空火器は、機銃を除けば射程が五キロメートル前後の対空ミサイル「シーキャット」のみ。おまけに飛翔速度はマッハーに満たないので、発射したとしても二〇式戦闘機にアフターバーナーを噴かされれば、まず当てられないのだ。

結局、二機の戦闘機はシーキャットの射程外から偵察を終えると、何事も無かったかのように平然と母艦に戻っていった。この後も、アルゼンチン軍は航空機を交代させながら、断続的にイギリスのフリゲートたちを監視し続けたのである。

この報告を受けたアルゼンチン海軍主力艦隊は、完全にイギリス軍の陣容を把握した状態で、安心してサウスジョージア島へと突撃。

午後四時に、サウスジョージア島の前に立ち塞がるようにして陣取った、八隻の「リアンダー」級フリゲートを相次いで捉えた。

同時刻、フリゲート「フィード」戦闘指揮所。

「前方より、アルゼンチン艦隊と思しき水上艦多数確認！ 距離二十海里、速力二十ノット！」

「敵艦隊より、誘導弾飛来！ 数は三十！」

その後も断続的に行われた航空偵察によって、アルゼンチン軍はイギリス艦の位置を正確に知っていた。そのため事前に対艦誘導弾の発射準備を整えておき、イギリス艦が水平線のこちら側に見え、電探で捕捉した瞬間に誘導弾を放つことができたのである。

「むざむざとやられるな！ 全艦、準備完了次第エグゾセを放て！」

「目標、前方のアルゼンチン艦隊！ 発射！」

八隻のフリゲートから、せめて一矢報いようと多数のエグゾセが発射される。その数は、なんとアルゼンチン側を上回る三十二発に上った。

第百十七話 空を握れど（後書き）

大隅「それにしても、イギリス軍は随分と対空火力を軽視していたのですね」

作者「積んでいるミサイルの射程が長いだけで、アメリカも一緒だよ。VLSの搭載が当たり前になる時代の後知恵を使っている、日本が多すぎるだけだ」

朝日「同時に誘導できる誘導弾の数は同じでも、長射程の対空ミサイルと比べると搭載数と第二射までの時間に、小型のミサイルと比べると射程に圧倒的な差がありますからな」

作者「ただスタンダードより小型だから射程は短めだし、シースパローよりは搭載数が限られる。そう考えると、帯に短し襷に長しの感じは否めないね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「この殴り合いの結末は如何に？ 次回『飽和攻撃』ご期待下さい」

第百十八話 飽和攻撃

エグゾセの発射を知ったアルゼンチン艦隊は、すぐさま十発の乙型対空誘導弾で迎撃を試みる。十発の誘導弾は、発射からおよそ二十秒後に、アルゼンチン艦隊からおよそ十五海里離れたところでもうエグゾセの群れと激突した。

「敵対艦誘導弾、二十六発残存！」

「第二射発射！ 一発でも多く撃ち減らせ！」

せり上がったままの九連装発射機から、再び誘導弾が飛び出す。今度は約二十秒後に、第一射を上回る七発の誘導弾を道連れにできた。しかし相変わらず十九発の誘導弾が、アルゼンチン艦隊から二十キロメートルほどの地点を飛行していたのである。

アルゼンチン艦隊に所属する各艦のイルミネーターは、先程から前方を向いたままだ。ほとんど同じ方向から直進してくる目標を片っ端から撃ち落とせばいいので、対空誘導弾にとってこれほど楽な仕事は無い。おまけにエグゾセの巡航速度は音速にさえ満たないため、何度でも迎撃が可能であった。

アルゼンチン海軍甲型水上艦の搭載している対空誘導弾が、アメリカのターターやスタンダードのように一発ごとの再装填を必要とするものであれば、また結果は違ったであろう。しかし乙型対空誘導弾は、のちのVLSと同じく弾薬庫と発射機が一体化しているため、一基のコンテナに搭載している九発の対空誘導弾を立て続けに撃てるのだ。

その結果、十隻の中型水上艦は各艦が六発ずつの対空誘導弾を発

射。エグゾセがアルゼンチン艦隊に到達するはずであった二分弱の間に、六十発の対空誘導弾が、なんと全てのエグゾセを叩き落としてしまったのだ。

一方のイギリス艦隊は、悲惨であった。誘導弾を迎撃できそうな兵器と言えば、シーキャットの四連装発射機が各艦に二基ずつ搭載されているだけなのだ。シーキャットの射程距離と二〇式乙型対艦誘導弾の飛翔速度を考えれば、射程に捉えてから着弾するまでに一五秒程度しかないことになる。

「いいか！ シーキャットの発射は各艦に任せる！ とにかく、一発でも多くの誘導弾を落とすことだけを考えろ！」

「シーキャットは、敵誘導弾を射程に捉え次第、各操作員の判断で放て！ 命令は待たなくていい！」

各艦から二発ずつのシーキャットが射ち出されるものの、人間の目で誘導するのでは命中は覚束ない。結果として第一射の十六発で五発、第二射の十六発で七発の乙型対空誘導弾を撃墜したが、誘導弾が航空機よりはるかに小型であることを考えれば、これでもまだ上出来であろう。

その後はチャフによる錯乱も試みたが、回避できたのは三発のみ。つまり、イギリス艦隊に命中した乙型対艦誘導弾は合計で十八発。難を逃れた艦は一隻もおらず、以下のような内訳と被害内容で、仲良く誘導弾の洗礼を浴びることになった。

クレオパトラ：マスト根本に命中し倒壊

シリウス………艦橋に命中して艦長などが戦死、艦首五インチ連装砲に命中して砲塔大破

フィービ………錨甲板に命中、浸水は発生せず

ミネルヴァ……艦首中央部と艦橋に命中、浸水は発生せず
ダナエ……艦首左舷側と艦橋左舷に命中、浸水発生
ジュノー……艦首左舷に一発、右舷に二発命中、浸水発生
アルゴノート……マストを含めた上部構造物に二発、艦首左舷に一発
命中。浸水発生、艦長戦死
ペネロープ……艦首右舷に二発命中、破孔が水面下に到達して浸水
発生

さらにフォークランド周辺のイギリス海軍艦艇も撃破しようとしていたアルゼンチン海軍は、イギリス艦隊に追撃を行わず、またイギリス艦隊の反撃を恐れたため撤退。これはイギリス艦隊が各艦の復旧作業に回す時間を与えてしまったが、「ダナエ」、「ジュノー」及び「ペネロプ」の三隻が沈没処分となった。

そして他の後関が復旧作業を終えた後で、イギリス艦隊はサウスジョージア島沖から撤退。アルゼンチン艦隊はフォークランド沖へと向かい、アマゾン級フリゲート八隻の撃滅を目指した。

第百十八話 飽和攻撃（後書き）

富士「アルゼンチン海軍、ミサイルを持ちすぎじゃないか？」

作者「ガルチエリが資源を大量に売ったんでしょう、たぶん」

敷島「で、その資源でまたミサイルを作るわけか」

作者「加工貿易おいしいです」

三笠「この有様では、きつとどこかで『破壊貿易』や『殺人貿易』とでも揶揄されていそうですが……次回予告をお願いします」

作者「次回、サウスジョージア沖のイギリス軍がとった迎撃策とは？ 次回『捨て身の斥候』ご期待下さい」

第百十九話 捨て身の斥候

五月九日朝、アルゼンチン艦隊はアマゾン級フリゲートが海上封鎖を行っているフォークランド諸島の東方およそ二百海里的距離にまで移動。リアンダー級フリゲートと同じく、シーキャットしか対空ミサイルを持たないアマゾン級フリゲートに対し、対艦誘導弾の飽和攻撃を行おうとしていた。

ところがその後の航空偵察で、二隻の大型艦船が発見される。これはイギリス軍の給油艦であり、本土から遠く離れた島々に対する海上封鎖を支援するため、定期的にフォークランド諸島やサウスジョージア島の近海へと現れていたものだ。

同日午後二時、アルゼンチン艦隊は自分たちから距離二十海里的地点に、一隻のイギリス海軍艦船をレーダーで捕捉。しかしサウスジョージア島の時とは異なり、周囲に他のイギリス海軍艦艇は一切発見できなかった。

「敵艦は一隻だけか……まあいい、対艦誘導弾で仕留めろ！」

甲型水上艦「ベルメホ」及び「サラード」から、三発ずつの対艦誘導弾が放たれる。なお、これは二隻が搭載していた最後の誘導弾であり、他の八隻も対艦誘導弾の残りは三発のみであった。

しかしアルゼンチン艦隊は気付かなかったが、この時アルゼンチン艦隊に狙われた「アーデント」の五海里後方には、姉妹艦である七隻のリアンダー級フリゲートが控えていた。そしてデータリンクシステムにより「アーデント」からアルゼンチン艦隊の接近を知らされた七隻は、彼女と共に満を持して四発ずつのエグゾセを放った

のである。

つまりこの時、七隻のリアンダー級は、水平線の向こうからアルゼンチン艦隊を攻撃したのだ。間もなくそのエグゾセの群れはアルゼンチン艦隊に捕捉され、アルゼンチン艦隊の幕僚は騒然となる。

「馬鹿な、あのミサイルはどこから飛んできたのだ？」

「おそらく、今我々が捕捉している一隻に我々の位置を探らせ、他の艦は水平線の向こうから攻撃してきたのでしょう。ですからこのまま直進すれば、残りの艦も発見できるかと」

「だな。全艦、今は対艦誘導弾の迎撃に専念しろ！」

エグゾセの捕捉から二十秒以上の時間が空いたものの、三十二発のエグゾセに向けて、サウスジョージア沖での戦闘と同じように乙型対空誘導弾が放たれる。だが直前に対艦誘導弾を放っていた「ベルメホ」と「サラード」は数秒反応が遅れてしまい、他の艦が二発目の誘導弾を放つと同時に一発目を放った。

エグゾセは第一射の対空誘導弾八発によって三発が、第二射の十発によって四発が、第三射の十発によってさらに四発が撃墜される。これまでの戦いで、各艦は乙型対空誘導弾を発射機一基分である九発ずつ放っていたが、各艦は二基ずつの九連装発射機を装備していたために、このような乱射が可能になったのだ。

その後もアルゼンチン艦隊の猛射は続き、サウスジョージア沖での戦闘と同じく、各艦は六発ずつの対空誘導弾を発射。その結果二十三発のエグゾセが撃墜され、残りは九発となった。なお、六時に亘る迎撃の結果は以下のとおり。

第一次：八発発射、三発撃墜。残り二十九発

第二次…十発発射、四発撃墜。残り二十五発
第三次…十発発射、四発撃墜。残り二十一発
第四次…十発発射、三発撃墜。残り十八発
第五次…十発発射、五発撃墜。残り十三発
第六次…十発発射、四発撃墜。残り九発

残ったエグゾセは五発が「サラード」、三発が「ベルメホ」、一発が「ネグロ」に向かう。三隻はチャフを展開して三発の誘導弾を逸らし、各艦の自動機関砲でさらに四発の誘導弾を撃墜したが、「サラード」と「ベルメホ」に向かったエグゾセのうち一本ずつは、どうしても防ぐことができなかった。

「ミサイル、本艦に命中します！」

「総員、衝撃に備えろ！」

ところがその直前に、その「ベルメホ」と「サラード」が放った対艦誘導弾六発のうち、シーキャット二発による迎撃を掻い潜った五発が「アーデント」へと命中。「アーデント」は瞬く間に全巻火達磨となったが、彼女が一隻だけ突出することによって、他の姉妹はエグゾセを安全に発射できたのだ。

そしてまずは「サラード」の艦首扉が吹き飛ばされ、次いで「ベルメホ」の艦首左舷に大穴が開く。艦首の船体に水面下まで及ぶ大穴を開けられ、二隻の船体には大量の海水が流れ込み始めた。

第百十九話 捨て身の斥候（後書き）

富士「い、一隻につき対空ミサイル十八発だと？」

作者「最近の艦船のVLS装備数から考えて、これぐらいならいけるかと。ましてや、日本製の乙型誘導弾は諸外国の誘導弾より小型ですから」

敷島「で、ミサイルの代金は……」

作者「まあ、当然『ミサイル欲しけりゃ出すもん出せや』とはなるでしょうね。こちらにも、慈善事業でやっているわけではありませんから」

三笠「そう考えると、アルゼンチンが哀れにも思えてきますが……次回予告をお願いします」

作者「イギリス艦隊との距離を詰める最中、アルゼンチン艦隊が捉えた艦は？ 次回『食い扶持を守れ』ご期待下さい」

第二百二十話 食い扶持を守れ

アルゼンチン艦隊は落伍しつつある「サラダ」と「ベルメホ」を置いたまま、エグゾセの発射後に逃走を開始した七隻のアマゾン級フリゲートを追撃。間もなく、追っていた七隻に加えて、大型艦二隻を捕捉した。

「あの二隻は……航空偵察で発見した給油艦か」

「はい」

「よし。各艦、敵最大艦船に目標を設定し、対艦誘導弾を発射しろ！」

八隻の甲型水上艦は、距離二十海里で三発ずつの対艦誘導弾を発射した。目標は、イギリス軍のリーフ級給油艦「ピアリーフ」と「プラムリーフ」である。なお、二隻の要目は以下のとおり。

全長一七一メートル、幅二六メートル、喫水一一・二メートル、満載排水量二五七九〇トン

ディーゼル四基一軸、一二〇〇〇馬力、一五ノット、乗員三六名
二〇ミリ及び七・六二ミリ単装機銃各二基、物資二五〇〇トン輸送可能

アルゼンチン艦隊がアマゾン級フリゲートの撃破を後回しにしたのは、基準排水量が三千トン程度しかない彼女たちを、接近してからの砲撃戦でも十分撃沈できると考えたからである。アルゼンチン艦隊の各艦には五インチ砲が一基ずつ装備されており、誘導弾が無いとはいえある程度の対艦攻撃力はあった。

さらにここで給油艦を二隻とも撃破してしまえば、一七ノットで

も四千海里しか航行できないアマゾン級フリゲートは、補給艦の増援が無ければ事実上イギリス本土への帰還が不可能になる。そうなれば、彼女たちは例え船体が無事であろうと、降伏するか自沈するかを選択を迫られることになるのだ。

同時刻、フリゲート「アマゾン」。

「アルゼンチン艦隊、誘導弾多数発射！」

「くっ、おそらく目標は『ピアリーフ』と『プラムリーフ』か……補給を断って我々の燃料切れを待ち、降伏させようというつもりだな」

「如何致しますか、司令？」

参謀の言葉に、封鎖部隊の司令官は暫し悩む。そして彼は数秒で、しかし断腸の思いである命令を下した。それは確かに艦隊の損害を最小限に抑える可能性を有する方法ではあったが、確実な犠牲を伴うものだったからである。

「本艦と『アンテロープ』を『ピアリーフ』へ、『アクティブ』と『アンバスケイド』を『プラムリーフ』に横付けしろ！」

「司令、そのようなことをすれば本艦が攻撃に巻き込まれます！」

「ここで給油艦をやられれば、この七隻は燃料切れで全滅だ。なら我々が盾になって、例えば四隻が沈められてでも残りの三隻と給油艦を脱出させる！」

司令官の言葉に、周囲の将兵が一斉にざわめく。そんな中、司令官はなおも言葉を続けた。

「それに、アルゼンチンの戦闘艦はこれまでにそれぞれ六発の対艦ミサイルを発射している。そして一隻当たりが装備している対艦ミ

サイルは九発で、この戦闘では全艦が三発ずつのミサイルを撃ってきた。ならこの攻撃さえ凌げば、少なくともミサイルの攻撃は受けずに済む！」

司令官の言葉に、将兵たちはそれぞれに覚悟を決めた。するとその時、アルゼンチン側の対艦ミサイルがシーキヤットの射程圏内に収まったという報告が入る。司令官は自らも死を覚悟すると、せめてシーキヤットが一発でも多くの対艦誘導弾を撃墜してくれるよう祈った。

司令官に乗りがいくらかでも天に通じたのか、七隻から放たれた合計十四発のシーキヤットは、なんと十発の対艦誘導弾を破壊。命中率七割以上というこの時代としては驚異的な数字を叩き出し、乗員たちの覚悟に報いて見せた。

だが逆に言えば、十四発の誘導弾がシーキヤットの迎撃を凌いだことになる。七隻のフリゲートは一縷の望みを懸けてチャフをばらまき、さらに六発の誘導弾を明後日の方向へと誘導したが、残り八発の誘導弾はそのまま二隻の補給艦目掛けて飛んだ。

そして低空飛行を続けた対艦誘導弾は、その前に立ち塞がった四隻のフリゲートへと全弾が命中。四隻のフリゲートと二隻の給油艦は、直径数百メートルはあろうかという黒鉛の塊に呑みこまれていった。

第二百二十話 食い扶持を守れ（後書き）

富士「補給艦を見捨てて、アルゼンチンの対艦ミサイルを浪費させるという方法は無かったのか？」

作者「確かに燃料を積んだタンカーは、燃料が漏れない限り燃料槽内に海水が浸入しないので、比較的沈没はしにくいです。そのぶん多くの対艦ミサイルを吸収できますが、この二隻に続いてやってくる補給艦がアルゼンチン艦隊に叩かれれば、フリゲートたちは今度こそお手上げなのです」

敷島「アルゼンチン側の水上艦がこれで全力なら、この後アルゼンチン艦隊が補給に戻ったすきを突いて補給艦を向かわせられるんだけどねえ。この艦隊が引っ込んでも、アルゼンチン軍はまた増援の補給艦に同規模の艦隊を差し向けられるからなあ」

三笠「そうなのは、例え増援の補給艦の護衛がいたところで無事では済みませんね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、アルゼンチン艦隊がなりふり構わぬ行動に出ます。次回『物は使いよう』ご期待下さい」

第二百二十一話 物は使いよう

この時命中した誘導弾の数は「アマゾン」二本、「アンテロープ」三本、「アクティブ」一本、「アンバスケイド」二本。「アンテロープ」は船体中央部に命中した誘導弾が爆発した衝撃で船体が両断され、そのまま海底へと沈んでいった。

そして「アマゾン」は後部マストとヘリコプター格納庫を破壊され、「アクティブ」は煙突に大穴が開いた。この二隻は幸いにして浸水が見られなかったが、「アンバスケイド」は一一四ミリ単装砲の真下と艦橋の右舷側に被弾し、前者による損傷からは浸水が始まった。

「誘導弾、全てフリゲートに命中した模様！」

「おのれ、作戦を見抜かれたか……まあいい、このまま突っ込め！ 砲撃戦で一網打尽だ！」

八隻の甲型水上艦が、イギリス艦隊との距離を十海里にまで詰めたところで砲撃開始。だがほぼ同時に、イギリス側のフリゲートも「アンバスケイド」を除く五隻が、艦首の一一四ミリ単装砲を用いて反撃を開始した。

砲の数だけで言えば、それぞれ単装砲が八門と五門でアルゼンチン側に分がある。しかし発射速度はアルゼンチン側の分速二十発に対しイギリス側は二十五発と、砲が新しく、また口径が多少小さいぶんだけ有利であった。

とはいえ砲弾重量は、前者が二十五キログラムで後者が二十一キログラム。一分当たりの弾薬投射量は四トンと二千六百二十五キロ

グラムで、総合的な砲撃力では、砲撃戦を挑んだだけあってアルゼンチン側が五割ほど優勢であった。

「撃て、撃ちまくれ！ 補給艦は後回しで良い。まずは取り巻きを叩け！」

「何としてでも補給艦を護れ！ 敵の砲を潰せばそれでいい！」

アルゼンチン側としては、最終的に補給艦を叩けばいいので、イギリス軍フリゲートの砲火に晒される時間が延びるという危険を冒してまで最初に補給艦を叩く必要はない。一方イギリス側は、補給艦がやられてしまえばフリゲートたちも道連れになってしまうため、フリゲートが何隻か沈められてでも補給艦を守らなければならなかった。

そのためイギリス軍のフリゲートは、補給艦の周囲を反時計回りに周回し、交代で補給艦の盾になる位置へと移動しながら砲撃戦を展開。だがこれではどうしても各艦の運動が単調なものとなり、アルゼンチン側の命中率向上に一役買ってしまうことになる。

とはいえ、イギリス側も必死であることに変わりはない。アルゼンチン軍の甲型水上艦部隊も次々と被弾し、両舷に集中して配置された各艦の居住区は穴だらけになっていった。

アルゼンチン海軍第二艦隊甲型水上艦「サラダ」戦闘指揮所。

「『デセアド』右舷に被弾、火災発生！」

「くっ、砲撃戦では埒が明かんか……このままでは、我が軍からも戦没艦が出るかもしれん」

砲戦開始から、およそ十分。既にアマゾン級フリゲートは何隻か

が戦闘能力を失っており、火災が発生している艦も一隻だけではない。だがそれはアルゼンチン側も同じことで、第一艦隊の水上艦は「パラナ」を除く全艦が、最早戦闘の継続は困難になりつつあった。

「待てよ、こうなったら……敵水上艦は、レーダーに捉えているな？」

「はい。二隻の補給艦を含め、見失った艦は一隻もいません」

「よし、対空誘導弾の発射準備をしろ。目標は、敵フリゲート部隊！」

「なっ……確かに水上艦艇へも発射はできますが、効果は保障できません！」

「構うものか！」

アメリカが開発したスタンダード等の対空誘導弾には、確かに対艦攻撃を考慮したものの存在する。しかしこれまで、そのようなミサイルが実戦で対艦攻撃を行った例は無く、本当にまともな対艦攻撃力を有するのかどうかということについて疑問を呈する者も少なくなかった。

「そうだな……よし、一番近いフリゲートに対して対空誘導弾を発射しろ！ 物は試しだ！」

艦長の命令で、「サラダ」の艦橋手前に配置されていたイルミネーターが、最早虫の息となっているフリゲート「アンバスケイド」を捉える。そして二〇式乙型対空誘導弾による対艦攻撃という、開戦国の日本でさえ奥の手とされてきた攻撃方法が、ついに実行へと移された。

第二百二十一話 物は使いよう（後書き）

敷島「ミサイルを撃ち尽くした揚句砲撃戦……と思ったら、そうきたか」

作者「一応レーダーには捉えていますから、できないことは無いでしょう。但し効果があるかと言われれば、当然疑問符が付きます」

富士「まあ、作中にもあるとおりレーダーや砲の破壊が精々だろうな。相手がミサイル艇のような小型艦艇なら、撃沈もあり得るだろうが」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、この砲撃戦が終わります。次回『出血は強いれど』ご期待下さい」

第二百二十二話 出血は強いれど

およそ五海里にまで距離を詰めた状態で放たれた、一発の対空誘導弾。これをレーダーで捉えた「アンバスケイド」の艦内は、事態を呑みこめず混乱状態に陥った。

「敵五番艦、誘導弾発射！ マッハ三の速度で、こちらに向かって来ます！」

「馬鹿な、アルゼンチンがそんなに速い対艦ミサイルを持っている訳が無い！」

不運にも至近距離で対艦誘導弾を発射された「アンバスケイド」は、艦長がそこまで言ったところで艦橋に直撃弾を受ける。弾頭の重さが五十キログラムしかないとはいえ、その威力は艦橋を吹き飛ばすのに十分であり、彼らは自分の身に何が起こったのか最後まで理解できないまま塵と化した。

それもそのはず、この時対空誘導弾が発射してから命中するまでの時間は、十秒あるかないかという極めて短いものだったからだ。シーキヤットがいつでも撃てる状態であれば形だけの迎撃もできたかもしれないが、マッハ三の誘導弾を誘導弾で迎撃することは至難の業であり、ましてや亜音速でしか飛べないシーキヤットではまず不可能であろう。

これを見たアルゼンチン艦隊第二艦隊の各艦は、最早イギリス軍による航空攻撃の恐れはないと判断して、相次いで対空誘導弾をアマゾン級フリゲートへと発射。炸薬量が小さいために、水面下の船体を損傷させて直接浸水を発生させることは難しかったが、上部構造物や武装を破壊するには十分であった。

この時、各艦は未だに最大で六発の対空誘導弾を装備していた。それらはイルミネーターの誘導に従って、次々とフリゲートたちに火災を発生させたのである。事の次第を悟った何隻かのフリゲートはシーキヤットを放ったものの、一発も撃墜できずに終わっている。

アルゼンチン艦隊の甲型水上艦たちが手持ちの対空誘導弾を撃ち終える頃には、アマゾン級フリゲートは大半が炎上。ここに至って彼女たちは戦闘能力を失ったと見たアルゼンチン艦隊は、残り少なくなった五インチ砲弾を全て二隻の補給艦へと叩きつけることにした。

「目標、敵補給艦一番艦！ 撃ち方始め！」

二隻の船体は、数分と経たない間に穴だらけとなり、搭載されていた重油が引火して火災も発生する。しかし重油が詰まっている重油槽にはなかなか浸水が起こらなかったため、水より軽い重油が浮の代わりとなって、当分沈みそうになかった。

「艦長、間もなく残弾が尽きます！」

「照明弾でもなんでもいい！ 砲弾と名のつくものは全て撃て！」

榴弾も徹甲弾も撃ち尽くしたアルゼンチン艦隊は、照明弾など本来攻撃には用いない砲弾も発射。炸薬が入っていないとはいえ、金属の塊がマッハ二前後の速度で命中すればそれだけで船体を損傷させることができ、二隻の給油艦のマストや給油設備は徹底的に破壊された。

やがて、アルゼンチン艦隊が合計で数千発の砲弾を撃ち尽くした時には、至る所で黒煙が立ち込めていた。しかしその黒煙はイギリ

ス海軍の艦艇からだけ立ち上っているわけではなく、アルゼンチン側の甲型水上艦も全てが傷ついていた。

特に「ドウルセ」と「ジャチャル」は、本土への帰還が不可能となるほどの損害を受けてしまい、自沈処分と相成ったのである。なお、誘導弾による攻撃も含めた双方の損害は以下のとおり。

アルゼンチン側損害

沈没

サラード、ベルメホ、ドウルセ、ジャチャル

損傷

全ての甲型水上艦（六隻）

イギリス側損害

沈没

アンテロープ、アンバスケイド、アーデント、アベンジャー（アマゾン級フリゲート）

損傷

アマゾン、アクティブ、アロー、アラクリティ（アマゾン級フリゲート）

ピアリーフ、プラムリーフ（リーフ級給油艦。給油能力喪失）

この後、災害救難艦を除く全艦が深手を負ったアルゼンチン艦隊は、五月十日にブエノスアイレスへと帰港。イギリス海軍はその隙にリーフ級やグリーン・ローバー級といった給油艦を差し向け、フォークランドとサウスジョージアの沖で損傷した艦艇を全て連れ戻したのである。

そして彼女たちと交代させる形で、フォークランド諸島にリアンダー級フリゲートバッチーの八隻を、サウスジョージア島沖にブロ

ードソード級フリゲート四隻をそれぞれ派遣して海上封鎖を続行したのである。なお、リアンダー級フリゲートの「ダイドー」は、ニューヨークランドへ売却されず、イギリス海軍所属のままである。

第二百二十二話 出血は強いれど（後書き）

敷島「……これ、アルゼンチン海軍にとっては良くて痛み分けじゃないの？」

作者「ですね。イギリス艦隊を兵糧攻めするのは完全に失敗しましたから、イギリス側艦艇の戦線復帰を防げたというのがせめてもの幸いでしょうか」

朝日「これで、両軍とも主力艦艇の半数程度が戦闘不能にされたことになりますな」

作者「双方とも、既に動かせる艦艇は多くない。だから、遠からず決着がつくことになるだろうね」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「イギリス海軍は、飽くまでフォークランドの封鎖を試みます。次回『いちごっこ』ご期待下さい」

第二百二十三話　　いたちいっ

フォークランドとサウスジョージアの部隊から、イギリス海軍による再度の海上封鎖が行われたことを知らされ、アルゼンチン海軍は健在な十二隻の甲型水上戦闘艦を全て出撃させることにした。このままイギリス艦隊が来るたびに物資の輸送を輸送機だけに頼り続ければ、守備隊が何れ慢性的な物資不足に追い込まれ、戦わずして無力化されてしまうからである。

特にサウスジョージア島を包囲しているブロードソード級フリゲートは、新型の対空誘導弾であるシーウルフの六連装発射機を二基も装備しており、侮りがたい対空攻撃力を有していた。もし、サウスジョージアに物資を空輸しようとした二式戦略爆撃機の輸送機型が彼女たちに発見されてしまえば、撃墜される恐れは極めて大きい。

そして六月十二日、十二隻の甲型水上艦と災害救難艦「メダノサ」及び「トレス・ブントス」がブエノスアイレスを出港。航空機の損耗によって、二隻の災害救難艦が搭載する航空機は二〇式戦闘機と二〇式中型回転翼機がそれぞれ十二機ずつに止まったが、イギリス海軍の艦隊航空戦力が壊滅した以上は問題ないとされた。

六月十六日、アルゼンチン艦隊はサウスジョージア島の近海に到着。「トレス・ブントス」に搭載されている二〇式戦闘機による航空偵察で、シーウルフの射程外からブロードソード級四隻を確認すると、航空攻撃で彼女たちを撃退するため「メダノサ」から十二機の二〇式戦闘機を出撃させた。

イギリス海軍機動部隊への攻撃により、アルゼンチン海軍が保有している空対艦誘導弾の在庫は一時的に尽きかけた。しかし日本製

の誘導弾は共通の部品が多く、また艦対艦誘導弾と空対艦誘導弾はもともと構造が似ているため、予備の部品を用いて艦対艦誘導弾を空対艦誘導弾に作り替えたのだ。

この代償として、今回の出撃に当たりアルゼンチン艦隊の甲型水上艦が搭載する艦対艦誘導弾は三発に止まったが、目標となる水上艦艇が少ないこともあって弾切れの恐れはさほど危惧されていなかった。

午前十時に出撃した攻撃隊は、午前十時半頃「ブリリアント」に捕捉される。しかし彼女から十海里の距離に近づいて、電探で発見したのちに六機の戦闘機が一発ずつの対艦誘導弾を発射するまで、攻撃隊は何の妨害も受けなかったのである。

午前十時四十三分、フリゲート「ブリリアント」戦闘指揮所。

「敵誘導弾、シーウルフの射程に入りました！」

「シーウルフ、撃ち方始め！」

だが「ブリリアント」に着弾するまでの時間が十五秒しかない状況では、発射できるシーウルフの数は精々四発。奇跡的に四発のシーウルフは全てが対艦誘導弾を破壊したが、四発目を撃墜したわずか五秒後に、二発の誘導弾が「ブリリアント」のマストを二本とも、それぞれ右舷からへし折った。

へし折られた両方のマストは前方へと倒壊し、上部構造物に搭載されていた電子機器をほぼ完全に破壊。これによって砲を持たない「ブリリアント」は戦闘能力の大半を喪失し、使える武装は機銃のみとなってしまった。

彼女が戦えなくなったことを悟ると、十二機の攻撃機は四機ずつの小隊に分散。同型艦の「ブロードソード」、「バトルアクス」及び「ブラーゼン」の三隻にも対艦誘導弾による攻撃を加え、それぞれ以下のような戦果を収めた。

ブロードソード

攻撃隊は四発の対艦誘導弾を発射したが、二発がシーウルフで撃墜され、一発がチャフによって攪乱された。残り一発はヘリコプター格納庫へと命中し、格納庫の上にあったシーウルフ六連装発射機を破壊したが、航行に支障は無し。

バトルアクス

八発の対艦誘導弾が発射され、三発がシーウルフにより破壊。さらに五発のうち、三発がチャフによって攪乱された。残った二発の誘導弾は船体中央と煙突のそれぞれ右舷側に命中し、浸水が発生したものの、水面下の損傷が小さかったために沈没は免れている。

ブラーゼン

差し向けられた八発の誘導弾は四発がシーウルフに撃墜され、二発がチャフによって妨害された。それらを掻い潜った二発の誘導弾は何れも左舷中央部に命中し、浸水が発生したが、沈没はせずに済んだ。

第二百二十三話　いたちごっこ（後書き）

大隅「ミサイルの改造など、可能なのですか？」

作者「アルゼンチンの技術力にもよるけれど、少なくとも不可能ではないよ」

敷島「しかし、アルゼンチン軍はミサイルを贅沢に撃ってくるねえ。この紛争で、もう何百発のミサイルを撃ったやら」

作者「一発が史実の現代における一億円相当だったとしても、買えないことはないかと……それ相応の代償を用意すれば、ですが」

三笠「どこまでも、がめつい日本ですねえ……次回予告をお願いします」

作者「次回、アルゼンチンの限界が悲劇を招きます。次回『安物買いの船失い』ご期待下さい」

第二百二十四話 安物買いの船失い

六月十八日、フォークランド諸島に接近したアルゼンチン艦隊は、再び二〇式戦闘機による航空偵察を実行。フォークランド諸島を海上封鎖しているリアンダー級フリゲートを捉え、これを水上戦闘で撃滅することにした。

翌十九日午前九時、アルゼンチン艦隊は二十海里前方に「ダイド」を発見。しかし、五月九日に同じくフォークランド沖で、同じくリアンダー級フリゲートと戦ったときの苦い戦訓を、アルゼンチン海軍は忘れていなかった。

「残りの七隻は後方に控えているはずだ！ あの艦の攻撃は『コラストイーネ』に任せ、他の艦は対空誘導弾の発射準備をしておけ！」

司令官が言うが早いか、「ダイド」から四発のエグゾセが放たれ、アルゼンチン艦隊のリーダーはさらに水平線の向こうから飛来する二十八発のエグゾセを捕捉する。これを予期していたアルゼンチン艦隊は、慌てることなく乙型艦対空誘導弾をエグゾセに向けて撃ち始めた。

この時、アルゼンチン艦隊の甲型水上艦は十二隻。一度に十二発もの対空誘導弾が発射され、前回のフォークランド沖における海戦と同じく、リアンダー級フリゲートたちが一縷の望みを懸けて放ったエグゾセは次々と叩き落されていった。

アルゼンチン側が迎撃に差し向けた対空誘導弾は、第六射までの合計で七十一発（第一射のみ『コラストイーネ』が参加せずに十一発となった）。乙型対空誘導弾の命中率はこの時も五割を下回った

が、それでもなお二十九発のエグゾセを撃墜した。

生き残った三発のエグゾセがアルゼンチン艦隊に向かうが、今度は自動機関砲による迎撃を受けてしまう。甲型コンテナに搭載され、電探や火器管制システムを一体化した機関砲の対応は迅速であり、「イビクイ」に向かった二発のうち一発と、「イバイ」に向かった一発が撃墜される。

だが、残った一発はチャフによる妨害にも耐えて「イバイ」の艦首扉にほぼ真正面から命中。彼女の艦首扉は、あろうことか命中時の衝撃で船体から脱落してしまい、艦首波によって飛沫となった大量の海水が、海面とほぼ同じ高さのコンテナ搭載甲板へと侵入した。

日本海軍のコンテナには、波にさらされることを想定した、物資輸送用の水密コンテナも存在する。だがアルゼンチン軍は誘導弾や砲弾の購入量を増やそうとするあまり、武装コンテナの下に搭載するこれらの物資輸送コンテナが高額になるのを嫌って、完全な水密性を持たない安価なコンテナを使っていたのだ。

その結果、武装コンテナの下に倉庫として搭載されていたコンテナの中にも海水が流入。この浸水は「イバイ」の船体から浮力を確実に奪っていき、彼女の艦首は目に見えて沈み始めた。そして艦首側のコンテナを浸した海水は、艦橋の基部にあるコンテナ運搬用の通路を伝って艦尾側の物資搭載コンテナにも流れ込んでいく。

ちょうどその頃、「ダイドー」もシーウルフとチャフで防げなかった一発の対艦誘導弾を被弾。とはいえこちらは艦首の四・五インチ連装砲が破壊されただけで、弾薬庫の誘爆も避けられたために、航海に対する支障や浸水は全く発生しなかった。その後彼女は独力で戦場を離脱し、来援した給油艦と共にイギリス本土への帰還に成

功する。

そして直後に、アルゼンチン艦隊は残り七隻のフリゲートを発見。既に「ダイドー」へと対艦誘導弾の発射を終えていた「コラスティーン」と、沈没しつつあった「イバイ」を除く十隻の中型水上艦が、立て続けに最寄りのフリゲートへと三発ずつの対艦誘導弾を放った。

第二百二十四話 安物買いの船失い（後書き）

富士「水密コンテナなど、ミサイルを何発か我慢すればいくらでも買えるだろうに……背伸びをしすぎたな」

作者「やられる前にやればいいと言えばそれまでですが、いつもうまくいくとは限りませんからね」

敷島「当たらなければどうということはない！」

朝日「姉上……それを船に求めるのは無茶かと」

三笠（敷島に冷ややかな視線を浴びせつつ）「次回予告をお願いします」

作者「果たして、このフォークランド紛争の結末や如何に？ 次回『早められた時計』ご期待下さい」

第二百二十五話 早められた時計

自分たちから五キロメートルの距離にまで到達した三十発もの誘導弾へと、リアンダー級フリゲートたちがシーキヤットを遮二無二発射する。七隻から放たれた合計十四発のシーキヤットは、八発の艦対艦誘導弾を破壊することに成功した。

残った二十二発の対艦誘導弾は、さらにチャフの妨害で十二発が海面へと着弾するか、あるいは空中で近接信管により爆発。そして最後まで目標に向かって飛び続けた十発の誘導弾が七隻に命中し、それぞれに以下のような損害を生じさせた。

まず「リアンダー」は、二発がそれぞれ前部マストの根元と、艦首にある一一四ミリ砲塔に命中。前部マストと艦橋の上部にあった電子機器は全て使用不能になり、火災も発生したが、幸いなことに一一四ミリ砲弾の誘爆は免れた。

二番艦「エイジャックス」は、一発が艦橋の正面を直撃し、そこにいた乗員が多数死傷。電子機器の一部も配線の切断などによって故障し、さらに艦橋が破壊されたことで一時的に操舵不能に陥ったが、操舵は後に復旧して自力での航行を再開している。

「オーロラ」は一発が直撃したことで、煙突が倒壊したものの、一部の電子機器の損傷を除いて戦闘に支障無し。だがエグゾセを撃ち尽くしてしまった以上、アルゼンチン艦隊に対する有効な攻撃手段は全くとって良いほど残されていなかった。

一列横隊の中央にいた「ガラテア」は、艦首の先端に一発が命中し、亀裂が水面下に到達。これにより浸水が発生したため、艦首波

による損傷と浸水の拡大を恐れて、速力は僅か十ノットに制限されることになった。

誘導弾の直撃で錨甲板を潰された「ユーライアラス」は火災が発生し、黒煙によって館全体が覆われる事態になったが、それ以外に目立った損傷は無かった。

艦隊の右側、即ち南方にいた「ナイアド」と「アリシューザ」は、それぞれ左舷の艦首に二発ずつが命中。損傷の度合いは「ガラテア」より遥かに酷く、大量の海水が艦内に流れ込んできたため、二隻ともその場で復旧が断念された。

損傷した七隻のうち、「ナイアド」と「アリシューザ」を除く五隻のフリゲートは、フォークランドの北方へと離脱。アルゼンチン艦隊の司令官は彼女たちを追撃すべきかどうか迷ったが、作戦の目的が飽くまで海上封鎖の打破であること、砲撃戦に持ち込めば自軍にも少なくない損害が発生する恐れが大きいことから取りやめになった。

こうしてイギリス海軍の脅威が去った後、アルゼンチン海軍は甲型水上艦や災害救難艦による物資の輸送を開始。一方のイギリス海軍は、最早十分な海上封鎖をするだけの健在な艦艇が残れておらず、かといって強行上陸も困難であるため、武力によるフォークランド諸島とサウスジョージア島の奪還は諦めるしかなかった。

六月二十三日、イギリス軍はフォークランドの領有権をアルゼンチンに譲渡する代わりに、サウスジョージア島から一カ月以内に撤退することを要求。サウスジョージアの占領は本来陽動作戦に過ぎないと捉えていたアルゼンチンにとっては、これは願っても無い申し出であり、六月二十七日に両国が戦闘の終結を宣言した。

これにより、対英強硬路線を打ち出して成果を収めたガルチェリと軍部のアルゼンチン国内における支持率は急上昇。反対に以前から不人気であったサッチャーは、閣僚が慎重論を唱えていたにも拘らず武力行使を決断して最悪と言っても良い結果を招いたため、より一層批判の対象となった。

その影響により、フォークランド紛争の翌年に行われたイギリス下院議員選挙においては、労働党が政権を奪取。労働党はサッチャーの行っていた「サッチャリズム」とも言われる新自由主義的な政策を良しとせず、従来の労働党が採っていた社会民主主義路線と、サッチャーら保守党の新自由主義路線の間とも言える「第三の道」と言われる政策路線を史実より早期に進んでいった。

またこの紛争においては、日本製の兵器が二十年以上前の型落ち品であるにも拘らず奮戦。特に戦闘や物資の輸送、さらに上陸作戦とあらゆる任務に投入されたコンテナ搭載型軍艦の活躍は目覚ましく、この後様々な国が購入を打診した。

日本はそれらの申し出に対して以前と同じく、天然資源の優先的な輸出や、日本企業進出に対する優遇措置などと引き換えに受諾。コンテナ軍艦を建造するための船台が世界の至る所に建造され、舷梯的な技術支援や軍事顧問の派遣なども積極的に行われた。

この手法は日本の造船技術の進歩や、日本企業の海外進出に大きな手助けとなっただけでなく、顧客となった中小国の軍事技術や造船技術も発展させることになった。しかしその一方で、艦艇の絶対数が限られる小国でもそれなりの海軍力を持てるようになり、地域紛争の増加も招いてしまったのである。

第二百二十五話 早められた時計（後書き）

富士「……………どうしてこうなった」

作者「イギリスの艦艇は対空火力が足りなさすぎるのです。大半の艦艇に中距離対空誘導弾どころかCIWSさえ装備されていなかったのですから、対艦ミサイルの飽和攻撃を受ければひとたまりもありません」

敷島「史実の日本よりは、ましだったかもしでないけどね」

作者「まあ、アルゼンチン側の艦艇が日本の後知恵の影響でミサイルの搭載数を増やされていたのは事実ですが……………イギリス側は、いくらなんでも船体の割に軽装備過ぎると思うのです」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「次回、現代編で残されたほぼ唯一の紛争が始まります。次回『前代未聞の大背伸び』ご期待下さい」

第二百二十六話 前代未聞の大背伸び

一九九一年、それまでエチオピアと連邦国家を形成していたエリトリアにおいて、最大の独立組織であるエリトリア人民解放戦線とティグレ人民解放戦線がクーデターを決行。エチオピアのメンギスツ政権を打倒し、五月二十九日に独立宣言を行った。

そして政権が打倒されたエチオピアは、一九九三年五月二十四日にエリトリアの独立を承認。すると直後にエリトリアは、当時イエメン領であったハニーシュ群島の領有権を主張し始めたのだ。

ハニーシュ群島は紅海の南部に位置し、付近には石油等の地下資源が存在すると言われていた。そしてエリトリアは、この地をイエメンから武力で奪うべく、人口四百万人にも満たない小国としてはあまりにも過大な軍備を整えていく。

一九九五年、イエメンがドイツ及びイタリアの業者に対し、ハニーシュ群島のリゾート開発を承認。同時に、当時三個師団がいたイエメン陸軍のうち、それぞれ一個戦闘団を大ハニーシュ島及びズカル島へと差し向けたのであった。

これに対し、エリトリアは陸軍戦力を動員することで、ハニーシュ群島を占領しようと画策。九月二十日午後七時に、陸軍四個師団のうち一個旅団を乗せた艦隊が、大ハニーシュ島の南およそ百キロメートルの距離にあるアッサブ港を出撃した。なお、両軍の戦力は以下のとおり。

・イエメン（人口一五五二万人、陸軍四五〇〇〇人、海軍四〇〇〇人、空軍七二〇〇人）

三個師団、戦車二四〇両（うちハニーシュ群島には一個戦闘団、戦車五両）

甲型水上艦一隻、乙型四隻、丙型一二隻、甲型水上艇一六隻、乙型、丙型及び丁型各六四隻

戦闘機、練習戦闘機、練習機、中型及び小型回転翼機各八〇機

・エリトリア（人口三二〇万人）

ほぼイエメンと同一

エリトリア艦隊の編成は以下のとおり。各艦は一個戦闘団を乗せており、四隻の部隊が合計で一個旅団を編成する手はずになっていた。本来は、船体両舷の居住区だけであれば一隻につき一個中隊程度の部隊を乗せるのが限界なのであるが、半日にも満たない航海だからこそ可能になったのである。

甲型水上艦ハマセン、乙型水上艦セント、サヒル、サムハー

翌九月二十一日の午前零時、四隻はハニーシュ群島沿岸へと到着。そして「ハマセン」と「セント」が南部の大ハニーシュ島に、「サヒル」と「サムハー」がズカル島に着岸し、艦首の扉が倒された。イエメン軍への奇襲攻撃を行うために、夜間の上陸を選んだのだ。

「戦車小隊、突撃！ 機甲中隊の各小隊は戦車隊の援護を、歩兵中隊は建造物の制圧にかかれ！」

戦車隊がイエメン軍の兵舎へと焼夷榴弾による走行間射撃を加え、これを次々と炎上させる。さらには小さな金属球を詰めたキャニスター弾も用いられ、イエメン軍の兵士たちはまともな反撃もできないままに、その多くが死傷させられた。

また合計十両が展開していたイエメン軍の戦車隊も、乗員が乗る前に徹甲弾で破壊されてしまう。こうなれば、随伴している歩兵部隊の隙を見計らって対戦車誘導弾を発射するぐらいしか、エリトリア軍の戦車部隊による攻撃を止める術は無い。

「全艦、砲撃開始！」

部隊と物資の上陸を終えた四隻は、島から離脱しつつも艦砲射撃を敢行。一隻に一門ずつの五インチ砲は、上陸支援の火力としては頼りなかったものの、既に戦車隊の攻撃によって重装備の大半を破壊されていたイエメン軍には大きな脅威であると言えた。

その後、エリトリア軍はイエメン軍の兵舎へと突入。イエメン軍は何が起こったのか事態を飲み込めないままの降伏を余儀なくされ、こうしておよそ五時間の戦闘を経て、ハニーシュ群島はエリトリア軍の手に落ちたのだった。なお、双方の損害は以下のとおり。

・エリトリア軍損害

戦史五十名、負傷百四十名

・イエメン軍損害

戦史二百名、負傷四十名、生存者は全員捕虜

第二百二十六話 前代未聞の大背伸び（後書き）

富士「なあ……エリトリアの兵力が多すぎないか？」

作者「ですが、史実の現代では人口の四パーセントを超える人数の常備軍を保有しています。それでも、まだ抑えた方なのです」

敷島「しかし、共産主義国家と冷戦が無くなると、史実の戦後で起きた武力衝突は半分以上無くなるんだねえ」

作者「朝鮮戦争然り、中越国境紛争然り、ソ連のアフガン侵攻然り……ただ、イラク戦争はどうなるか分かりませんが」

三笠「あとは、湾岸戦争も微妙なところかもしれませんね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「エリトリア軍の排除に動くイエメン軍ですが、彼らには気がかりなことがありました。次回『背に腹は代えられず』ご期待下さい」

第二百二十七話 背に腹は代えられず

ハニーシュ群島が占領されたとの報告を受け、イエメン軍は逆上陸による奪還を考えた。だが現在イエメン軍が保有している艦艇や輸送機では、ハニーシュ群島を確実に奪還できるだけの兵力を上陸させることは難しく、航空機や艦艇による事前の攻撃が不可欠と判断された。

そこで、二十一日よりイエメン空軍は、戦闘機や回転翼機を低空から侵入させて対地攻撃を行わせる。この方法は一見効果的であったが、イエメンやエリトリアの本土と比べて背の高い植物が多く植生しているハニーシュ群島では、森林地帯に隠れたイエメン陸軍を発見することは難しかった。

また運良く発見できたとしても、通常の自由落下爆弾やロケット弾では、目標としたほぼ一点にしか攻撃できない。ナパーム弾を初めとする焼夷弾を使えば、森林諸共周囲のエリトリア軍も焼き払えるのであるが、ハニーシュ群島のリゾート開発に未練があったイエメンはこれをしなかった。

そのため、イエメン空軍が数日間に亘って航空攻撃を行ったにも拘らず、エリトリア軍に与えることができた損害は微々たるものであった。このままでは埒が明かないと見たイエメン軍は、とうとう九月二十五日の爆撃から、焼夷弾の使用を許可したのである。

九月二十五日午前八時、ハニーシュ群島の北北東およそ百キロメートルの地点にあるホデイダ空軍基地より、十二機の二〇式戦闘機が出撃。念のため主翼には四発ずつの甲型対空誘導弾を搭載していたが、残ったペイロードは全てナパーム弾の搭載に回された。

八時半に基地上空で編隊を整えた攻撃隊は、その後五分程度でハニーシュ群島の上空に到達。そして胴体の下に搭載していた、一機当たり四発ずつの二五〇キログラムナパーム弾を投下。投下されたナパーム弾は辺りに充填物を撒き散らし、周囲の植物や建造物を一瞬にして炎上させ始めた。

ナパーム(Napalm)という言葉は、ナフテン酸 (Naphthenic acid) とパルミチン酸のアルミニウム塩 (Palmitic acid, Aluminum Salts) を略したものである。これは石油類と混ざることによってゼリー状になる増粘剤の成分であり、通称「ナパーム剤」とも言われる。

そして同じくナパーム弾に充填されているナフサ(沸点が摂氏三十五度から百八十度の炭化水素。ガソリン原料や石油化学原料として用いる)と、これらの増粘剤が混ざった物体が人体などに付着すれば、水ではなかなか落とせない。そのためナパーム弾による火災を効率よく消し止めるには、ガソリン火災に用いるような消火装置が必要になる。

だが現地のイエメン軍には、そのような専門的な機材は配備されていないかった。これにより、彼らはハニーシュ群島の草木ともども荒れ狂う業火にその身を晒さざるを得なくなったのである。

またナパーム弾は燃焼の際に大量の酸素を消費してしまうため、周辺の空気中から酸素が急速に失われてしまい、そこにいた人間が窒息や一酸化中毒になって死ぬことも少なくない。こうして多くのエリトリア軍兵士が、自分の身に起こった事態を理解できないままに命を落としていった。

「よし、全機帰投するぞ」

爆撃の指揮を執っていた隊長が、全機に撤収を指示する。彼の眼下では二つの島がそのままかがり火になったかのような様子を見せており、駐留していたエリトリア軍が壊滅的な被害を受けたことは想像に難くなかった。

この爆撃で、エリトリア軍は数十両の車両と火砲を失い、ほぼ全ての負傷兵を含めた三百名以上の将兵が戦死した。またこの攻撃によって負傷した兵士に至っては四百名近くの多きに達し、死傷者を除いたエリトリア軍の残存兵力は、上陸時の半数程度にまで落ち込んでいた。

翌九月二十六日午後六時、ハニーシュ群島奪回に燃えるイエメン艦隊が出撃。篡奪者であるエリトリア軍への意趣返しとして、水上艦隊の編成や上陸部隊の規模と編成、そして夜間の奇襲上陸ということまで真似るという徹底ぶりであった。

第二百二十七話 背に腹は代えられず（後書き）

富士「貴様、詳細が分からない軍には取り敢えず日本製兵器を使わせるのだな」

作者「他国の植民地だったところには、例外もありますがね。ただこの頃には日本製兵器の実用性も知れ渡っていますから、資源がある国は少なからず日本製兵器を購入しようとするはずです」

大隅「飽くまで、資源のある国限定……ということですか」

作者「イエメンには石油が、エリトリアには各種鉱山資源があります。将来、資源が枯渇するようになってからも少しでも安定した供給を受けるためには、一ヶ国でも多く味方に引き入れる必要があるのです」

三笠「そういう点は、史実における現代の中国と似ていますね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「多大な打撃を受けたエリトリア軍の運命や如何に？ 次回『篡奪への報復』ご期待下さい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5744q/>

艦魂たちともうひとつの日本海軍史 現代編

2011年10月11日05時57分発行